

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第7集

小川柳ノ内遺跡Ⅰ

福岡県みやま市瀬高町所在遺跡の調査

2007

福岡県教育委員会

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第7集

小川柳ノ内遺跡Ⅰ

福岡県みやま市瀬高町所在遺跡の調査

2007

福岡県教育委員会



1.小川柳ノ内遺跡遠景（北から）



2.小川柳ノ内遺跡遠景（西から 奥の山は女山神籠石）

序

福岡県教育委員会では、平成 13 年度から独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（旧日本鉄道建設公団）九州新幹線建設局の委託を受けて、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。本報告書は平成 16・17 年度に発掘調査を実施した、みやま市瀬高町小川及び坂田に所在する小川柳ノ内遺跡第 1・2 次調査の記録です。

本遺跡からは弥生時代から古墳時代にかけての集落や弥生時代の甕棺墓を中心に様々な遺構が見つかり、地域の文化を知る上で貴重な成果を得ることができました。

本書が文化財愛護思想の普及及び学術研究・生涯学習への一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査及び報告書の作成に当たりましては、関係諸機関や地元を始めとする多くの方々に御協力・御助言をいただきました。ここに深く感謝いたします。

平成 19 年 3 月 31 日

福岡県教育委員会教育長

森山 良一

例言

1. 本書は平成 16・17 (2004・2005) 年度に九州新幹線鹿児島ルート建設に伴い発掘調査を実施した、福岡県みやま市瀬高町小川 (旧山門郡瀬高町大字小川) 等に所在する小川柳ノ内遺跡 (第 1 次調査) の記録で、九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告の第 7 集となる。
2. 本遺跡の発掘調査・整理報告は独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
3. 本遺跡は九州新幹線船小屋―大牟田間の埋蔵文化財調査第 2 地点に当たる。
4. 本書に掲載した遺構写真は進村真之が、遺物写真は文化財保護課整理指導員北岡伸一が撮影した。なお、空中写真は株式会社東亜航空技研及び九州航空株式会社に委託した。
5. 本書に掲載した遺構図は進村の外、今井涼子・大庭孝夫・高松智・榎崎俊平が作成した。なお、掲載した遺構図の方位は全て座標北 (G.N) である。
6. 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所において大庭・濱田信也の指導の下に実施した。出土遺物の実測は調査担当の他に平田春美・久富美智子・田中典子・若松三枝子・寺岡和子・橋之口雅子・高田知恵が行った。製図は豊福弥生・原カヨ子・江上佳子が行い、土山真弓美・安永啓子・山田智子・辻清子が補助した。
7. 出土遺物・写真・図面はすべて九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所に保管している。
8. 本書の執筆は進村が行った。

目 次

I	はじめに	1
1	調査の経緯	1
2	調査の組織	4
II	位置と環境	6
III	発掘調査の記録	9
1	遺跡の概要	9
2	基本層序	9
3	1区の調査の内容	10
	(1) 土坑	10
	(2) 溝	17
	(3) 遺構面等出土土器	17
4	2区の調査の内容	18
	第一遺構面	18
	(1) 土坑	18
	(2) 溝	20
	第二遺構面	22
	(1) 土坑	22
	(2) 包含層ほか出土土器	32
5	3区の調査の内容	35
	(1) 竪穴住居跡	35
	(2) 甕棺墓	38
	(3) 祭祀土坑	71
	(4) 土坑	76
	(5) 溝	86
	(6) 波板状遺構	88
	(7) 遺構面等出土土器	92
6	4区の調査の内容	93
	(1) 竪穴住居跡	93
	(2) 甕棺墓	122
	(3) 石棺墓	142
	(4) 石蓋土坑墓	144
	(5) 土坑	145
	(6) 溝	154
	(7) 遺構面等出土土器	160
7	まとめ	165

図版目次

巻頭図版	1	小川柳ノ内遺跡遠景（北から）		
	2	小川柳ノ内遺跡遠景（西から 奥の山は女山神籠石）		
図版 1	1	1区遠景（南から）	2	1区全景（空中写真）
図版 2	1	1区1号土坑（南西から）	2	1区2号土坑（南東から）
	3	1区3号土坑（北から）		
図版 3	1	1区4号土坑（北西から）	2	2区1号土坑（南から）
	3	2区2号土坑（南から）		
図版 4	1	2区3号土坑（北西から）	2	2区5号土坑（東から）
	3	2区7号土坑（東から）		
図版 5	1	3区全景（空中写真）	2	3・4区甕棺集中部分
図版 6	1	3区1号竪穴住居跡（東から）	2	3区1号甕棺墓（北から）
	3	3区2号甕棺墓（南東から）		
図版 7	1	3区3号甕棺墓（南東から）	2	3区4号甕棺墓（南東から）
	3	3区5・6号甕棺墓（北から）		
図版 8	1	3区8号甕棺墓（南西から）	2	3区9号甕棺墓（北から）
	3	3区10号甕棺墓（北東から）		
図版 9	1	3区11号甕棺墓（西から）	2	3区12号甕棺墓（南東から）
	3	3区13号甕棺墓（北から）		
図版 10	1	3区14号甕棺墓（北西から）	2	3区15号甕棺墓（北から）
	3	3区16号甕棺墓（南東から）		
図版 11	1	3区17号甕棺墓（北から）	2	3区18号甕棺墓（北から）
	3	3区19号甕棺墓（西から）		
図版 12	1	3区20号甕棺墓（南から）	2	3区21号甕棺墓（南から）
	3	3区22号甕棺墓（南東から）		
図版 13	1	3区23号甕棺墓（南東から）	2	3区24号甕棺墓（北西から）
	3	3区25号甕棺墓（東から）		
図版 14	1	3区26号甕棺墓（南東から）	2	3区27号甕棺墓（西から）
	3	3区28号甕棺墓（西から）		
図版 15	1	3区29号甕棺墓（東から）	2	3区30号甕棺墓（東から）
	3	3区31・32号甕棺墓（南から）		
図版 16	1	3区33号甕棺墓（東から）	2	3区34号甕棺墓（西から）
	3	3区35号甕棺墓（西から）		
図版 17	1	3区36号甕棺墓（北東から）	2	3区37号甕棺墓（東から）
	3	3区1号祭祀土坑（北東から）		
図版 18	1	3区2号祭祀土坑（南から）	2	3区1号土坑（東から）
	3	3区4号土坑（南東から）		

- | | | |
|-------|--------------------------|-------------------|
| 図版 19 | 1 3区7号土坑（東から） | 2 3区12号土坑（南から） |
| | 3 3区13号土坑（南西から） | |
| 図版 20 | 1 3区14号土坑（北から） | 2 3区15号土坑（南から） |
| | 3 3区波板状遺構検出状況（東から） | |
| 図版 21 | 1 3区1号波板状遺構（東から） | 2 3区2号波板状遺構（東から） |
| | 3 3区3号波板状遺構（東から） | |
| 図版 22 | 1 3区3号波板状遺構細部（北から） | 2 3区4号波板状遺構（東から） |
| | 3 3区4号波板状遺構細部（東から） | |
| 図版 23 | 1 4区遠景（西から） 奥の山は女山神籠石 | |
| | 2 4区第一遺構面全景（空中写真） | |
| 図版 24 | 1 4区1号竪穴住居跡（南東から） | 2 4区2号竪穴住居跡（南東から） |
| | 3 4区3号竪穴住居跡（南から） | |
| 図版 25 | 1 4区4号竪穴住居跡（東から） | 2 4区5号竪穴住居跡（東から） |
| | 3 4区6号竪穴住居跡（南から） | |
| 図版 26 | 1 4区7号竪穴住居跡（南東から） | 2 4区8号竪穴住居跡（西から） |
| | 3 4区9・10号竪穴住居跡（南から） | |
| 図版 27 | 1 4区11号竪穴住居跡（南から） | |
| | 2 4区12・13・14号竪穴住居跡（西から） | |
| | 3 4区竪穴住居跡集中部分（南から） | |
| 図版 28 | 1 4区15号竪穴住居跡（北西から） | |
| | 2 4区15号竪穴住居跡柱穴検出状況（北東から） | |
| | 3 4区15号竪穴住居跡柱痕検出状況（南東から） | |
| 図版 29 | 1 4区17号竪穴住居跡（南から） | 2 4区18号竪穴住居跡（東から） |
| | 3 4区19号竪穴住居跡（南東から） | |
| 図版 30 | 1 4区20号竪穴住居跡（南東から） | 2 4区1号甕棺墓（南東から） |
| | 3 4区2・3号甕棺墓（東から） | |
| 図版 31 | 1 4区4号甕棺墓（南西から） | 2 4区5号甕棺墓（南東から） |
| | 3 4区6号甕棺墓（南東から） | |
| 図版 32 | 1 4区7号甕棺墓（北西から） | 2 4区8号甕棺墓（南から） |
| | 3 4区9号甕棺墓（南から） | |
| 図版 33 | 1 4区10号甕棺墓（南から） | 2 4区11号甕棺墓（北から） |
| | 3 4区12号甕棺墓（北から） | |
| 図版 34 | 1 4区13号甕棺墓（南から） | 2 4区14号甕棺墓（南東から） |
| | 3 4区15号甕棺墓（南東から） | |
| 図版 35 | 1 4区16号甕棺墓（南東から） | 2 4区17号甕棺墓（北西から） |
| | 3 4区18号甕棺墓（北西から） | |
| 図版 36 | 1 4区19・20号甕棺墓（南東から） | 2 4区21号甕棺墓（南東から） |
| | 3 4区1号石棺墓検出状況（南から） | |

- | | | |
|-------|-----------------------------|------------------|
| 図版 37 | 1 4区1号石棺墓（北から） | 2 4区1号石棺墓（北から） |
| | 3 4区1号石棺墓（南から） | |
| 図版 38 | 1 4区1号石棺墓（西から） | 2 4区1号石蓋土坑墓（南から） |
| | 3 4区1号石蓋土坑墓完掘後（北から） | |
| 図版 39 | 1 4区1号土坑（南から） | 2 4区2号土坑（南から） |
| | 3 4区3号土坑（南から） | |
| 図版 40 | 1 4区4号土坑（南から） | 2 4区5号土坑（南から） |
| | 3 4区6号土坑（西から） | |
| 図版 41 | 1 4区7号土坑（西から） | 2 4区8号土坑（北から） |
| | 3 4区9号土坑（東から） | |
| 図版 42 | 1 4区1号溝土層（東から） | 2 4区4号溝土層（西から） |
| 図版 43 | 1区1・2・4・5号土坑出土土器 | |
| 図版 44 | 2区3・5号土坑、包含層出土土器 | |
| 図版 45 | 3区1・5号甕棺 | |
| 図版 46 | 3区9・16・29号甕棺 | |
| 図版 47 | 3区18・21号甕棺 | |
| 図版 48 | 3区22・23号甕棺 | |
| 図版 49 | 3区24・26号甕棺 | |
| 図版 50 | 3区36・37号甕棺 | |
| 図版 51 | 3区2・3・6・7・8・10号甕棺 | |
| 図版 52 | 3区11・12・13・15・17・19号甕棺 | |
| 図版 53 | 3区28・30・31・33・34・35号甕棺 | |
| 図版 54 | 3区4・14・20・27号甕棺 | |
| 図版 55 | 3区1・2号祭祀土坑、1号土坑出土土器 | |
| 図版 56 | 3区2・4・5・9・14号土坑、5号溝、遺構面出土土器 | |
| 図版 57 | 4区2・4・6号竪穴住居跡出土土器 | |
| 図版 58 | 4区9号竪穴住居跡出土土器 | |
| 図版 59 | 4区9・12・13号竪穴住居跡出土土器 | |
| 図版 60 | 4区15・17・19号竪穴住居跡出土土器 | |
| 図版 61 | 4区1・2・12号甕棺 | |
| 図版 62 | 4区4・5号甕棺 | |
| 図版 63 | 4区7・18号甕棺 | |
| 図版 64 | 4区19・20号甕棺 | |
| 図版 65 | 4区21号甕棺、1号石棺墓出土土器 | |
| 図版 66 | 4区3・6・8・9・10・11号甕棺 | |
| 図版 67 | 4区14・15・16・17号甕棺 | |
| 図版 68 | 4区1・4・5・8・13号土坑（南から） | |
| 図版 69 | 4区1・3・4号溝、遺構面出土土器、2～4区出土石器 | |
| 図版 70 | 4区2・4区出土石器 | |

挿図目次

第1図	九州新幹線船小屋・大牟田間埋蔵文化財調査地点	3
第2図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	7
第3図	瀬高町内新幹線沿線図 (1/20,000) 調査区配置図 (1/2,000)	8
第4図	基本層序模式図	9
第5図	1区遺構配置図 (1/300)	10
第6図	1区1~3号土坑実測図 (1/30)	11
第7図	1区1・3・4号土坑出土土器実測図 (1/4)	13
第8図	1区2号土坑出土土器実測図 (1~7は1/3、他は1/4)	14
第9図	1区4・5号土坑実測図 (1/30・1/60)	15
第10図	1区5号土坑出土土器実測図 (1/4)	16
第11図	1区遺構面等出土土器実測図 (1/4)	17
第12図	2区1・2号土坑実測図 (1/30)	18
第13図	2区遺構配置図 (1/300)	19
第14図	2区1~3号溝出土土器実測図 (1/4)	20
第15図	2区1・2・4・6・7号土坑出土土器実測図 (1/4)	21
第16図	2区3号土坑実測図 (1/30)	23
第17図	2区3号土坑出土土器実測図① (1/4)	24
第18図	2区3号土坑出土土器実測図② (1/4)	25
第19図	2区4~6号土坑実測図 (1/30)	27
第20図	2区5号土坑出土土器実測図① (1/4)	29
第21図	2区5号土坑出土土器実測図② (22・23は1/8、他は1/4)	30
第22図	2区7号土坑実測図 (1/30)	31
第23図	2区包含層等出土土器実測図① (1/4)	33
第24図	2区包含層等出土土器実測図② (1/4)	34
第25図	3区1号竪穴住居跡実測図 (1/30)	35
第26図	3区遺構配置図① (1/300)	36
第27図	3区遺構配置図② (1/300)	37
第28図	3区1~3号甕棺墓実測図 (1/20)	39
第29図	3区1・5・9号甕棺実測図 (1/10)	41
第30図	3区4~9号甕棺墓実測図 (1/20)	43
第31図	3区2~4・6・7号甕棺実測図 (1/6)	44
第32図	3区8・10・11号甕棺実測図 (1/6)	45
第33図	3区10~15号甕棺墓実測図 (1/20)	47
第34図	3区12~15号甕棺実測図 (1/6)	49
第35図	3区16・18号甕棺墓実測図 (1/20)	51
第36図	3区16・18号甕棺実測図 (1/10)	53
第37図	3区17・19~21号甕棺墓実測図 (1/20)	55

第 38 図	3 区 17・19・20・27 号甕棺実測図 (1/6)	56
第 39 図	3 区 21・22 号甕棺実測図 (1/10)	57
第 40 図	3 区 22・23 号甕棺墓実測図 (1/20)	59
第 41 図	3 区 23・24・26 号甕棺実測図 (1/10)	60
第 42 図	3 区 28・30~32 号甕棺実測図 (1/6)	61
第 43 図	3 区 24~27 号甕棺墓実測図 (1/20)	63
第 44 図	3 区 28~35 号甕棺墓実測図 (1/20)	65
第 45 図	3 区 33~35 号甕棺実測図 (1/6)	67
第 46 図	3 区 36・37 号甕棺墓実測図 (1/20)	69
第 47 図	3 区 29・36・37 号甕棺実測図 (1/10)	70
第 48 図	3 区 1・2 号祭祀土坑実測図 (1/30)	71
第 49 図	3 区 1 号祭祀土坑出土土器実測図① (1/4)	73
第 50 図	3 区 1 号祭祀土坑出土土器実測図② (28 は 1/8、他は 1/4)	74
第 51 図	3 区 2 号祭祀土坑出土土器実測図① (1/4)	75
第 52 図	3 区 2 号祭祀土坑出土土器実測図② (1/4)	76
第 53 図	3 区 1~5 号土坑実測図 (4 は 1/60, 他は 1/30)	79
第 54 図	3 区 1 号土坑出土土器実測図 (1/4)	80
第 55 図	3 区 2~5 号土坑出土土器実測図 (1/4)	81
第 56 図	3 区 6~9 号土坑実測図 (1/30)	83
第 57 図	3 区 7 号土坑出土土器実測図 (1/4)	84
第 58 図	3 区 10~15 号土坑実測図 (1/30)	85
第 59 図	3 区 9・11~14 号土坑出土土器実測図 (1/4)	86
第 60 図	3 区 2~6 号溝出土土器実測図 (1/4)	89
第 61 図	3 区 1・2 号波板状遺構出土土器実測図 (1/4)	90
第 62 図	3 区 1~4 号波板状遺構実測図 (1/60)	91
第 63 図	3 区遺構面等出土土器実測図 (1/4)	92
第 64 図	4 区遺構配置図① (1/300)	94
第 65 図	4 区遺構配置図② (1/300)	95
第 66 図	4 区 1~3 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	97
第 67 図	4 区 1~5 号竪穴住居跡出土土器実測図 (27~29 は 1/4、他は 1/3)	98
第 68 図	4 区 4~8 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	99
第 69 図	4 区 6 号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)	101
第 70 図	4 区 6 号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)	102
第 71 図	4 区 6 号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/3)	103
第 72 図	4 区 7・8・11・13 号竪穴住居跡出土土器実測図 (8 は 1/4、他は 1/3)	104
第 73 図	4 区 9・10 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	105
第 74 図	4 区 9 号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)	107
第 75 図	4 区 9 号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)	109
第 76 図	4 区 9 号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/3)	110
第 77 図	4 区 11~13 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	111

第 78 図	4 区 12 号 竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	113
第 79 図	4 区 14・15 号 竪穴住居跡実測図 (1/60)	115
第 80 図	4 区 14・18~20 号 竪穴住居跡出土土器実測図 (1~5 は 1/4、他は 1/3)	116
第 81 図	4 区 15 号 竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)	117
第 82 図	4 区 15 号 竪穴住居跡出土土器実測図② (24~28 は 1/4、他は 1/3)	118
第 83 図	4 区 17~20 号 竪穴住居跡実測図 (1/60)	119
第 84 図	4 区 17 号 竪穴住居跡出土土器実測図 (3 は 1/4、他は 1/3)	121
第 85 図	4 区 1~3 号 甕棺墓実測図 (1/20)	123
第 86 図	4 区 1・2・4 号 甕棺実測図 (1/10)	125
第 87 図	4 区 4~8 号 甕棺墓実測図 (1/20)	127
第 88 図	4 区 3・6・7 号 甕棺実測図 (1/6)	128
第 89 図	4 区 5・12・18 号 甕棺実測図 (1/10)	129
第 90 図	4 区 9~14 号 甕棺墓実測図 (1/20)	131
第 91 図	4 区 8~11 号 甕棺実測図 (1/6)	133
第 92 図	4 区 14・15 号 甕棺実測図 (1/6)	135
第 93 図	4 区 15~18 号 甕棺墓実測図 (1/20)	137
第 94 図	4 区 16・17 号 甕棺実測図 (1/6)	138
第 95 図	4 区 19・20 号 甕棺墓実測図 (1/20)	139
第 96 図	4 区 19・20 号 甕棺実測図 (1/10)	140
第 97 図	4 区 21 号 甕棺墓・1 号 石棺墓実測図 (1/20)	141
第 98 図	4 区 21 号 甕棺・1 号 石棺墓出土土器実測図 (1/10)	143
第 99 図	4 区 1 号 石蓋土坑墓実測図 (1/20)	144
第 100 図	4 区 1~4 号 土坑実測図 (1/30)	146
第 101 図	4 区 1~3 号 土坑出土土器実測図 (1/3)	147
第 102 図	4 区 4 号 土坑出土土器実測図 (1/4)	149
第 103 図	4 区 5~8 号 土坑実測図 (5, 6 は 1/60、他は 1/30)	151
第 104 図	4 区 5 号 土坑出土土器実測図 (1/3)	152
第 105 図	4 区 6・8・10・12・13 号 土坑出土土器実測図 (1~8 は 1/3、他は 1/4)	153
第 106 図	4 区 9~12・14 号 土坑実測図 (1/30)	155
第 107 図	4 区 13・15~18 号 土坑実測図 (1/30)	156
第 108 図	4 区 1・2・6~8 号 溝土層実測図 (1/30)	157
第 109 図	4 区 1~4・11 号 溝出土土器実測図 (8・9・18・20・21 は 1/4、他は 1/3)	159
第 110 図	4 区 遺構面等出土土器実測図① (1~7 は 1/4、他は 1/3)	161
第 111 図	4 区 遺構面等出土土器実測図② (1/3)	162
第 112 図	1~4 区 出土鉄器・石器実測図 (4~6 は 2/3、他は 1/2)	163

表目次

第1表	九州新幹線鹿児島ルート船小屋・新八代間福岡県内埋蔵文化財調査一覧……………	2
第2表	1～4区出土鉄器・石器一覧表……………	164

I はじめに

1 調査の経緯

今回、新たに建設される九州新幹線鹿児島ルートは「高速輸送体系の形成が国土の総合的かつ普遍的開発に果たす役割の重要性にかんがみ、新幹線鉄道による全国的な鉄道網の整備を図り、もって国民経済の発展及び国民生活領域の拡大並びに地域の振興に資することを目的」とする「全国新幹線鉄道整備法」に基づき、九州の大動脈として地域の振興と国土の均衡ある発展のために、その主たる区間を列車が毎時200キロメートル以上の高速度で走行することができる「新幹線鉄道」として計画されたものである。

ほぼ直線に福岡県福岡市の博多駅から鹿児島県鹿児島市の鹿児島中央駅に至る全長約257km、全12駅の整備新幹線であり、このうち、熊本県八代市新八代駅～鹿児島市鹿児島中央駅区間の約127kmについては平成16(2004)年3月13日に部分開業している。

現在、残る博多・新八代間約130km区間については、平成22年度の完成を目標に建設が進められている。現在までの流れは下記のとおりである。

昭和45(1970)年5月	全国新幹線鉄道整備法制定
昭和47(1972)年6月	福岡市・鹿児島市間基本計画決定
昭和48(1973)年11月	福岡市・鹿児島市間整備計画決定
昭和50(1975)年3月	山陽新幹線岡山・博多間開業
平成3(1991)年8月	八代・西鹿児島間工事実施計画認可(建設事業着手)
平成10(1998)年3月	船小屋・新八代間工事実施計画認可(建設事業着手)スーパー特急方式
平成12(2000)年12月	政府・与党整備新幹線検討委員会で博多～新八代間でのフル規格での整備が決定
平成13(2001)年4月	博多・船小屋間工事実施計画認可(建設事業着手)
平成16(2004)年3月	新八代・鹿児島中央間開業
平成22(2010)年度	博多・新八代間完成予定

小川柳ノ内遺跡の所在する瀬高中工区については、平成15年12月1日付けで九州新幹線建設局長名で、福岡県教育委員会教育長に「九州新幹線建設工事に伴う山門郡瀬高町地内の埋蔵文化財の試掘調査について」(鉄運九建用一第72号)という依頼文書が提出されている。これは山門郡瀬高町本郷・坂田・小川及び山門にまたがる新幹線工事側の瀬高北工区・中工区部分に関する埋蔵文化財の試掘調査依頼である。

この依頼を受け、平成15年12月10・12・15～18・24日の間で、用地の交渉が調い、試掘が可能な部分について試掘調査を行っている。試掘調査はバケットサイズが0.25のバックホーを用い、路線に沿って、南北に試掘トレンチを掘削して行った。その結果、中工区に関しては、後の文化財調査区で1～4区及び8区で試掘を行っており、その全ての区間から遺構ないし遺物を検出している。結果、返済川の氾濫原を一部除き、本調査が必要であることが判明した。

このことから、埋蔵文化財の試掘結果の実施について(平成16年1月5日15教文調第127号)により、小川柳ノ内遺跡に関しては遺構が高密度で存在し、本調査が必要な旨を回答している。またその文書で、今回、試掘を行うことができなかつた5～7区は地形の状況から連続して遺構が存する可能性

が高いとしている。

発掘調査は同年6月2日(水)から、まず南端部に位置する小川柳ノ内1区の重機(バケットサイズ0.4)による表土剥ぎから行った。試掘調査での遺構面の深さは1.2~1.3mと予想されていた。6月9日(水)遺構面の深さが約2mとかなり深いことが判明し、遺構面からの湧水が盛んになる。この後、周辺の水田への水が引かれたためにますます湧水が増え、毎日水汲みが必要となる。6月28日(月)の休日明けには、雨水と湧水のために現場がほぼ完全に水没する。現場作業員から農業用ポンプ(パチカル)を借りし水汲みを行う。7月6日(火)、1区の埋め戻しを無事、終了する。

7月5日(月)から次に本調査を依頼された4区の表土剥ぎを開始する。7月13日(火)、北九州市産業医科大学の堀江正知先生ほか、炎天下での発掘作業における人体への影響を測定・調査するために来現され、気温・体温等の測定を行う。8月4日(水)、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。8月6日(金)、重機によって下層面までの掘削を開始する。9月7日(火)、台風18号の強風により事務所・休憩所として使用していた連棟のプレハブ(総重量約3t)が180度横転する。近接する天満宮の風速計が約50mを二度、記録していた。10月22日(金)、4区の埋め戻しが終了する。

9月14日(火)、3区の表土剥ぎを開始する。なお、3区については新設の水路部分及び仮設の水路部分についても本調査を行っている。10月15日(金)、3区のラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。下層の遺構面の調査を行い、11月10日(水)、3区の埋め戻しを終了する。

10月29日(金)、2区の掘削を開始する。調査中、下層に遺構面がもう一面存することが判明し、下層の調査を行う。12月6日(月)、2区の埋め戻しを終了する。

地点	工事件名	遺跡名	所在地	対象面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	調査年度	報告年度	備考
1	瀬高北	郡領ノ一遺跡	みやま市瀬高町坂田	4480	1107	H16	H17	調査終了
2	瀬高中	小川柳ノ内遺跡	みやま市瀬高町小川・下坂田	5600	5300	H16・17	H18・19	調査終了
3	瀬高南	藤ノ尾垣添遺跡	みやま市瀬高町山門	3360	5500	H15・16	H19~21	調査終了
4-A	瀬高南	山門北池遺跡	みやま市瀬高町山門	6340	1700	H15	H18	調査終了
4-B	瀬高南	山門前田遺跡	みやま市瀬高町山門・松田		1175	H14・15	H17	調査終了
4-C	瀬高南	松田掛畑遺跡	みやま市瀬高町松田		360	H17	H19	調査終了
5	高田田尻	海津横馬場遺跡	みやま市高田町海津	4200	2050	H13~15	H16・17	調査終了
6	高田田尻	飯田遺跡	みやま市高田町田尻	0				遺跡なし
7	高田T		みやま市高田町上楠田	3300				遺跡なし
8	楠田T	上楠田松浦遺跡	みやま市高田町上楠田	3520	560	H16	H17	高田町調査
9	楠田T	上楠田垣田遺跡	みやま市高田町上楠田	6000	870	H16	H17	高田町調査
10	楠田T		みやま市高田町上楠田	3300				遺跡なし
11	楠田T		大牟田市大字宮崎	5200				遺跡なし
12	楠田T	釈迦堂古墳群	大牟田市大字岩本	4000				遺跡なし
13	楠田T	釈迦堂古墳群	大牟田市大字岩本	8400				遺跡なし
14	楠田T	コソ塚遺跡	大牟田市大字岩本	2576				遺跡なし
15	大牟田ST	白銀川条里	大牟田市大字岩本	3360				遺跡なし
16	岩本	岩本下内遺跡	大牟田市大字岩本	1344	1000	H18	H19	調査終了
17	岩本	岩本土定原遺跡・貝殻塚古墳	大牟田市大字岩本	2240				遺跡なし
18	岩本		大牟田市大字岩本	896				遺跡なし
19	岩本	出口古墳群	大牟田市大字宮部	5000				遺跡なし
20	岩本		大牟田市大字宮部	5400				遺跡なし
21	三池T		大牟田市大字教来木	896				遺跡なし

第1表 九州新幹線鹿児島ルート船小屋・新八代間福岡県内埋蔵文化財調査一覧



第1図 九州新幹線船小屋・大牟田間埋蔵文化財調査地点 (1/100,000)

11月16日(火)、7区の1次調査部分の掘削を開始する。12月10日(金)、7区の1次調査部分、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。その後、下層の遺構面の調査を行い、平成17年1月19日、平行して調査を行っていた6区の上層面と同時にラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。3月11日(金)、7区1次調査部分の埋め戻しを終了する。

12月6日(月)、6区の掘削を開始する。平成17年1月19日、6区の上層面及び7区の下層面のラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。その後、6区下層面の調査を行い、2月22日(火)に6区下層面のラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。3月18日(金)、6区の埋め戻しを終了する。

なお、8区については今井涼子が発掘調査を行った。平成17年1月5日(水)より重機による表土剥ぎを開始した。1月14日(金)より作業員による遺構検出、掘削を開始し、2月17日(木)にラジコンヘリによる空中写真の撮影を行った。その後、用地内に残っていた電柱撤去を待ち、2月21日(月)より調査区を拡張し、3月14日(月)に再度空中写真を撮影した。3月22日(火)には作業員による作業を終了し、3月31日(木)に全ての作業を完了した。

用地交渉が長びき、最後まで調査が残っていた5区の調査に関しては年度をまたぎ、平成17年4月25日(月)、重機による掘削を開始した。また、国道208号線に面して一部調査のできなかった7区2次調査部分も平行して重機による掘削を開始した。6月7日(火)、5区・7区2次調査部分空撮。6月14日(火)、7区2次調査部分、埋め戻しを終了した。6月24日(金)、5区埋め戻しを終了し、九州新幹線建設に係る小川柳ノ内遺跡の調査を全て終了している。

2 調査の組織

独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 鉄道建設本部 九州新幹線建設局

	平成16年度	平成17年度	平成18年度
局長	高山 博文 北川 隆	北川 隆	元木 洋
次長	伊神 英二	関根 茂	関根 茂
用地第一課長	田中 等	田中 等	高橋 秀幸
用地第一課補佐	木佐一正和	木佐一正和	
用地第一課担当係長	入江 万久	入江 万久	入江 万久 房野 和清
工事第三課長	石徳 博行	北原 太一	北原 太一
工事第三課補佐	上野 登	上野 登	上野 登 弓削 伸二
工事第三課担当係長	馬淵 善男 林 孝治	馬淵 善男	林 孝治
大牟田鉄道建設所長	渡邊 修	長谷川正明	長谷川正明
担当副所長	那須 芳人	福田 聡	福田 聡
(瀬高中工区)			石津 範彦

福岡県教育庁総務部文化財保護課

	[平成16年度]	[平成17年度]	[平成18年度]
総括			
教育長	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教育次長	清水 圭輔	清水 圭輔	清水 圭輔
総務部長	中原 一憲	中原 一憲	大島 和寛
副理事兼文化財保護課長			磯村 幸男
文化財保護課長	井上 裕弘	久芳 昭文	
副課長		川述 昭人	佐々木隆彦
参事兼課長技術補佐	川述 昭人	木下 修	池辺 元明
	木下 修	池辺 元明	小池 史哲
参事	新原 正典	佐々木隆彦	新原 正典
		新原 正典	
参事兼課長補佐		安川 正郷	安川 正郷
課長補佐	安川 正郷		
参事補佐兼調査第一係長	小池 史哲	小池 史哲	小田 和利
庶務			
参事補佐兼管理係長		稲尾 茂	
管理係長	稲尾 茂		井手 優二
事務主査	宮崎 志行	石橋 伸二	
主任主事	石橋 伸二	末竹 元	湖上 大輔
	末竹 元	湖上 大輔	柏村 正央
			小宮 辰之
調査・報告			
参事補佐兼調査第二係長	中間 研志	飛野 博文	飛野 博文
参事補佐			濱田 信也
主任技師	今井 涼子	今井 涼子	進村 真之
	進村 真之	進村 真之	大庭 孝夫
	大庭 孝夫	大庭 孝夫	

発掘調査にあたっては地元の区長や住民を始め多くの方々の御協力で円滑に進めることができました。多雨だった梅雨の時期、酷暑・厳寒の中、1年以上の長きにわたり熱心に作業にあたられた現場作業員の方々や発掘調査を進める上で様々な御協力をいただいた旧瀬高町教育委員会及び鉄道建設・運輸施設整備支援機構の皆様に感謝申し上げます。

Ⅱ 位置と環境

小川柳ノ内(OGAWAYANAGINOUCHI)遺跡(1)は福岡県みやま市瀬高町小川及び坂田に位置している。発掘調査時点での所在地は福岡県山門郡瀬高町大字小川字柳ノ内及び大字坂田字下坂田であった。旧瀬高町は平成19年1月29日、近接する山門郡山川町、三池郡高田町と合併し、現在、『みやま市』となっている。旧瀬高町は、『筑紫次郎』と呼ばれ九州最大級の河川である筑後川や矢部川などの堆積による沖積平野である筑後平野の南部に所在する。筑後平野は現在でも肥沃な穀倉地帯として知られており、本遺跡が営まれていた時も稲作が中心の生活が行われていたものと考えられる。遺跡に近接する現在の堀池園・下坂田集落は、河川の氾濫などによって形成された自然堤防上の微高地に展開しており、本遺跡はその東側の縁辺に位置することから、遺跡の本体は現在の集落の地下に大規模に展開するものと考えられる。

18年度は、弥生時代の甕棺墓を中心に報告するため周辺の弥生時代の主な遺跡の概要について記述する。古墳時代以降の周辺の遺跡については19年度に記述することにする。

銚田遺跡(2)は旧瀬高町大字小川に所在する。煉瓦製作の原料とするため、盛んに行われていた土取り工事により破壊されていたが、1950年代以降、九州大学の鏡山猛先生により精力的に調査が行われている。弥生時代中期の甕棺墓55基以上を中心とする墓地と住居跡が検出されている。甕棺墓については墓坑に関する記載はないが、埋葬順序の前後関係については記述されている。甕棺墓の棺外副葬とみられる細形銅剣の破片と出土遺構は不明ながら弥生時代小形仿製鏡が出土している。

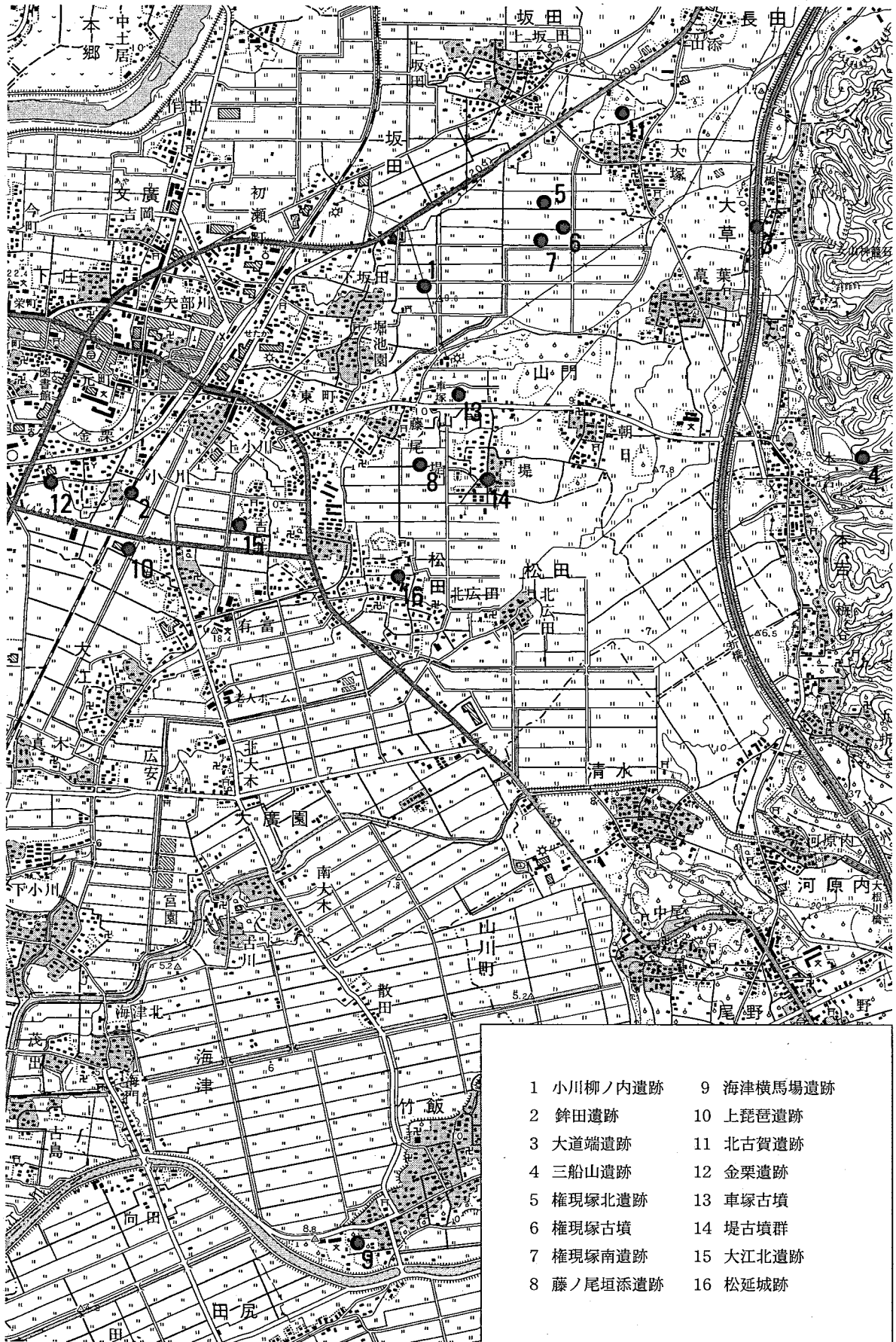
大道端遺跡(3)は旧瀬高町大字大草に所在する。昭和47(1972)年、九州縦貫自動車道建設に先立って発掘調査が行われた。瀬高町内では初めての大規模な発掘調査である。古墳時代から奈良時代にかけての集落が中心であるが、弥生時代後期の竪穴住居跡も10棟ほど調査されている。平成2(1990)年に圃場整備にかかる発掘調査も行われ、弥生時代終末から奈良時代にわたる集落も検出、38棟が調査されている。

旧瀬高町内では昭和58(1983)年から圃場整備事業にかかる発掘調査が行われている。その中で旧瀬高町大字本吉に所在する三船山遺跡(4)は標高50m前後の見晴らしのよい丘陵上に位置する。弥生時代中期後半から後期に掛けての竪穴式住居跡24棟が検出されている。

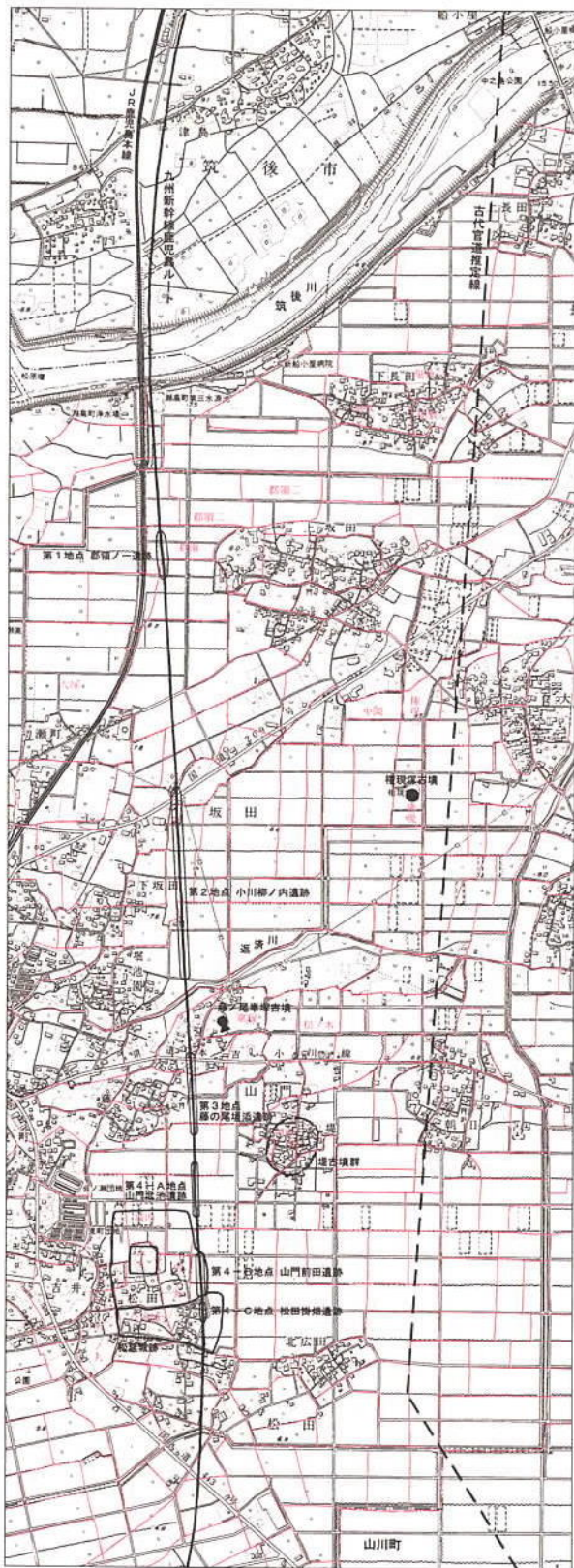
権現塚北遺跡(5)は旧瀬高町大字坂田字権現の権現塚古墳(6)の北側付近に広がる。縄文時代後期の竪穴住居跡や埋め甕なども検出されているが、弥生時代中期初頭～後期前半にわたる甕棺墓を中心とする墓地遺跡である。調査区内からは甕棺墓48基、箱式石棺墓2基、土坑墓4基が検出されている。その南側付近に広がる権現塚南遺跡(7)からは弥生時代中期初頭から前半の竪穴住居跡3棟と土坑7基他が検出されており、集落が展開する様子が窺える。

山門遺跡群に含まれる藤ノ尾垣添遺跡(8)では圃場整備に係る発掘調査により弥生時代中期を中心とする甕棺墓32基と弥生時代後期から古墳時代の竪穴住居跡13棟が検出されている。なお、14号甕棺墓からは翡翠製の勾玉1点が出土している。また、本遺跡は九州新幹線建設に係る発掘調査が平成14(2002)年から平成16(2004)年にかけて行われており、多数の甕棺墓、竪穴住居跡が調査されている。

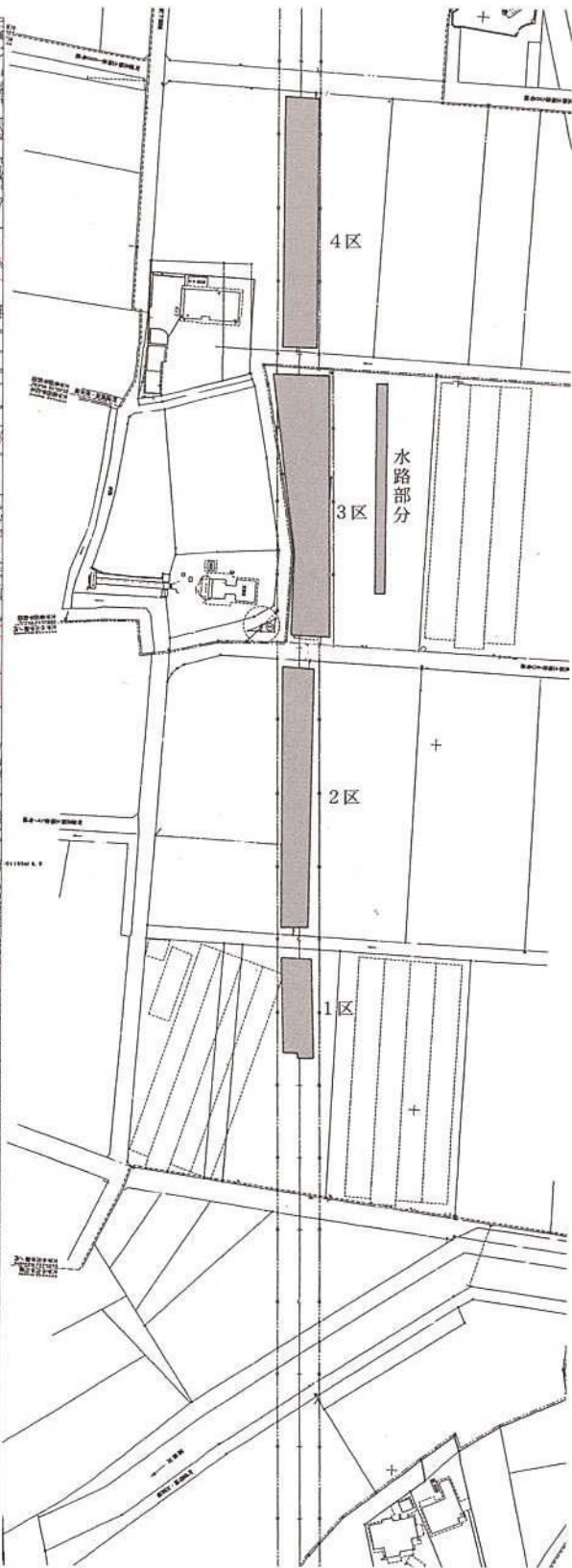
海津横馬場遺跡(9)は旧高田町大字海津に所在し、九州新幹線の建設工事に伴い平成13(2001)年から平成15(2003)年にかけて発掘調査が行われた。遺構は弥生時代後期を中心とするが、複数の時代にまたがっており、遺構密度が極めて濃い。小学校のプール建設に伴い発掘調査された近接する竹海校東遺跡と一連の遺跡と考えられ、付近一帯の台地上には大規模な集落が展開している。なお、遺跡内の土坑から巴形銅器が出土している。



第2図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第3図 瀬高町内九州新幹線沿線字図(1/20,000)



調査区配置図 (1/2,000)

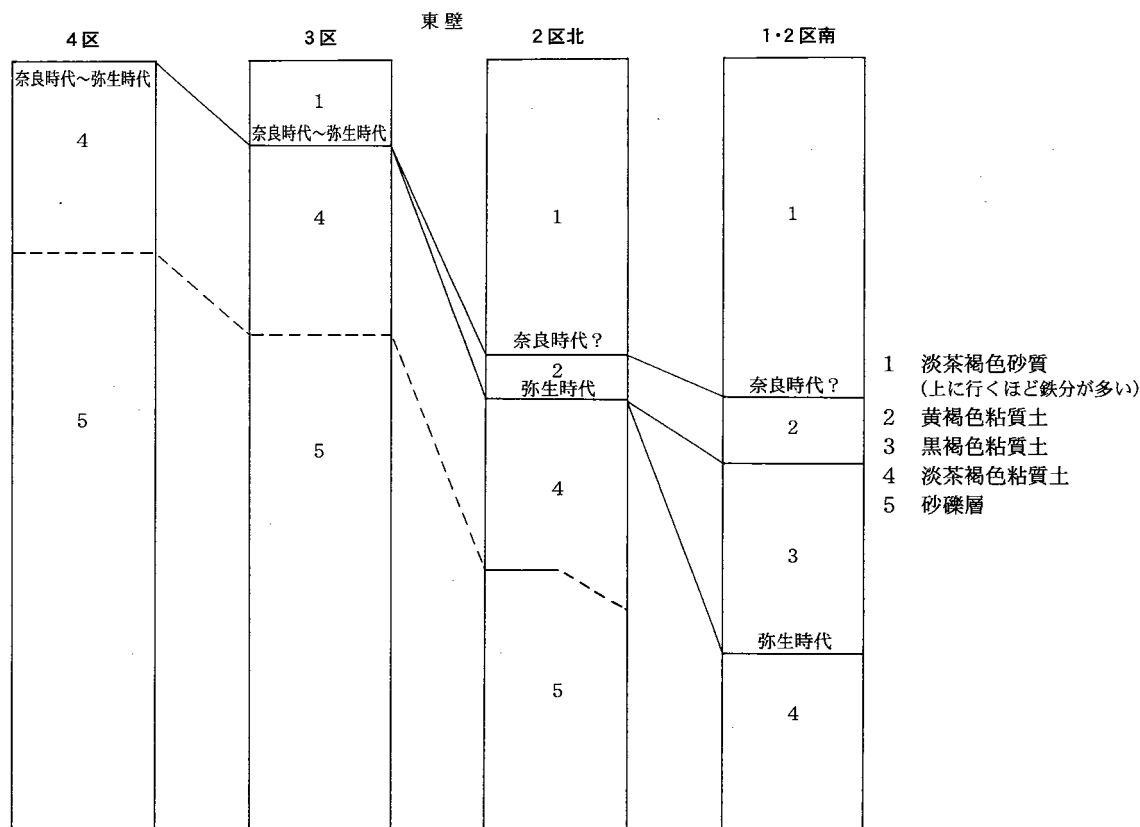
Ⅲ 発掘調査の記録

1 遺跡の概要

小川柳ノ内(OGAWAYANAGINOUCI)遺跡は福岡県みやま市瀬高町小川及び坂田に位置する。遺跡は矢部川の南岸に位置し、矢部川の形成した沖積平野の標高7m前後の微高地に存在する。この遺跡は昭和50年代後半に圃場整備にかかり発掘調査の行われた権現塚遺跡の範囲のやや西に外れた位置にある。このため、名称を権現塚遺跡にすることも検討したが、「権現塚」は西側約500m離れた位置に所在する古墳の名称であること、また、そうした場合、遺跡が広範囲に及んでしまうことから、最初に調査を行った地点である大字小字の名称をとり、小川柳ノ内遺跡とした。北側では大字が坂田の地点もあるが、遺跡が途切れることがなかったので同一の名称を使用した。調査範囲は返済川の北から国道209号線の北側部分までの約600mの区間である。この区間を調査の便宜上、道路および水路で分け、南から1～8区分けて調査を行った。区間中は多少の高低差はあるが一連の遺跡である。遺物はパンケース180箱分出土している。

2 基本層序(第4図)

現況では水田であり、倉庫等として使用されていた7区も水田面の上に盛土がなされていた。調査区が1～8区までに分かれ、多少の高低差はあるが、基本的な層序は変化はない。比較的判別しやすかった1区を例に挙げて説明を行うと、耕作土の直下、遺物をほとんど含まない淡茶褐色砂質土が約80cmと厚く堆積している。上層にいくに従い、鉄分が沈着しているのが、現代までに至る水田耕作によるものであろう。この層を除去すると黄褐色粘質土の安定した面が表れる。2区において遺構は検出されていないが、他調査区の奈良時代の遺構面に相当するものであると考えている。



第4図 基本層序模式図

この面の15cm下層で、黒褐色粘質土が現れる。面は安定せず、層中には遺物はほとんど含まれない。この黒褐色粘質土の下層、約45cmで淡茶褐色粘質土が現れる。この面を弥生時代の遺構面として調査を行っている。

3 1区の調査の内容

1区は返済川の北側に位置する。現在の返済川に向かっては氾濫原であったと考えられ遺構は存在せず、本遺跡の最南端である。地形は北に向かってわずかに上がっている。黄褐色粘質土の面で安定した面が表れたので、一旦、重機による掘削を止め、人力による精査を行ったが遺構は存在せず、耕土を除いて約160cm掘り下げた淡茶褐色粘質土の面での調査を行った。弥生時代の土坑4基、溝2条、古墳時代前期の土坑1基を検出した。

(1) 土坑

1号土坑(図版2、第6図)

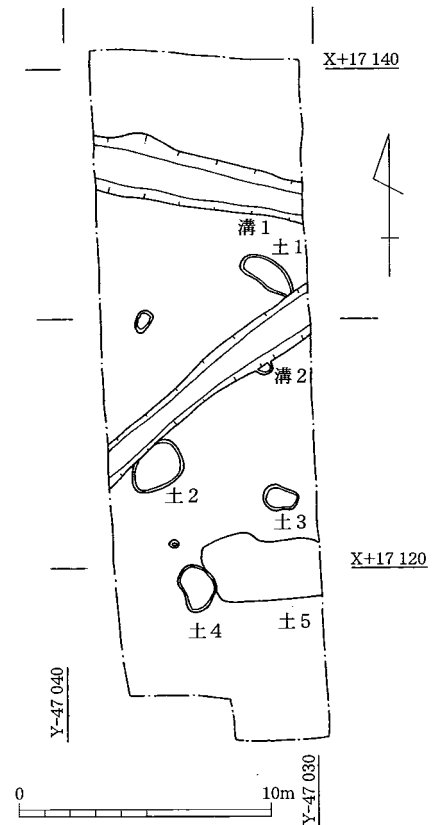
調査区の中央北東寄りに位置する。長軸230cm×短軸102cmの長楕円形で、南東端部を2号溝に切られる。深さは約30cmで、底面はほぼ平坦である。覆土は暗黄褐色である。遺物は弥生時代中期後葉のものがまとまって出土しているが、著しい湧水のために原位置での記録はできなかった。この土坑に伴うものと考えられる。

出土土器(図版43、第7図)

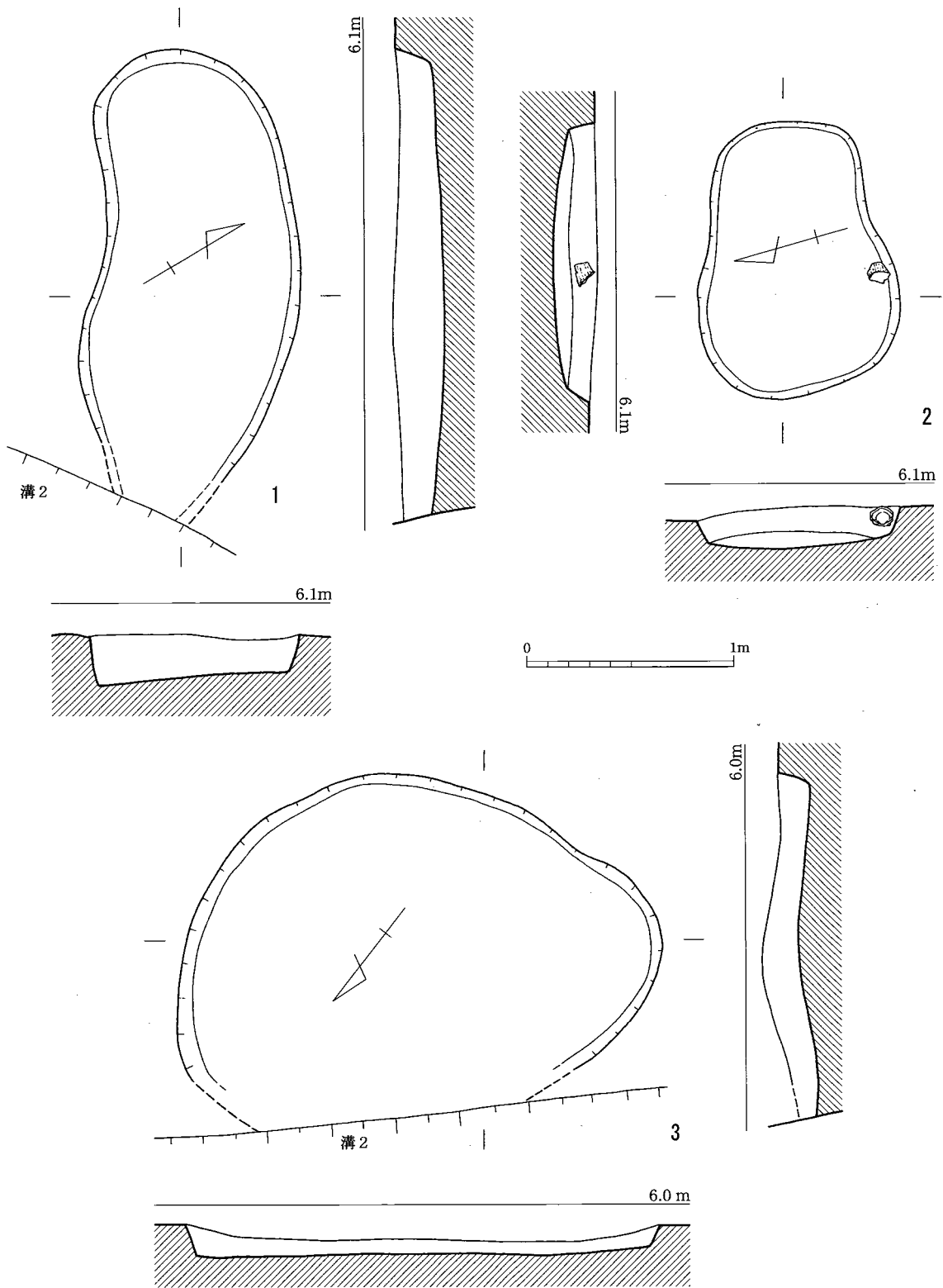
1~12はいずれも弥生土器である。1は蓋である。台付甕の底部の可能性も考えたが、胴部への広がりから蓋と判断した。内面にススが付着する。底径7.6cmである。2~12は甕である。2は口縁を外側に強く折り曲げるもの。口径27.0cm。外面はハケメ調整。3は口縁が両側に発達したもので、平坦面がやや外に傾く。外側に強く折り曲げ、内側に貼り付けていることが、断面から判断できる。内面に連続した圧痕が残る。口径33.5cmである。4は小型の甕で口縁端部を跳ね上げている。胴部内面に粘土の接合痕が残る。外面の調整は粗いハケメである。口径は14.0cmである。5はやや小形の甕で口縁部は両側に発達する。外面に部分的にススが付着する。口径は26.6cmである。6は甕の胴部分である。胴部中に1条の三角突帯を貼り付ける。外面の調整はハケメ。突帯部分の径は33.0cmである。7・8は2条の三角突帯を貼り付ける胴部である。外面はハケメ調整である。9・10は底部である。9の底径は8.5cmでわずかに上底である。10の底径は8.6cmである。部分的に二次的な火熱を受けた痕跡が残る。11は台付甕の底部で底径は8.3cm、外面の調整は粗いハケメである。12はやや大きめの甕の口縁部である。外側に大きく発達した口縁端部で、胴部が大きく張るものである。口径は32.0cmである。

2号土坑(図版2、第6図)

調査区の中央東寄りに位置する。長軸236cm×短軸167cmの卵形を呈するが北西部分を2号溝に切られる。深さは約15cmで、底面は平坦に近い。遺物は古墳時代前期のものが出土しているが、著しい湧水のため、原位置での記録はできなかった。覆土は暗黄茶褐色である。



第5図 1区遺構配置図 (1/300)



第6图 1区1~3号土坑实测图 (1/30)

出土土器(図版43、第8図)

1~7は土師器である。1~6は甕である。1~4は甕である。1はわずかに底部が残り、外面胴部上位にはタタキ調整、中位から下位はハケメである。胴部上位内面には接合痕が不規則に残るが、その上からハケメ調整を施す。内面下位はケズリである。口径は17.8cm、器高は26.4cmである。2も1と同様の調整を施す。口径17.5cmである。3は外面にハケメが見られない。口縁部外面には不規則に圧痕が残る。口径17.4cm。4は外面胴部上位までハケメ調整が施されるが、その下にタタキが残る。胴部内面下位はケズリ、上位には圧痕が強く残る。5・6は甕の口縁部である。5は口径16.0cmである。6は口径16.4cmである。7は直行する小型壺の口縁部であろうか。外面は圧痕の上から粗くミガキを施す。口径は12.0cmである。8~18は混入の弥生土器である。8・9は口縁を強く外反させるものである。8の口径は32.0cm。9は口径40.0cmである。10は中型の甕の口縁部である。口縁部は内外に大きく発達する。胴部は球形に大きく開くものと思われる。口径は46.0cmである。11は甕の胴部で断面三角の突帯を1条貼り付ける。12は三角突帯を2条貼り付けたものである。13~16は甕の底部である。平底である。13は底径6.0cm。14は底径10.0cm。15は底径8.0cm。16は底径7.0cmである。17は台付甕の底部である。外面は粗いハケメ調整である。18は丹塗りの高杯もしくは器台の底部である。やや丁寧な仕上げで、底径は21.0cmである。

3号土坑(図版2、第6図)

調査区の南寄りに位置する。長軸135cm×短軸100cmの楕円形を呈する。深さは15cmでやや中央が深くなっている。覆土は暗黄褐色である。弥生土器の底部がやや浮いた状態で出土している。

出土土器(第7図)

13は弥生土器の甕底部である。底径10.0cm。外面の調整はハケメである。内面にやや強い圧痕が連続して残る。

4号土坑(図版3、第9図)

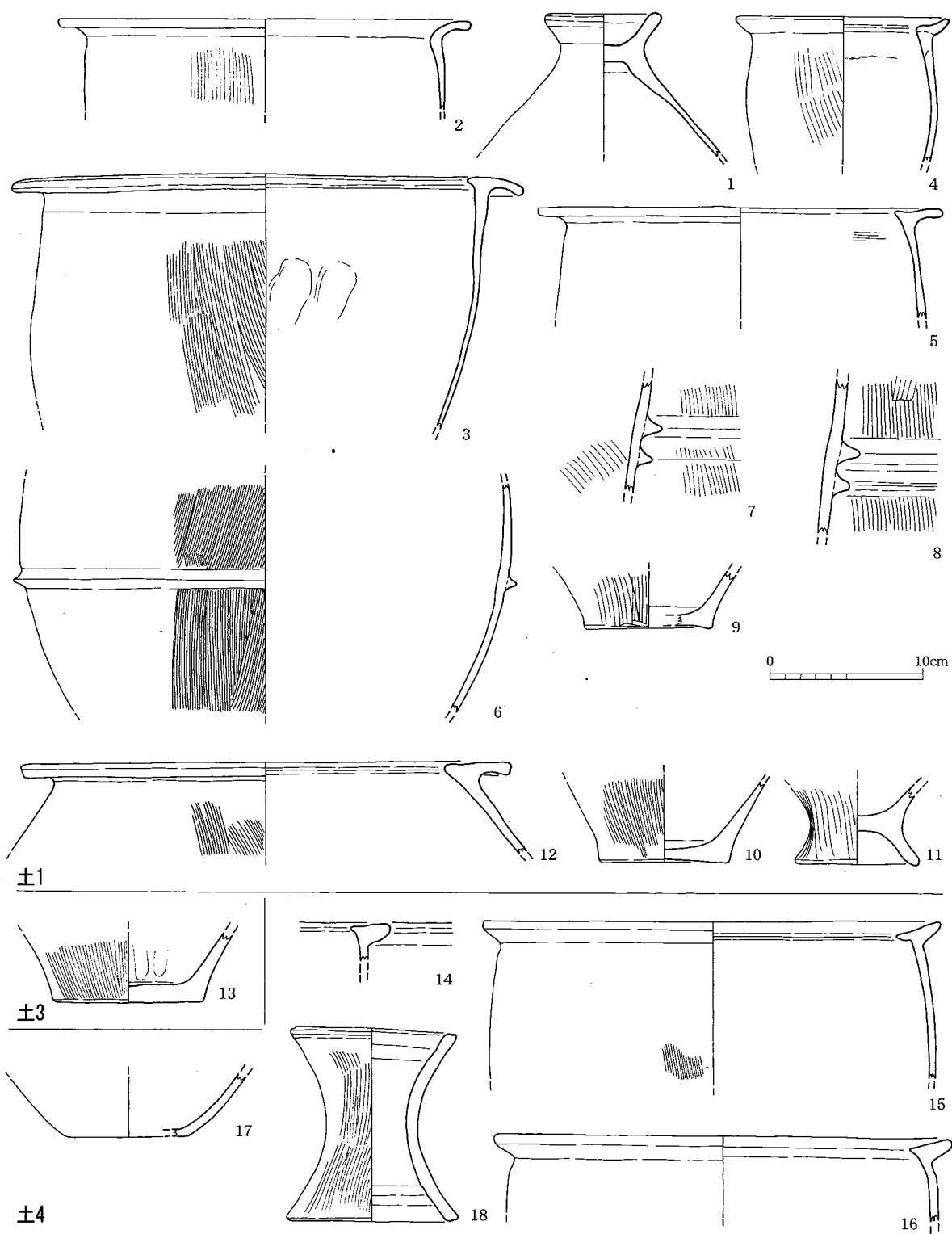
調査区の南寄りに位置する。一部、5号土坑を切っており、これより新しい。長軸190cm×短軸132cmの楕円形を呈する。深さは15cmで、底はほぼ平坦である。覆土は暗黄褐色である。弥生土器の器台が底付近から出土している。

出土土器(図版43、第7図)

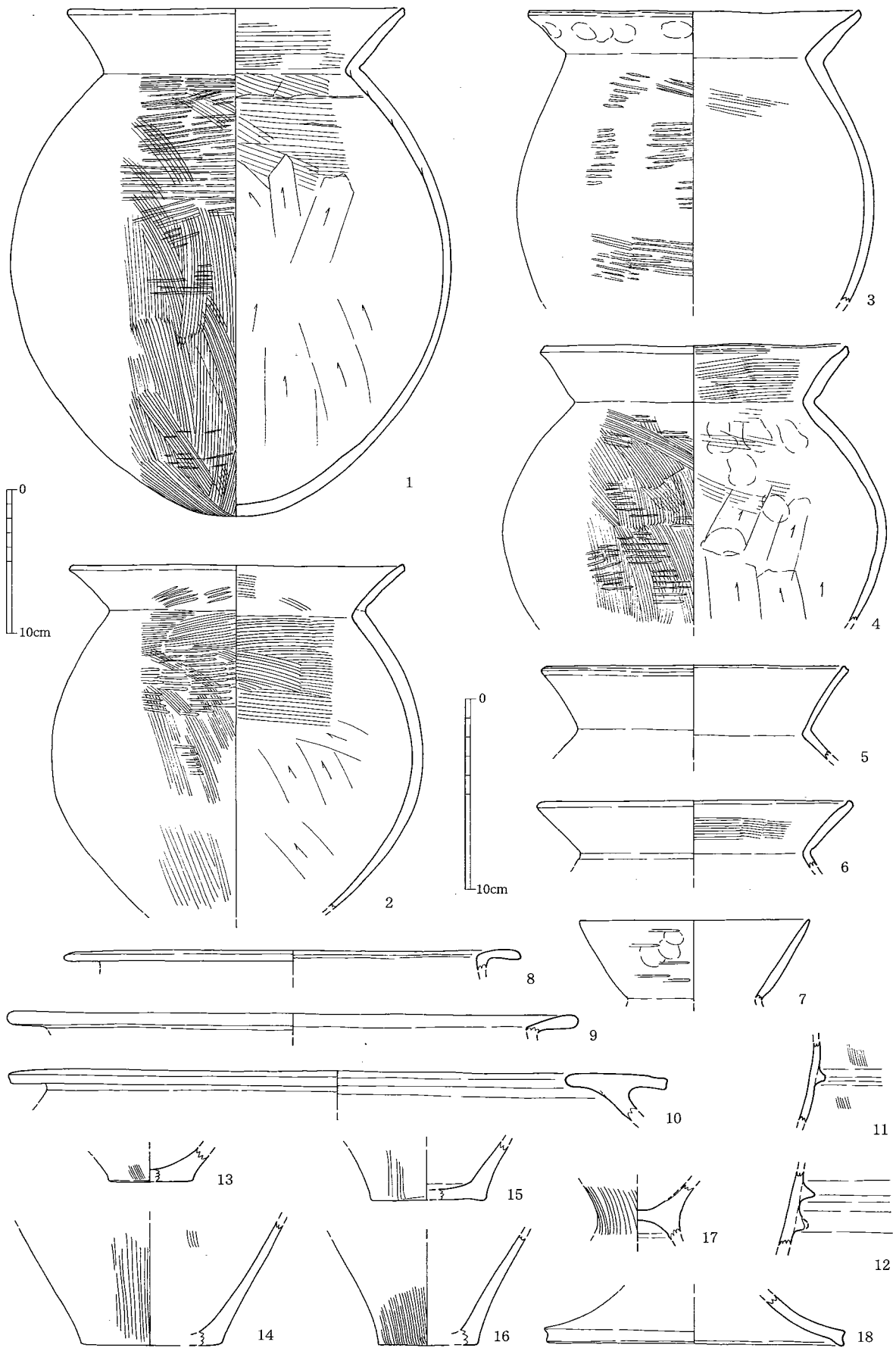
14~18は弥生土器である。14は甕の口縁部で断面三角状の貼り付け口縁で、わずかに内側に発達させたものである。15は口縁が両側に発達したもので、上に強く跳ね上げている。口縁上端面には黒斑が残る。口径30.0cmである。16も15と同様の口縁を呈する。口径は30.0cmである。17は鉢の底部であろうか。底径は8.0cmである。18は器台である。口径10.9cm、底径11.2cm、器高は10.7cmである。

5号土坑(第9図)

調査区の南寄りに位置する。西端を4号土坑に切られる。長軸深さは470cm+ α ×短軸276cmで、東端は調査区外へ広がる。深さは最も残りのよいところで30cmで、底はほぼ平坦である。覆土は暗黄褐色である。遺物は弥生時代中期後葉のものがまとまって出土しているが、著しい湧水のために原位置での記録はできなかった。



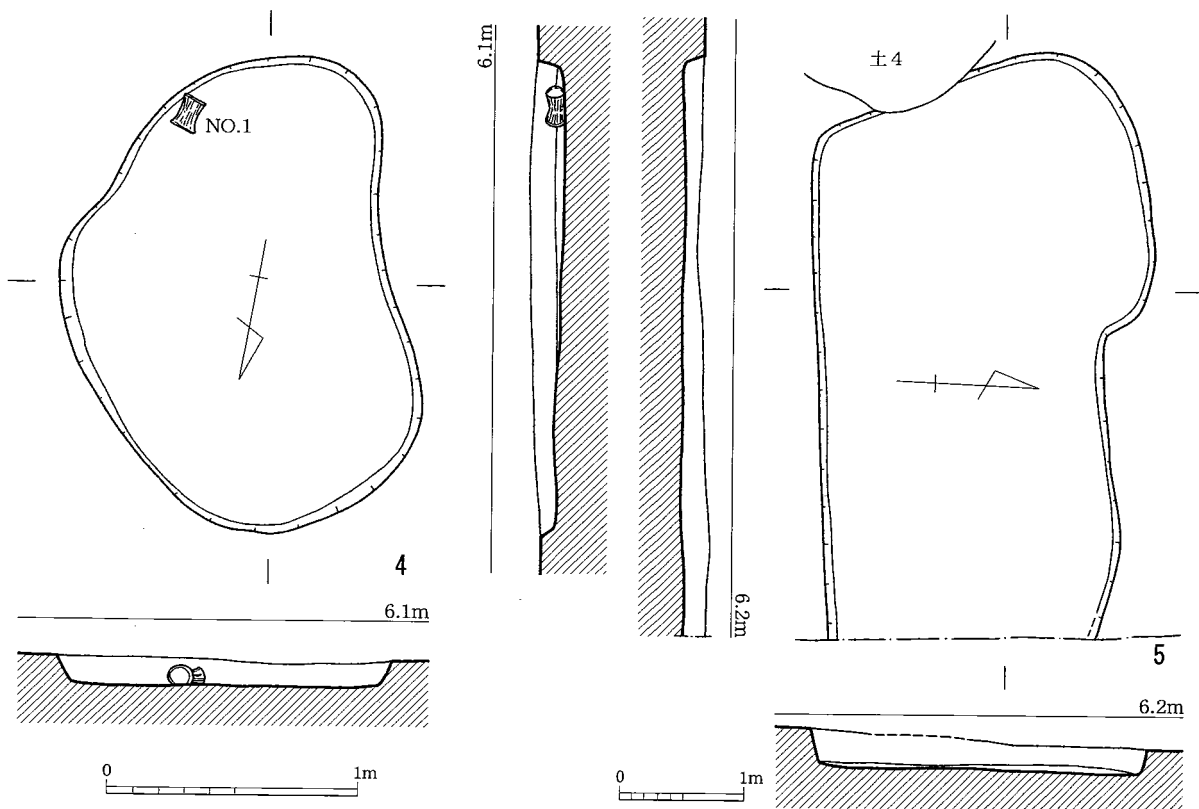
第7图 1区1·3·4号土坑出土土器实测图 (1/4)



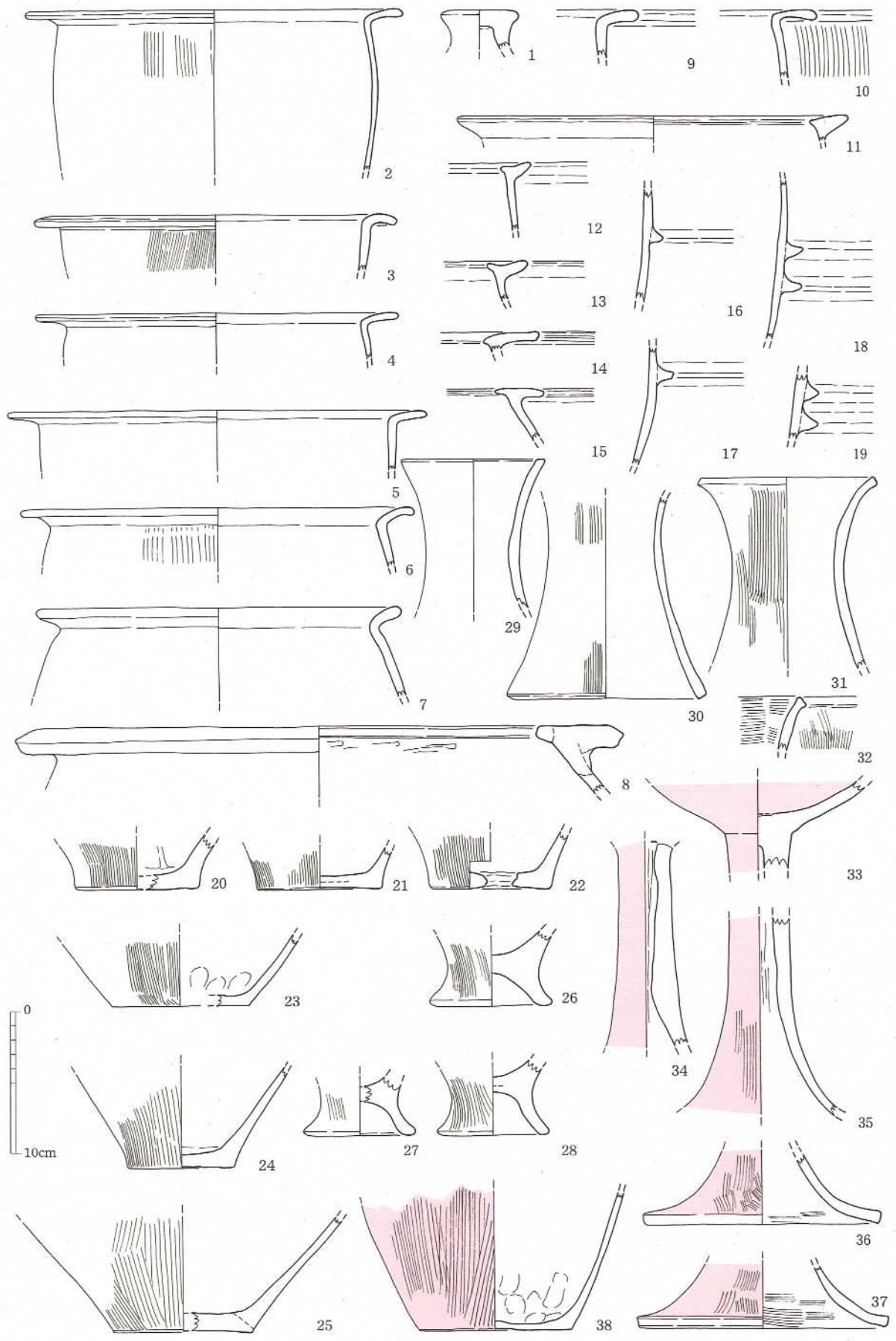
第8図 1区2号土坑出土土器実測図(1~7は1/3、他は1/4)

出土土器(図版43、第10図)

1~38は弥生土器である。1は蓋である。上端の径は5.0cmである。2~28は甕である。2~7は口縁を外側に強く外反させるものである。2の口径は27.0cmである。3は胴部があまり張らず、口縁端部が下方へ曲がる。口径は26.0cmである。4は口径26cmである。6は外反がやや弱く外面には粗いハケメが施される。口径は28.0cmである。7は外反がやや弱く胴部が張るものである。口径は26.0cmである。8は中型の甕の口縁部である。断面の観察から口縁の内外面に粘土帯を貼り付けていることがわかる。口縁部内面には貼り付けた粘土の接合痕が残る。口径は43.0cmである。9・10は口縁端部を強く折り曲げている。11は断面三角形に近い口縁で上部平坦面がやや内傾する。口径は28.0cmである。12~15は口縁が両側に発達した口縁部である。12・13はやや跳ね上げ気味のものである。14は口縁が外側に大きく発達している。15は両側に発達したもので、胴部が張るものである。16・17は断面三角の突帯を1条貼り付けたもの。18・19は断面三角の突帯を2条貼り付けたものである。20~25は平底の甕の底部である。20の底径は9.0cm。21は底径8.9cmである。22は甕の底部で焼成後に約1.5cmの穿孔を施している。底径は8.6cmである。23の底径は10.0cm。24の底径は7.7cmである。25は底径10.0cmである。26~28は台付甕の底部である。26は底径9.6cm。27は底径8.0cm。28は底径7.8cmである。29~32は器台である。外面の調整は縦方向のハケメ。内面の調整は端部付近に横方向のハケメを施す。29の口径は10.2cm。30の底径は14.2cm。31の口径は13.0cmである。33~38は丹塗土器である。33は高杯の杯部から脚部にかけての破片である。内外面に丹塗が施される。34~37は高杯の脚部である。34の内面には絞り痕が残る、外面に丹塗を施す。35は外面、ハケメの後、丹塗を施す。内面には絞り痕が残る。36は脚端部で内外面ハケメ調整の後、内面のみ丹塗が施される。底径は17.0cmである。37も36と同様に内外面ハケメの後、外面のみに丹塗りされる。



第9図 1区4・5号土坑実測図 (1/30・1/60)



第10图 1区5号土坑出土土器实测图 (1/4)

底径は18.0cmである。38は甕の底部である。ハケメを施したやや黒い外面に丹塗が施される。内面には不規則に圧痕が残る。底径は10.9cmである。

(2)溝

1号溝(第5図)

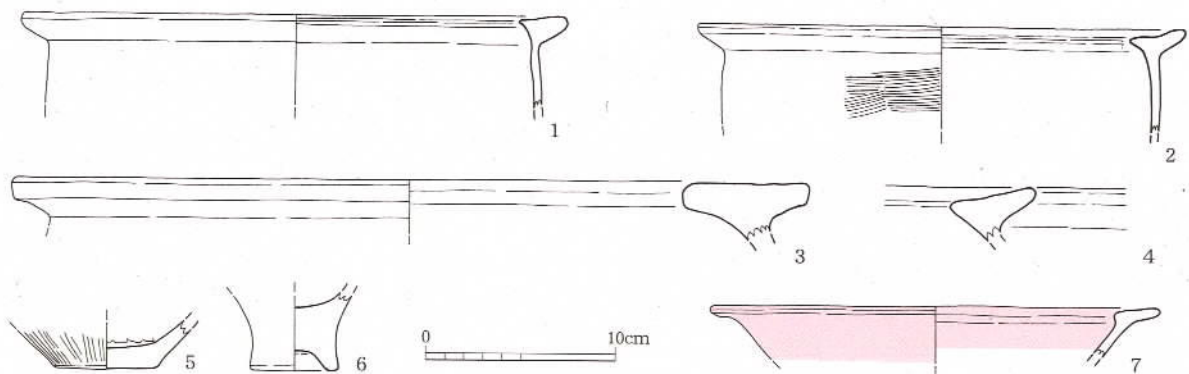
調査区北端部に東西に掘削された溝である。両端は調査区外へと延びる。幅200~230cm、残存している深さは約40cmの断面逆台形を呈する。著しい湧水のため土層図は作成できなかったが、覆土は暗黄褐色である。遺物は出土していない。

2号溝(第5図)

調査区の中央付近を北東から南西に掘削された溝である。1号土坑及び2号土坑を切っていることから、古墳時代前期以降に掘削された溝である。両端は調査区外へと延びる。幅130~140cm、残存している深さは約30cmの断面逆台形を呈する。著しい湧水のため土層図は作成できなかったが、覆土は暗黄褐色である。遺物は出土していない。

(3)遺構面等出土土器(第11図)

1~7は弥生土器である。1は甕の口縁部である。断面三角形であるがわずかに内側に発達している。口径は29.0cmである。2は跳ね上げ口縁のやや小型の甕の口縁部である。外面には横方向のハケメが施される。口径は26.0cmである。3は中型の甕の口縁部である。口縁部は内外に大きく発達しており、胴部が大きく張る器形と考えられる。口径は42.0cmである。4は跳ね上げ気味の口縁を持つ甕の口縁部である。5は甕の底部で、外面の調整はハケメ。内面に工具によるナデの痕跡が残る。底径は5.4cmである。6は厚底の甕の底部である。上底で底径は4.7cmである。7は丹塗の高杯の杯部である。口縁部は外側に大きく発達する。内外面に丹塗を施す。口径は26.0cmである。



第11図 1区遺構面等出土土器実測図(1/4)

4 2区の調査の内容

1区の用水路を挟んで、北側に位置する。1区に続いて、南端は低い北に向かい、徐々に上がっている。北端付近は遺構の存在しない砂礫層が露出しており、これは続く3区南端部に位置する天満宮の微高地に連なるものと考えられ、本来、遺構が存していた場所であるが、その後の土地の改変により削られてしまった可能性が高い。南側は1区と同じく黄褐色粘質土の面で安定した面を検出したが、遺構は存在せず、耕土を除いて約80cmまで掘り下げた淡茶褐色粘質土の面で土坑2基、溝3条を検出した。

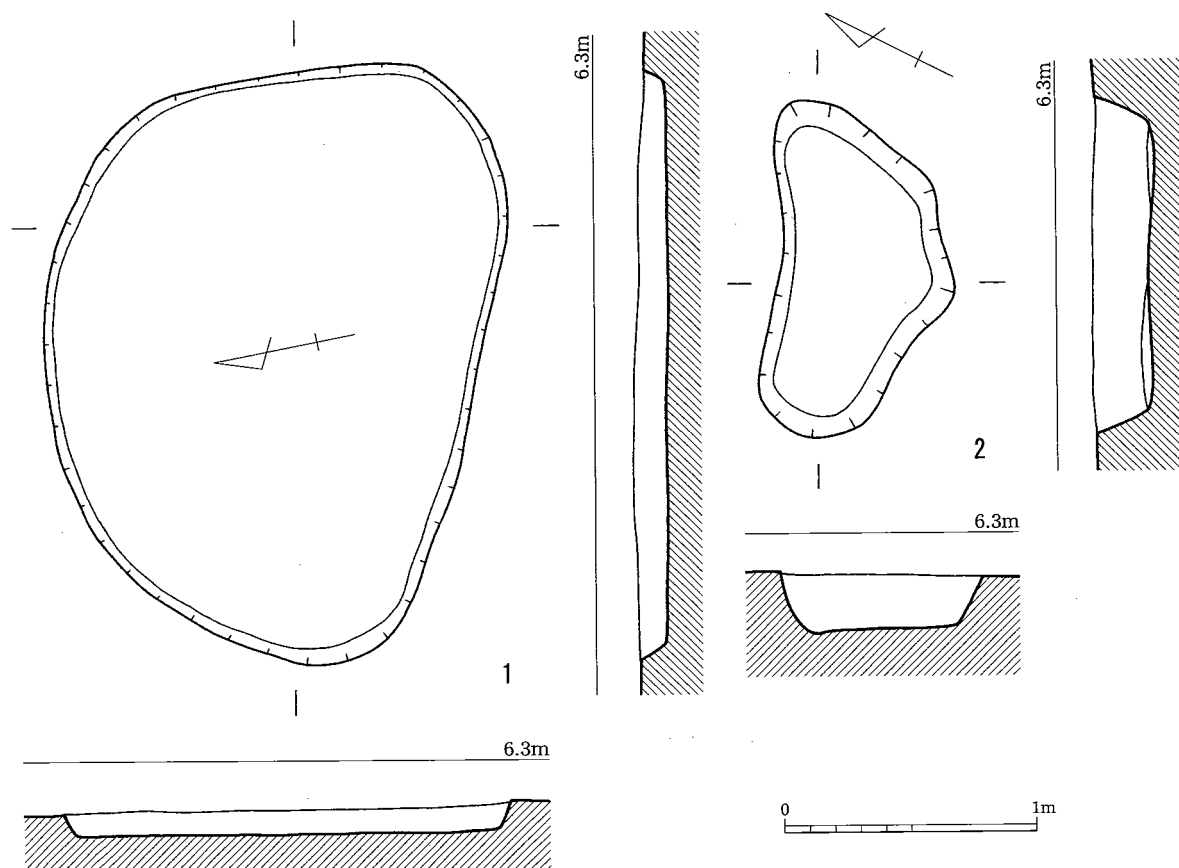
この遺構面を掘削の後、駄目押しの人力によるトレンチ調査を行ったところ、下層に別の遺構が存することが判明したため、再度、重機による掘削を行い、この面を第二遺構面とし、土坑5基、ピットを検出した。しかし、土層の観察では明瞭な差は見られず、第一遺構面からの掘り込みである可能性もある。

第一遺構面

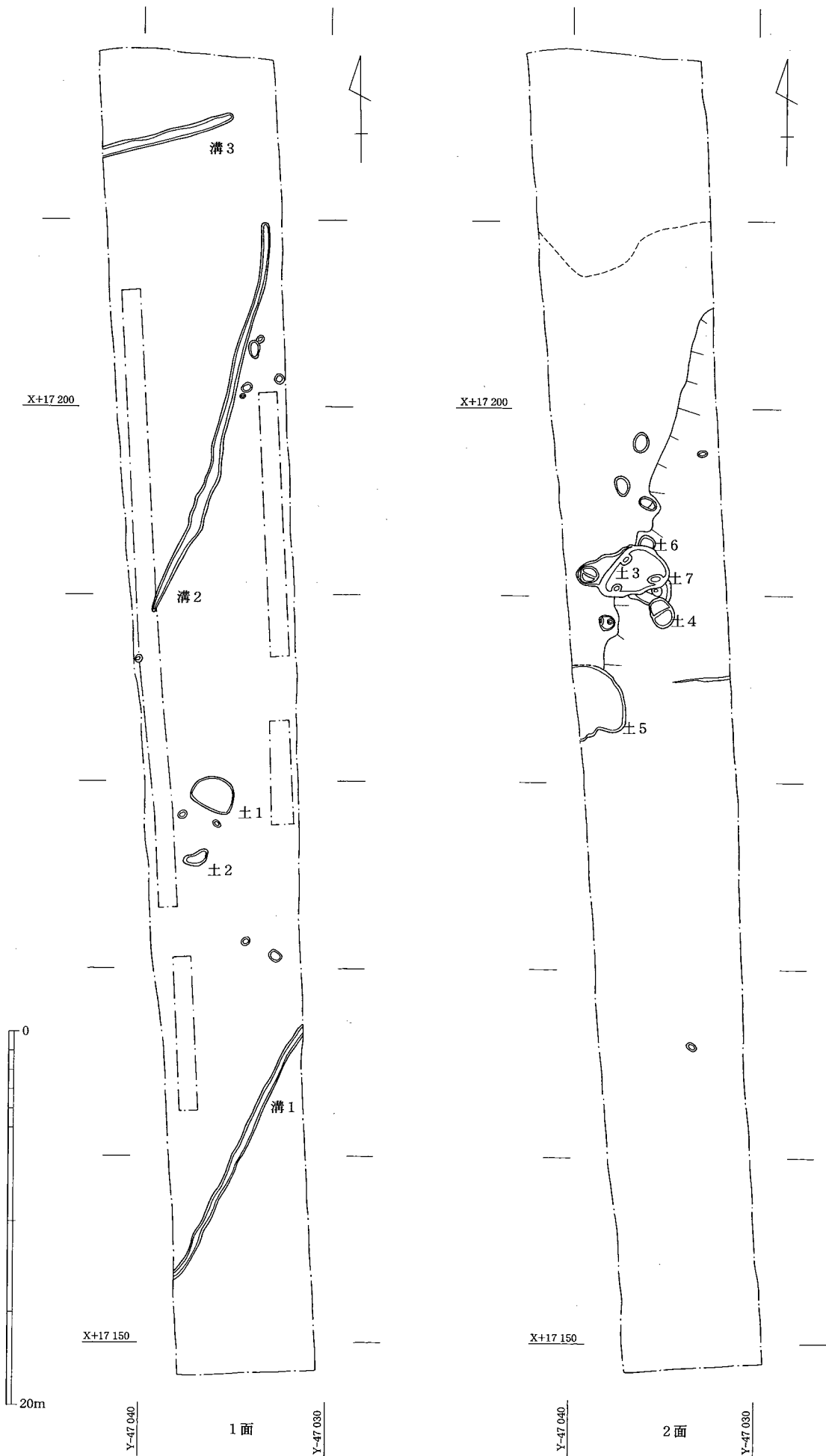
(1) 土坑

1号土坑(図版3、第12図)

調査区の中央付近で検出した。長軸240cm×短軸178cmの楕円形である。深さは約15cmで、床面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器が出土している。



第12図 2区1・2号土坑実測図 (1/30)



第13図 2区遺構配置図 (1/300)

出土土器(第15図)

1~3は弥生土器である。1は中型甕の口縁部である。内外に大きく発達し、口縁上端部の平坦面はやや内傾する。2は甕の底部である。底径11.0cmとやや広い。3は甕の底部で外面にはハケメを施す。底径は8.4cmである。

2号土坑(図版3、第12図)

調査区の中央付近、1号土坑の南側で検出した。長軸135cm×短軸70cmの不整な楕円形である。深さは約20cmでほぼ平坦である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器(第15図)

4~8は弥生土器である。4は断面が三角形に近い甕の口縁部である。わずかに胴が張る器形と思われる。5は外側に強く折り曲げた甕の口縁部片である。6は外側に大きく、内側にわずかに発達した甕の口縁部片である。7は器台の口縁部分であろうか。口縁は緩やかに外反し、断面を三角状に仕上げる。

(2)溝

1号溝(第12図)

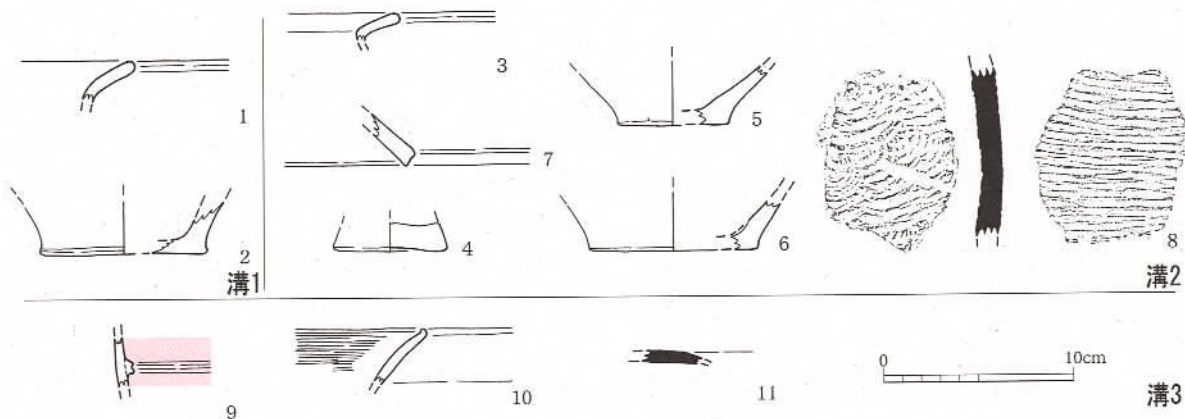
調査区の南部分で検出した北東から南西に向かって掘削されており、両端は調査区外へ延びている。幅50cm、深さ15cmである。遺物は弥生土器が出土しているが、この溝に伴うものであるかは不明である。

出土土器(第14図)

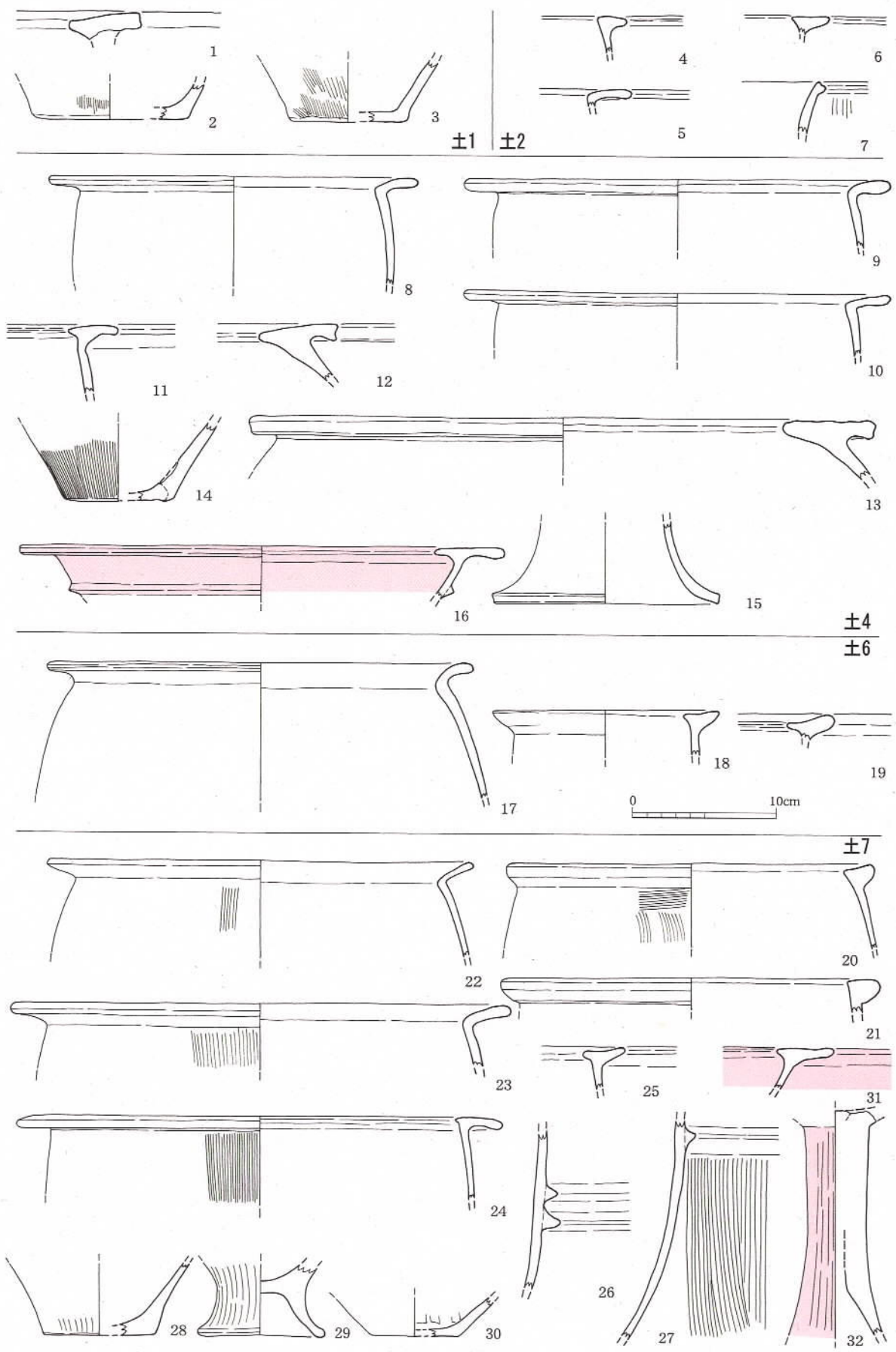
1・2は弥生土器である。1は甕の口縁であろうか。端部は丸く仕上げられる。2は甕の底部である。平底で底径8.8cmである。

2号溝(第13図)

調査区の北側で検出した。北東から南西に掘削されるが、端部は削平のためか調査区外へは延びない。第二遺構面の地形の落ちに会うことから、地形に合わせて掘削された溝と考えられる。幅45cm、深さ15cmである。弥生土器が出土しているが、この溝に伴うものであるかは不明である。



第14図 2区1~3号溝出土土器実測図(1/4)



第15图 2区1·2·4·6·7号土坑出土土器实测图 (1/4)

出土土器(第14図)

3~7は弥生土器である。3は甕の口縁部片である。強く折り曲げられ、端部は丸く仕上げられる。4は厚底の甕の底部である。底径6.0cmである。5・6は甕の底部である。5は底径6.0cm。6は底径9.0cmである。7は高杯の脚部であろうか。8は須恵器甕の胴部である。焼成は堅緻で、内面には同心円文、外面には平行のタタキ目が残る。

3号溝(第13図)

調査区の北端部付近で検出した。東西に走る溝であるが、東端は途中で終わり、西端は調査区外へ延びる。幅60cm、深さ15cmである。遺物は弥生土器が出土しているが、この溝に伴うものであるかは不明である。

出土土器(第14図)

9は弥生の丹塗土器の胴部である。甕であろうか。断面「M」字状の突帯を貼り付け、外面のみに丹塗を施す。10は古墳時代前期の甕口縁部である。口縁部内面には横方向のハケメを施す。11は須恵器蓋杯の破片である。外面の調整はケズリか。内面はナデ調整である。

第二遺構面

(1)土坑

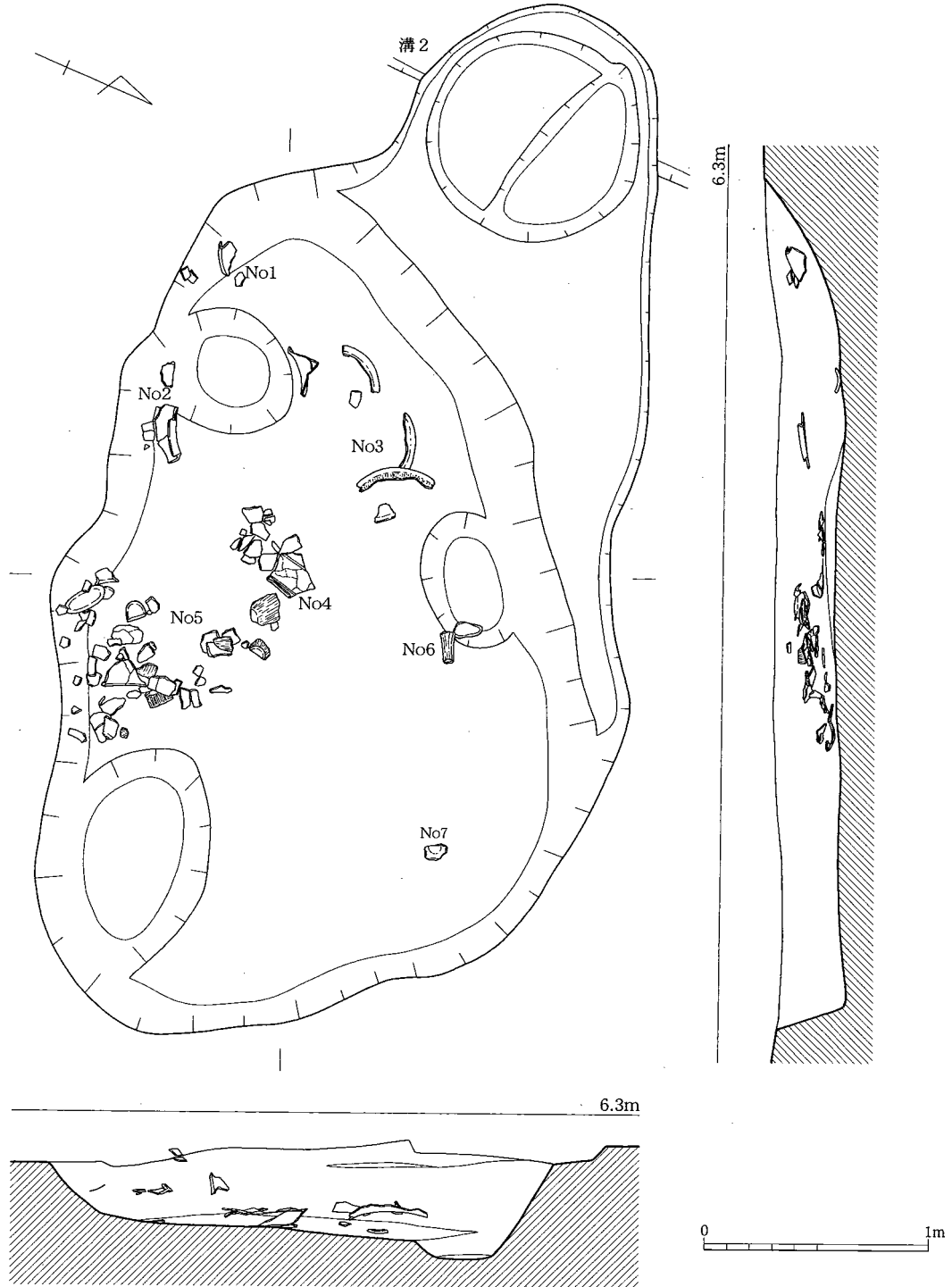
3号土坑(図版4、第16図)

調査区の中央やや北寄りで見出した。地形の落ちの境に位置する。位置的には第一遺構面の2号溝と切り合うが、2号溝のラインが比較的明瞭に見えたことから、2号溝より古いと考えられる。また、6・7号土坑と切り合うが、これらよりは新しい。長軸4.9m×短軸2.5mの不整な楕円形を呈する。西側が浅く、西端に円形の掘りこみがある。東側は段状に深くなり、数箇所の堀込みがある。最も深い部分で50cmである。底面に近い位置から弥生土器が多量に出土している。

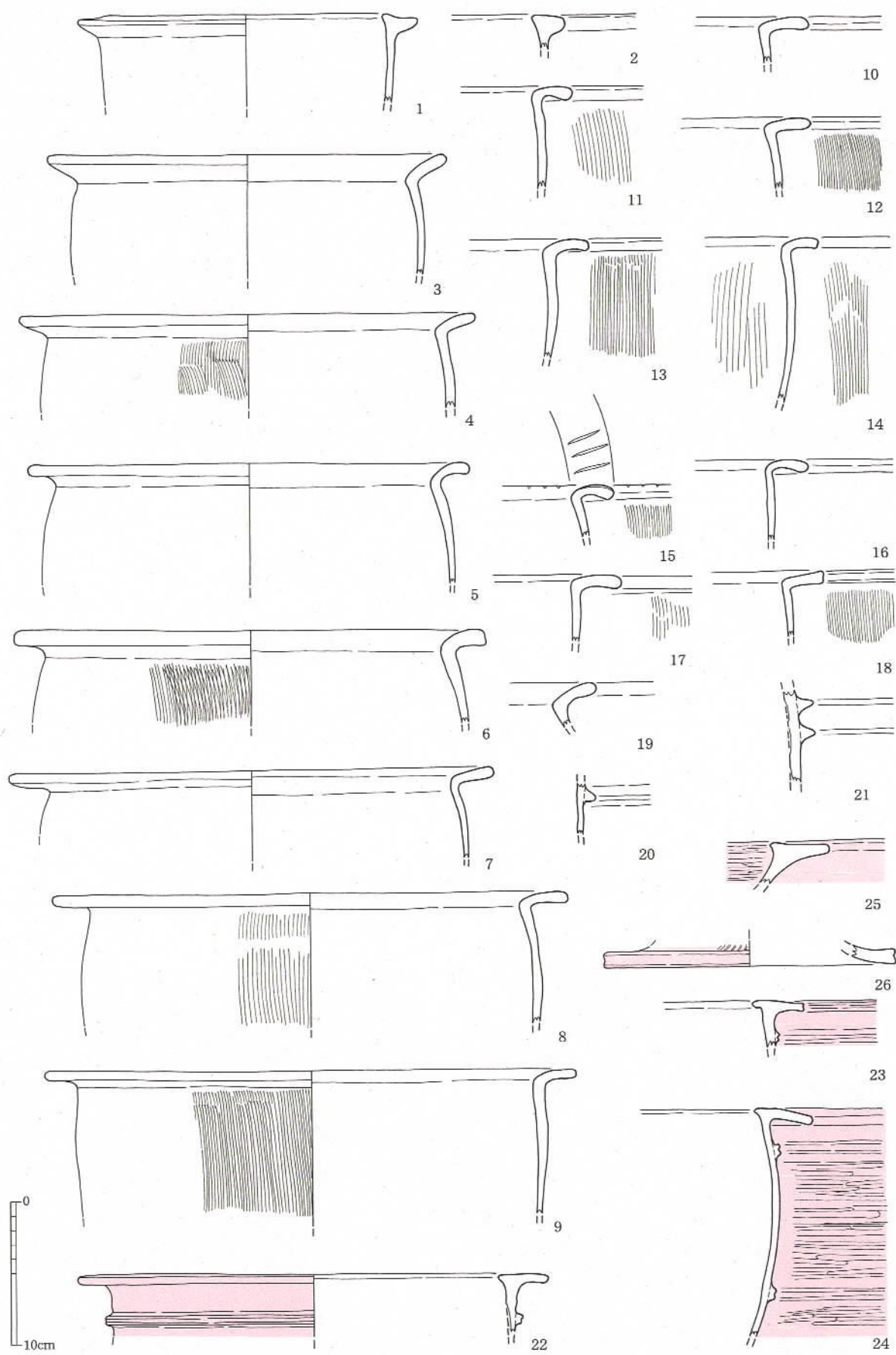
出土土器(図版44、第17・18図)

1~54は弥生土器である。1・2は口縁部断面を三角形状に仕上げるものである。1の口径は24.0cmである。2も1と同様の器形であるが、1よりも丸く仕上げられる。No5の位置で出土している。3~19は口縁を強く外反させるものである。3の折り曲げは比較的弱く、口径は28.0cmである。4の口径は32.0cm。5の口径は29.8cm。6は口縁端部をやや角ばって仕上げるもの。外面は口縁下まで縦方向のハケメを施し、上から横ナデを加えている。口径は33.0cmである。No5の位置で出土している。7の口径は34.0cm。No3の位置で出土している。8の口径は36.0cmである。No3の位置で出土している。9の口径は37.0cmである。14は外面とともに内面にも粗いハケメが施される。15は口縁上端の平坦面に3本の細線が刻まれる。16はNo3の位置で出土している。17はNo5の位置で出土している。20・21は甕の胴部である。21は下方を向く断面三角突帯を1条貼り付ける。21は断面三角突帯を2条貼り付ける。22~26は丹塗土器である。22~24は甕である。22は両側に発達した鋤先状の口縁下に断面「M」字状の突帯を貼り付ける。外面はミガキの後に丹塗を施される。口径33.0cmである。23も22と同様の器形である。24は鋤先状の口縁が外側に大きく下がるもので、口縁下と胴部中位に断面「M」字状の突帯を貼り付ける。外面の調整は主にミガキで、その上から丹塗を施す。No4の位置で出土している。25は高杯の杯部口縁部分である。内外面、ミガキ調整の後、全面に丹塗を施す。26は高杯の脚端部である。外面は縦方向の暗文が施され、外面のみに丹塗が施される。底径は20.4cmである。27~32は口縁を強く屈曲させるものである。

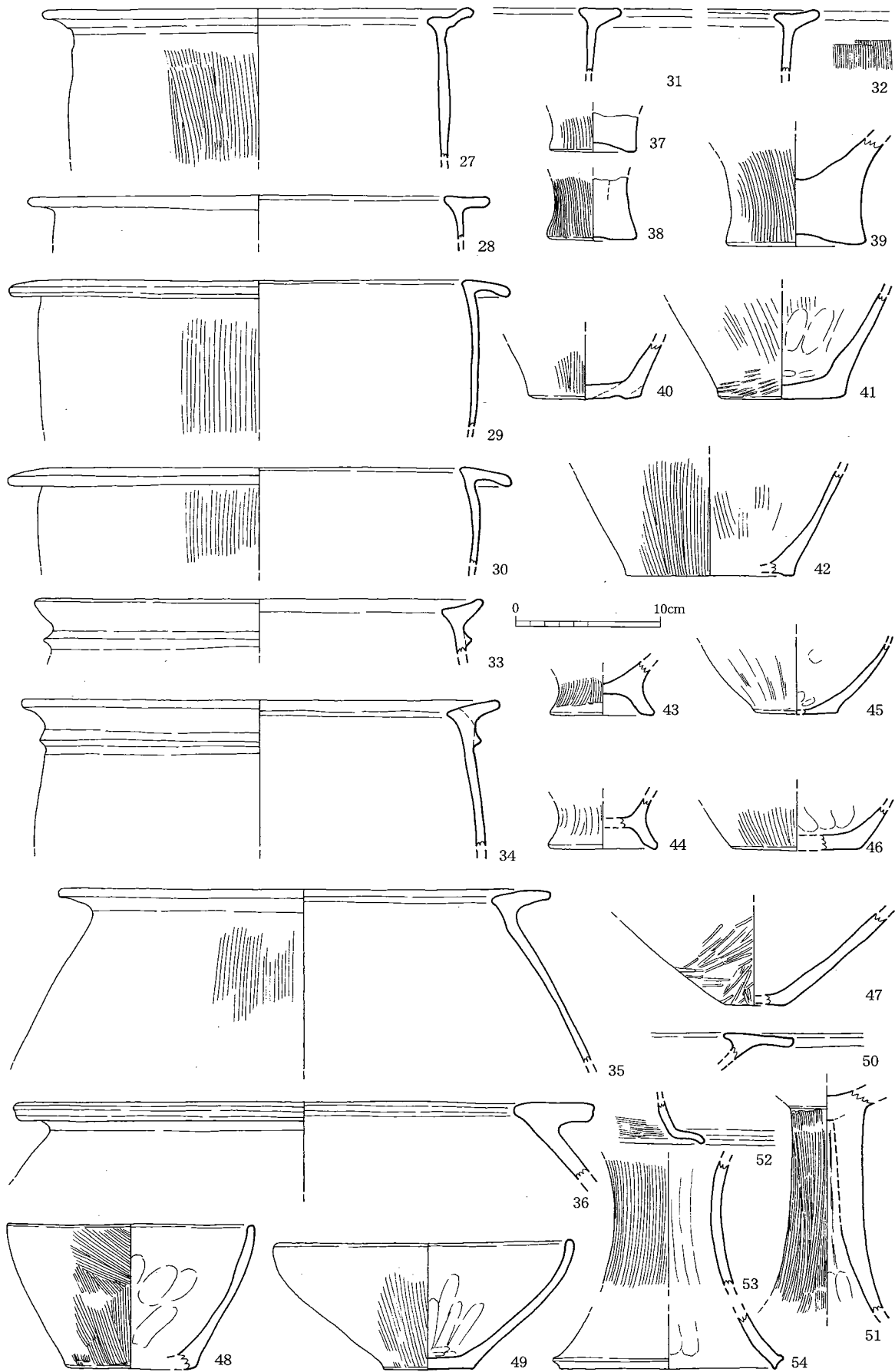
27は口縁を強く折り曲げた後、内側にもわずかに張り出させたもので、わずかに跳ね上げ気味である。口径は20.0cmである。No5の位置から出土している。28・31・32は鋤先状に近い口縁を呈するものである。28の口径は31.5cmである。29・30は口縁を強く折り曲げ、端部が下方を向くものである。29の口径は34.8cmである。30の口径は34.8cmである。No2の位置から出土している。33・34は口縁下に断面三角の突帯を1条貼り付けるものである。33は口縁端部を跳ね上げ気味に仕上げる。



第16図 2区3号土坑実測図 (1/30)



第17图 2区3号土坑出土土器实测图① (1/4)



第18图 2区3号土坑出土土器实测图② (1/4)

口径は31.4cmである。34の口径は33.0cmである。35・36は中型の甕の口縁部である。35は口径34.0cmで、胴部が大きく張る。36は外側に大きく発達した口縁を角ばって仕上げる。口径は40.0cmである。37～39は厚底の甕の底部である。37はわずかに上底で、底径は6.0cmである。38の底径は6.2cmである。39はわずかに上底で底径9.7cmである。40～42は平底の甕の底部である。40の底面には接合痕であろうか、1条の窪みが輪状に巡る。底径は7.8cmである。No5の位置から出土した。41は外面底部付近にタタキ痕が残り、粗いハケメで仕上げられる。内面には圧痕が連続する。底径は9.0cmである。42は内外面がハケメで仕上げられる。40と同様に底面には接合痕であろうか、1条の窪みが輪状に巡る。底径は11.4cmである。43・44は台付甕の底部である。43は底端部よりわずかに上がった位置からハケメを施される。底径は7.3cmである。44は外面に粗いハケメを施す。底径は7.5cmである。45・46は鉢の底部であろうか。45の外面はハケメ、内面は圧痕が残る。底部はかなり薄い。底径は5.6cmである。46の底径は9.0cmである。47は壺の底部であろうか。外面は不定方向のミガキを施す。底径は3.8cmである。48・49は小型の鉢である。48の外面はハケメ、内面には圧痕が残る。口径は17.0cm、底径は8.8cm、器高10.0cmである。No5の位置から出土している。49は口径が48より大きく広がるもので、外面の調整はハケメ、内面には圧痕が残る。口径20.7cm、底径6.4cm、高さ8.8cmである。50は鋤先状の口縁の高杯の杯部である。51は高杯の脚部である。外面の調整はハケメである。内面には絞り痕が残る。No6の位置から出土している。52は高杯の脚端部か。外側に強く折り曲げ、わずかに下方に折り曲げている。53は器台である。外面はハケメ調整である。54は器台の脚端部である。端部は角ばって仕上げられている。底径は16.0cmである。

4号土坑(第19図)

調査区の中央やや北より付近で検出した。7号土坑と切り合うが、これより新しい。長軸170cm×短軸120cmの楕円形を呈する。南側が一段深くなっており、約20cmである。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器(第15図)

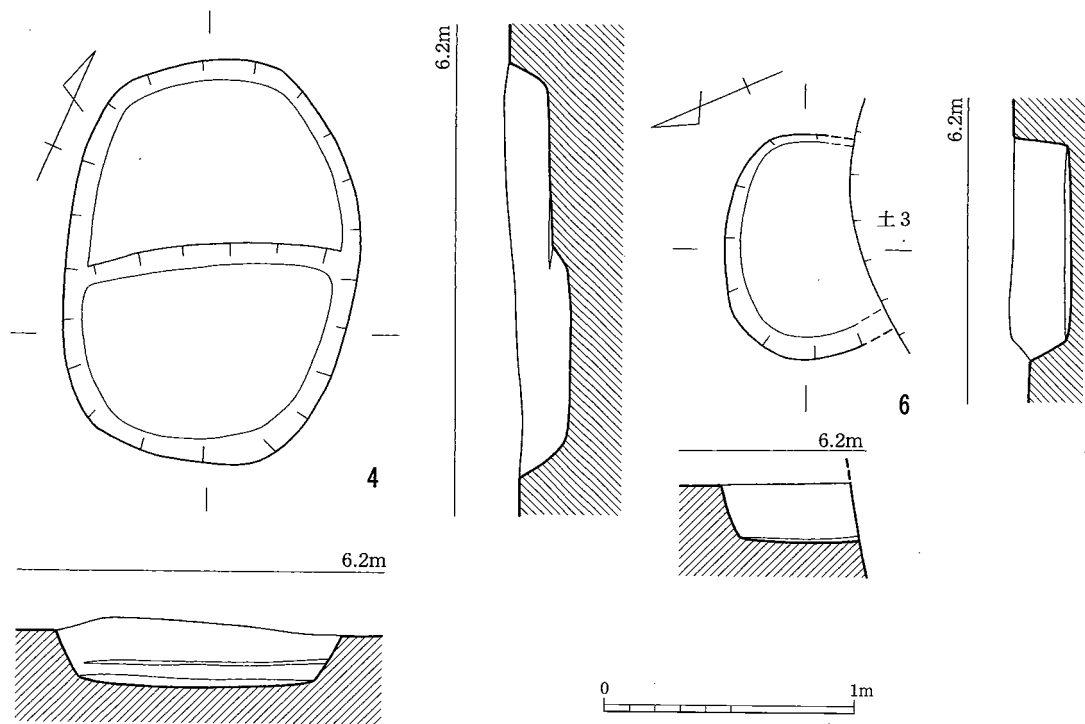
8～16は弥生土器である。8～10は口縁を強く外反させるものである。8は口径26.0cmである。9は口径30.0cmである。10は口径30.0cmである。11は口縁部を強く外反させ、その内側に粘土帯を貼り付け、上面に平坦面を形成するものである。12・13は中型の甕の口縁部である。12の上端部の平坦面はやや内傾する。13の口径は44.0cmである。14は甕の底部である。外面の調整はハケメである。底径7.8cmである。15は器台の脚部か。緩やかに外反する脚部で、端部を角ばって仕上げている。底径は16.0cmである。

5号土坑(図版4、第19図)

調査区の中央付近で検出した。西側へさらに広がっている。長軸400cm×短軸250cm+ α の不整な円形に近い形状を呈すると考えられる。深さは25cm程度で、多少の凹凸があるがほぼ平坦である。遺物は弥生土器がほぼ全体から多量に出土している。

出土土器(図版44、第20・21図)

1～31は弥生土器である。1は小型の蓋である。緩やかに広がり、端部には焼成前の穿孔が1孔残存する。口径は13.0cmである。No5の位置から出土している。2・3は口縁外面に断面三角形に近い粘土帯を貼り付けるものである。2は口径30.0cmである。No7の位置から出土している。4～10は口縁を強く折り曲げるものである。4は外面に横方向と縦方向のハケメを施す。口径33.0cm。No4の位

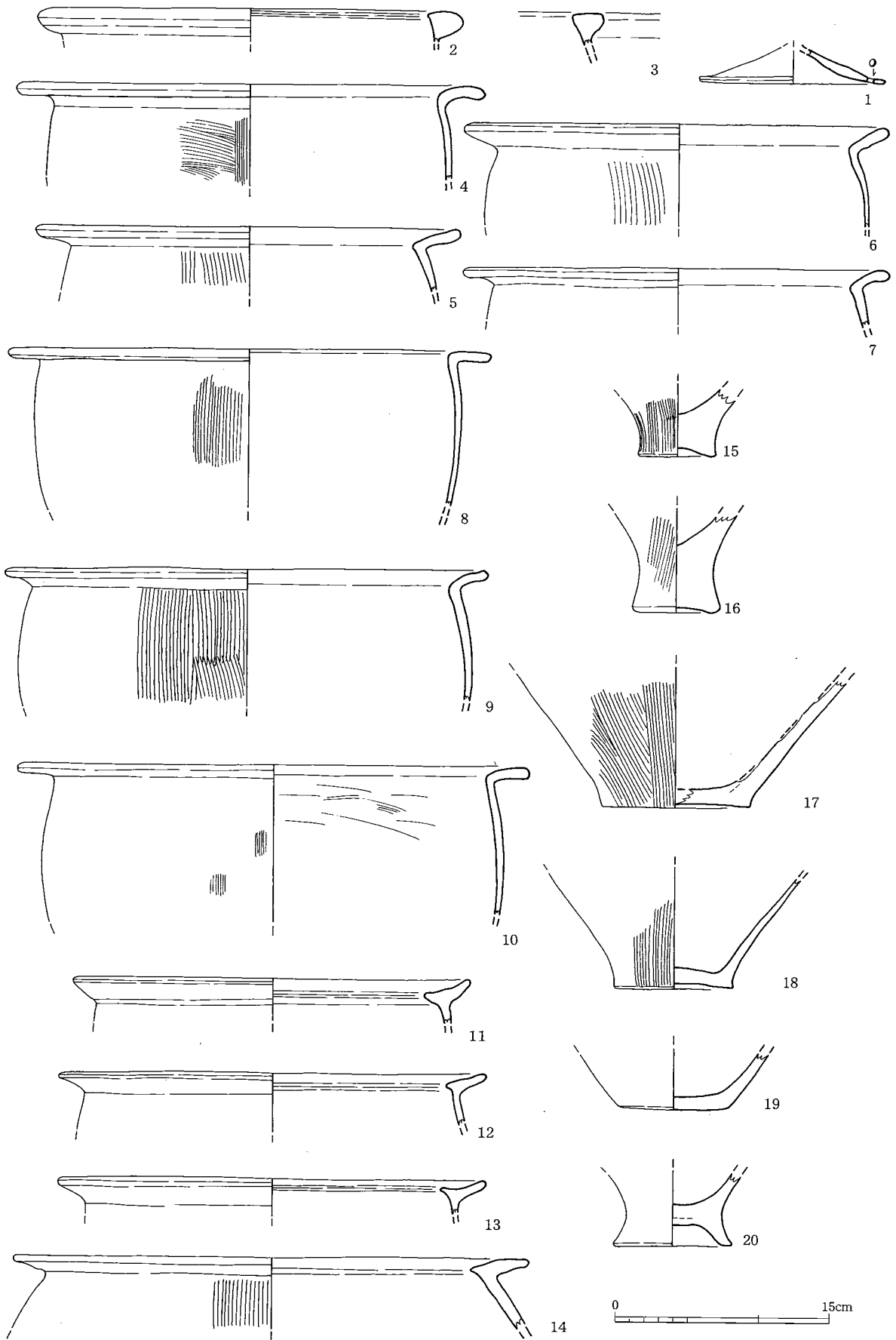


第19图 2区4~6号土坑实测图 (1/30)

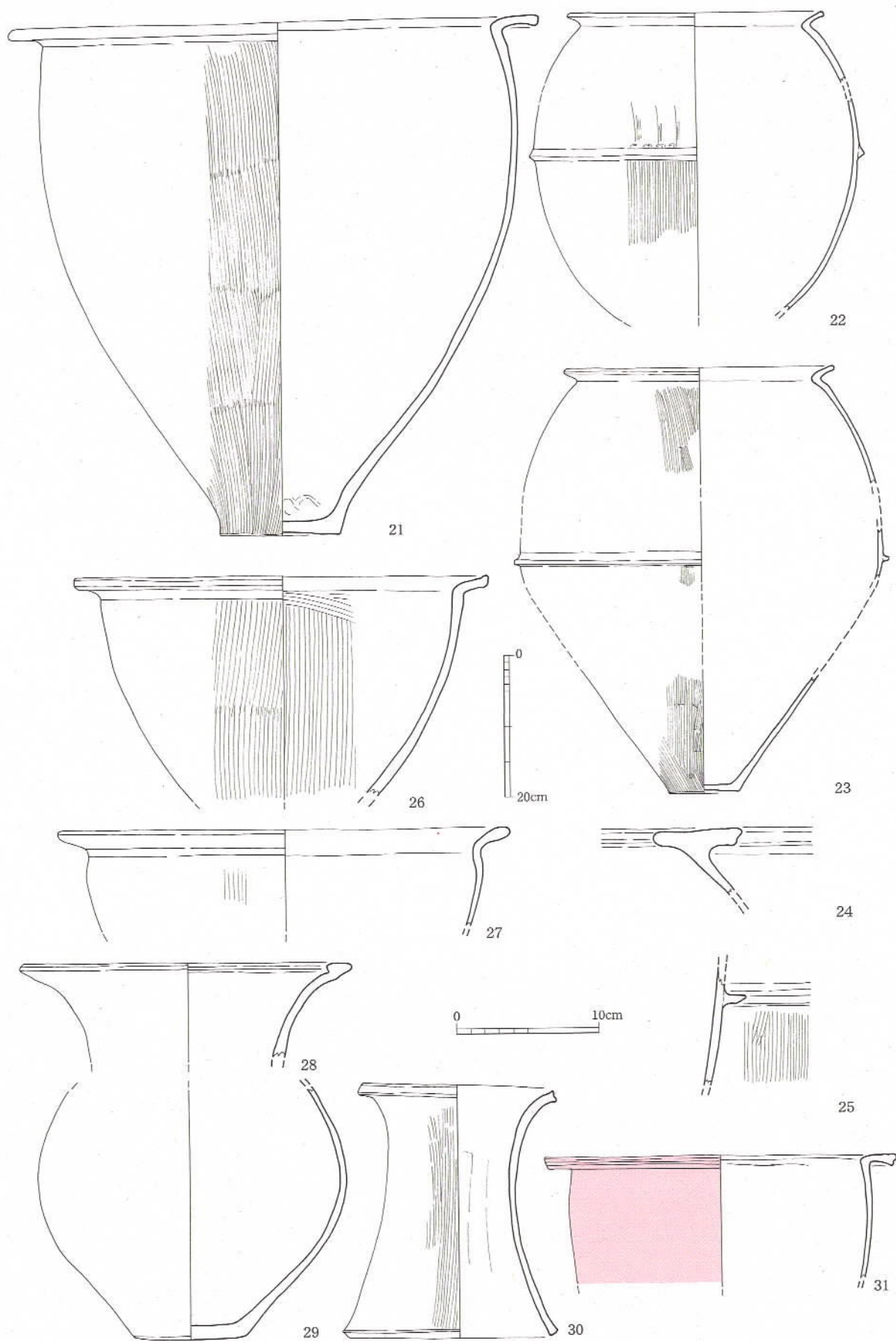
置から出土している。5は口径30.0cmである。No10の位置から出土している。6は口径30.0cm。No4の位置から出土している。7は口径30.0cmである。No5の位置から出土している。8は口径34.0cm。No4の位置から出土している。9は口径34.0cm。No1の位置から出土している。10の内面には工具によるナデ痕が残る。口径36.0cm。No4の位置から出土している。11～13は跳ね上げ口縁の甕である。11は端部を強く跳ね上げている。口径は28.0cmである。No3の位置から出土している。12の口径は30.0cm。No4の位置から出土している。13は口縁部外端とともに内側も跳ね上げている。口径は30.0cmである。No8の位置から出土している。14は中型の甕である。胴部が強く張る。口径は36.0cmである。No11の位置から出土している。15・16は厚底の底部である。15はわずかに上げ底で底径は5.4cm。No6の位置から出土している。16はわずかに上底で口径6.2cmである。No5の位置から出土している。17・18は平底の甕の底部である。17の内面底部と胴部の境には接合痕が残る。わずかに上底で底径10.3cmである。No2の位置から出土している。18もわずかに上底である。底径は8.3cmである。No6の位置から出土している。19は鉢の底部か。底径7.6cmである。20は台付甕の底部である。底径8.2cm。No7の位置から出土している。21は甕である。口縁端部は強く折り曲げ、胴部はわずかに張る。底部は平底であるが、わずかに上げ底である。外面は縦方向にハケメ、内面底部付近には圧痕が残る。口径37.5cm、底径8.5cm、器高36.5cmである。No6の位置から出土している。22は中型の甕である。口縁部は外側に強く折り曲げられ、端部は角張って仕上げられる。胴部は球形に膨らむ。胴部最大径の部分に1条の断面三角突帯を貼り付ける。外面の調整はハケメ、突帯部分の上位に貼り付け時の圧痕が残る。口径は36.0cm、胴部最大径は47.8cmである。No3の位置から出土している。23は中型甕である。口縁部、胴部、底部がそれぞれ接合しないが、同一個体である。胴部最大径部分に断面四角形の突帯を貼り付ける。外面の調整はハケメである。口径は36.0cm、胴部最大径は53.0cm、底径は9.6cmである。No2の位置から出土している。24は胴の張る中型甕の口縁部である。口縁上部平坦面はやや内傾する。No5の位置から出土している。25は甕の胴部である。1条の突帯を貼り付けるが、端をやや上に向ける。No3の位置から出土している。26・27は鉢である。26は口縁を外側に強く折り曲げ、端部をわずかに上方に曲げる。内外面はハケメ調整である。口径は29.4cmである。No12の位置から出土している。27の口径は32.0cmである。No11の位置から出土している。28・29は壺である。28は緩やかに広がる口縁で、端部上面に粘土帯を貼り付ける。口径は23.4cmである。No13の位置から出土している。29は壺の胴部から底部にかけての部分である。底部がわずかにレンズ状を呈する。胴部最大径21.7cm、底径8.0cmである。No1の位置から出土している。30は器台である。口縁部をやや強めに外反させる。外面はナデ調整、内面には圧痕が残る。口径13.4cm、底径15.0cm、器高23.0cmである。No6の位置から出土している。31は丹塗の甕である。口縁を強く折り曲げ、端部を角ばって仕上げる。外面のみに丹塗を施す。口径25.0cmである。No2の位置から出土している。

6号土坑(図版4、第19図)

調査区の中央やや北寄りで検出した。3号土坑に切られる。長軸90cm×短軸55cm+ α の楕円形を呈する。深さは約20cmで底面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器が出土している。



第20图 2区5号土坑出土土器实测图① (1/4)



第21図 2区5号土坑出土土器実測図② (22・23は1/8、他は1/4)

出土土器(第15図)

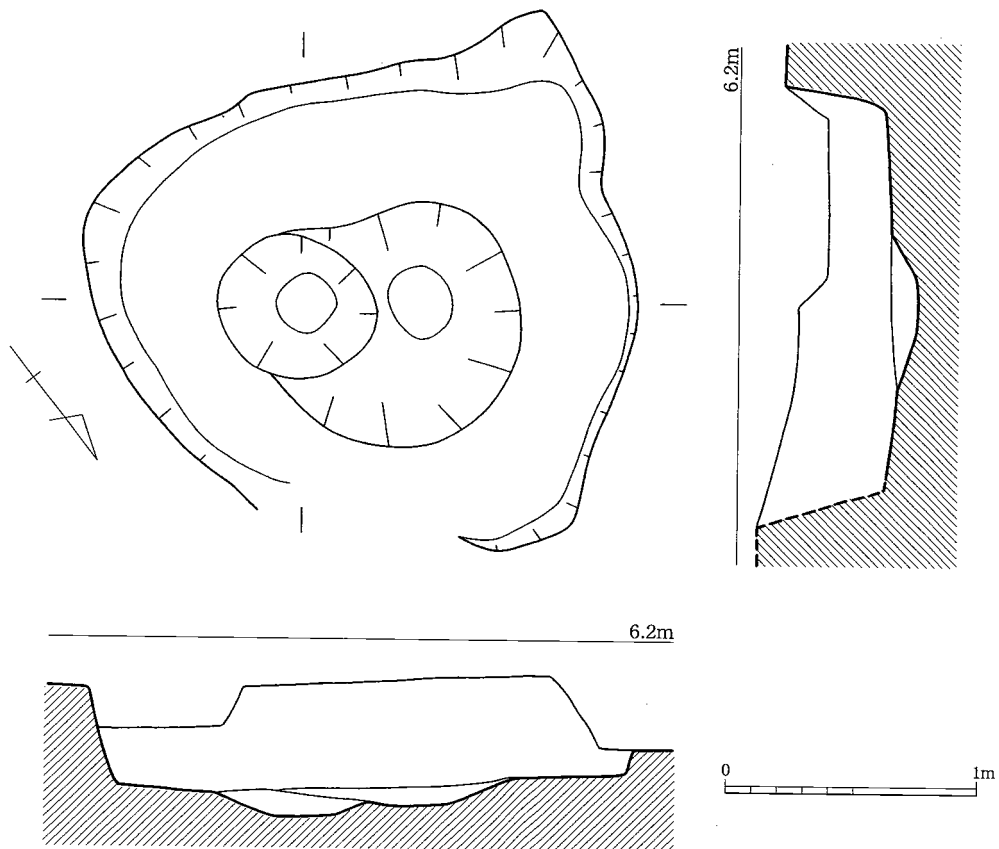
17~19は弥生土器甕の口縁部である。17は口縁部を緩やかに外反させるものである。胴部は大きく張る。口径は30.0cmである。18は口縁端部を断面三角形に仕上げ、端部をやや跳ね上げるものである。口径16.0cmと小形である。19は両側に発達した甕の口縁部である。口縁端部をやや跳ね上げている。

7号土坑(図版4、第22図)

調査区の中央やや北寄りで検出した。3・4号土坑に切られる。長軸220cm×短軸200cmのややいびつな円形を呈する。深さは約50cmで、中央部分が一段深くなっている。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器(第15図)

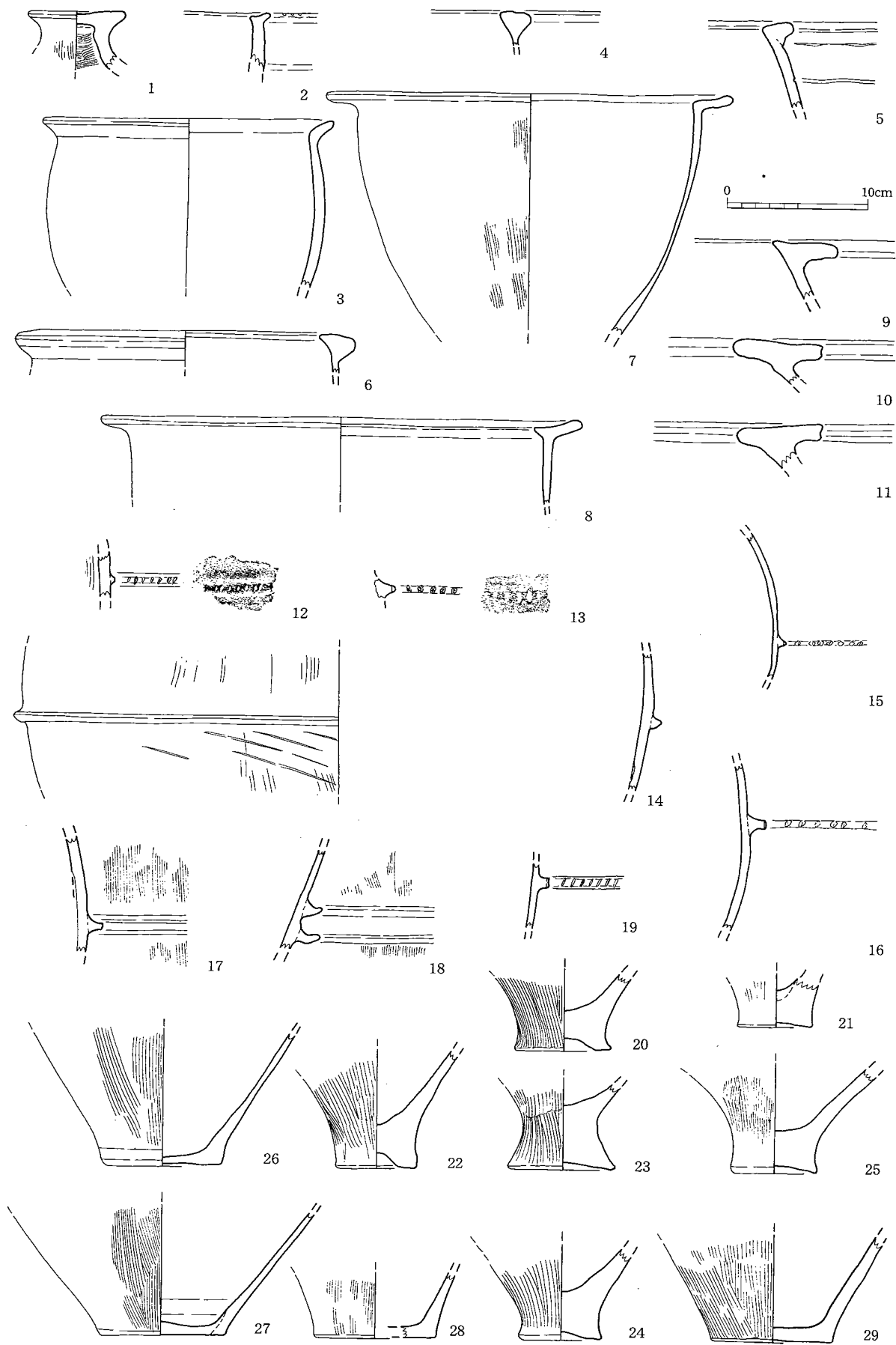
20~30は弥生土器。20・21は甕の口縁端部外側に粘土帯を貼り付けるもの。20は胴が張る。口径は26.0cmである。21の口径は26.8cmである。22・23は甕で口縁を強く折り曲げるものである。ともに外面に粗いハケメを施す。22の口径は30.0cm。23は口径35.0cmである。24は甕で口縁が外側に大きく、内側に小さく発達した甕である。外面はハケメ調整。内面には横方向に工具によるナデが残る。25は跳ね上げ口縁の甕の口縁部である。26は甕の胴部片で、断面三角形の突帯を2条を貼り付ける。27は甕胴部で、断面三角形の突帯を1条貼り付ける。28は平底の甕の底部である。底径は8.0cmである。29は台付甕の底部。外面は粗いハケメ。底径は9.0cm。31・32は丹塗の高杯。31は鋤先状の口縁を呈する杯部片で内外に丹塗を施す。32は杯部から脚部にかけての部分。外面は縦方向にミガキ、丹塗を施す。



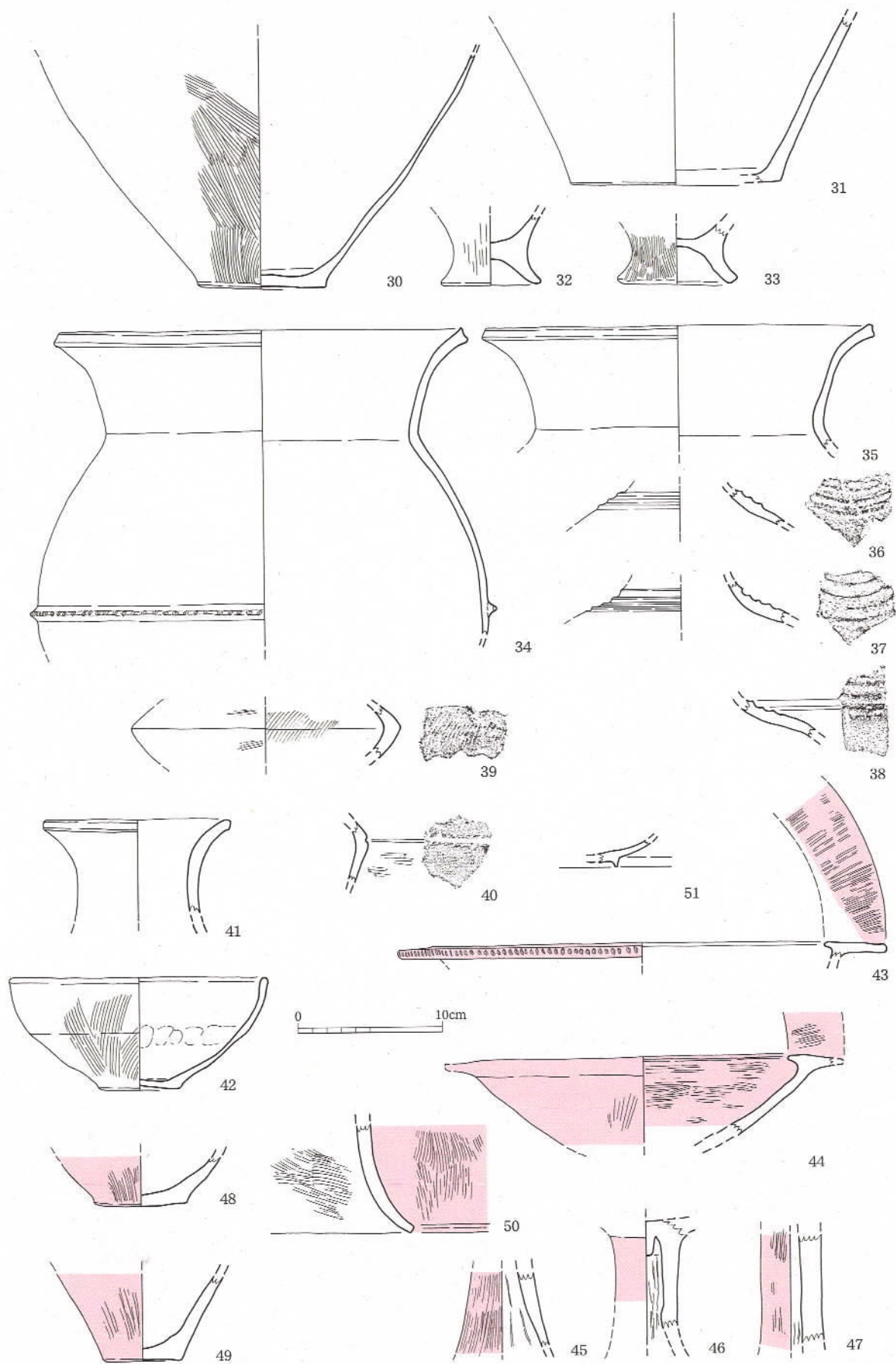
第22図 2区7号土坑実測図(1/30)

(2) 包含層ほか出土土器(図版44、第23・24図)

1~50は弥生土器である。1は蓋である。内外面の調整はハケメである。つまみの径6.8cmである。2~33は甕である。2は口縁端部をわずかに外側に摘み出し、刻み目を施す。西側トレンチから出土している。3は小型の甕である。口縁端部をわずかに外反させる。胴部はやや張る。口径20.6cmである。4~6は口縁端部外側に小さな断面三角形の粘土帯を貼り付けたものである。5は胴部が大きく張り、口縁下に1条の突帯を巡らせるものである。西側トレンチから出土している。6はやや内側にも張り出すものである。口径は24.0cmである。7は口縁を折り曲げ、わずかに跳ね上げる甕である。外面はハケメ調整である。口径は28.9cmである。8は跳ね上げ口縁の甕である。口径34.0センチである。9~11は中型甕の口縁部である。いずれも胴が大きく張るものである。9は外側に大きく発達している。端部の仕上げは丸い。10・11は口縁が両側に発達したもので、口縁端部は角ばって仕上げられる。10はピット3からの出土である。11は西側トレンチからの出土である。12~19は甕の胴部である。12・13は突帯に刻め目を施すもの。14は胴部最大径の部分に小さな断面三角突帯を貼り付ける。外面にはハケメ調整と工具痕が残る。胴部最大径は45.4cmである。15・16は壺の胴部の可能性もある。17は小さな断面四角の突帯を貼り付けている。西側トレンチからの出土である。18は2条の突帯を貼り付けるもので、突帯端部は上方を向く。19は断面四角の突帯に斜め方向の刻み目を施す。20~33は甕の底部である。20~25は厚底でやや上底を呈するものである。20の底径は6.8cmである。21は断面に接合痕が残る。底径5.4cmである。22の底径は5.8cmである。23の底径は7.6cmである。24の底径は5.8cmである。25の底径は6.2cmである。26~31は平底の底部である。26の底径は8.6cmである。27の底径は9.2cmである。28の底径は8.6cmである。ピット2からの出土である。29の底径は8.6cmである。30は胴部が大きく広がるものである。底径は9.0cmである。31は底径14.8cmと他よりかなり大きい。32・33は台付甕の底部である。32の底径は6.7cmである。33の底径は8.4cmである。34~39は壺である。34は球形の胴部に緩やかに長い外反する口縁が付いたものである。胴部最大径の部分に小さな断面三角突帯を貼り付け、刻み目を施す。口径は28.2cm、胴部最大径は32.0cmである。35も34と同様の器形であると考えられる。口径27.4cmである。36~38は肩部に小さな粘土帯を連続して貼り付け、段を形成し文様としている。39はソロバン玉状の胴部である。胴部最大径は18.6cmである。40は壺の胴部であろうか。最大径の部分に沈線が巡る。41は器台である。口縁部は緩やかに開き、端部は丸く仕上げている。口径は13.0cmである。42は小型の鉢である。外面はハケメ調整。内面の中位に連続した圧痕が残る。底部はやや上げ底を呈する。口径18.0cm、底径4.8cm、器高7.8cmである。43~50は丹塗土器である。43~47は高杯である。43は高杯の杯部である。口縁は鋤先状を呈し、外端部には刻み目、上端面には暗文を施す。内外面ともに丹塗を施す。口径34.0cmである。44も高杯の杯部である。口縁は鋤先状を呈し、上端面には暗文を施す。内外面の調整はミガキで、内外面に丹塗を施す。口径は21.4cmである。45~47は脚部である。いずれも外面にミガキ調整を施し、丹塗をしている。内面には絞り痕が残る。48・49は甕の底部である。48はややレンズ状を呈する底部で、底径は6.5cmである。外面の調整はミガキで、上から丹塗を施す。49の底径は5.5cmで、胴部が急に立ち上がっている。外面はミガキの後、丹塗を施す。50は器台の脚部であろうか。内外面の調整はハケメである。外面のみに丹塗を施す。



第23图 2区包含層等出土土器实测图① (1/4)



第24图 2区包含層等出土土器实测图② (1/4)

5 3区の調査の内容

3区は南西端部に所在する下坂田地区の天満宮の御神木植え替え作業のため、迂回する水路を掘削する必要があったため先行して調査を行い、先に引き渡した。掘削される溝の形状に合わせ、トレンチ状に調査を行っている。表土より約120cm掘削したところで1号土坑を検出した。調査区本体は西側に用悪水路が調査区内に入り込んでいるため、いびつな台形状の調査区である。また、用悪水路を移設部分のために西側に広い調査区となる。ついで用悪水路移設のための仮設水路部分においても試掘を行った結果、甕棺墓等の遺構を検出したために発掘調査を行っている。

調査区は南端部の西側に天満宮が所在していたために、当初より微高地の周辺であることが予想された。また、この微高地自体が古墳の墳丘である可能性も捨てきれず、十分注意しながら調査を行った。結果、予想通り、遺構面はかなりあがっていたが、古墳ではないという結論に達したので、通常の調査を行った。3区では1・2区で見られた黒褐色粘質土は見られなかった。耕土を除いて約20cm掘り下げた淡茶褐色粘質土の面で弥生時代～中世にかけての遺構を検出したため、この面まで重機による掘削を行った。この際、甕棺の掘り方をまったく検出できなかったため、重機で薄く剥ぎながら出てきた甕棺墓をそのつど調査していった。

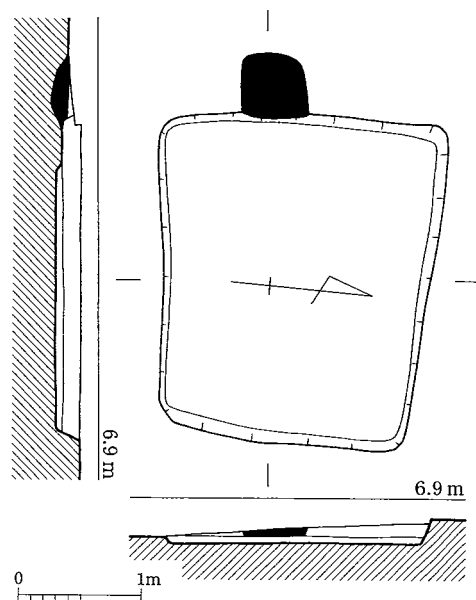
この面での調査終了後、駄目押しの重機による掘削を行ったところ、下層から甕棺墓と上面より古い時期の遺構を検出したため、第二遺構面として調査を行うこととした。なお、この下層で検出した甕棺墓は上面からの掘り込みと判断している。土坑に関しては淡茶褐色粘質土層の中位からの掘り込みの可能性もあるが、平面及び土層からそのラインを検出できなかった。

遺構は竪穴住居跡1棟、甕棺墓37基、祭祀土坑2基、土坑15基、溝8条、波板状遺構4を検出している。

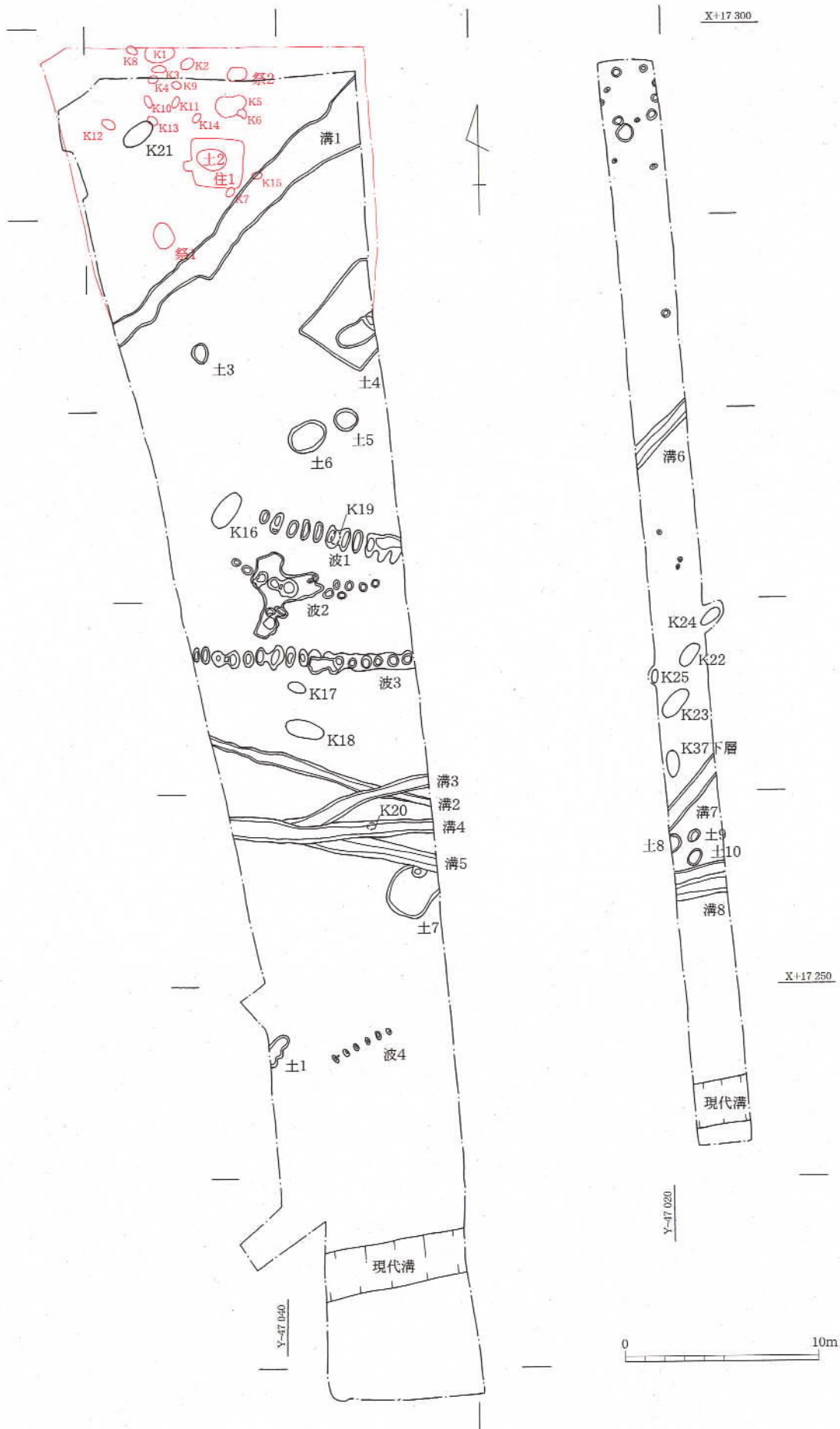
(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡(図版6、第25図)

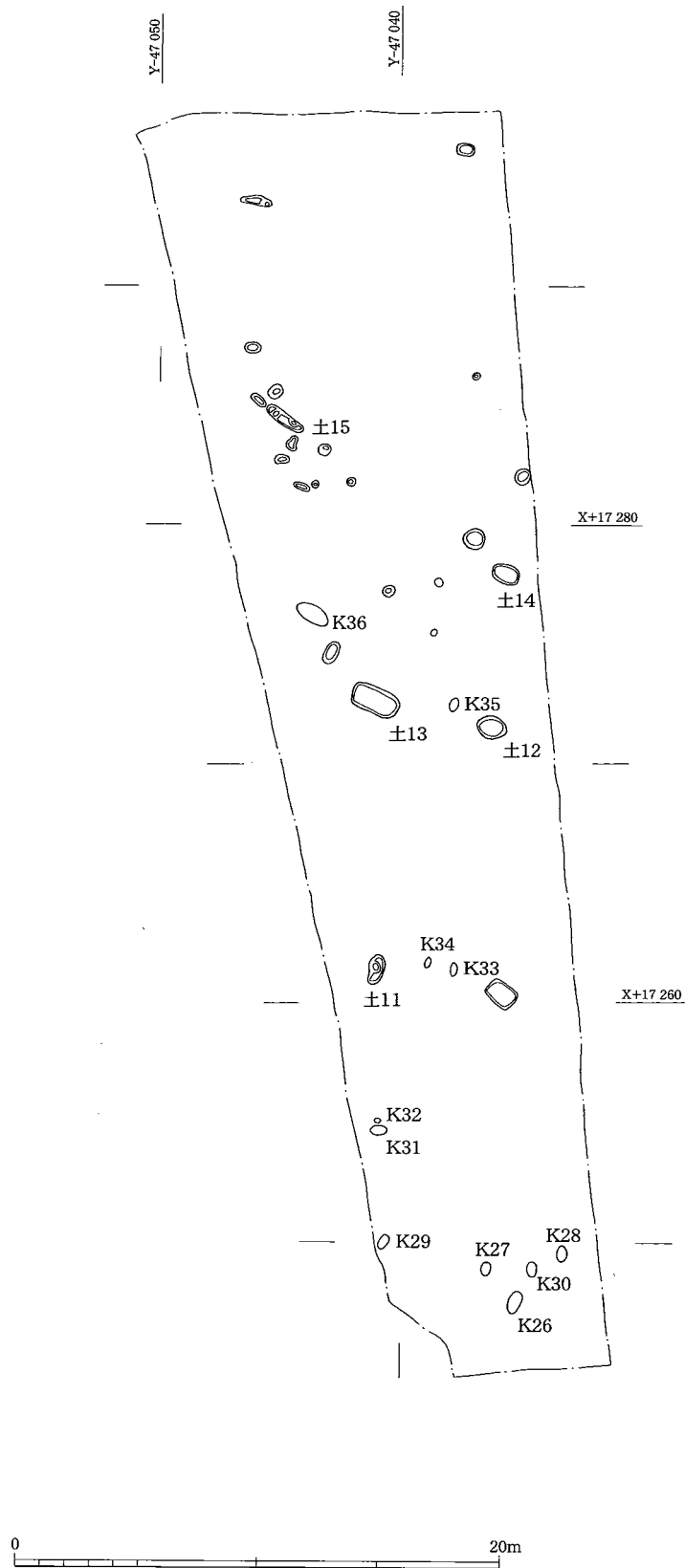
調査区の北端部付近で検出した。当初、遺構のラインがまったく確認できず、須恵器や土師器がまとまって出土する部分があったので、これを2号土坑として取り上げていたが、これより先に検出していた7号甕棺墓が別の遺構に切られた状態であったこと、2回目の検出時に西側でカマドラしき焼土面を検出したことなどから、再精査を行い、竪穴住居跡であると判断した。長軸265cm×短軸230cmの方形であり、西側中央にカマドを付設する。床面までの深さはカマドの底面から推定すると15cmであり、掘りすぎてしまった。床面で、柱穴等は検出されていない。また、床面下層の掘り込み等も検出できなかった。遺物は須恵器と土師器が出土しているが、2号土坑の文中で説明を行う。



第25図 3区1号竪穴住居跡実測図(1/60)



第26図 3区遺構配置図① (1/300)



第27図 3区遺構配置図② (1/300)

(2) 甕棺墓

3区は北端部から重機による掘削を行っていったが、甕棺墓の墓坑のラインの検出には困難を極め、甕棺本体が露出して甕棺墓の存在を確認できる状態であった。そのため、重機で薄く剥ぎながら検出した順に取り上げ、また薄く遺構面を剥ぐということを繰り返した。ちなみに北端部で検出した1~7号甕棺墓は1回目の検出時、8~14号甕棺墓は2回目の検出時に取り上げを行っている。

1号甕棺墓(図版6、第28図)

調査区の北端部付近に位置する。合せ口の成人用甕棺墓である。耕土直下であり、すでに大きく削平されていたものと考えられる。3号甕棺墓が近接するが、切り合い関係はない。墓坑は段を付けた後、深く掘り込む。埋置角度は 50° で、主軸は $N-13^{\circ}-E$ の方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版45、第31図)

上甕は胴部突帯の上位までしか残存しない。調査中には口縁部から突帯にかけての部分も存在していたが、台風による突風でプレハブが転倒した時に所在が不明になったものと考えられる。胴部は下位から張り気味で器壁は厚い。外面は全体にハケメ調整で、その上から胴部中位に断面三角の小さな突帯を貼り付ける。内面はナデである。底径12.0cm、突帯部分で55.2cmである。色調は全体に赤褐色を呈する。

下甕は下位から張り気味の胴部で口縁部付近はわずかに内傾する。口縁部は外側に大きく内側に小さく張り出すもので、鋤先状に近い形態である。外側部分はわずかに窪みを形成している。上部平坦面はやや内傾する。内外面の調整はナデ調整である。胴部中位よりやや下がった部分に小さな断面三角突帯を貼り付ける。底部付近と口縁部付近には黒斑が残る。口径64.4cm、胴部最大径60.4cm、底径12.0cm、器高85.8cmである。色調は全体に赤茶褐色を呈する。

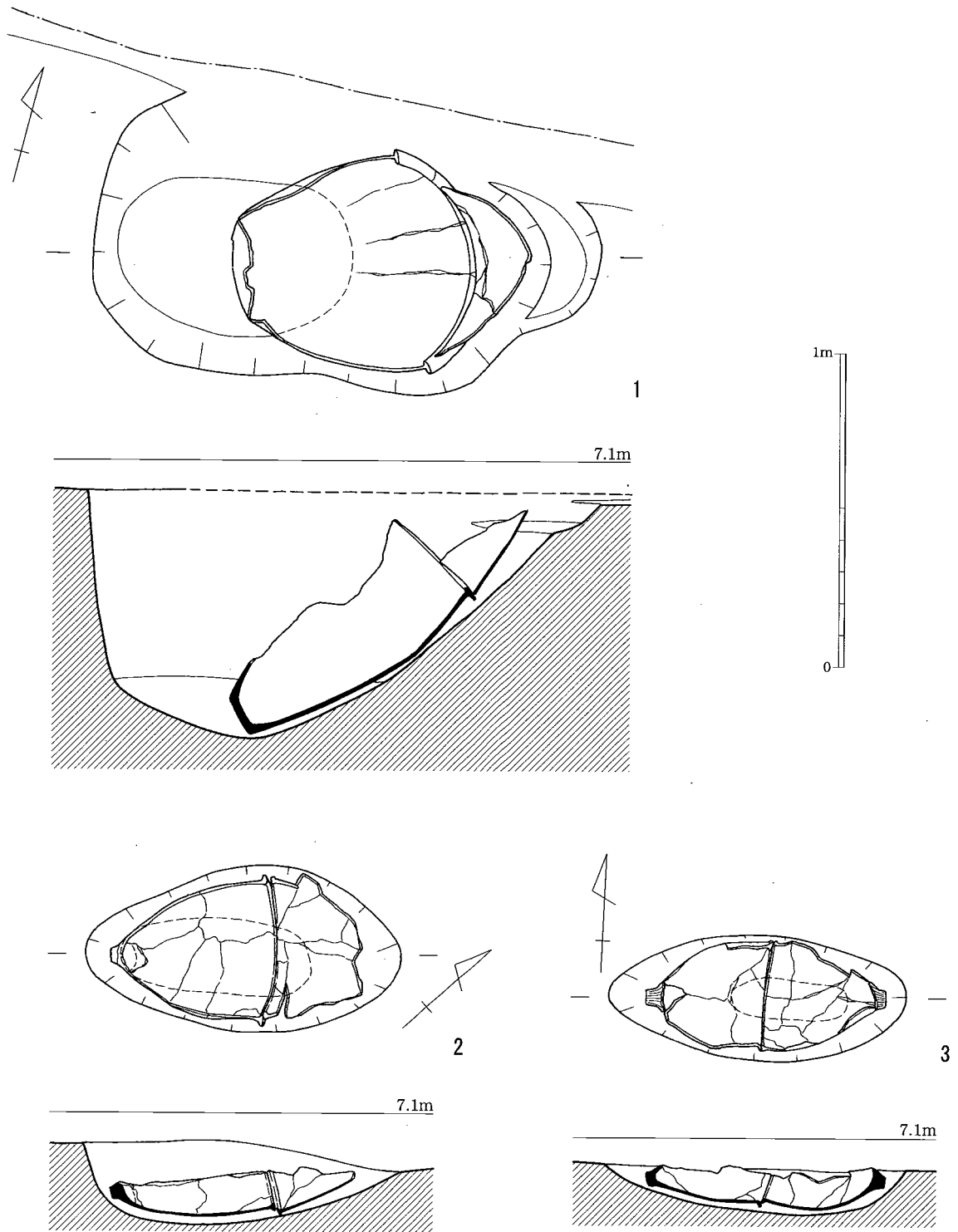
2号甕棺墓(図版6、第28図)

調査区の北端部付近に位置する。合せ口の小児用甕棺墓である。検出時に甕棺の上半分は棺内に落ち込んでいた。上甕の底部は削平のためにすでに失われる。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度は 15° で、主軸は $N-50^{\circ}-E$ の方位をとる。時期は弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版51、第31図)

上甕は削平のために底部を失う。全体に膨らみ気味の器形で底部にかけて大きくすぼむ。口縁部は断面三角形、内側にもわずかに伸びる。口縁下に断面三角突帯を貼り付ける。外面はハケメ調整である。内面底部付近には不規則な圧痕が残る。口径35.0cm、胴部最大径33.8cmである。色調は淡黄褐色である。

下甕も全体に膨らみをもつ器形で底部が大きくすぼむ。口縁部は断面三角形で、上部平坦面が水平となる。口縁下に1条の断面三角突帯を貼り付ける。底部は厚底で小さく、わずかに上底である。外面は縦方向のハケメであるが、突帯部の下のみ横方向である。内面はナデ調整であるが、不規則な圧痕が残る。口径37.5cm、胴部最大径35.8cm、底径5.0cm、器高45.2cmである。色調は淡橙褐色を呈する。



第28图 3区1~3号甕棺墓实测图 (1/20)

3号甕棺墓(図版7、第28図)

調査区の北端部に位置する。合せ口の小児用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。検出時に甕棺の上半分は棺内に落ち込んでいた。埋置角度は5°程度である。主軸はN-89°-Wの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版51、第31図)

上甕は膨らみ気味の器形で底部にかけて大きくすぼむ。底部は調査中ではあったが、所在不明である。口縁部は断面三角で、内側にやや張り出し気味である。外面は縦方向のハケメ調整で、口縁部付近は横ナデ。内面はナデ調整だが、圧痕が残る。口径28.8cm、胴部最大径27.8cmである。色調は橙褐色を呈する。

下甕はやや膨らまない器形である。口縁は断面三角形を呈し、内側にわずかに発達する。口縁下に細い沈線を1条巡らす。底部は厚底で小さく、わずかに上底である。外面は粗いハケメ調整であるが、沈線より上は横ナデである。内面はナデであるが、圧痕が残る。底部の底面には黒斑が残る。口径は28.3cm、胴部最大径26.4cm、底径5.0cm、器高35.4cmである。色調は淡橙茶色を呈する。

4号甕棺墓(図版7、第30図)

調査区の北端部に位置する。合せ口の小児用甕棺墓である。上甕を削平のために失う。上甕らしき破片が出土しているが、小片のため復元・図化を行っていない。下甕は土圧により大きく歪んでいる。墓坑は土圧より歪んだ下甕に合った形状をしており、掘り間違いの可能性もある。埋置角度は復元すると50°位であるが動いている可能性が高い。主軸はN-27°-Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃。

出土土器(図版54、第31図)

中型の甕で、やや胴の長い球形を呈し、口縁付近は大きく内傾する。口縁部は断面三角を呈し、外側にわずかに跳ね上げ気味である。胴部最大径の部分に小さな断面三角の突帯を貼り付ける。底部は平底である。外面は底部付近は縦方向、それより上位は横方向のミガキ。内面はナデ調整。胴部に大きく黒斑が残る。口径29.3cm、胴部最大径42.4cm、底径8.2cm、器高49.2cmである。色調は橙茶色である。

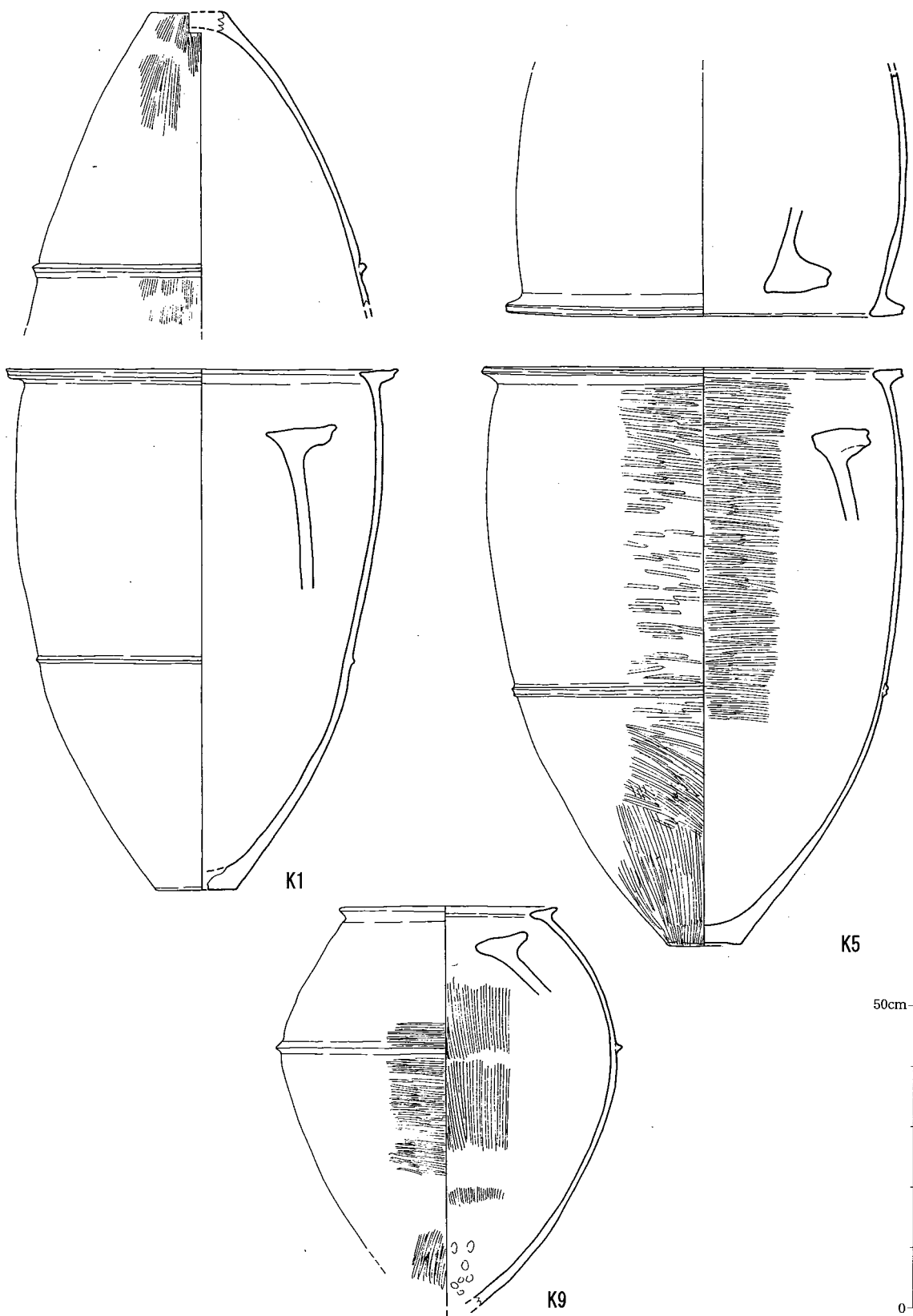
5号甕棺墓(図版7、第30図)

調査区の北端部に位置する。合せ口の成人用甕棺墓である。6号甕棺墓に切られる。削平により上甕の上部を失う。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度は29°である。主軸はN-67°-Eの方位をとる。弥生時代中期前半と考えられる。

出土土器(図版45、第29図)

上甕は削平のために底部から胴部にかけてを失う。口縁部付近は内傾する。口縁部は外側に大きく張り出すもので、外側部分にわずかに窪みを形成する。内側にはほとんど発達しない。内外面調整はナデである。口径は65.5cm、胴部最大径は64.8cmである。色調は淡橙褐色を呈する。

下甕は下位から大きく膨らむ器形で、口縁部付近が内傾する。口縁部は厚い断面四角の粘土帯を乗せるような形状を呈し、外側にはわずかに窪みを形成する。外面は全体にミガキ調整。底部付近は縦方向に、それより上位は横方向にミガキを行っている。胴部中位よりやや下った部分に断面「M」字状の小さな突帯を貼り付ける。内面の調整は横方向のミガキである。胴部上位に黒斑が残る。口径69.3cm、胴部最大径68.6cm、底径11.3cm、器高95.8cmである。色調は橙褐色を呈する。



第29图 3区1·5·9号甕棺实测图 (1/10)

6号甕棺墓(図版7、第30図)

調査区の北端部に位置する。5号甕棺墓を切り、これより新しい。壺と鉢を用いる合せ口の小児用甕棺墓である。削平により上甕に使用される鉢の大部分を失う。墓坑は浅い段を掘り、下甕の形状に合わせて掘り込まれる。埋地角度は 59° である。主軸は $N-36^{\circ}-E$ の方位をとる。弥生時代中期前半頃。

出土土器(図版51、第31図)

上甕は鉢を使用している。本来、口縁部まであったのであろうが、削平の時であろうか失われる。外面の調整はナデ、内面に大き目の圧痕が残る。底径は13.2cmである。色調は茶褐色を呈する。

下甕は広口壺を使用する。口縁部を打ち欠く。小さな底部から大きく胴部が広がり、肩部でくびれ、真っ直ぐ口縁へ立ち上がる器形である。口縁部と肩部の境には突帯を貼り付ける。外面の調整はミガキ。底部付近は縦方向、それより上位は横方向のミガキ調整である。内面の調整はナデであるが、内面に複数の圧痕が残る。底部付近に黒斑が付着する。胴部最大径33.0cm、底径5.5cmである。色調は茶褐色を呈する。

7号甕棺墓(第30図)

調査区の北端部に位置する。合せ口の小児用甕棺墓である。1号竪穴住居跡により切られ、上甕の大部分を失う。上甕は小片のため、復元・図化を行っていない。墓坑はラインが見えなかったので、推定線である。埋置角度は 21° である。主軸は $N-35^{\circ}-E$ の方位をとる。弥生時代中期前半頃であると考えられる。

出土土器(図版51、第31図)

下甕は胴部があまり膨らまないものである。口縁部は断面三角形を呈し、上部平坦面はやや内傾する。底部は厚底で小さく、上げ底である。外面は縦方向のハケメで、口縁下は横方向に行く。口縁部付近は横ナデである。内面はナデ調整。胴部に大きく黒斑が残る。口径29.0cm、胴部最大径27.0cm、底径4.8cm、器高33.8cmである。色調は橙褐色を呈する。

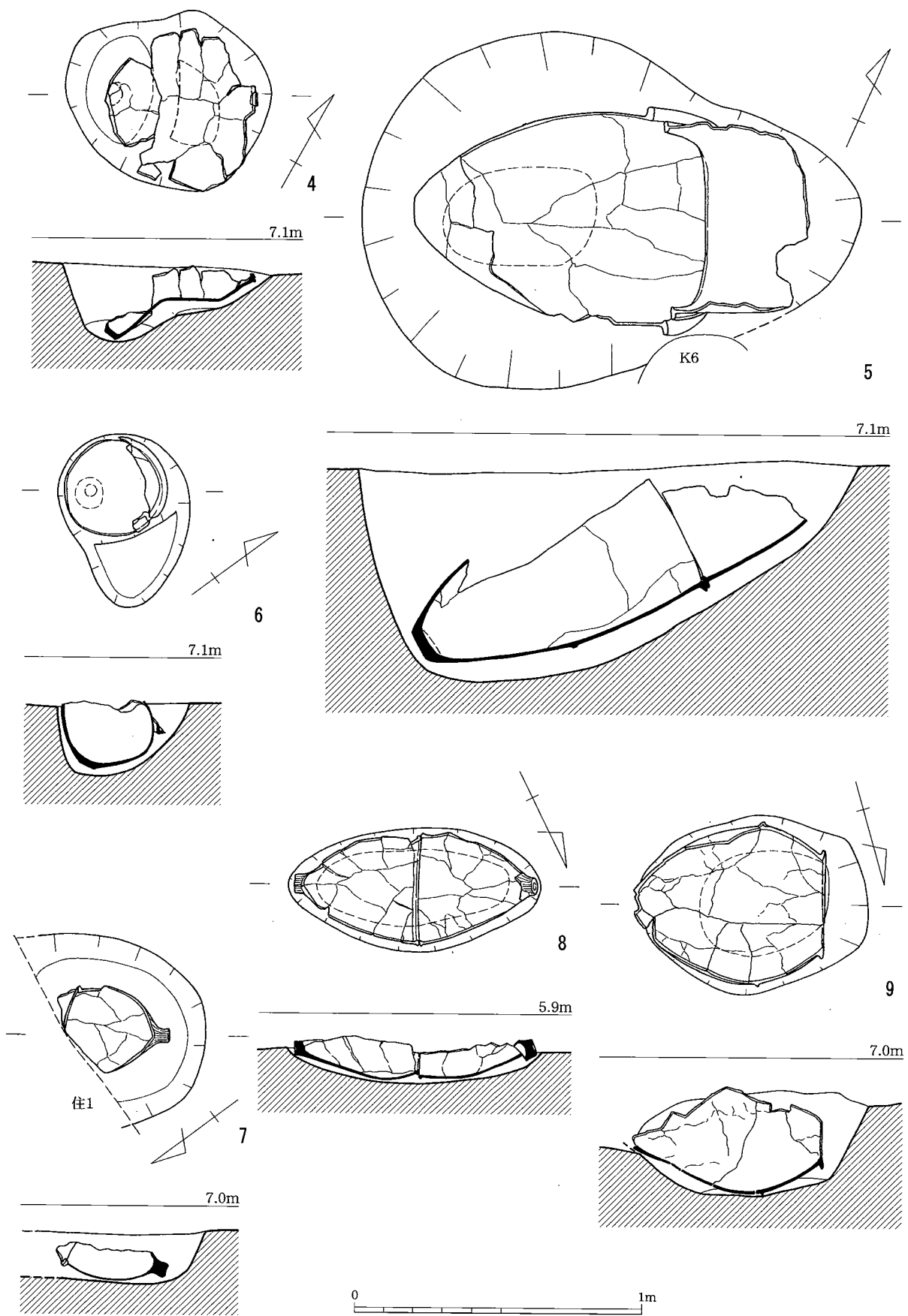
8号甕棺墓(図版8、第30図)

調査区の北端部に位置する。合せ口の小児用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込んでいると考えられる。埋置角度はほぼ水平である。主軸は $N-64^{\circ}-W$ の方位。弥生時代中期前半頃であると考えられる。

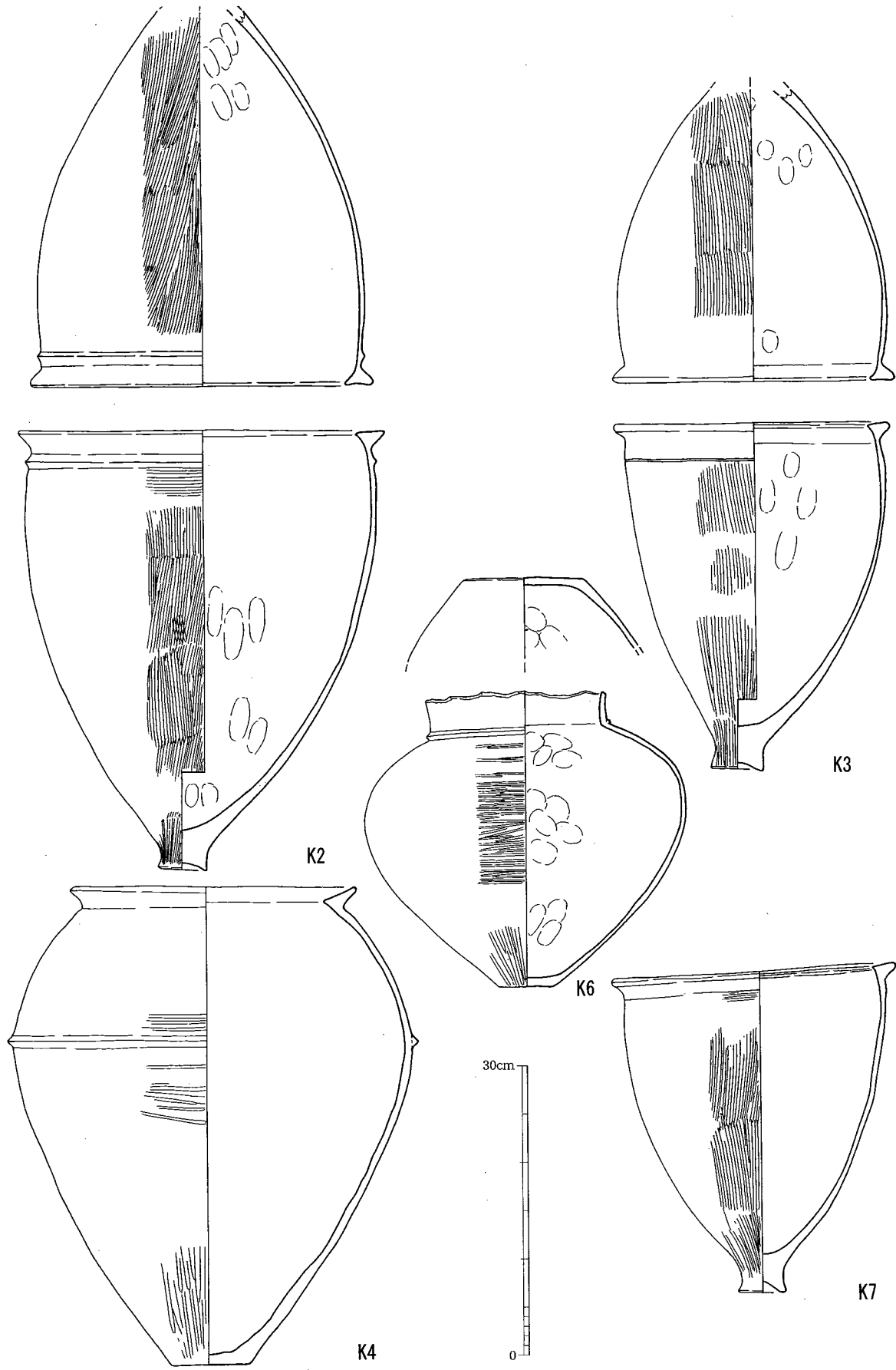
出土土器(図版51、第32図)

埋置の状況がほぼ水平であったために上下をつけていない。東甕と西甕と呼称し、説明を行う。東甕はやや胴の張る器形である。口縁付近は内傾する。口縁部はやや厚ぼったい感のある断面三角突帯であり、上端面は水平となる。口縁下に1条の細い沈線を巡らす。底部は厚底でやや大ぶりである。わずかに上底を呈する。外面は粗いハケメ調整である。内面の調整はナデである。底部底面付近に黒斑が付着する。口径30.0cm、胴部最大径29.8cm、底径6.0cm、器高39.0cmである。色調は橙褐色を呈する。

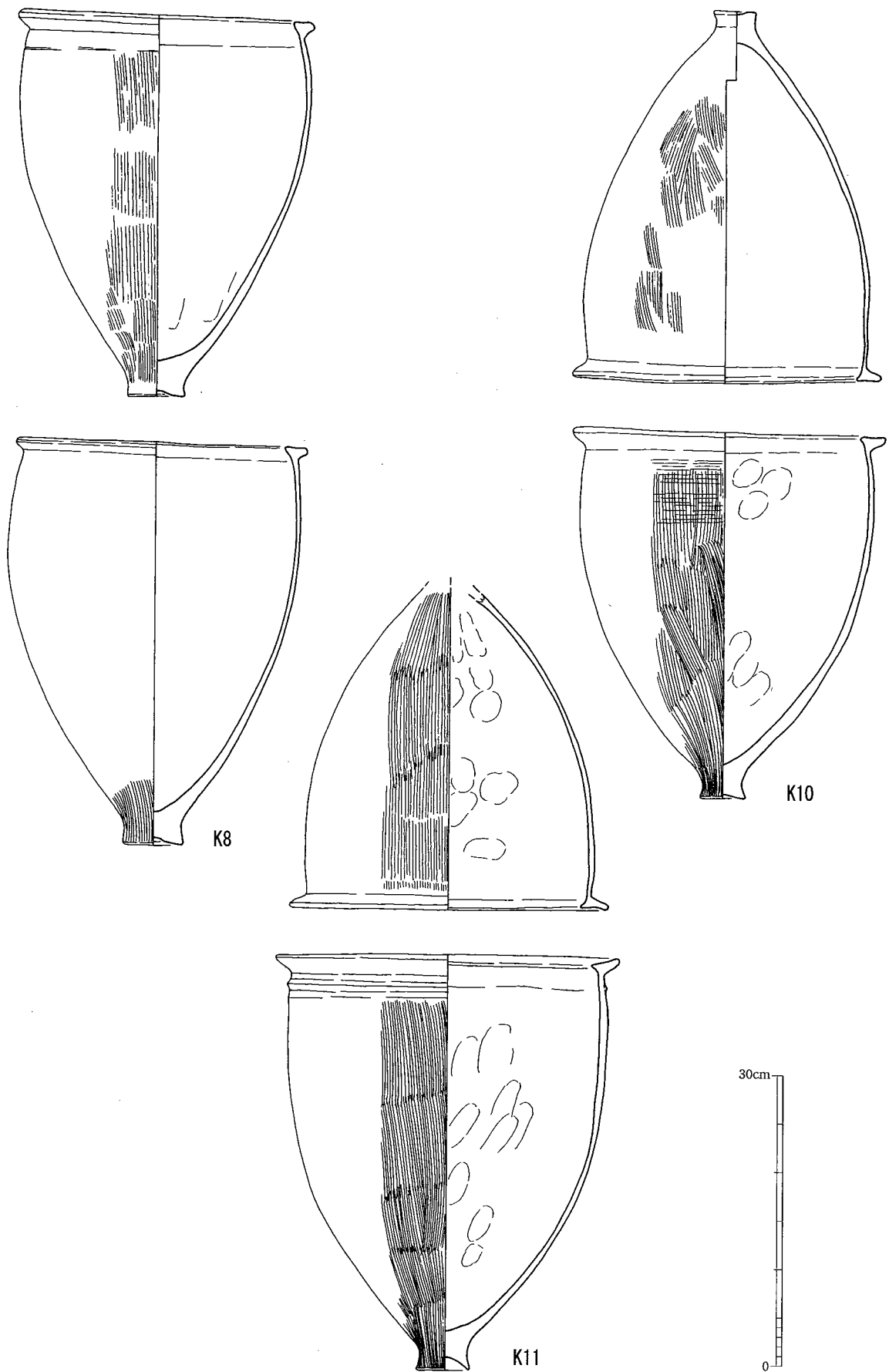
西甕は胴のほぼ張らない器形である。口縁端部は断面三角形で内側にもやや発達している。底部は厚底でやや大きめである。わずかに上底である。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデである。口径29.6cm、胴部最大径30.0cm、底径6.2cm、器高41.6cmである。色調は白黄褐色を呈する。



第30图 3区4~9号甕棺墓实测图 (1/20)



第31图 3区2~4·6·7号甕棺实测图 (1/6)



第32图 3区8·10·11号甕棺实测图 (1/6)

9号甕棺墓(図版8、第30図)

調査区の北端部で検出した。単棺の中人用甕棺墓であるが、本来、木蓋等があった可能性がある。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれている。埋地角度は 2° で、主軸はN- 77° -Wの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版46、第29図)

中型の甕で底部付近を失う。胴の張る球形に近い形態である。口縁部は両側に発達するが両端ともに丸く仕上げられる。上部の平坦面は大きくない傾する。外面は全体にミガキ調整である。底部付近は縦方向、それより上位は横方向である。胴部最大径の部分にやや大きめの断面三角突帯を貼り付ける。内面はハケメが残り、底部付近には不規則な圧痕がある。胴部中位付近には大きく黒斑が付着する。口径35.6cm、胴部最大径57.2cmである。色調は白橙褐色を呈し、他の甕棺より白い印象を受ける。

10号甕棺墓(図版8、第33図)

調査区の北端部で検出した。合せ口の小児用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれるが、南側が広いことから挿入方向と考え、上甕と判断した。埋置角度は 2° で、ほぼ水平である。主軸はN- 25° -Wの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版51、第32図)

上甕はほぼ胴の張らない胴部に小さい底部が付く。口縁部は断面三角形で内側にやや張り出す。底部は厚底で小さく、中位でくびれる。わずかに上底である。外面はハケメ調整、口縁部付近は横ナデ。内面はナデ調整。底部の底面には黒斑が付く。口径31.8cm、胴部最大径29.6cm、底径4.4cm、器高38.2cmである。色調は淡橙褐色を呈する。

下甕はやや張り気味の胴部をもつ。口縁部は断面三角形でわずかに内側にも発達する。上甕の形態とも類似するが、やや端部の仕上げがあまい。底部は厚底で小さくくびれる。わずかに上底気味である。外面は縦方向のハケメであるが、口縁下はその上から横方向のハケメを重ねる。口縁部分は横ナデを施す。内面はナデ調整であるが、ところどころに圧痕が残る。底部の底面には黒斑が付着する。口径32.0cm、胴部最大径30.4cm、底径4.7cm、器高37.0cmである。色調は灰黄褐色を呈する。

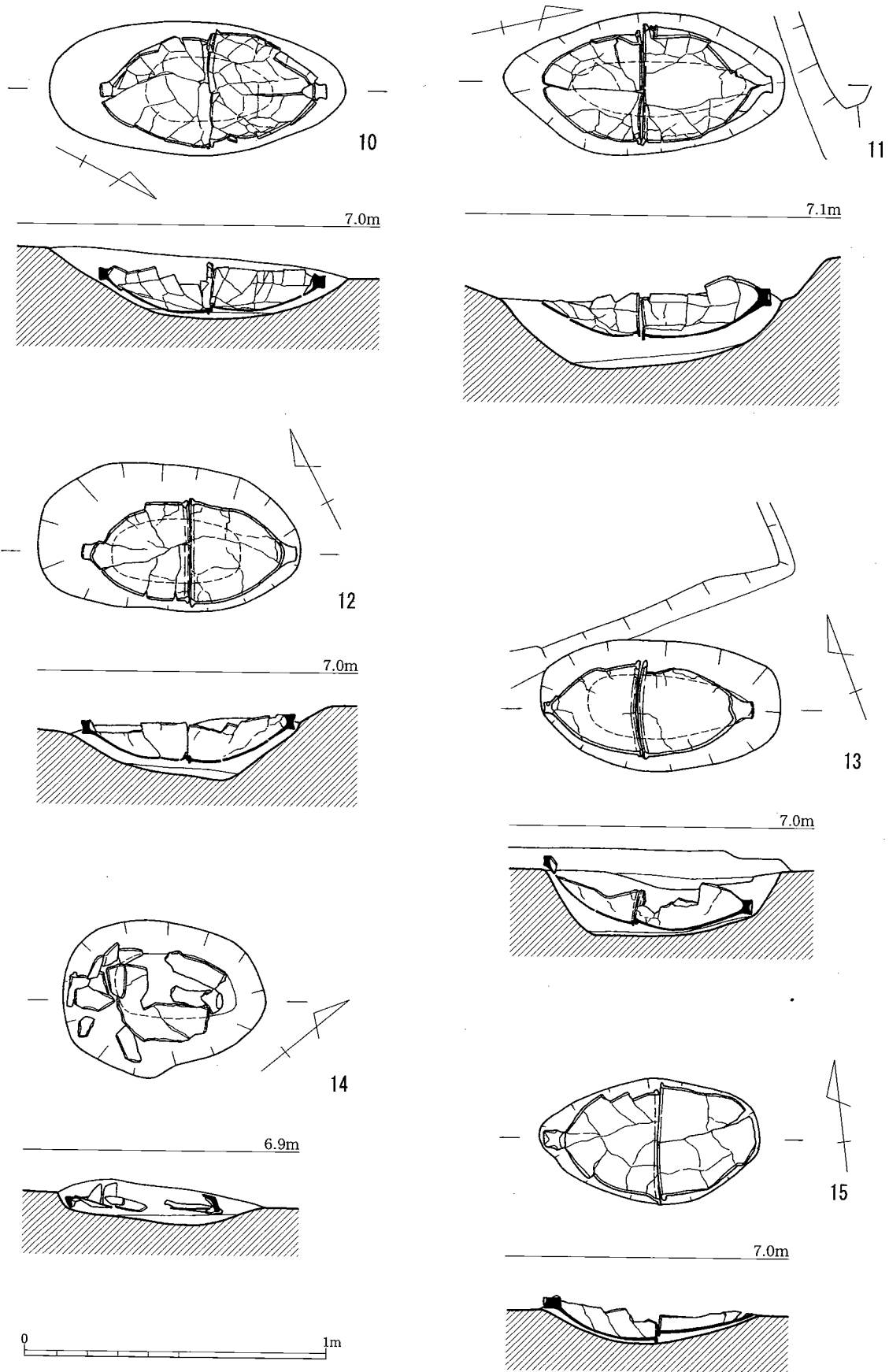
11号甕棺墓(図版9、第33図)

調査区の北端部で検出した。合せ口の小児用甕棺墓である。墓坑はやや掘り過ぎで、本来は甕棺の形状に合わせて掘り込まれていたものと考えられる。埋置角度は 3° で、主軸はN- 12° -Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版52、第32図)

上甕は底部を失う。胴部はあまり張らず、他のものよりやや器高が低い印象を受ける。口縁部は内外に発達し、外側はやや跳ね上げ気味である。外面はハケメで口縁部は横ナデで、一部ハケメが消される。内面には大き目の圧痕が不規則に残る。口径32.5cm、胴部最大径29.7cmである。色調は淡黄褐色。

下甕はあまり胴の張らないもので、ややスマートな印象を受ける。口縁部は跳ね上げ口縁で、口縁下に小さな断面三角突帯を貼り付ける。底部は厚底で、上底である。外面はハケメ調整で、口縁部及び突帯付近は横ナデである。内面はナデ調整で圧痕が残る。口径35.0cm、胴部最大径32.6cm、底径5.5cm、器高42.5cmである。色調は暗黄褐色を呈する。



第33图 3区10~15号甕棺墓实测图 (1/20)

12号甕棺墓(図版9、第33図)

調査区の北端部で検出した。合せ口の小児用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度はほぼ水平である。主軸はN-62°-Wの方位をとる。時期は弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版52、第34図)

埋置の状況がほぼ水平であったために上下をつけていない。東甕と西甕と呼称し、説明を行う。東甕はほとんど胴の張らない器形である。口縁部は外側に大きく発達し、わずかに跳ね上げ気味である。底部はやや大きめの厚底で、上底である。外面はハケメ調整、口縁部付近は横ナデである。内面にはハケメが部分的に残る。底部付近に小さく黒斑が付着する。口径29.6cm、胴部最大径28.2cm、底径5.0cm、器高34.4cmである。色調は橙褐色を呈する。

西甕も東甕と同様にほとんど胴が張らない。口縁部は内外に発達し、跳ね上げ気味である。底部はやや大き目の厚底で、上底である。内外面はハケメ調整であるが、内面部分的に圧痕が残る。口縁部付近は横ナデである。底部の底面に黒斑が付着する。口径28.0cm、胴部最大径27.6cm、底径5.0cm、器高33.4cmである。色調は淡褐色である。

13号甕棺墓(図版9、第33図)

調査区の北端部で検出した。合せ口の小児用甕棺墓である。墓坑は下甕は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度は15°である。主軸はN-70°-Wの方位をとる。弥生時代中期前半頃。

出土土器(図版52、第34図)

上甕は胴がやや張り気味で、やや器高の低い印象を受ける。口縁は断面三角形で、内面にわずかに発達する。上端面はわずかに外側が上がっている。底部は小さく厚底で、中位が大きくくびれる。上底で端部が大きく開く。外面は粗いハケメ。内面はナデ調整で、中位付近に圧痕が残る。口径31.0cm、胴部最大径28.6cm、底径4.9cm、器高33.9cmである。色調は淡褐色である。

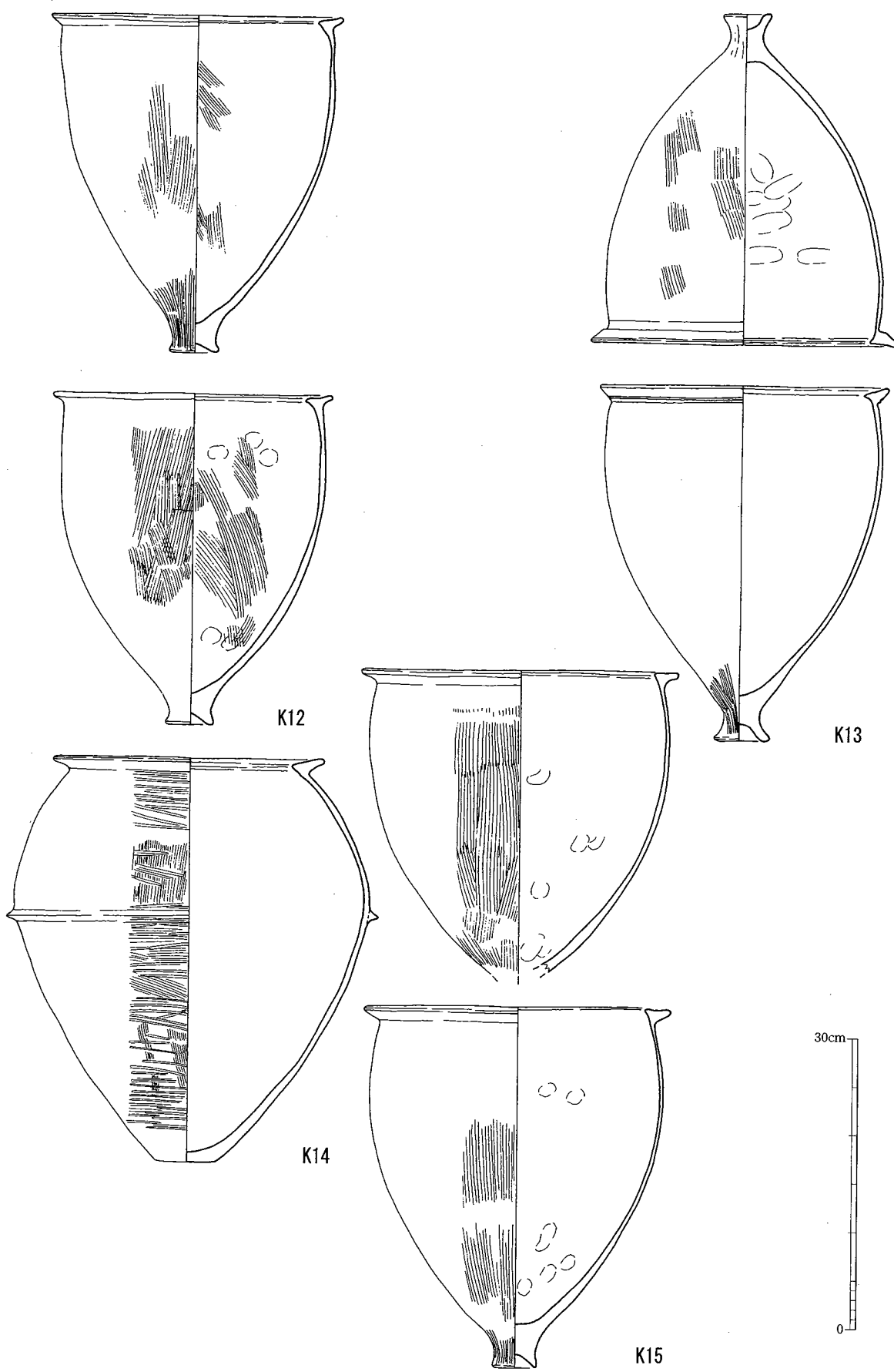
下甕は胴がわずかに張る器形である。口縁部は断面三角の口縁の外側を大きく上げる。底部は小さな厚底であるが、上底でくびれ端部が大きく開き、台付甕の形態に近い。外面はハケメ調整で、口縁部付近はナデ調整である。内面はナデ調整で、中位に圧痕が残る。口径29.6cm、胴部最大径28.6cm、底径5.0cm、器高36.5cmである。色調は淡褐色を呈する。

14号甕棺墓(図版10、第33図)

調査区の北端部で検出した。単棺の中人用甕棺墓である。土圧のためか、破片となっており、かなり原位置を動いているものが多い。墓坑も正確な形状は不明であるが、本来、甕棺の形状に合わせて掘り込まれていたものと考えられる。埋置角度はほぼ水平であろうか。主軸はS-40°-Wの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版54、第34図)

中型の甕で、胴部は球形に近く、口縁付近は大きく内傾する。口縁部は外側に大きく発達しており、上端面は内側に傾く。胴部最大径の部分に小さな三角突帯を貼り付ける。底部は平底である。外面の調整は縦方向のハケメの後、横方向のミガキをまばらに施す。内面はナデ調整。胴部外面下位に黒斑が付着する。口径27.6cm、胴部最大径38.0cm、底径6.0cm、器高41.5cmである。色調は白黄褐色を呈する。



第34图 3区12~15号甕棺实测图 (1/6)

15号甕棺墓(図版10、第33図)

調査区の北端部で検出した。合せ口の小児甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度はほぼ水平である。主軸はN-84°-Wの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版52、第34図)

埋置の状況がほぼ水平であったために上下をつけていない。東甕と西甕と呼称し、説明を行う。東甕は削平のためか、底部を失う。胴部がわずかに張る器形である。口縁は断面L字に近い形状を呈する。外面はハケメ調整、口縁付近は横ナデである。内面はナデ調整で、圧痕が残る。底部付近に黒斑が付着する。口径は32.4cm、胴部最大径30.4cmである。色調は淡褐色を呈する。

西甕はわずかに胴部が張る器形である。口縁部は断面三角形で、上端面がやや窪む。底部はやや大きめの厚底でほとんどくびれない。上底で、底面に黒斑が付着する。外面はハケメ調整、口縁付近は横ナデである。内面はナデで、圧痕が残る。口径31.2cm、胴部最大径30.0cm、底径4.6cm、器高36.9cmである。色調は淡橙褐色を呈する。

16号甕棺墓(図版10、第35図)

調査区の中央やや北寄りで検出した。合せ口の成人用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度はほぼ水平である。主軸はN-34°-Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版46、第36図)

埋置の状況がほぼ水平であったために上下をつけていない。東甕と西甕と呼称し、説明を行う。東甕の底部は削平により失われる。胴のほとんど張らないもので、口縁付近はわずかに内傾する。口縁部は外側に大きく張り出す。端部は丸く仕上げ、上部平坦面はわずかに内傾する。胴部中位よりやや下ったところに、小さな断面三角突帯を貼り付ける。外面の調整は縦方向のハケメ、口縁下と突帯下は横方向のハケメである。内面はナデ調整で、口縁部付近に工具によるナデ痕が残る。底部付近に黒斑が付着する。内面には黒塗りを施す。口径64.5cm、胴部最大径65.6cmである。色調は淡茶褐色を呈する。

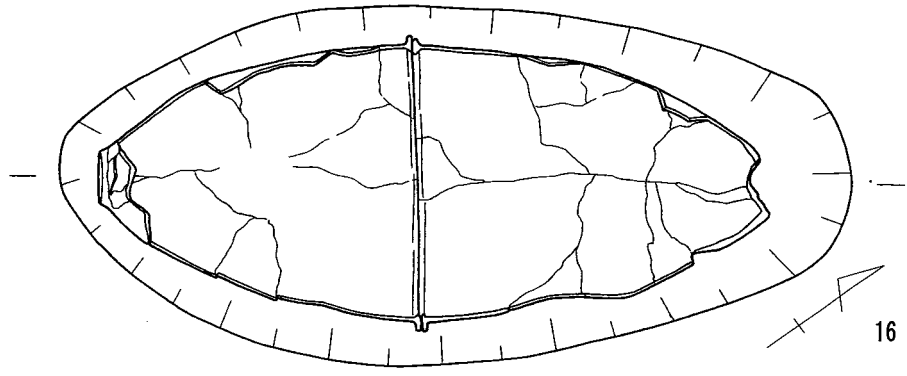
西甕は胴のほとんど張らないもので、口縁付近はわずかに内傾する。口縁部は粘土帯を上に乗せるように貼り付け、外側に大きく、内側にわずかに張り出す。外側の端部にはわずかに窪みを形成する。胴部中位よりやや下った位置に小さな三角突帯を貼り付ける。底部は平底であるが、厚く大きい。外面は縦方向のハケメ調整で、部分的に横方向に施される。内面はナデ調整。口縁部から突帯の上にかけてと底部の底面に黒斑が付着する。内面には黒塗りを施す。突帯より11cmほど上った位置に焼成後の穿孔が施される。孔の周囲は外面の方が広く欠けているため内側から外側に穿孔した可能性が高い。口径は67.4cm、胴部最大径61.6cm、底径12.8cm、器高84.7cmである。色調は茶褐色を呈する。

17号甕棺墓(図版11、第37図)

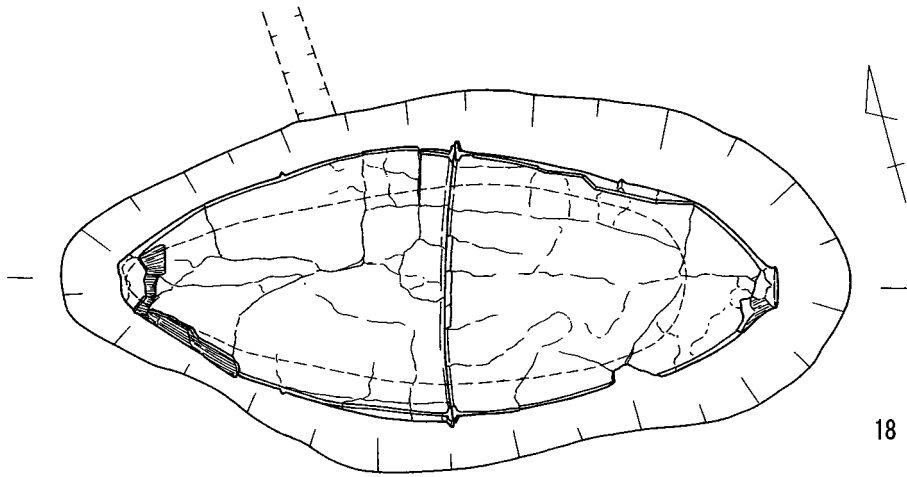
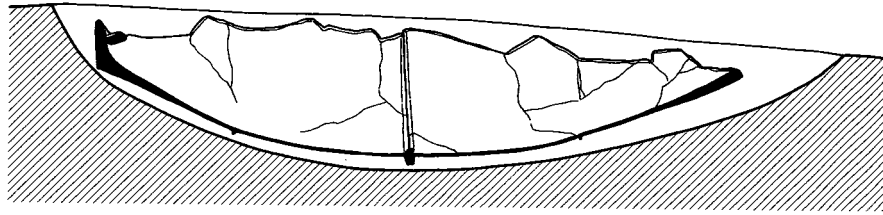
調査区のほぼ中央で検出した。合せ口の小児用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせてやや大きめに掘り込まれる。埋置角度はほぼ水平である。主軸はS-67°-Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版52、第38図)

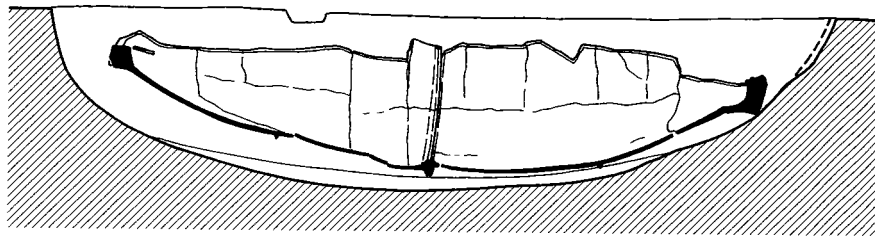
上甕はほとんど胴の張らない器形である。口縁部は跳ね上げ口縁であるが、やや分厚い。底部は厚



6.8m



6.8m



第35图 3区16·18号甕棺墓実測图 (1/20)

底で小さい。上底で端部が開く。外面の調整はハケメ、口縁部付近は横ナデである。内面の調整はナデで、圧痕が残る。口径33.6cm、胴部最大径30.0cm、底径5.0cm、器高35.8cmである。色調は茶褐色。

下甕は胴部は張らず器高がやや低い器形である。口縁部は跳ね上げ口縁である。底部は厚底で小さい。上底で端部は開かない。外面はハケメ調整。内面はナデ調整で、底部付近に圧痕が残る。口径は34.7cm、胴部最大径32.7cm、底径5.4cm、器高35.2cmである。色調は橙茶色である。

18号甕棺墓(図版11、第35図)

調査区のはほぼ中央で検出した。合せ口の成人用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて、やや大きめに掘り込まれる。埋置角度は4°である。主軸はN-15°-Wの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版47、第36図)

上甕は削平により底部を失う。ほとんど胴の張らない器形である。口縁は外面にやや大きく、内面にわずかに発達している。胴部中位よりやや下った位置に小さなやや尖り気味の三角突帯を貼り付ける。外面はハケメ調整。内面には外面と工具の異なる粗いハケメを施す。内面は黒塗りの可能性もある。焼成後、口縁下に12cm×8cmの方形の穿孔が施される。口径66.2cm、胴部最大径63.0cmである。色調は灰褐色を呈する。

下甕はわずかに胴下半部の張る器形である。口縁部は外側に大きく、内側に小さく張り出すもので、上部平坦面は内傾する。胴部中位やや下がった位置に断面台形の小さな突帯を貼り付ける。底部は平底であるが厚い。外面はナデ調整。内面もナデ調整。底部付近に小さく黒斑が付着する。また、内面中位にも黒斑が付着。口径67.2cm、胴部最大径63.6cm、底径11.0cm、器高83.4cmである。色調は淡橙褐色。

19号甕棺墓(図版11、第37図)

調査区の中央やや北寄りで検出した。1号波板状遺構に切られる。合せ口の小児用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度はほぼ水平である。東側の甕の底部は1号波板状遺構の埋土から出土している。主軸はN-20°-Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

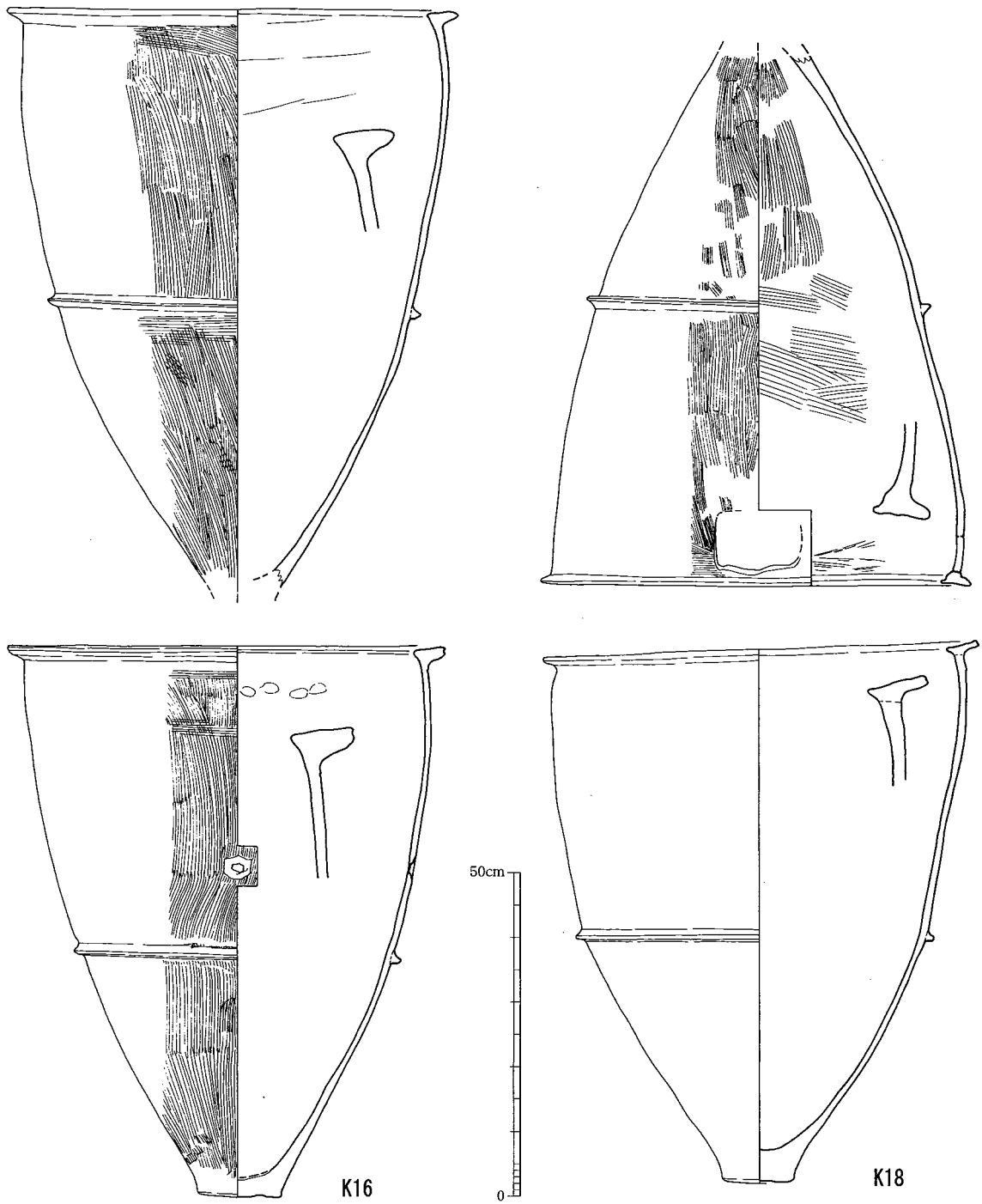
出土土器(図版52、第38図)

埋置の状況がほぼ水平であったために上下をつけていない。東甕と西甕と呼称し、説明を行う。東甕は器高が低く、大きく開く器形である。口縁部は断面三角形で、外側に大きく、内側に小さく張り出す。底部は厚底で小さい。上底である。外面の調整はハケメ。内面はナデ調整である。底部底面に黒斑が付着する。口径35.6cm、胴部最大径32.6cm、底径4.5cm、復元した器高30.6cmである。色調は黄褐色。

西甕はわずかに胴が張る器形である。口縁部は外側に大きく、内側に小さく張り出し、上部平坦面は内傾する。底部は小さく厚底である。上底である。外面はハケメ調整。内面はナデ調整である。底部底面に黒斑が付着する。口径32.4cm、胴部最大径30.0cm、底径4.8cm、器高35.0cm。色調は橙褐色。

20号甕棺墓(図版12、第37図)

調査区の中央やや南寄りで検出した。4号溝に大きく切られる。合せ口の小児用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度は8°である。主軸はN-80°-Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。



第36图 3区16·18号甕棺实测图 (1/10)

出土土器(図版54、第38図)

上甕の底部は4号溝に切られ、本体を大きく失う。胴の張らない器形である。口縁部は跳ね上げ口縁である。口径29.8cm、胴部最大径26.6cmである。色調は黄橙色を呈する。

下甕も4号溝に切られ、本体を大きく失う。卵形に近い器形で中型である。口縁付近は内傾する。口縁部は断面三角に近い形状で、外端部に刻み目を施す。胴部最大径付近に小さな断面三角突帯を貼り付け、刻み目を施す。外面は下半部は縦方向のミガキ、それより上位は横方向のミガキを施す。内面は圧痕が残り、その上からハケメを施す。外面下半部に黒斑が付着する。口径31.0cm、胴部最大径36.2cmである。色調は淡橙褐色である。

21号甕棺墓(図版12、第37図)

調査区の北端部で検出した。合せ口の成人用甕棺墓である。直接的には切り合いは確認できなかったが、2回目の検出時に検出した13号甕棺墓が重なる位置にあり、21号甕棺墓のほうが古いと考えられる。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度はほぼ水平である。主軸はS-50°-Wの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版47、第38図)

上甕は胴部の張らない器形である。口縁部は外側に大きく、内側にわずかに張り出す。胴部中位よりやや下った部分に小さな三角突帯を貼り付ける。胴部はこの突帯の部分でくびれている。底部は平底であるが、やや厚い印象を受ける。外面の調整はハケメで、突帯部分と口縁部分は横ナデである。内面はナデ調整で、突帯裏付近に工具よるナデ痕が残る。底部底面付近に黒斑あり。口径は65.5cm、胴部最大径61.2cm、底径11.0cm、器高82.5cmである。色調は褐色を呈する。

下甕は胴部の張らない器形で、上甕と極めて似る。口縁部は外側に大きく、内側にわずかに張り出す。胴部中位よりやや下った部分に小さな三角突帯を貼り付ける。胴部はこの突帯の部分でくびれている。底部は平底であり、わずかに上底となる。外面の調整はハケメで、突帯部分と口縁部分は横ナデである。内面はナデ調整で、口縁部内面には圧痕が残る。底部底面付近に黒斑あり。口径は67.2cm、胴部最大径63.2cm、底径12.0cm、器高84.2cmである。色調は褐色を呈する。

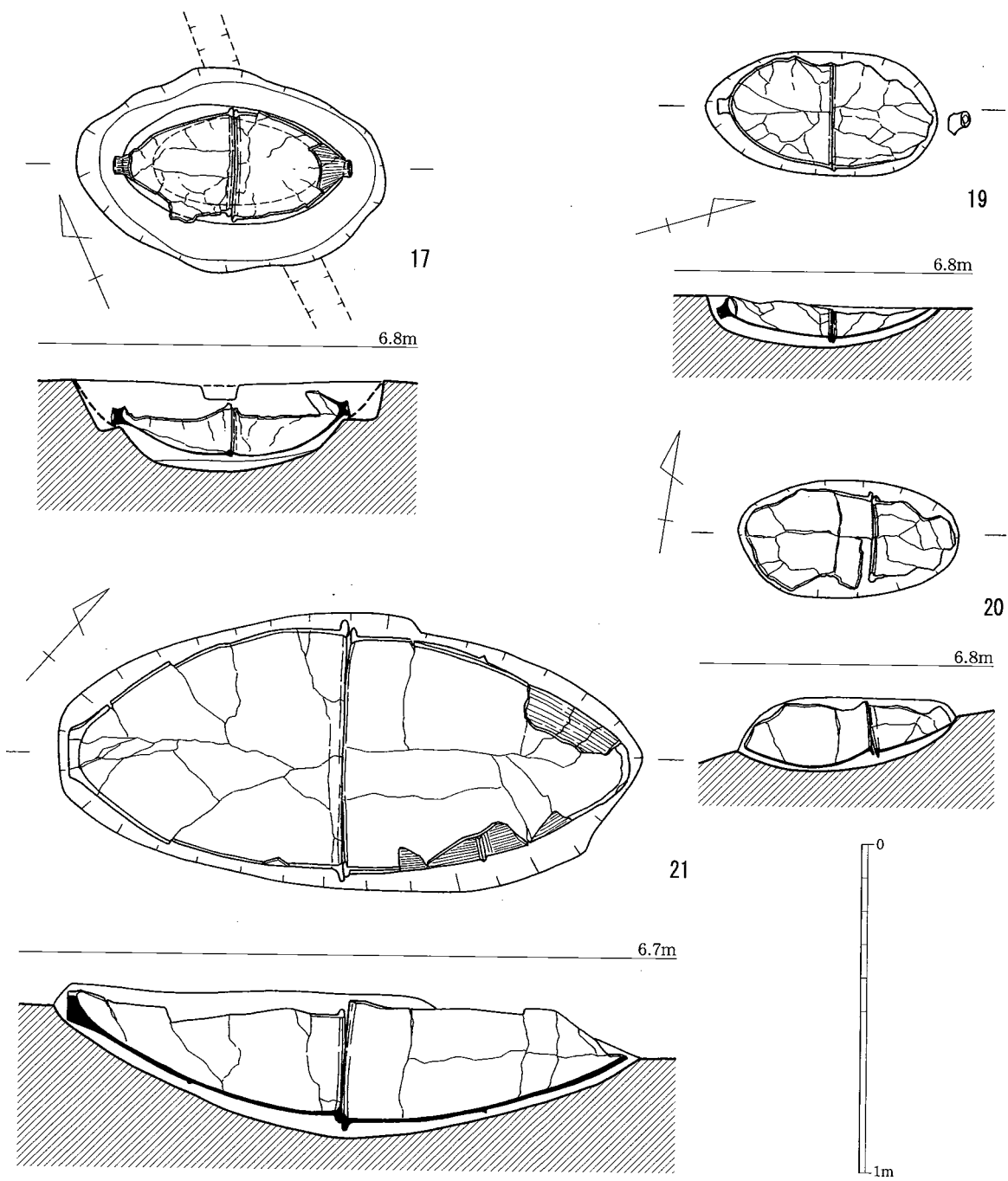
22号甕棺墓(図版13、第40図)

仮水路部分調査区の中央やや南寄りで検出した。合せ口の成人用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度はほぼ水平である。主軸はS-38°-Wの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

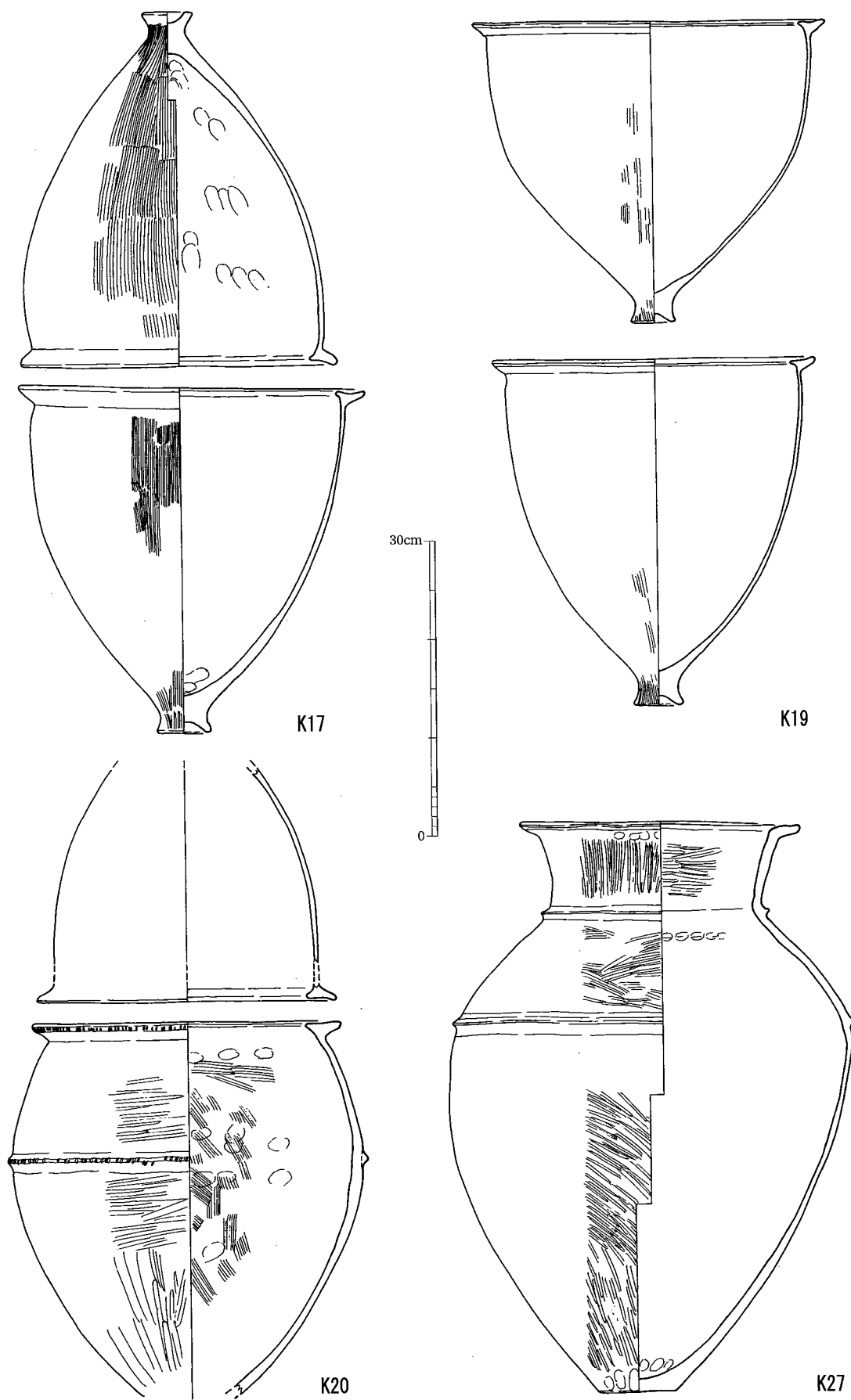
出土土器(図版48、第39図)

上下の甕ともに削平により底部を失う。上甕は比較的胴の張る器形である。口縁部は外側に台形の粘土帯を貼り付け、内側にはわずかに張り出す。胴部中位には小さな三角突帯を貼り付ける。外面は横方向のミガキである。内面はナデで、口縁内面には接合時の圧痕が連続して残る。口径65.4cm、胴部最大径66.2cmである。色調は淡黒褐色を呈する。

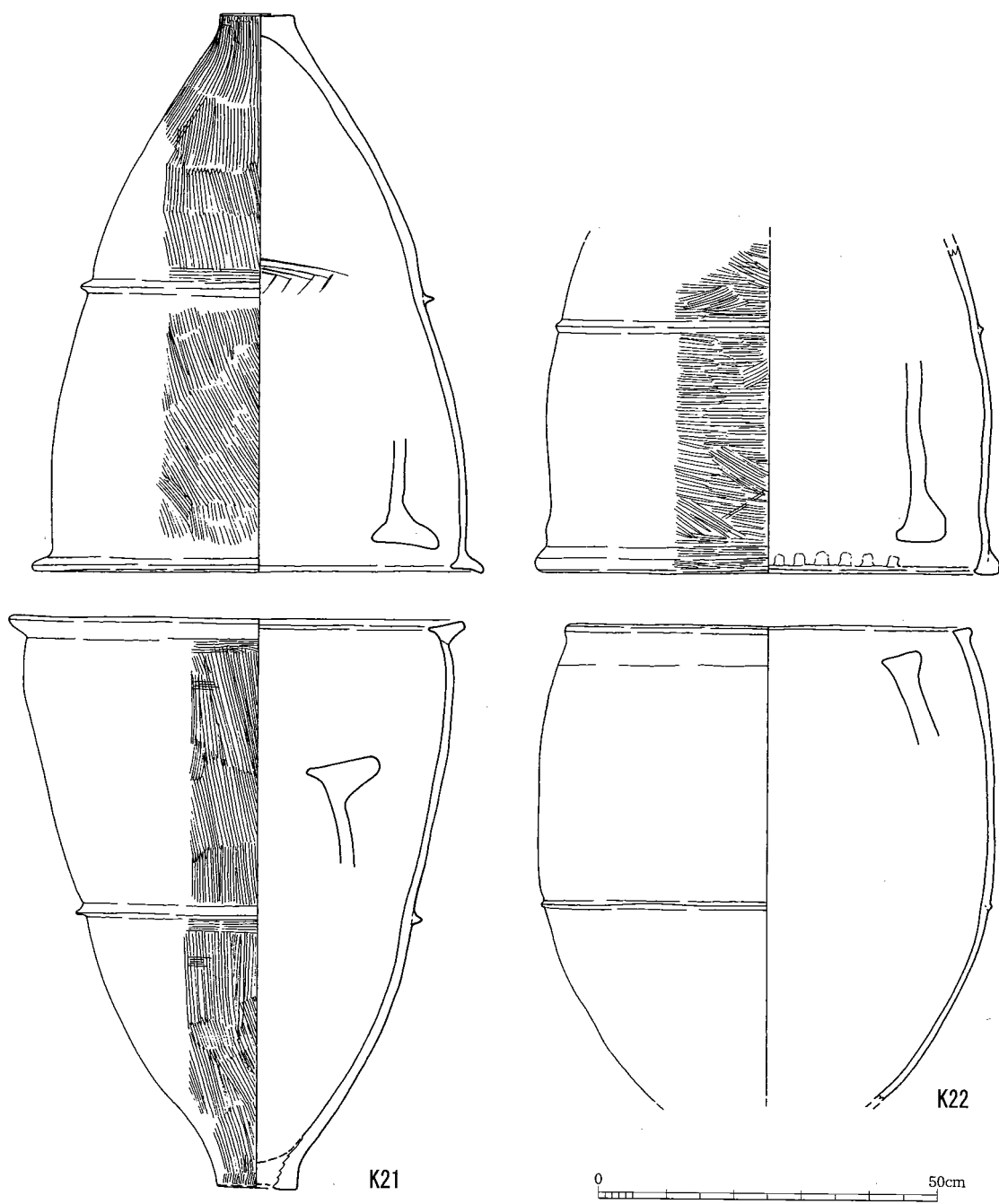
下甕はやや球形に近い器形である。口縁部は外側にわずかに張り出させるものである。胴部最大径をやや下った部分に小さな三角突帯を貼り付ける。外面内面ともにナデ調整である。口径59.8cm、胴部最大径67.0cmである。色調は灰黄褐色を呈する。



第37图 3区17·19~21号甕棺墓实测图 (1/20)



第38图 3区17·19·20·27号甕棺实测图 (1/6)



第39图 3区21·22号甕棺实测图 (1/10)

23号甕棺墓(図版13、第40図)

仮水路部分調査区の中央やや南寄りで検出した。合せ口の成人用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて、やや大きめに掘り込まれる。埋置角度は 5° 程度である。主軸はS- 43° -Wの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版48、第41図)

上甕はやや胴の張る器形である。口縁部は短く両側に張り出す。胴部中位よりやや下った位置に小さな断面三角突帯を貼り付ける。底部は平底であるが、わずかに上底になっている。外面の調整は下位は横方向のミガキ、それより上は横方向のミガキである。内面はナデである。口径63.9cm、胴部最大径60.0cm、底径12.2cm、器高84.4cmである。色調は白黄褐色を呈する。

下甕も上甕と同様の器形である。口縁部は短く両側に張り出す。胴部中位よりやや下った位置に小さな三角突帯を貼り付ける。底部は平底であるが、わずかに上底である。外面の調整はミガキ、内面の調整はナデである。底部に黒斑が付着する。口径64.4cm、胴部最大径58.8cm、底径13.0cm、器高86.8cmである。色調は赤褐色を呈する。

24号甕棺墓(図版13、第43図)

仮水路部分調査区の中央やや南寄りで検出した。合せ口の成人用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて、やや大きめに掘り込まれる。埋置角度はほぼ水平である。主軸はS- 53° -Wの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版49、第41図)

埋置の状況がほぼ水平であったために上下をつけていない。東甕と西甕と呼称し、説明を行う。東甕はわずかに胴部の張る器形である。口縁部は外側に大きく、内側にわずかに張り出す。胴部中位よりやや下った部分に断面三角突帯を貼り付ける。外面はナデ調整。内面はミガキである。口縁部下に黒斑がある。口径64.0cm、胴部最大径59.6cmである。色調は橙褐色を呈する。

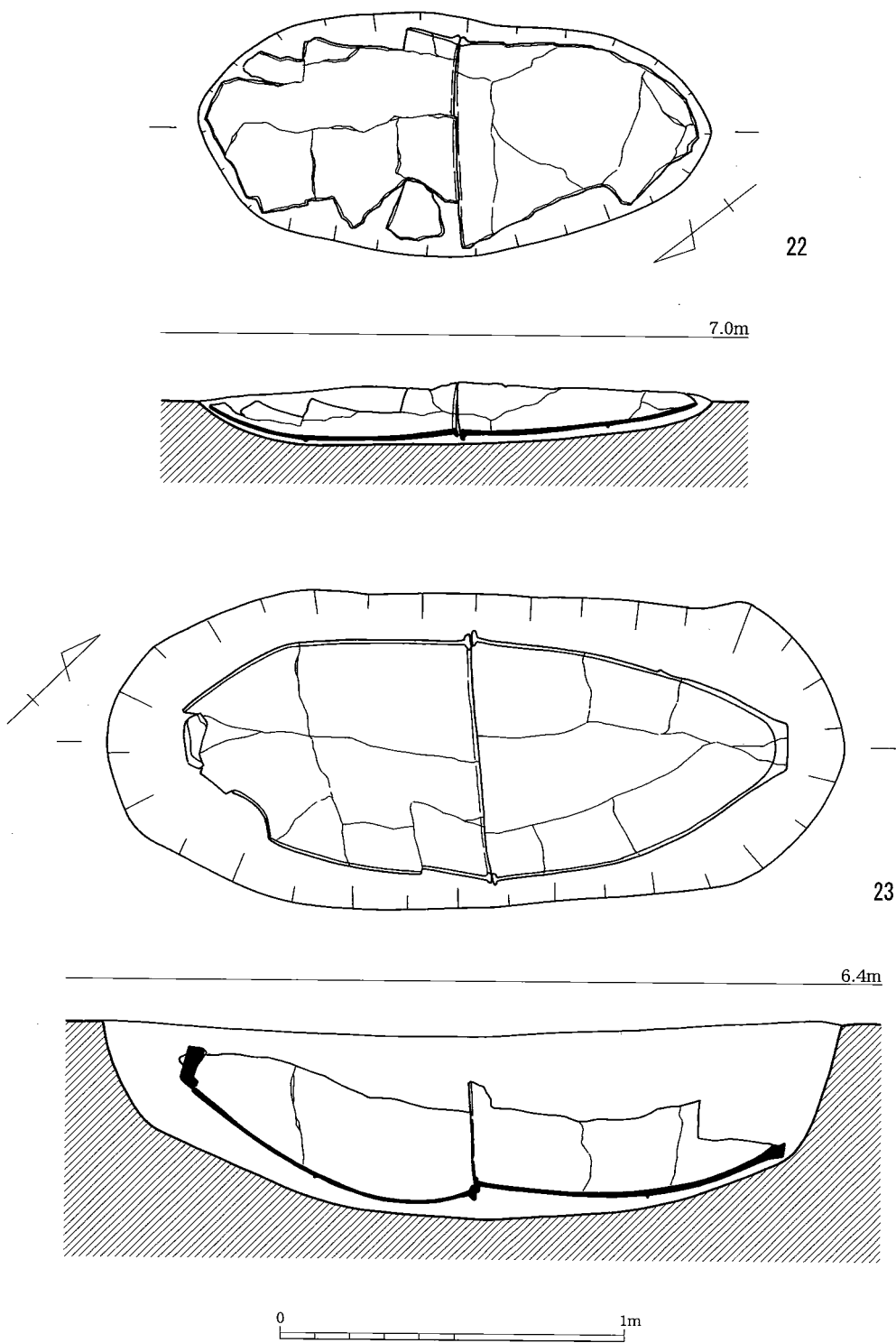
西甕は胴部がわずかにはる器形であり、全体の形は上甕と似る。口縁は外側に大きく、内側に小さく張り出す。胴部中位よりやや下がった位置に小さな断面三角突帯を貼り付ける。外面内面の調整はナデである。内面は黒塗りの可能性もある。口径60.0cm、胴部最大径55.6cmである。色調は赤褐色～黄橙色を呈する。

25号甕棺墓(図版13)

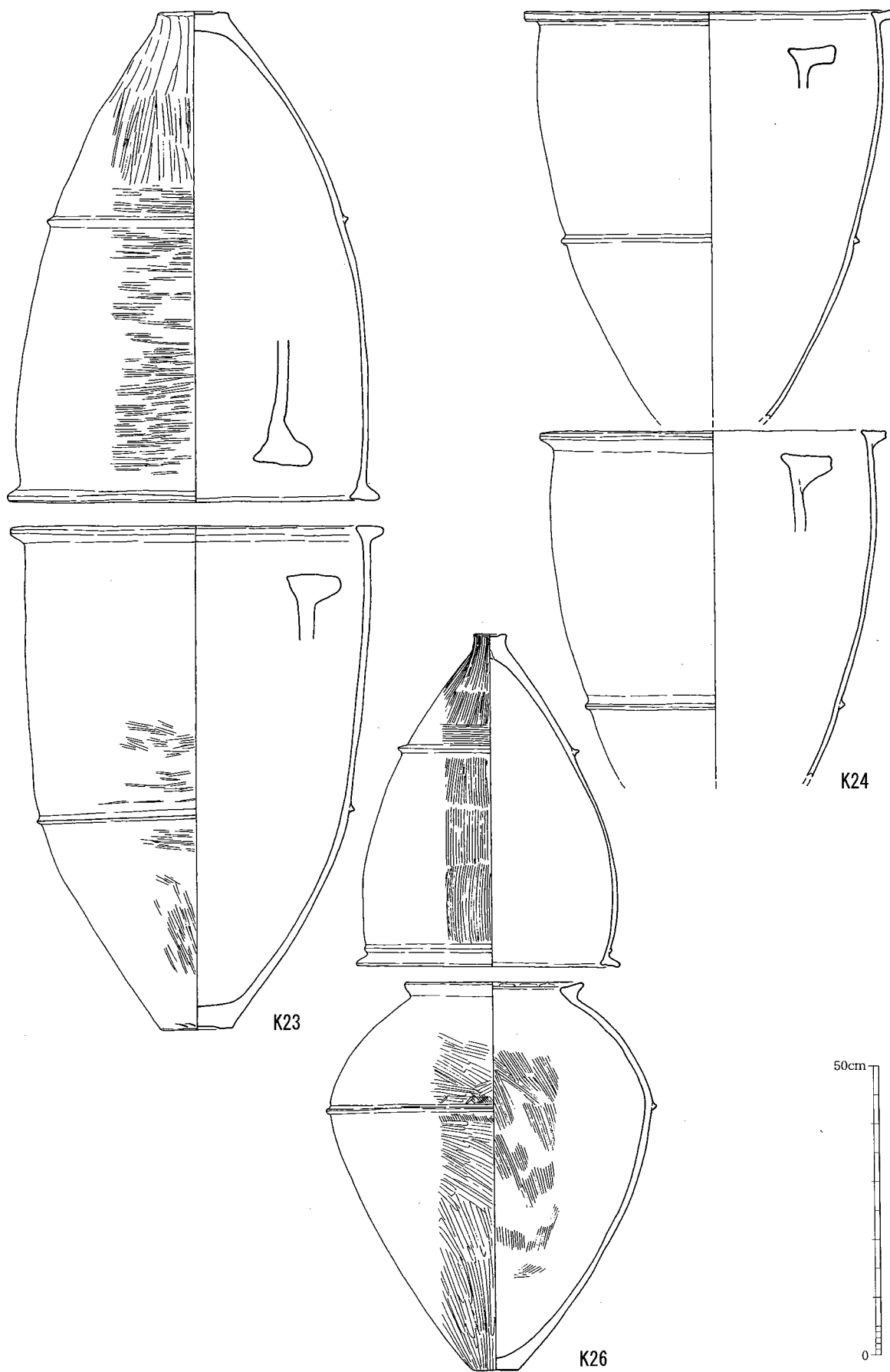
仮水路部分調査区の中央やや南寄りで検出した。削平により大部分が失われており、小児棺の胴部のみが検出された。おそらく、合せ口の小児用甕棺墓であったと考えられる。埋置角度、主軸方位は不明である。胴部のみ的小片のため、復元・図化はしていない。

26号甕棺墓(図版14、第43図)

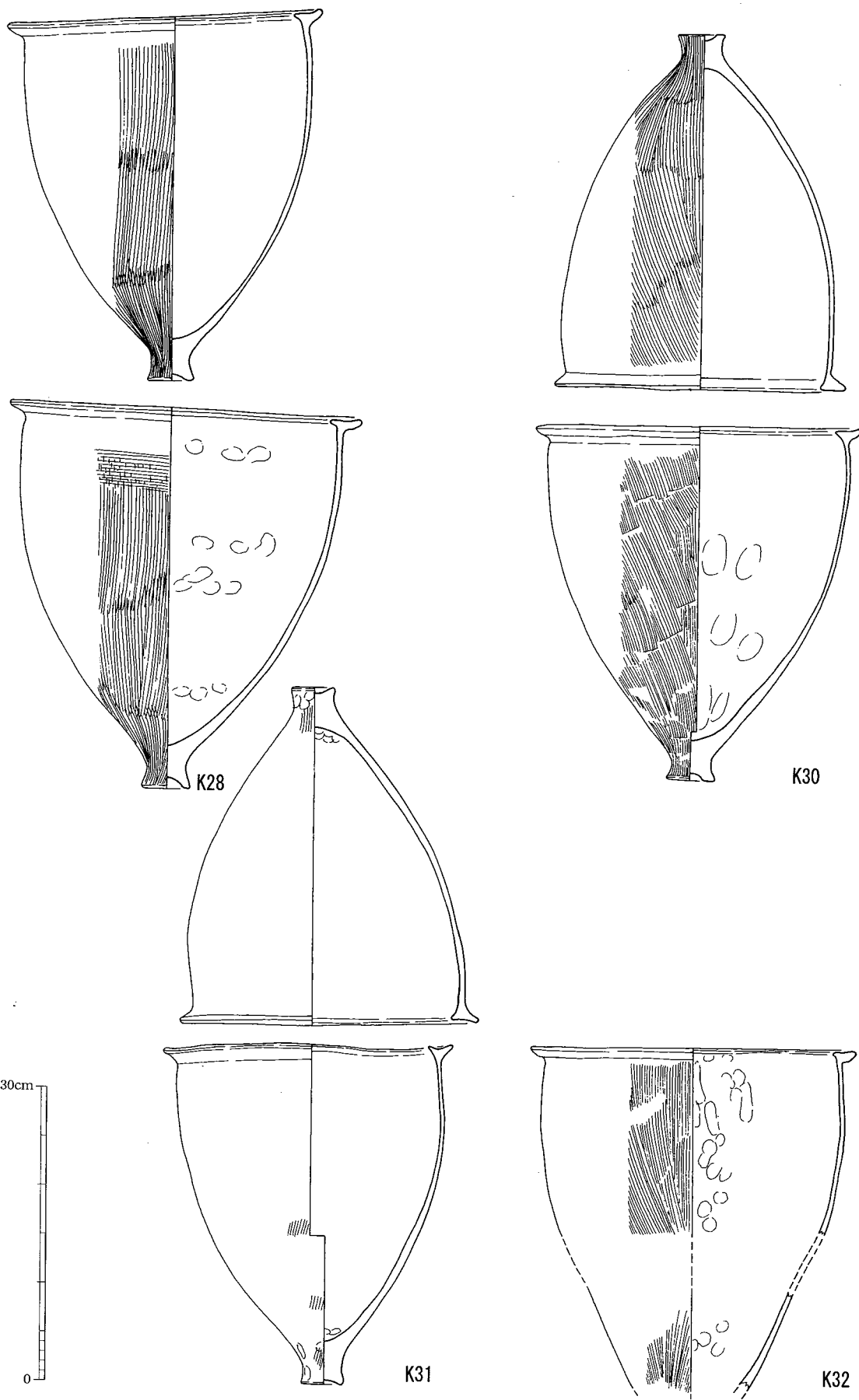
調査区の南寄りで検出した。最終面での検出である。合せ口の中人用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて、やや余裕をもって掘り込まれる。下甕は口縁部分を打ち欠き、上甕の径に合わせている。埋置角度は 3° である。主軸はN- 27° -Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。



第40图 3区22·23号甕棺墓实测图 (1/20)



第41图 3区23·24·26号甕棺实测图 (1/10)



第42图 3区28·30~32号甕棺实测图 (1/6)

出土土器(図版49、第43図)

上甕は中型の甕で胴部は比較的張る器形である。口縁付近は内傾する。口縁部には外側に大きく発達した断面三角形を呈する。口縁下には小さな三角突帯を張り付ける。また、胴部下位にやや大きめの突帯を貼り付ける。底部は厚底で、わずかに上底である。底部には黒斑が付着する。口径45.5cm、胴部最大径43.6cm、底径5.2cm、器高58.1cmである。色調は淡黄褐色を呈する。

下甕は卵形を呈する中型の甕である。口縁は断面三角の粘土帯を外側に貼り付ける。胴部最大径の部分に小さな断面三角突帯を貼り付ける。底部は平底であるが、やや厚い。外面の調整はミガキであるが、突帯付近にハケメが残る。内面はハケメ調整。口径30.5cm、胴部最大径56.8cm、底径8.2cm、器高66.8cmである。色調は褐色を呈する。

27号甕棺墓(図版14、第43図)

調査区の南寄りで検出した。最終面での検出である。壺を使用した単棺の中人用甕棺墓である。本来、木蓋等が存した可能性もある。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度は5°である。主軸はN-3°-Wの方位をとる。時期は他の甕棺墓と同じく弥生時代中期前半であろうか。

出土土器(図版54、第38図)

卵形の胴部にやや広がる口縁の付いた壺である。口縁部は外側に短く強く折り曲げており、わずかにすぼみながら肩部へつながる。口縁と肩部の境には小さな三角突帯を貼り付ける。胴部最大径の部分に小さな三角突帯を貼り付ける。底部は平底である。外面の調整はミガキで、口縁部付近と底部付近には圧痕が残る。内面は口縁部付近は横方向のミガキ、胴部付近はナデ調整で、圧痕が部分的に残る。底部付近と肩部に黒斑が付着する。口径28.2cm、胴部最大径40.2cm、底径8.1cm、器高57.8cmである。色調は黄褐色を呈する。

28号甕棺墓(図版14、第44図)

調査区の南寄りで検出した。最終面での検出である。合せ口の小児用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて、やや大きめに掘り込まれる。埋置角度はほぼ水平である。主軸はN-1°-Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

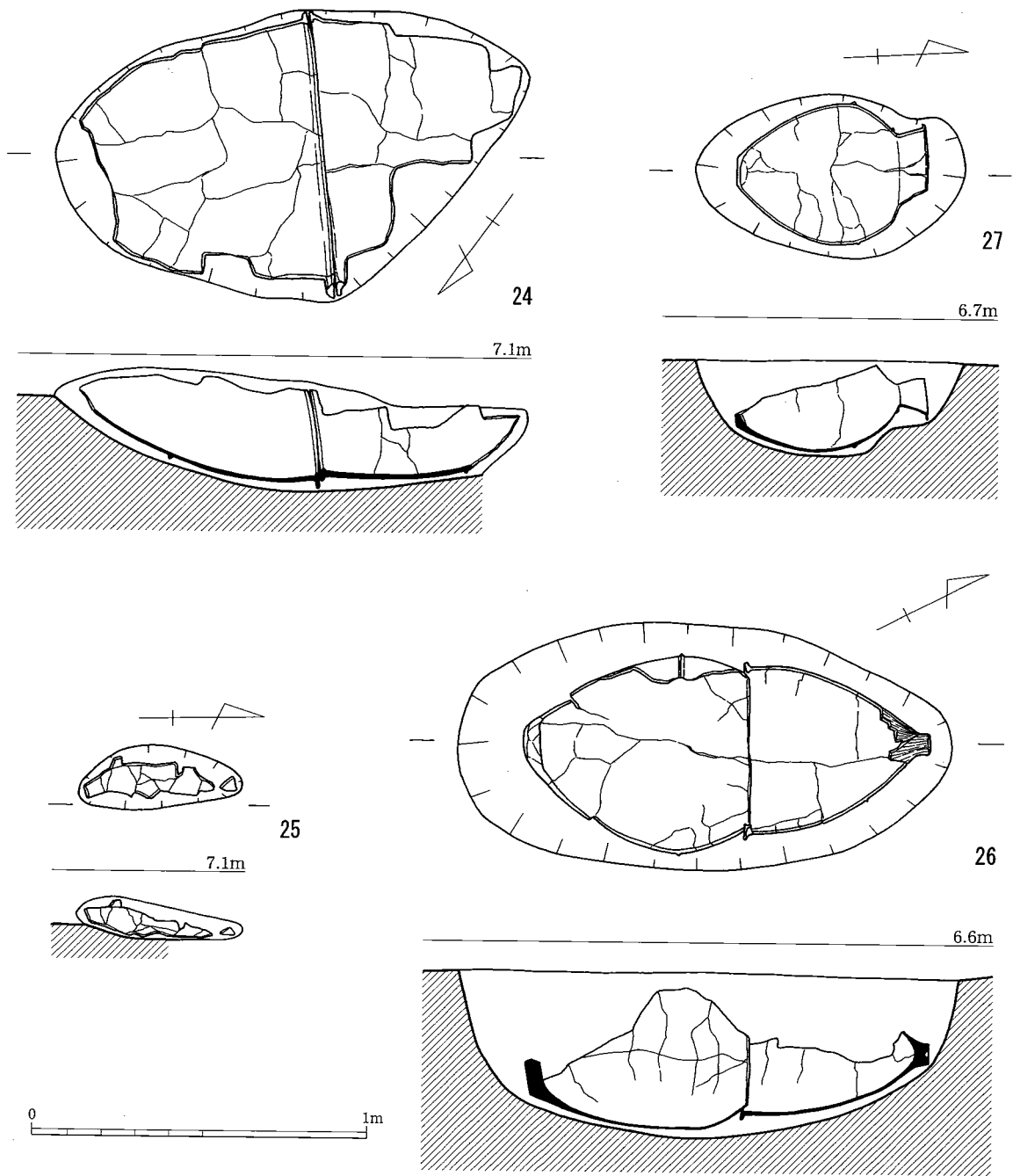
出土土器(図版53、第42図)

埋置の状況がほぼ水平であったために上下をつけていない。北甕と南甕と呼称し、説明を行う。北甕はやや胴の張る器形である。口縁は跳ね上げているが、端部のつくりはあまい。底部は厚底で小さい。わずかに上底である。外面の調整はハケメ、内面はナデ調整である。底部に黒斑が付着する。口径32.0cm、胴部最大径29.6cm、底径4.6cm、器高38.0cmである。色調は茶褐色を呈する。

南甕はやや胴の張る器形である。口縁部は跳ね上げており、北甕のつくりに似る。底部は厚底で小さい。上底である。外面は縦方向のハケメであるが、口縁付近は横方向のハケメとなる。内面はナデ調整で、圧痕が残る。口径35.8cm、胴部最大径32.6cm、底径4.9cm、器高39.3cmである。色調は黄褐色を呈する。

29号甕棺墓(図版15、第44図)

調査区の南寄りで検出した。最終面での検出である。単棺の中人用甕棺墓である。本来、木蓋等があった可能性もある。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋地角度はほぼ水平である。主軸はS-29°-Wの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。



第43图 3区24~27号甕棺墓実測図 (1/20)

出土土器(図版46、第47図)

卵形の胴部をもつ中型の甕である。口縁部は内外に大きく張り出す。口縁部下のやや下がった位置に小さな断面三角突帯を貼り付ける。また、胴部最大径部分にも小さな断面三角突帯を2条貼り付ける。底部は平底でやや広い。外面の調整はハケメの後、ナデを施す。内面の調整はナデ調整。口径35.7cm、胴部最大径59.8cm、底径11.2cm、器高66.1cmである。色調は淡褐色～褐色を呈する。

30号甕棺墓(図版15、第44図)

調査区の南寄りで検出した。最終面での検出である。合せ口の小児用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度は17°である。主軸はN-5°-Wの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版53、第42図)

上甕はあまり胴の張らない器形である。口縁は断面三角形であるが、内側にもやや張り出す。底部は厚底で小さい。上底である。外面の調整は粗いハケメ。内面の調整はナデである。口径は29.2cm、胴部最大径27.9cm、底径4.5cm、器高35.8cmである。色調は橙褐色を呈する。

下甕はわずかに胴の張る器形である。口縁は断面三角形であるが、内側にも発達する。底部は厚底で小さい。上底である。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデで圧痕が残る。口径31.8cm、胴部最大径30.9cm、底径4.8cm、器高36.1cmである。色調は灰黄褐色を呈する。

31号甕棺墓(図版15、第44図)

調査区の南寄りで検出した。最終面での検出である。合せ口の小児用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度は1°である。主軸はS-2°-Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版53、第42図)

上甕はほとんど胴の張らない器形である。口縁は跳ね上げ気味である。底部は厚底で小さく、上底である。外面の調整はハケメであるが、底部付近は圧痕が残る。内面の調整はナデで、内面の底に圧痕が残る。底部付近には黒斑が付着する。口径は29.8cm、胴部最大径28.0cm、底径4.5cm、器高34.2cmである。色調は淡褐色～褐色を呈する。

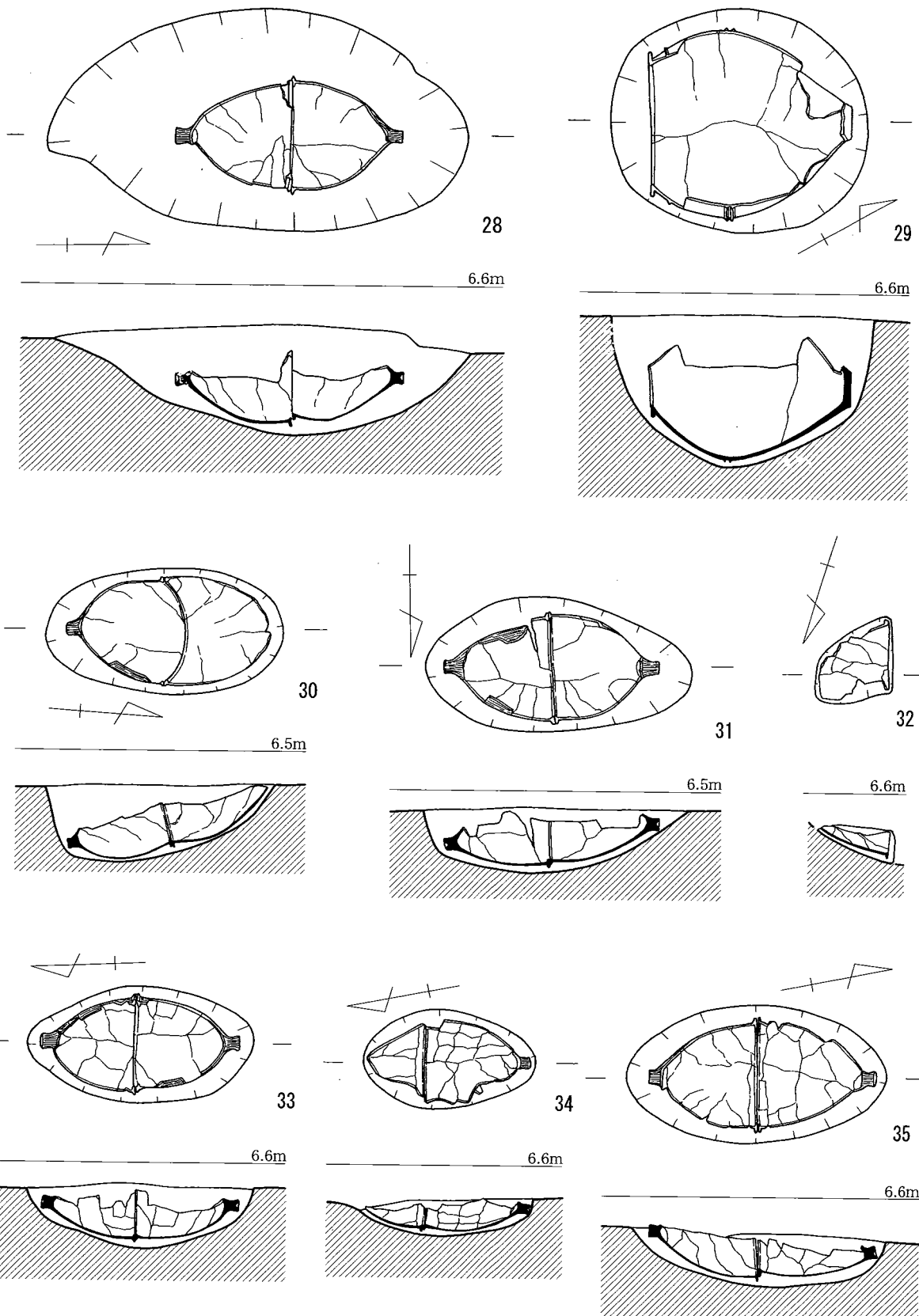
下甕は胴の張らない器形である。口縁は跳ね上げ気味である。底部は厚底で小さい。やや上底である。外面の調整はハケメである。内面の調整はナデである。口径29.4cm、胴部最大径27.2cm、底径4.2cm、器高34.5cmである。色調は白黄褐色である。

32号甕棺墓(図版15、第44図)

調査区の南寄り、31号甕棺墓の北側で検出した。最終面での検出である。何らかの遺構に切られたのか、本来、合せ口の小児用甕棺墓であったものが、一つの甕しか残っていない。埋置角度は8°程度である。主軸はN-72°-Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(第42図)

口縁部から胴部中位と下位の部分が出土しているが接合しない。口縁は断面三角であるが、内側にもわずかに張り出す。外面はハケメ調整。内面はナデ調整であるが、圧痕が多数残る。口径33.0cm、胴部最大径31.2cmである。色調は白黄茶色である。



第44图 3区28~35号甕棺墓实测图 (1/20)

33号甕棺墓(図版16、第44図)

調査区の中央付近で検出した。最終面での検出である。合せ口の小児用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度はほぼ水平である。主軸はN-2°-Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版53、第45図)

埋置の状況がほぼ水平であったために上下をつけていない。北甕と南甕と呼称し、説明を行う。北甕はやや胴の張る器形で、器高が低い印象を受ける。口縁部はやや跳ね上げ気味である。底部は厚底で小さく、上底を呈する。外面は縦方向のハケメで、胴部上位では横方向にも行う。内面はナデ調整で、圧痕が残る。口径は28.7cm、胴部最大径26.9cm、底径4.5cm、器高31.7cmである。色調は橙褐色。

南甕はやや胴の張る器形を呈する。口縁は跳ね上げ口縁である。底部は厚底で小さく、くびれ気味である。わずかに上底である。外面は縦方向のハケメで、口縁部付近は横方向にもハケメを施す。内面はナデ調整で、部分的に圧痕が残る。口径は29.7cm、胴部最大径27.8cm、底径4.6cm、器高34.8cmである。色調は橙褐色を呈する。

34号甕棺墓(図版16、第44図)

調査区の中央付近で検出した。最終面での検出である。合せ口の小児用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度は7°である。主軸はN-12°-Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版53、第45図)

上甕は底部を失う。胴は張らないが、器高の低い印象を受ける。口縁部は断面三角形に近いが、端部のつくりはあまい。内側にもわずかに張り出す。外面は摩滅しているが、ハケメ調整か。内面の調整はナデで、小さい圧痕が多数残る。口径は31.6cm。色調は暗褐色を呈する。

下甕は胴が張り気味の器形で、器高の低い印象を受ける。口縁部は外側に大きく、内側に小さく張り出している。底部は小さくくびれる。底部は上底である。外面の調整は摩滅しているが全面にハケメであろう。内面はナデであるが、圧痕が底部付近に残る。底部に黒斑が付着する。口径32.8cm、胴部最大径29.8cm、底径4.2cm、器高31.5cmである。色調は褐色～白黄褐色を呈する。

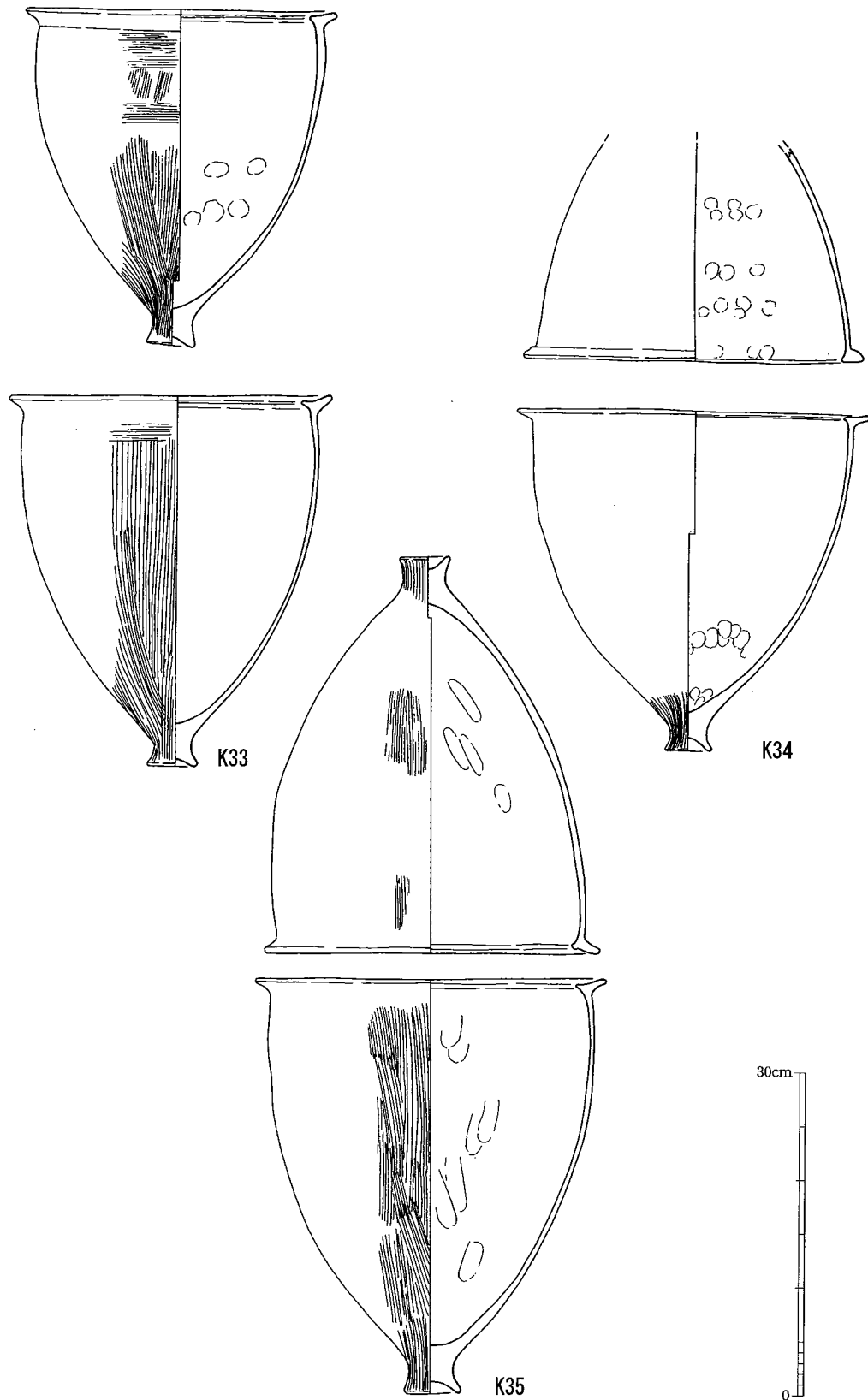
35号甕棺墓(図版16、第44図)

調査区の中央やや北寄りで検出した。最終面での検出である。合せ口の小児用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋地角度は5°である。主軸はS-11°-Wの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版53、第45図)

上甕はあまり胴の張らない器形である。口縁部は跳ね上げ気味の形状を呈する。底部は厚底で、小さいがあまりくびれない。上底である。外面はハケメ調整である。内面はナデ調整で、部分的に圧痕が残る。口径は30.7cm、胴部最大径28.9cm、底径4.7cm、器高36.6cmである。色調は橙黄褐色を呈する。

下甕はあまり胴の張らない器形で、全体の印象は上甕に似る。口縁部は跳ね上げ気味の形状を呈する。底部は厚底で小さい。上底である。外面はハケメ調整である。内面はナデ調整で、圧痕が多く残る。底部付近の内外面に黒斑が付着する。口径32.2cm、胴部最大径32.4cm、底径5.0cm、器高38.4cmである。色調は白橙色を呈する。



第45图 3区33~35号甕棺实测图 (1/6)

36号甕棺墓(図版17、第46図)

調査区の中央やや北寄りで検出した。最終面での検出である。合せ口の成人用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度はほぼ水平である。主軸はN-60°-Wの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版50、第47図)

埋置の状況がほぼ水平であったために上下をつけていない。東甕と西甕と呼称し、説明を行う。東甕は胴の張らない器形である。口縁部は外側に張り出し、上部平坦面がわずかに窪む。胴部中位よりやや下がったところに小さな断面三角突帯を貼り付ける。底部は平底であるが、かなり厚い。外面はハケメ調整、口縁部付近と突帯付近はナデである。内面の調整はナデである。底部と胴部上位に黒斑が付着する。口径64.2cm、胴部最大径60.0cm、底径12.0cm、器高84.0cmである。色調は白黄茶色を呈する。

西甕はほとんど胴の張らない器形である。口縁部は外側に発達する。胴部中位よりやや下った位置に断面三角突帯を貼り付ける。底部は平底であるが厚い。わずかに上底である。外面は縦方向のハケメで、部分的に横方向にも施される。内面は板状の工具によるナデ痕が施され、部分的に圧痕が残る。底部底面に黒斑が付着する。口径66.6cm、胴部最大径61.6cm、底径13.7cm、器高81.2cmである。色調は灰黄褐色を呈する。

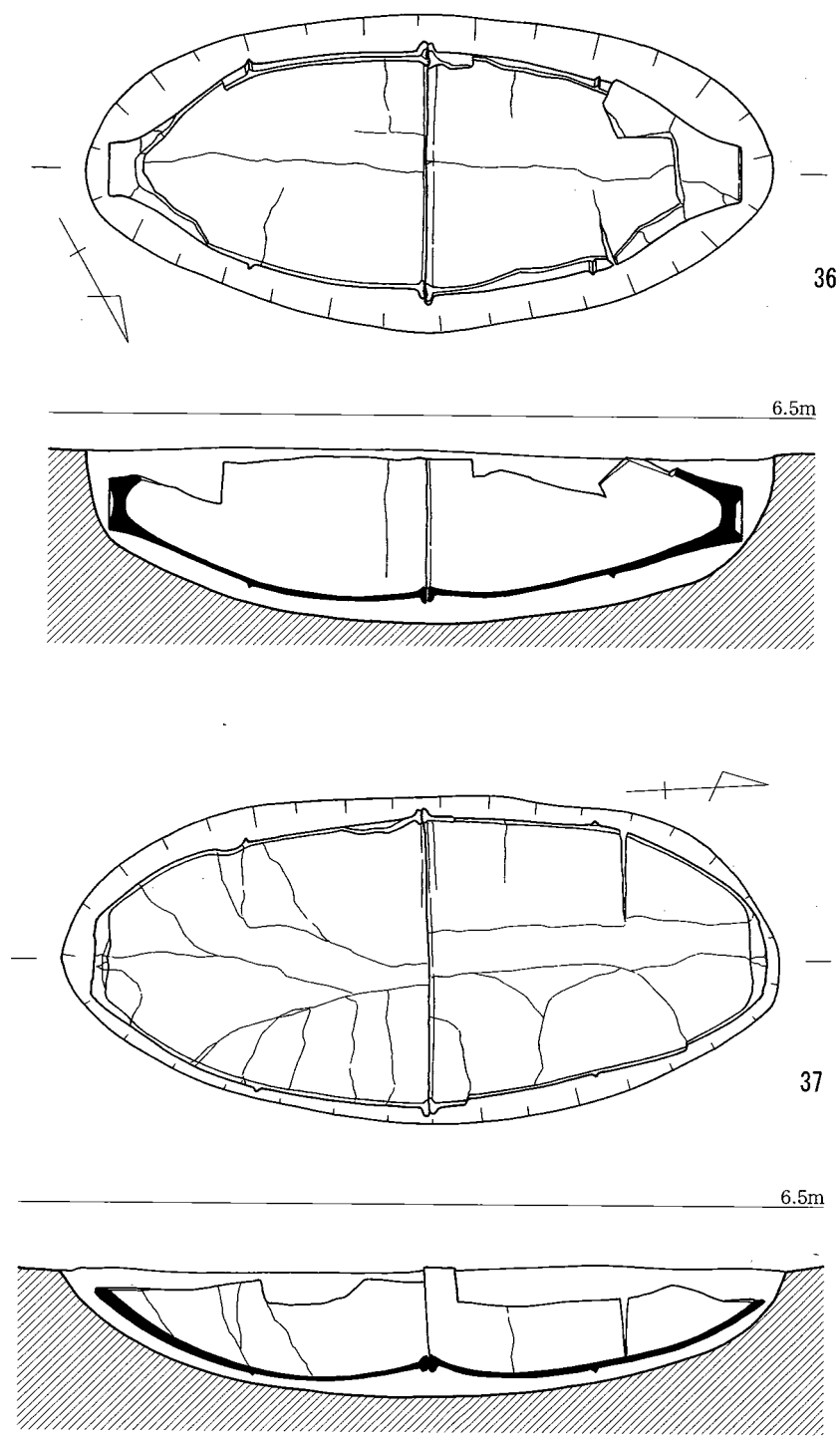
37号甕棺墓(図版17、第46図)

仮水路部分調査区の中央やや南寄りで検出した。合せ口の成人用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度はほぼ水平である。主軸はN-2°-Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

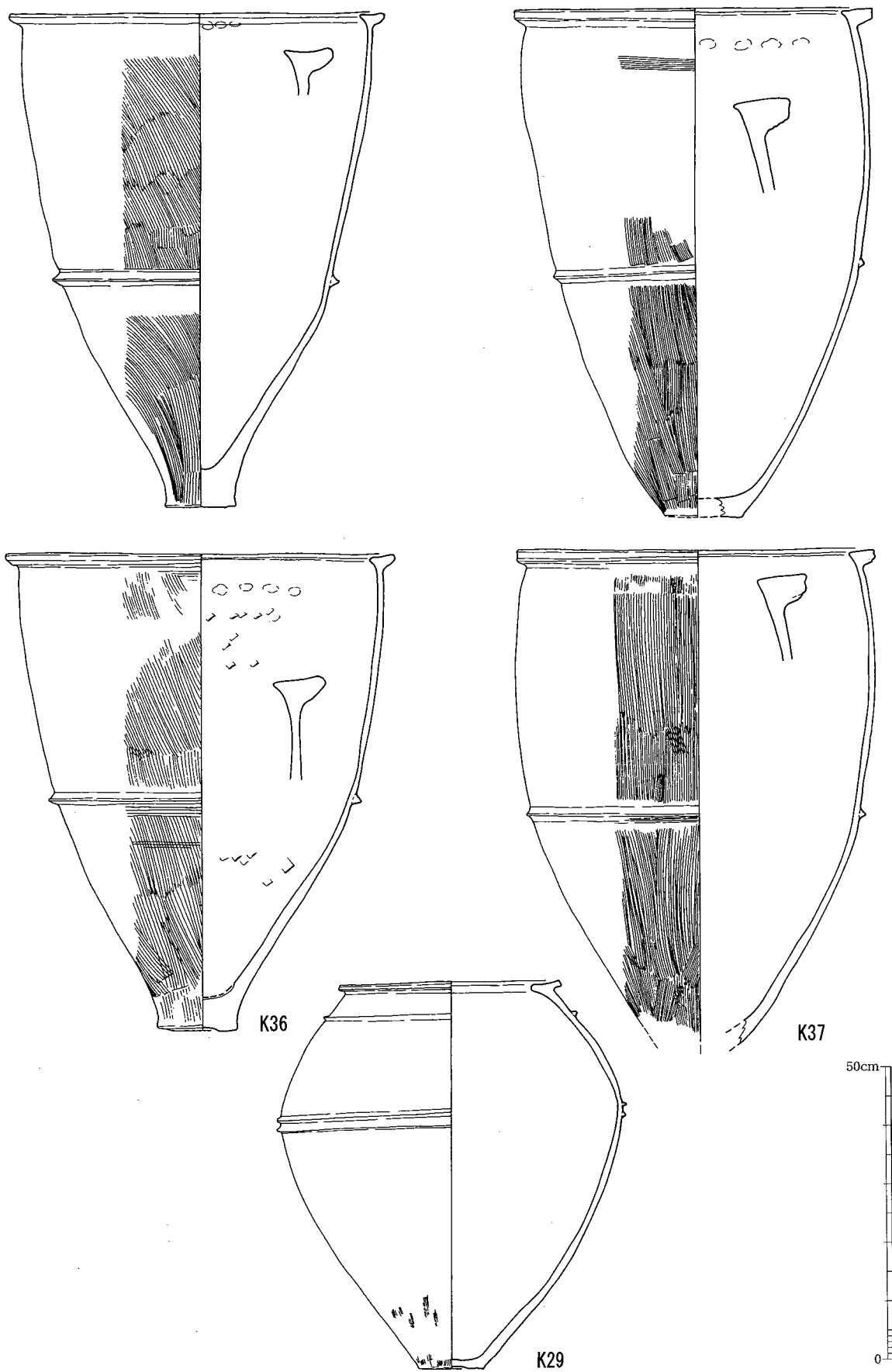
出土土器(図版50、第47図)

埋置の状況がほぼ水平であったために上下をつけていない。北甕と南甕と呼称し、説明を行う。北甕は胴のわずかに張る器形である。口縁部は外側に断面台形の粘土帯を貼り付ける。外端部にはわずかに窪みが残る。胴部中位よりやや下った位置に小さな断面三角突帯を貼り付ける。外面の調整はハケメ。内面はナデ調整で、一部に圧痕が残る。口径61.6cm、胴部最大径59.4cm、底径13.0cm、器高86.7cmである。色調は橙褐色を呈する。

南甕は底部を削平のためか失う。比較的胴の張る器形である。口縁部は外側に断面台形の粘土帯を貼り付ける。外端部には窪みが残る。胴部中位やや下った位置に小さな断面三角突帯を貼り付ける。外面は縦方向のハケメ。内面はナデ調整である。口縁部付近に黒斑が付着する。口径は61.2cm、胴部最大径は61.3cmである。色調は茶褐色を呈する。



第46图 3区36·37号甕棺墓实测图 (1/20)



第47图 3区29·36·37号甕棺实测图 (1/10)

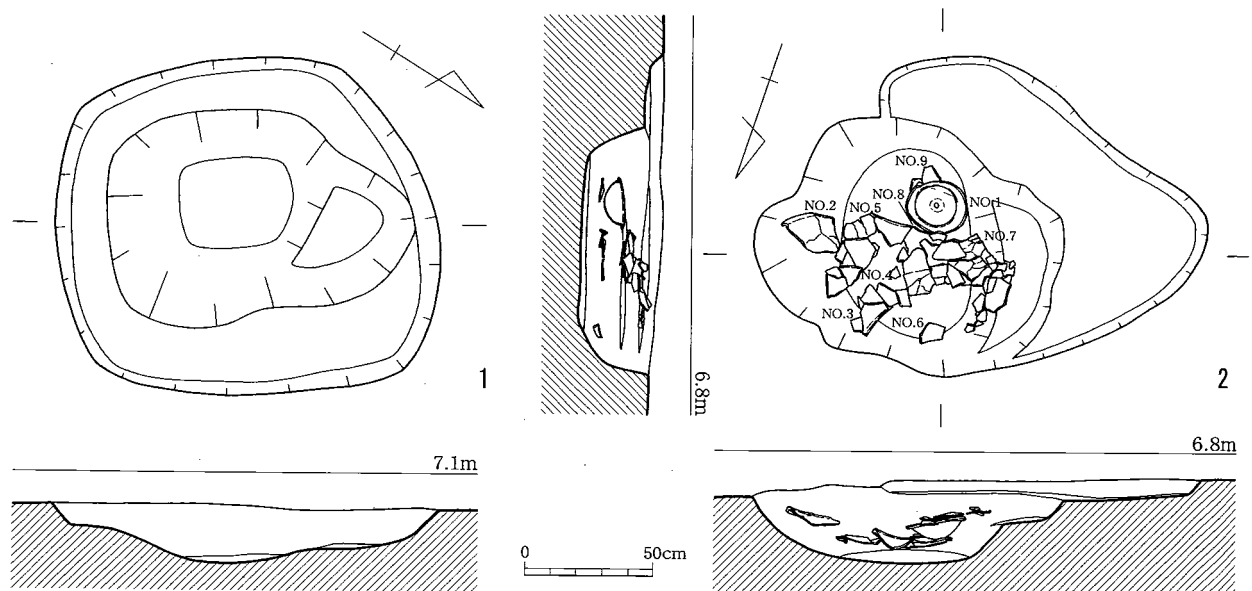
(3) 祭祀土坑

1号祭祀土坑(図版18、第48図)

調査区の北端部で、1回目の検出面で検出した。長軸154cm×短軸136cmの略隅丸方形を呈する。深さは段掘りで、24cm程度である。覆土中に弥生土器が多くあったが、雨により原位置を動いたために全て取り上げた。

出土土器(図版55、第49・50図)

1~33は弥生土器である。1は蓋である。つまみ部分から一度くびれ、裾部にかけて大きく広がる。端部はやや角ばって仕上げられる。外面の調整はハケメ、内面の調整は圧痕の後、ハケメを施している。外面に黒斑が付着する。つまみ部分の径は6.4cm、口径25.4cm、器高10.1cmである。色調は灰黄褐色~赤褐色を呈する。2~28は甕である。2は器高の低い甕である。口縁部は外側へ折り曲げられ、端部を丸く仕上げる。胴部最大径部分に小さな断面三角突帯を貼り付ける。底部はやや広めの平底である。外面の調整はハケメ。内面の調整はハケメで、底部付近に圧痕が残る。口径32.2cm、胴部最大径29.4cm、底径8.8cm、器高31.5cmである。色調は淡茶褐色を呈する。3~7は口縁部を強く外側に折り曲げるものである。3の口径は30.0cmである。4は口縁端部を丸く仕上げる。口径30.0cmである。5は口縁端部をやや角ばって仕上げるものである。口径は29.5cmである。6は内外面とも二次加熱を受け、赤変した痕跡がある。口径は28.2cmである。7の口径は30.0cmである。8は断面三角口縁を外側に大きく発達させたものである。口径29.6cmである。9~14は跳ね上げ口縁である。9・11・13は内側にほとんど発達しないものである。9の口径は29.2cm。11は二次加熱を受け赤変する。口径は31.0cmである。10・12・14は内側にも発達するものである。10の内面は圧痕の後、ハケメ調整である。口径は30.2cm。12の口径は28.0cmである。15は中型の甕の胴部である。胴部最大径部分にやや下向きの断面三角突帯を2条貼り付ける。外面の調整はハケメ。内面の調整はタタキの上からナデ調整である。部分的に圧痕が残る。16~26は平底の底部である。16はやや広めの底部である。



第48図 3区1・2号祭祀土坑実測図(1/30)

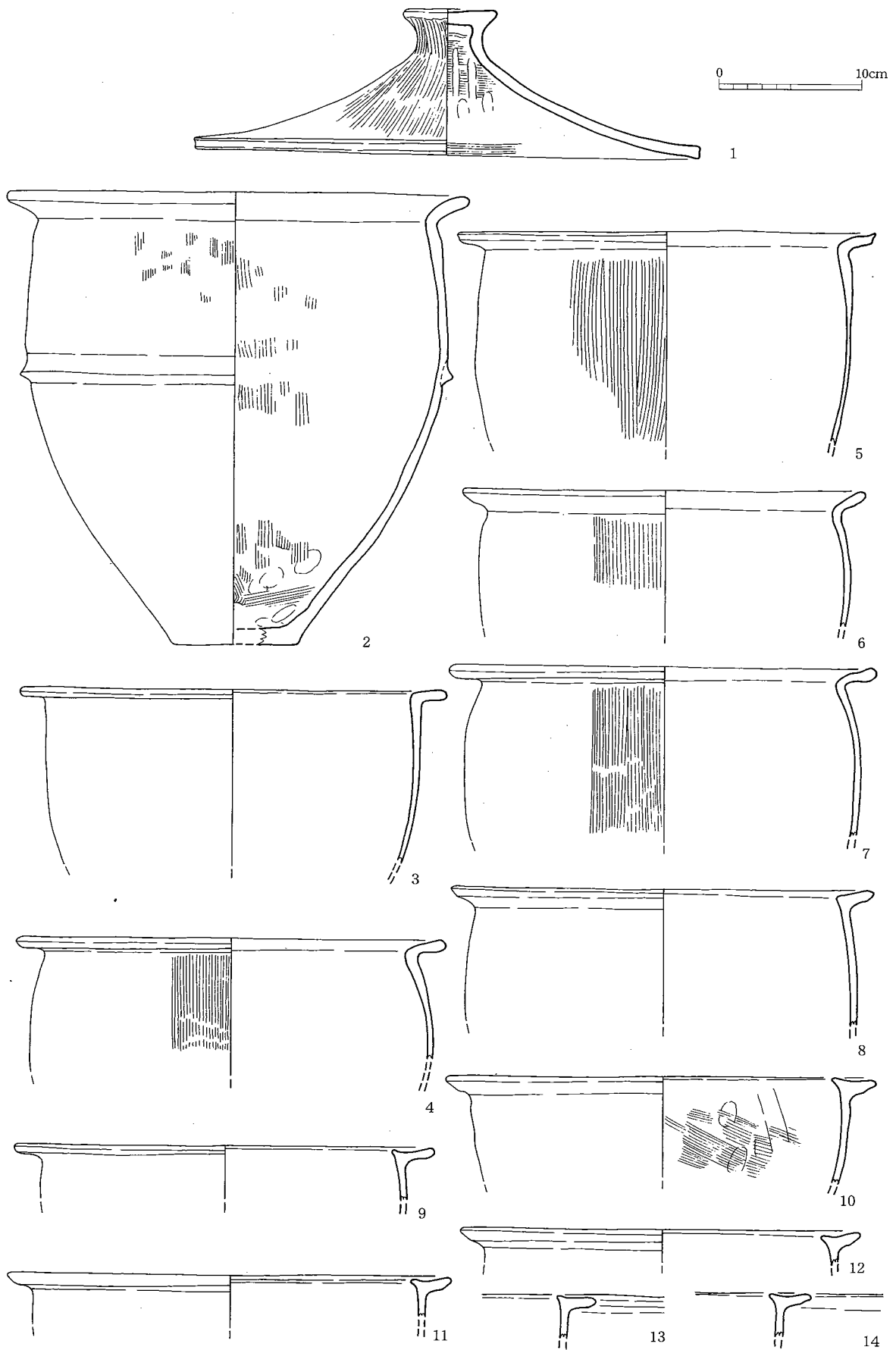
底径11.0cmである。17の内面には圧痕と工具によるナデ痕が残る。また、内面には黒斑が付着する。底径8.7cmである。18の内面にも黒斑が付着する。口径は8.2cmである。19は底径が6.6cmと小さく、壺の底部の可能性もある。内面には連続した圧痕が残る。20は底部を不定方向にハケメ調整を行い、仕上げている。底径は8.2cmである。21は底部から立ち上がりの角度が急で、底面と底部の境がやや丸い。外面には黒斑が付着する。底径は10.0cmである。22は底径12.0cmと大き目の底部である。23の内面には圧痕が連続して残る。底径11.1cmである。24はわずかに上底である。底径8.2cmである。25は薄手の底部である。底径9.7cmである。26は小型の底部で、底径5.7cmである。27は台付甕の底部である。端部は丸く仕上げられる。底径は7.8cmである。28は中型の甕である。胴部が大きく張り、球形を呈する。口縁部は鋤先状を呈する。外端部には窪みが残る。胴部最大径の部分に小さな断面三角突帯を2条貼り付ける。口径45.4cm、胴部最大径67.0cmである。29は鉢である。口縁部はわずかに内湾する。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデで、圧痕が不規則に残る。口径16.6cm、底径6.2cm、器高8.9cmである。30は高杯の杯部である。口縁部は外側に大きく張り出す。外面の調整は摩滅しており不明。内面の調整はハケメである。口径24.2cmである。31～33は器台である。31は端部を角ばって仕上げている。外面はハケメ調整であるが、圧痕が残っている。内面はナデ調整で、圧痕が多数残る。口縁付近には横方向のハケメを施す。口径13.2cmである。32は脚端部がわずかに内湾して終わるものである。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデである。端部付近は横方向の粗いハケメを施す。底径12.2cmである。33は内外面に粗いハケメを施す。底径12.3cmである。

2号祭祀土坑(図版18、第48図)

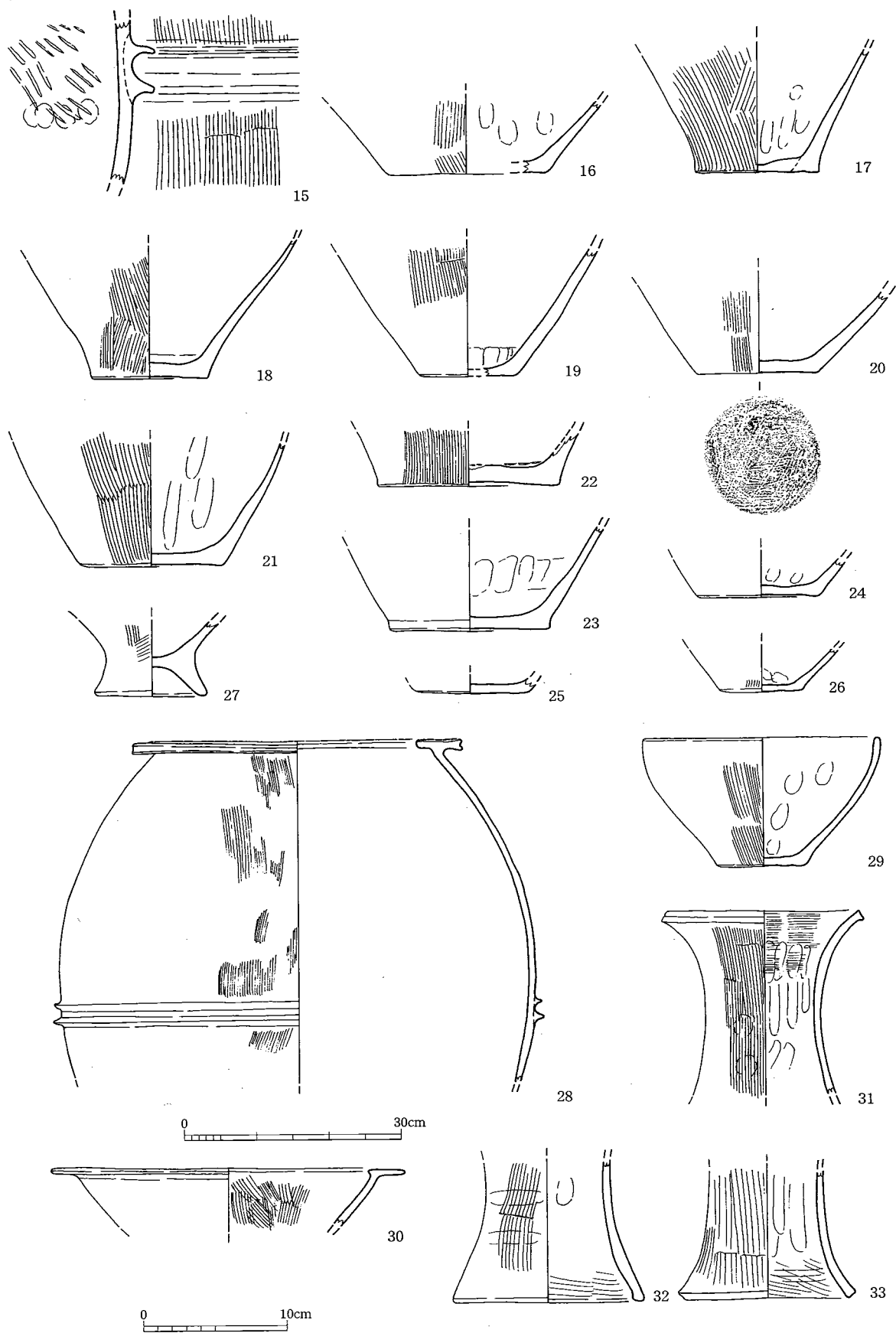
調査区の北端部で、2回目の検出面で検出した。長軸184cm×短軸130cmの不整な楕円形を呈する。2段の段掘りになっており、最も深い部分で33cmである。覆土の中位より弥生中期前半から中頃の土器が出土している。

出土土器(図版55、第51・52図)

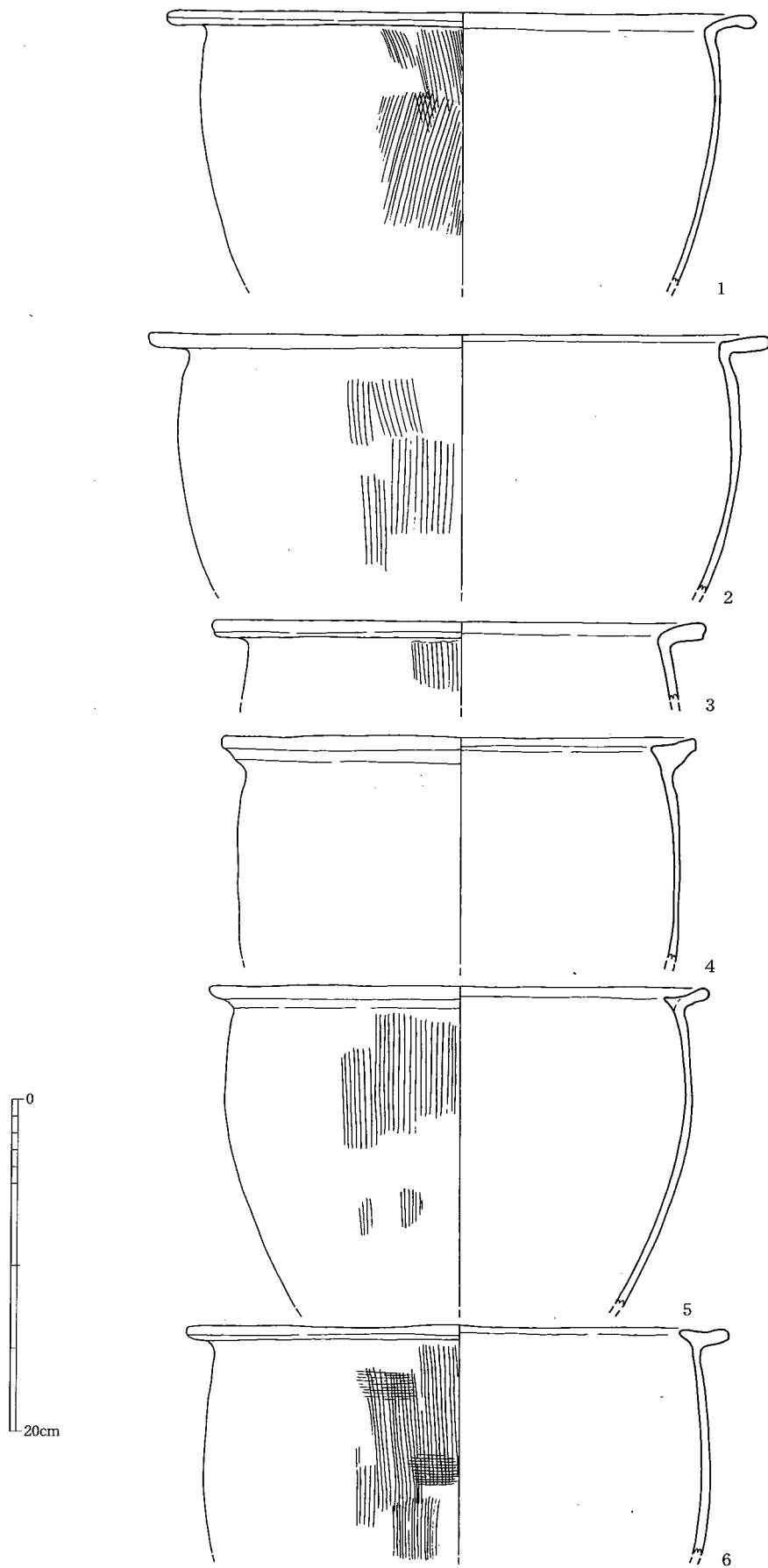
1～14は弥生土器である。1～11は甕である。1～3は口縁端部を外側に強く折り曲げたものである。1は胴の張らない器形である。口縁端部は丸く仕上げている。外面はハケメ調整、内面はナデ調整である。口径36.6cmである。2はやや胴の張る器形で、口径37.8cmである。3は口縁端部を角ばって仕上げるものである。口径29.6cmである。4は口縁端部に断面三角の粘土帯を貼り付け、わずかに跳ね上げ状に仕上げるものである。口径28.8cmである。5・6は跳ね上げ口縁を呈するものである。5は口縁端部を強く外側に折り曲げ、内面に小さな粘土帯を貼り付けていることが断面からわかる。口縁は28.2cmである。6は跳ね上げ状の口縁を呈するが、端部のつくりはあまい。外面は縦方向のハケメであるが、部分的に横方向のハケメを施す。7は跳ね上げ口縁である。口縁下に小さな三角突帯を貼り付ける。胴部の張る器形である。底部は接合しないが同一個体である。底部は厚底で、上底である。外面の調整はハケメ、内面はナデである。底部付近に黒斑が付着する。口径33.6cm、胴部最大径33.0cm、底径4.8cmである。8は甕の胴部である。内外面の調整はハケメである。胴部最大径は29.4cmである。9は中型甕の胴部である。断面台形の突帯を2条貼り付ける。10は平底の底部である。底径は9.0cmである。11は台付甕の底部である。外面の調整はハケメ。底部内面の調整は横方向のハケメである。底径は7.4cmである。12は口縁が鋤先状を呈する高杯の杯部である。胴の張らない杯部で、外面はハケメ調子である。口径は23.6cmである。13は口縁端部が内湾する高杯の杯部である。口径16.6cm、胴部最大径17.0cmである。14は器台である。口縁部付近はわずかに広がる。外面はハケメであるが、圧痕が口縁部付近に残る。内面はナデ調整で、端部付近は横方向にハケメを施す。口径12.0cmである。



第49图 3区1号祭祀土坑出土土器实测图① (1/4)



第50図 3区1号祭祀土坑出土土器実測図② (28は1/8、他は1/4)



第51图 3区2号祭祀土坑出土土器实测图① (1/4)

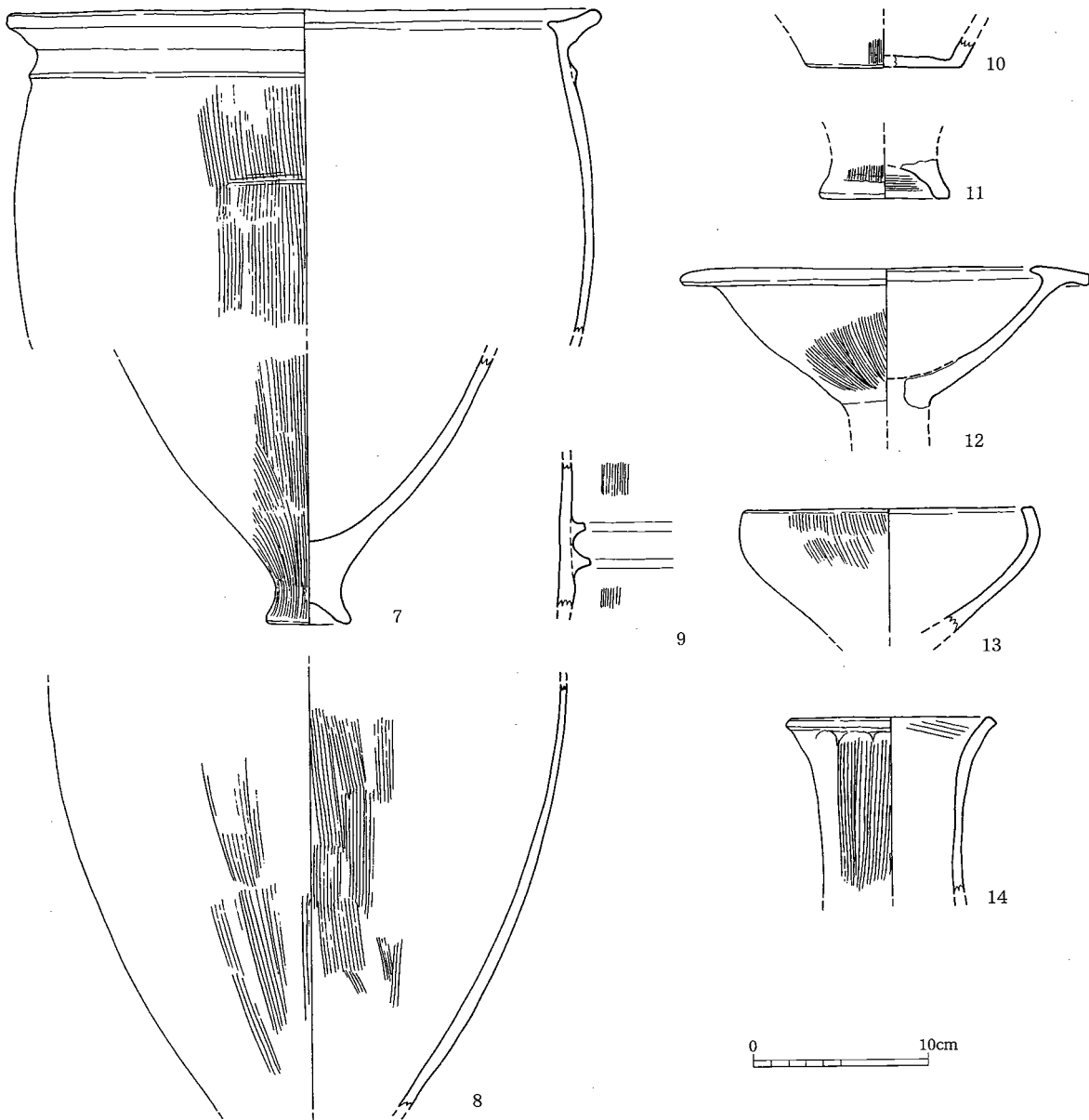
(4)土坑

1号土坑(第53図)

調査区の南西端部で、先行するトレンチ調査時に検出した。長軸165cm×短軸80cmの土坑である。深さは約10cmで底面はほぼ平坦である。弥生時代中期の土器が覆土の上位から出土している。

出土土器(図版55、第54図)

1~11は弥生土器である。1~10は甕である。1~6は口縁部を外側に強く折り曲げたものである。1は断面「L」字に近く折り曲げたものである。口径31.4cmである。No4の位置から出土している。2・3は折り曲げが緩いものである。2の口径は33.2cm。No3の位置から出土している。3の口径は36.0cmである。No3の位置から出土している。4は口縁端部がわずかに跳ね上げ状を呈するものである。口径34.6cmである。No4の位置から出土している。5の口径は34.4cmである。No1の位置から出土して



第52図 3区2号祭祀土坑出土土器実測図② (1/4)

いる。6は胴の張らない器形である。口径35.8cmである。No2の位置から出土している。7・8は台付甕の底部である。7は薄手のつくりである。底径9.6cmである。No6の位置から出土している。8の外表面は粗いハケメを施す。底径8.8cmである。No2の位置から出土している。9は胴の張らない小形の甕である。口径24.0cmである。No5の位置から出土している。10は小型の甕である。口縁端部を強く外側に折り曲げる。胴部は球形に近く張る。底部は平底で大きい。内外面の調整はナデであろうか。口径19.1cm、胴部最大径19.3cm、底径9.3cm、器高18.8cmである。No1の位置から出土している。11は鉢であろうか。直線的に開く口縁である。外面の調整はハケメである。口径15.6cmである。No3の位置から出土している。

2号土坑(第53図)

調査区の1回目の検出面で検出した。遺構のラインが判然としなかったために、遺物が出土する範囲を遺構として調査した。長軸155cm×短軸110cmの楕円形。しかし、2回目の検出面で1号竪穴住居跡の埋没時に廃棄された土器群を遺構として掘削したことが判明した。以下、出土遺物の説明を行う。

出土土器(図版56、第55図)

1～3は須恵器である。1は長頸壺である。直線的であるが緩く開いた口縁部である。胴部は肩が大きく張る。底面には断面四角の小さな粘土帯を貼り付け、底部とする。口縁部付近はナデ調整で、中位付近に2条の沈線を巡らせる。胴部下半はケズリである。口径9.8cm、胴部最大径19.6cm、底径10.1cm、器高22.6cmである。色調は青灰色を呈する。2は大ぶりの杯の口縁部である。内外面の調整はナデである。3は杯の口縁部である。内外面の調整はナデである。4～7は土師器である。4～6は甕の口縁部である。4は口縁を強く外反させるものである。内面はケズリである。6は口縁のほとんど外反しないものである。外面はハケメ調整。内面はケズリである。7は杯である。内外面摩滅しており、調整は不明である。

3号土坑(第53図)

調査区の北側で検出した。長軸106cm×短軸80cmの楕円形である。深さ10cm程度で、底面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器(第55図)

8は弥生土器の甕である。口縁を断面「L」字状に強く折り曲げられる。外面の調整は不明。内面の調整は横方向のハケメである。

4号土坑(図版18、第53図)

調査区の北側で検出した。長軸約500cm×短軸370cmの方形で、東側が調査区外へのびる。段掘りになっており、深さは約10cmである。竪穴住居跡の可能性も考えたが、炉跡や柱穴がなかったので土坑としている。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器(図版56、第55図)

9～20は弥生土器である。9・12・13は口縁を強く折り曲げる甕である。9の外表面の調整はハケメ。内面の調整は横方向のナデである。口径は35.6cmである。10・11は跳ね上げ口縁の甕である。10の口径は31.0cmである。11の内面には圧痕が残る。口径28.4cmである。14は甕の底部である。わずかに上底であるが、底面と底部の境が緩いものである。底径9.2cmである。15は平底の甕の底部であ

る。底が薄い印象を受ける。16・17は器台である。16は天地逆の可能性もある。外面の調整は不明。内面はナデ調整で、圧痕が多く残る。底径15.2cmである。17は胴部片で、内外面ナデ調整である。内面には一部ハケメが残る。18・19は高杯の杯部片である。いずれも外側に大きく、内側に小さく張り出したものである。20は丹塗土器の甕である。口縁は鋤先状を呈し、胴部中位には断面台形の突帯を貼り付ける。外面は横方向のミガキで、外面のみに丹塗を施す。内面はナデである。口径33.4cmである。

5号土坑(第53図)

調査区の北寄りで検出した。長軸120cm×短軸114cmの略円形を呈する。深さは約20cmで、底面は平坦である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器(図版56、第55図)

21～26は弥生土器である。21～25は甕である。21は断面三角の口縁であるが、つくりはあまい。22は小型の甕の口縁部で、断面三角を呈するが、端部のつくりはあまい。23～25は甕の底部である。23はやや厚底で、わずかに上底である。底径6.7cmである。24も厚底の底部である。わずかに上底である。底径4.8cmである。25は平底の底部である。外面に工具痕が残る。底径8.0cmである。26は支脚である。厚手で内外面ともにナデ調整である。底径5.8cmである。

6号土坑(第56図)

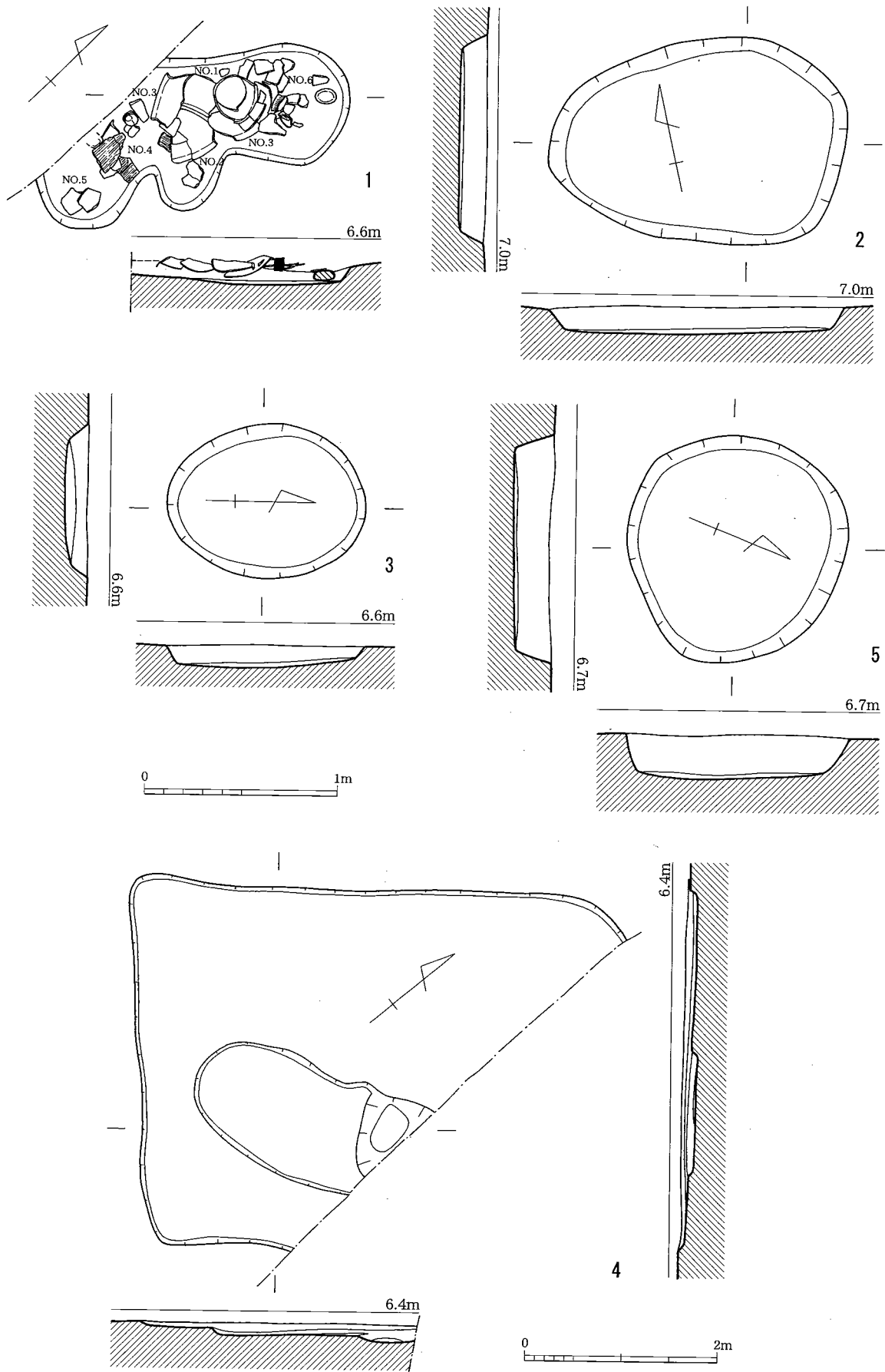
調査区の北寄りで検出した。長軸210cm×短軸152cmの楕円形を呈する。深さは約20cmで、底面は平坦である。出土遺物は弥生土器が出土しているが、細片で図化していない。

7号土坑(図版19、第56図)

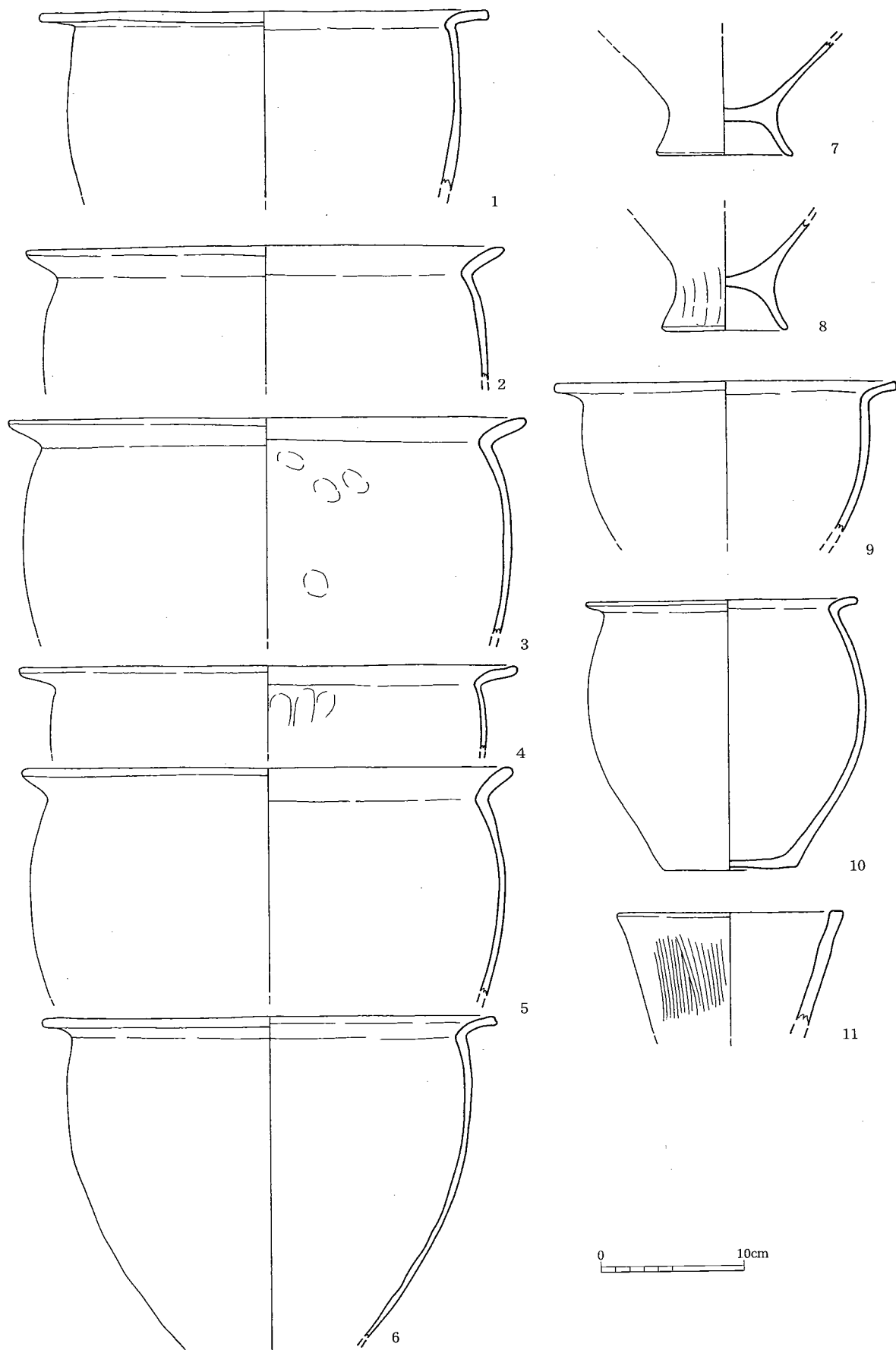
調査区の南寄りで検出した。5号溝に切られ、東側は調査区外へ延びる。長軸270cm+ α ×短軸230cm+ α の楕円形を呈する。深さは約15cmである。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器(第57図)

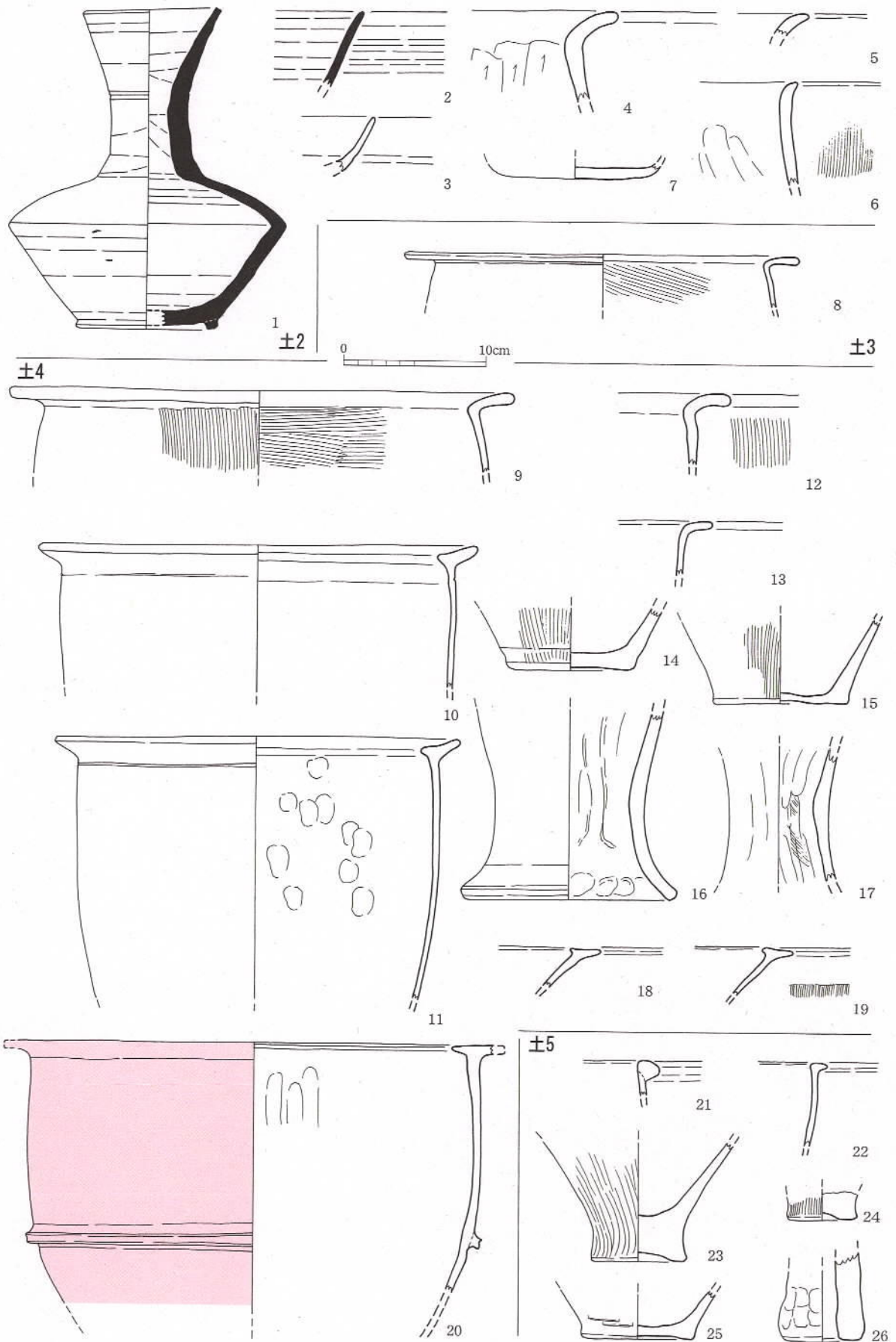
1～18は弥生土器である。1～14は甕である。1～3は口縁を外側に強く折り曲げたものである。1の口径は33.0cmである。2の口径は37.0cmである。3は外面の口縁付近にもハケメを施す。4・5は口縁下に三角突帯を貼り付けるもので、同一個体の可能性もある。4の口径は39.0cmである。6は中型の甕の口縁である。両側に大きく発達するが、特に内側への張り出しが大きい。口径43.0cmである。7は中型の甕の口縁部である。外側に強く折り曲げ、外端部を角ばって仕上げる。8は甕の胴部である。小さな三角突帯を貼り付け、刻み目を施す。9～13は甕の底部である。9の底径は9.0cmである。10は外面に粗いハケメを施す。底径10.0cmである。11の底径は9.0cmである。12はわずかに上底である。底径10.8cmである。13は広めの底部で、膨らんだ底部である。底径10.0cmである。14は台付甕の底部である。底径7.9cmである。15・16は鉢である。15は厚手のつくりで、口径14.0cm。16は厚手で粗いつくりである。口径11.4cm、底径4.6cm。17・18は器台。17の底径は14.0cm。18の底径は18.0cmである。



第53図 3区1~5号土坑実測図 (4は1/60・他は1/30)



第54图 3区1号土坑出土土器实测图 (1/4)



第55图 3区2~5号土坑出土土器实测图 (1/4)

8号土坑(第56図)

仮水路部分調査区の中央やや南寄りで検出した。長軸100cm×短軸53cm+ α で、西側は調査区外へ延びる。平面形は略円形を呈すると思われる。深さは約10cmである。出土遺物は弥生土器が出土しているが、細片で図化していない。

9号土坑(第56図)

仮水路部分調査区の中央やや南寄りで検出した。長軸65cm×短軸54cmの楕円形を呈する。深さは約40cmで底面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器(図版56、第59図)

1は弥生土器の甕である。胴はあまり張らない器形である。口縁は断面三角を呈する。口縁下に小さな断面三角突帯を貼り付けている。外面の調整はハケメである。内面の調整はナデである。口径27.4cmである。

10号土坑(第58図)

仮水路部分調査区の中央やや南寄りで検出した。長軸88cm×短軸62cmの楕円形を呈する。深さは約10cmで平面は平坦である。遺物は出土していない。

11号土坑(第58図)

調査区の中央付近で検出した。最終面での検出である。長軸117cm×短軸63cmの歪な楕円形を呈する。深さは約10cmでほぼ平坦であるが、中央部分が約5cm段状に深くなっている。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器(第59図)

2は弥生土器の甕の口縁部である。外側に強く折り曲げる。端部を丸く仕上げる。調整はナデである。

12号土坑(図版19、第58図)

調査区の北寄りで検出した。最終面での検出である。長軸123cm×短軸94cmの楕円形を呈する。深さは約20cmであるが、中央部分が一段約8cm深くなる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器(第59図)

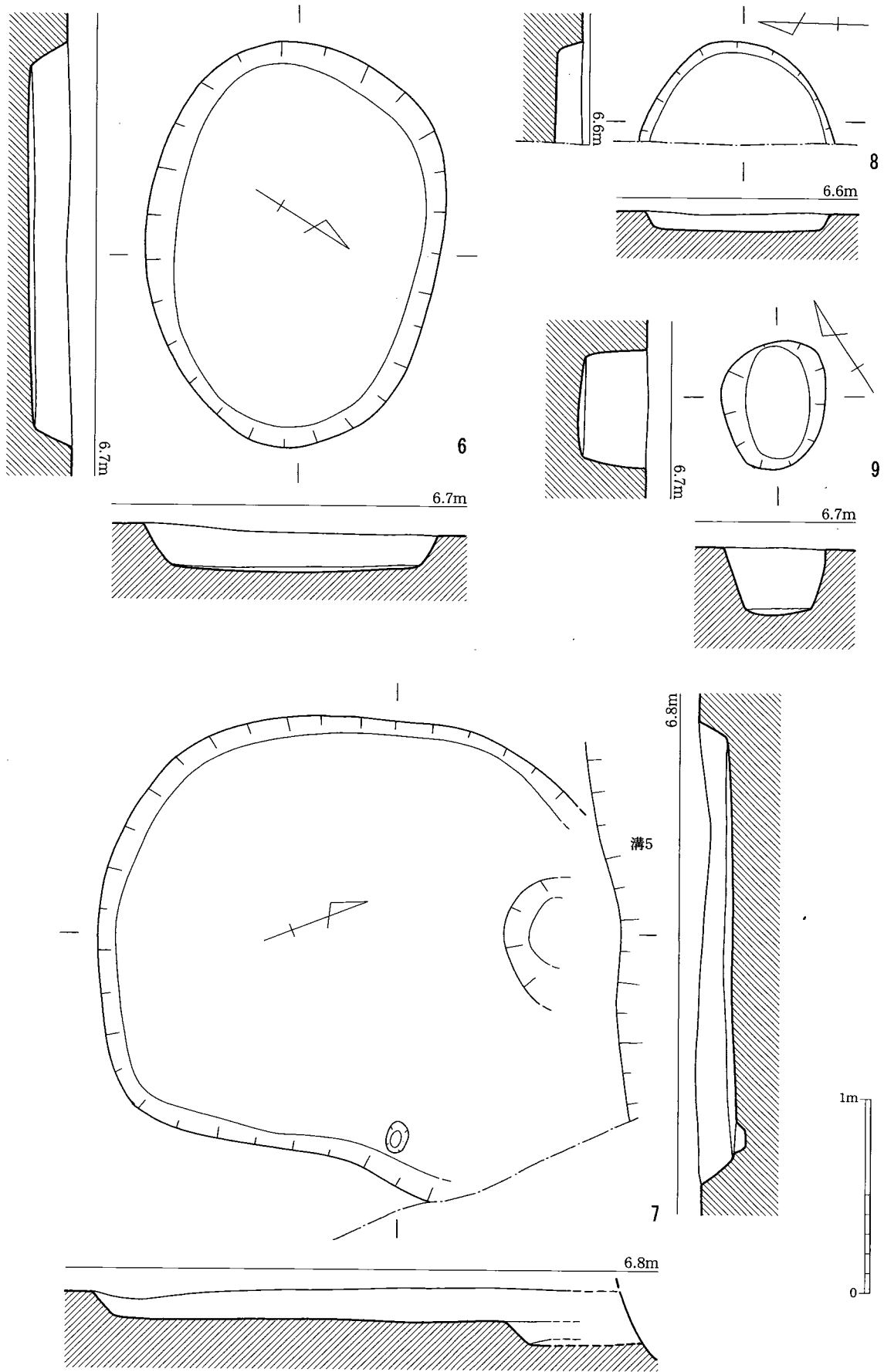
3は弥生土器の甕の口縁部である。口縁部の外側に小さな断面三角の粘土帯を貼り付ける。調整はナデを施す。

13号土坑(図版19、第58図)

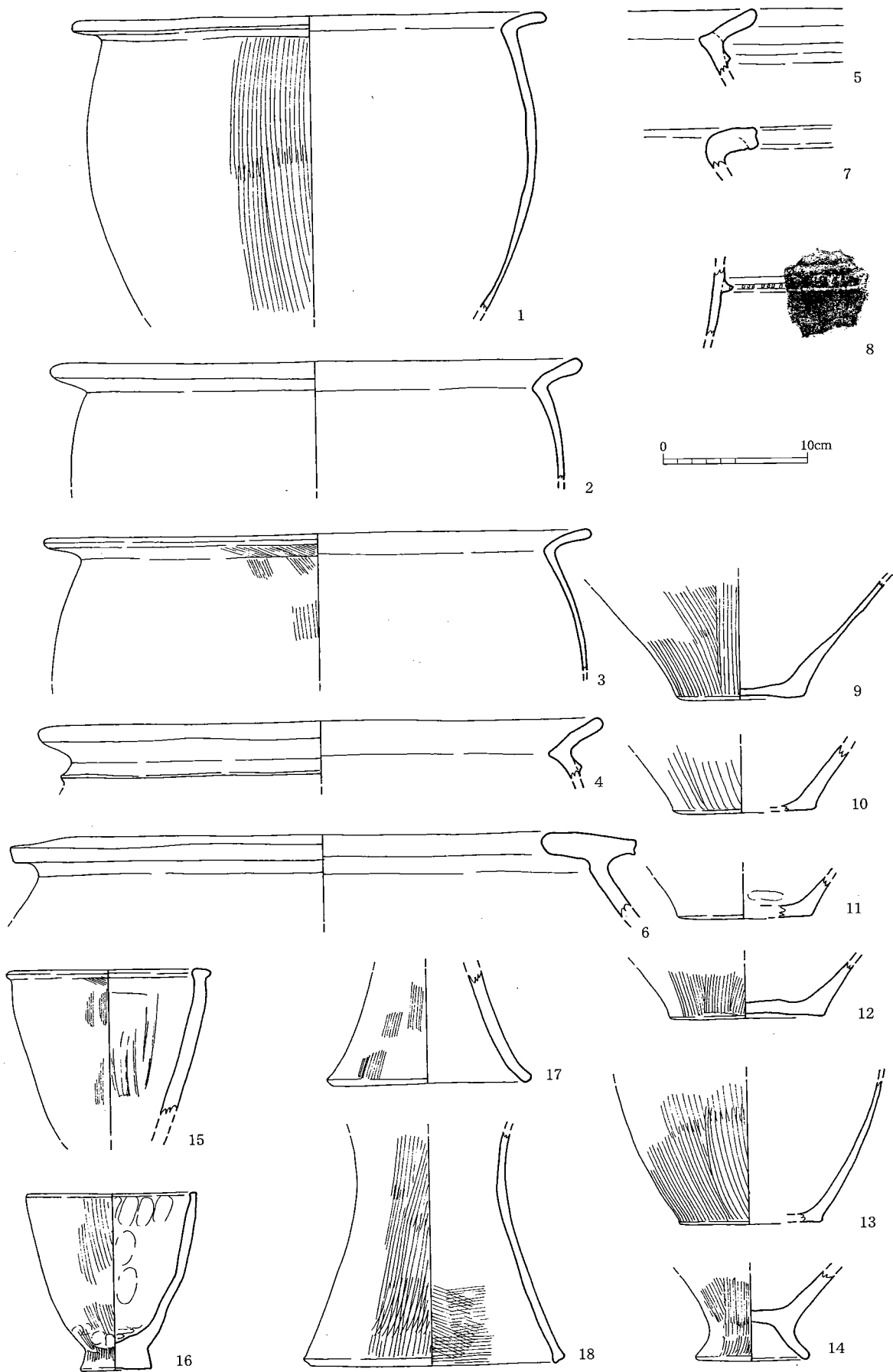
調査区の北寄りで検出した。最終面での検出である。長軸207cm×短軸103cmの略方形を呈する。深さは約15cmでほぼ平坦である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器(第59図)

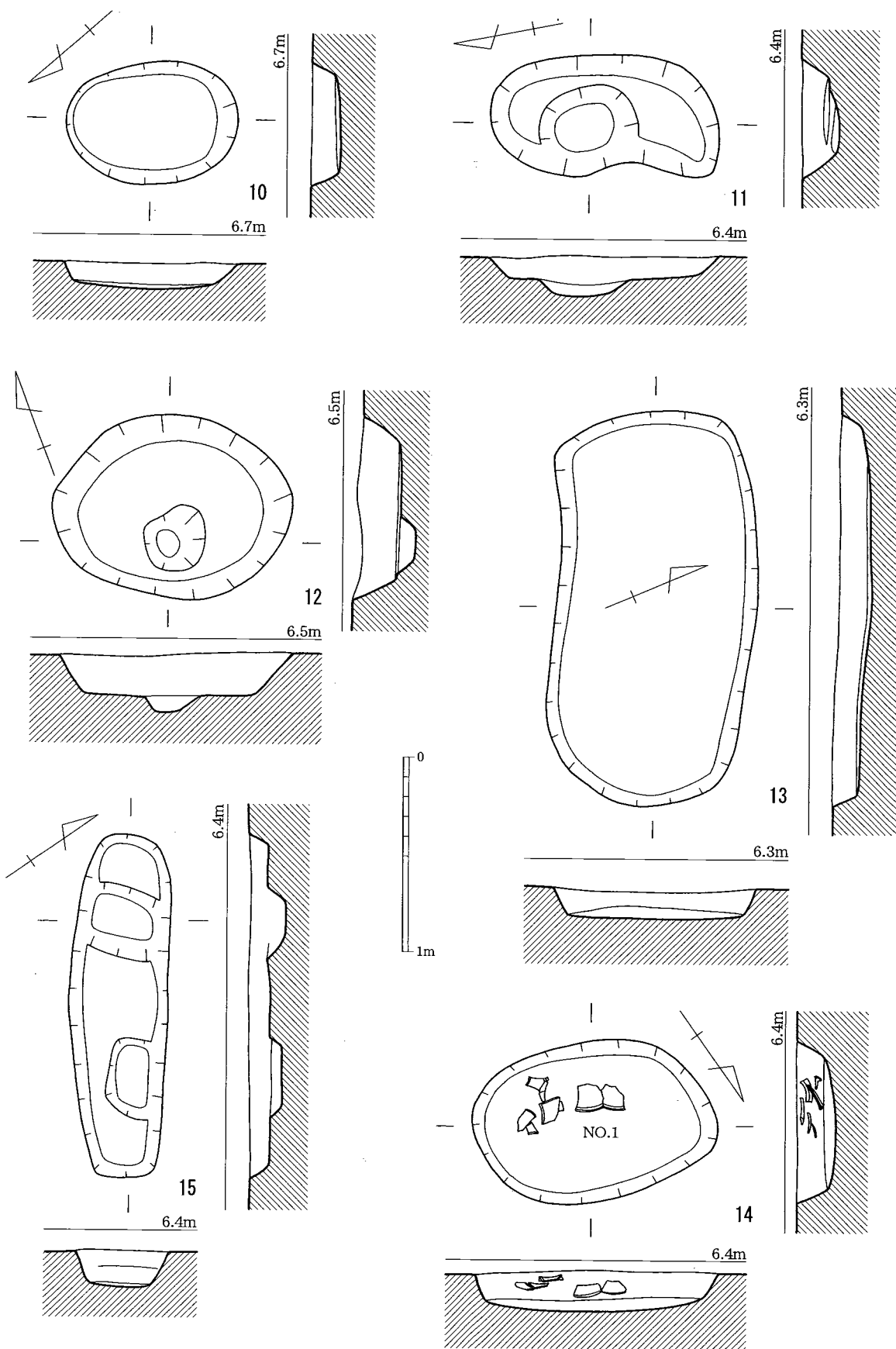
4・5は弥生土器の甕の底部である。4はやや厚底の底部である。わずかに上底である。外面はハケメ調整。内面の調整はナデである。底径6.7cmである。5は厚底の底部である。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデである。



第56图 3区6~9号土坑实测图 (1/30)



第57图 3区7号土坑出土土器实测图 (1/4)



第58图 3区10~15号土坑实测图 (1/30)

14号土坑(図版20、第58図)

調査区の北寄りで検出した。最終面での検出である。長軸125cm×短軸84cmの楕円形を呈する。深さは約20cmで、中央部分がわずかに深くなっている。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器(図版56、第59図)

6は弥生土器の甕である。断面三角の口縁部で、口縁下に細い沈線を巡らせる。口径26.4cm。No1の位置から出土。7~9は器台。いずれも外面はハケメで調整、内面はナデ調整。7の口径は7.5cm、底径9.3cm、器高13.4cm。8の口径は8.0cm、底径8.7cm、器高13.3cm。9は口径7.9cm、底径8.2cm、器高13.2cm。

15号土坑(図版20、第58図)

調査区の北寄りで検出した。最終面での検出である。長軸177cm×短軸50cmの長楕円形を呈する。深さは約10cmであるが、2箇所が深く掘り込まれる。遺物は出土していない。

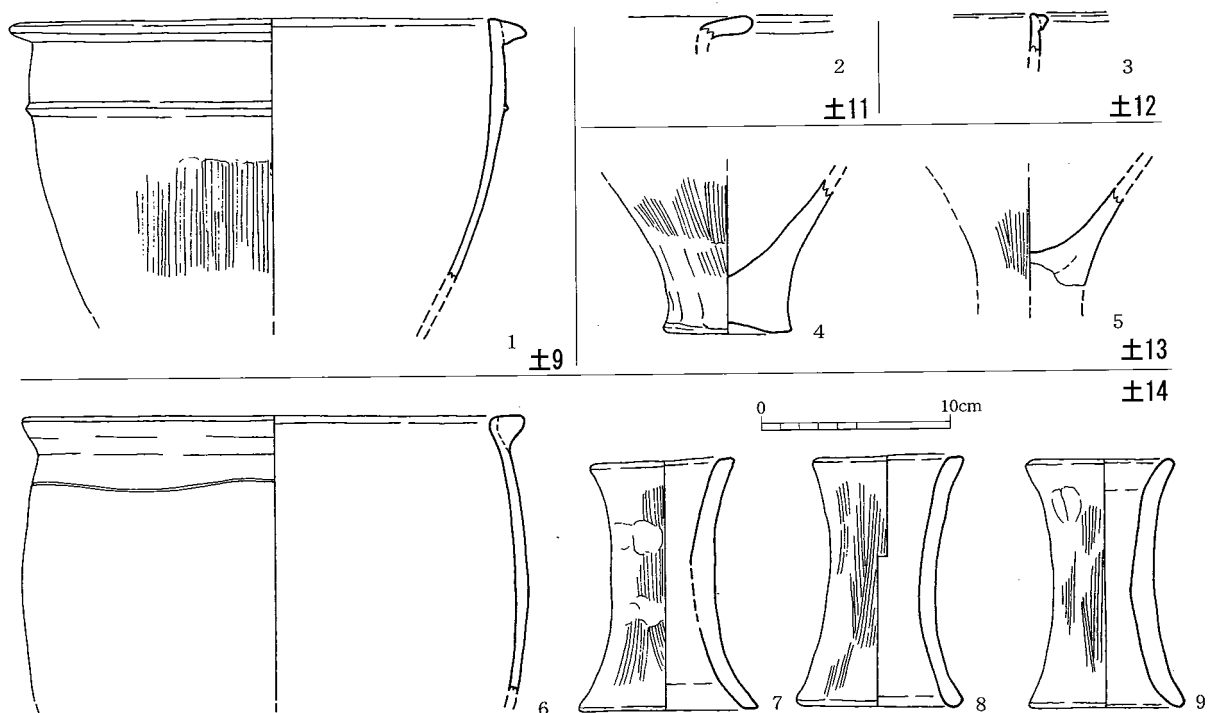
(5)溝

1号溝(第26図)

調査区の北端部で検出した。北東から南西へ向かい掘削され、両端は調査区外へ延びる。幅は位置によって一定しないが、80~160cm、深さ15cm程度である。遺物は出土していないが、覆土が淡暗灰褐色で他の弥生時代の遺構の覆土とは異なるので、新しい時期の可能性が高い。

2号溝(第26図)

調査区の中央付近で検出した。3号溝に切られる。北西から南東に向かって掘削され、両端は調査区外へ延びる。幅50cm、深さ15cmの逆台形を呈する。遺物は弥生土器が出土しているが、覆土が他の弥生時代の遺構より薄く灰色がかかることから、古墳時代以降の溝であろう。



第59図 3区9・11~14号土坑出土土器実測図(1/4)

出土土器(第60図)

1・2は弥生土器の甕の口縁である。1は外側に大きく、内側に小さく張り出した口縁部片である。上部平坦面がわずかに窪む。2も同様の形態である。

3号溝(第26図)

調査区の中央付近で検出した。3号溝を切り、西側で4号溝に切られ消失する。東端部は調査区外へ延びる。幅80cm、深さ25cmの逆台形を呈する。遺物に須恵器が出土していることから、古墳時代以降の溝であろう。

出土土器(第60図)

3・4は弥生土器の甕である。3は甕の断面三角の口縁部片である。端部には刻み目を施す。4は甕の胴部である。小さな断面三角突帯を貼り付け、刻み目を施す。5は須恵器の甕の口縁部である。外面にカキメを施す。

4号溝(第26図)

調査区の中央付近で検出した。3・5号溝、20号甕棺墓を切る。東西方向に掘削され、両端は調査区外へ延びる。幅30cm、深さ30cmで逆台形を呈する。遺物に須恵器・土師器が出土していることから古墳時代以降の溝であろう。

出土土器(第60図)

6～11は弥生土器である。6は口縁部を外側に強く折り曲げるものである。口径33.4cmである。7は跳ね上げの口縁である。口径31.6cm。8は外側に大きく、内側に小さく発達した口縁部で、外端部には刻み目を施す。9も8と同様の器形である。10は甕の胴部片である。断面三角突帯を貼り付け、刻み目を施す。内面の調整は不定方向のハケメである。11は丹塗の甕である。断面「く」字に近い口縁部で、胴部の張る器形である。外面の調整は横方向のミガキ。内面はハケメの後、ミガキを行う。外面のみに丹塗を施す。口径27.2cm、胴部最大径28.3cm、底径6.8cm、器高29.3cm。12は須恵器の甕の肩部。外面は平行タタキ。内面は同心円の当具痕が残る。焼成は堅緻である。13は土師器甕の口縁部。わずかに外反する器形で、内面にはケズリを施す。14は土師器椀の底部。底径は7.2cm。色調は淡黄茶褐色を呈する。

5号溝(第26図)

調査区の中央付近で検出した。7号土坑を切り、西側で4号溝に切られ消失する。東側は調査区外へ延びる。幅90cm、深さ30cmで逆台形を呈する。遺物は弥生土器のみが出土しているが、覆土が他の弥生時代の遺構より薄く灰色がかかることから古墳時代以降の溝であろう。

出土土器(図版56、第60図)

15～20は弥生土器である。15～19は甕である。15は断面三角であるが内側にも発達した口縁である。口径31.0cmである。16は口縁を強く外側に折り曲げるもので、端部を丸く仕上げる。胴の張る器形で外面はハケメである。口径は37.0cm。17は平底の底部である。底径9.4cm。18は底部外面を横方向のミガキを施す。底径7.0cm。19は台付甕の底部である。外面はハケメ調整である。底径6.0cmである。

6号溝(第26図)

仮水路部分調査区の中央やや北寄りで検出した。北東から南西に向かい掘削され、両端は調査区外へ延びる。幅70cm、深さ20cmの逆台形を呈する。弥生土器が出土しているが、覆土が他の弥生時代の遺構より薄く灰色がかかることから古墳時代以降の溝であろう。本調査区部分の2～5号溝と断面の形状、覆土が似ることから関連する溝の可能性はある。

出土土器(第60図)

21は弥生土器の底部である。底面と底部の境は緩い。内外面の調整は摩滅のため不明。底径7.3cm。

7号溝(第26図)

仮水路部分調査区のやや南寄りで検出した。北東から南西に向かい掘削され、両端は調査区外へ延びる。幅90cm、深さ20cmで逆台形を呈する。遺物は出土していないが、覆土が他の弥生時代の遺構より薄く灰色がかかることから古墳時代以降の溝であろう。本調査区部分の2～5号溝と断面の形状、覆土が似ることから関連する溝の可能性はある。

8号溝(第26図)

仮水路部分調査区のやや南寄りで検出した。東西方向に掘削され、両端は調査区外へ延びる。幅160cmであるが、段掘りされ本体部分は幅100cm、深さ0cmで逆台形を呈する。遺物は出土していないが、覆土が他の弥生時代の遺構より薄く灰色がかかることから古墳時代以降の溝であろう。本調査区部分の2～5号溝と断面の形状、覆土が似ることから関連する溝の可能性はある。

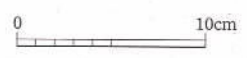
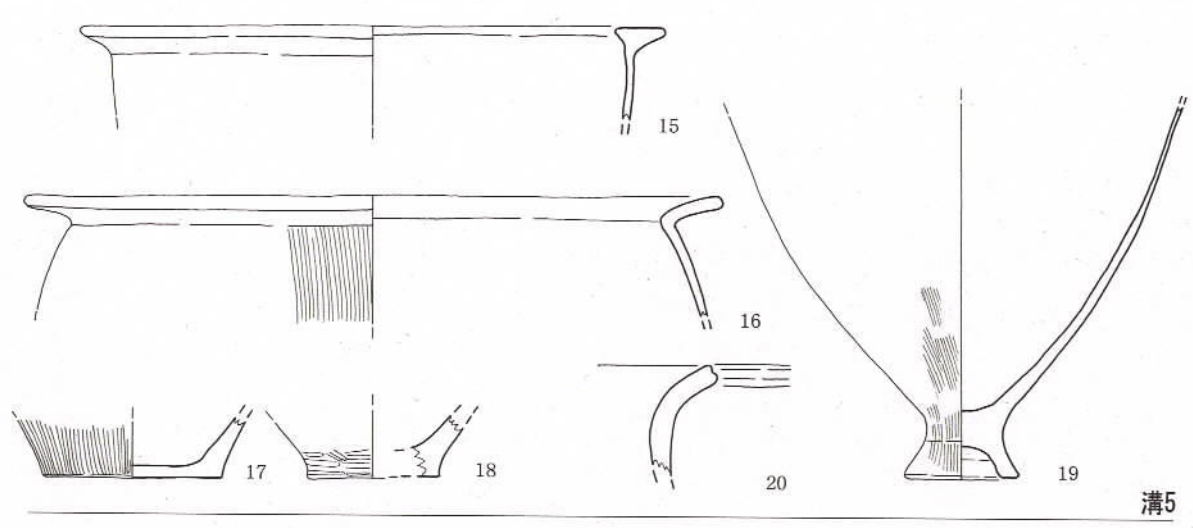
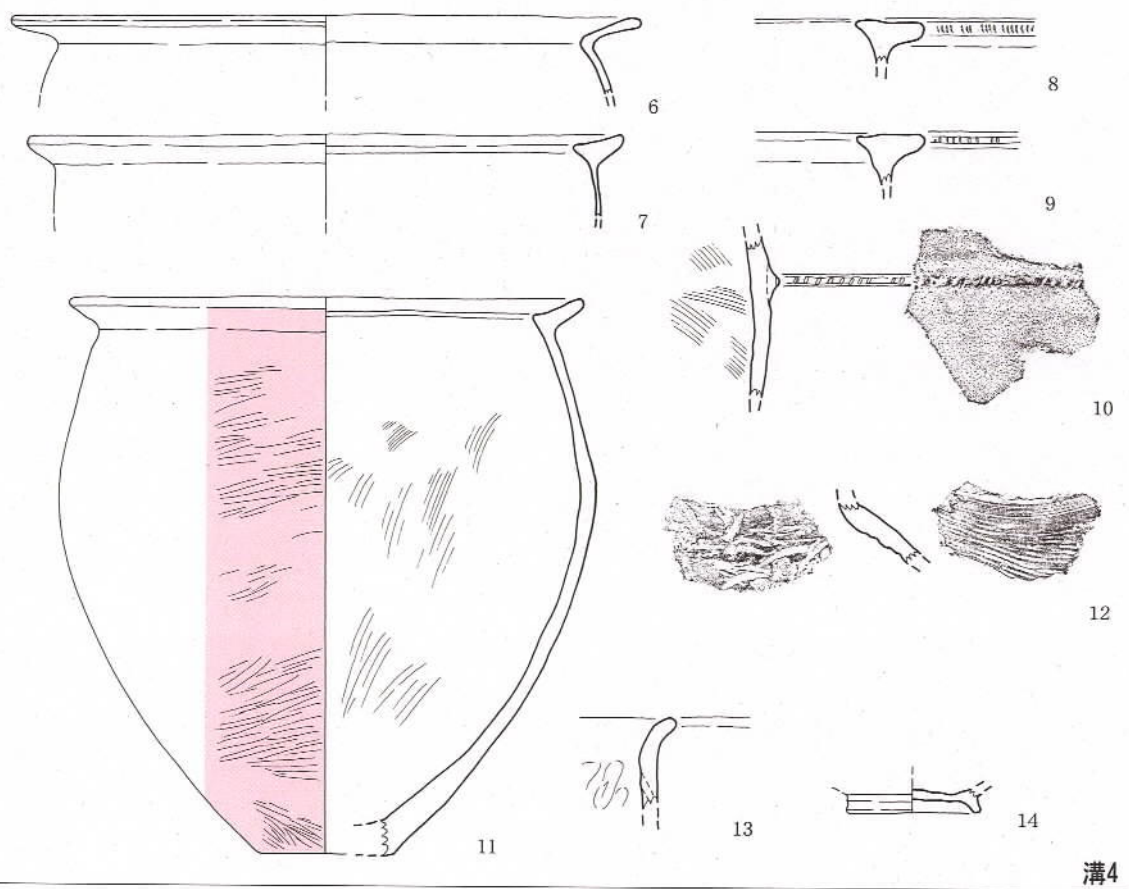
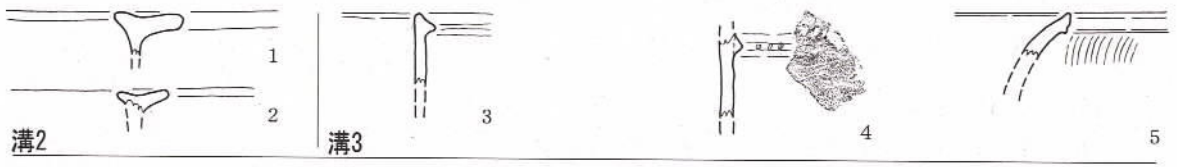
(6)波板状遺構

1号波板状遺構(図版21、第62図)

調査区の中央やや北寄りで検出した。19号甕棺墓を切る。周辺の土壌には部分的に鉄分が付着しており、滞水していた時期があった可能性もある。北西から南東方向へ連続して小土坑が並んでおり、東端部は調査区外へ延びる。東端部は小土坑3つ及び2つが浅い溝状に連続しており、本来、他の土坑も溝状に続いていた可能性がある。小土坑は長軸120cm×短軸45cm、深さ20cm程度のもので、心心間の距離は60～70cmである。土坑内は灰白色砂質土が硬く充填されており、10cm程度の円礫や土器片が混じる。須恵器片が出土しており、奈良時代以降の遺構であろう。

出土土器(第61図)

1～7は須恵器である。1は杯蓋の口縁部片である。端部をわずかに折り曲げたもので、内外面の調整はナデである。2も1と同様の器形であるが、折り曲げが小さい。内外面の調整はナデである。3は杯身の底部である。外面は中心付近は回転ヘラケズリ、周囲はナデである。内面はナデ調整を行う。4は杯身の底部である。小さな粘土帯を貼り付け、高台を形成する。底径7.6cmである。5は甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面は同心円の当具痕が残る。焼成は堅緻である。6は甕の胴部片である。外面は格子タタキ、内面は同心円の当具痕が残る。7も胴部片である。外面は格子タタキ、内面は同心円の当具痕が残る。8は弥生土器の甕の口縁部片である。断面三角の口縁である。外面はナデ調整。内面は工具痕が残る。9は弥生土器の壺の底部である。わずかにレンズ状を呈する。内外面の調整はナデである。内面には圧痕が残る。底径9.2cmである。



第60图 3区2~6号沟出土土器实测图 (1/4)

2号波板状遺構(図版21、第62図)

調査区の中央やや北寄りで検出した。周辺の土壌には部分的に鉄分が付着しており、滞水していた時期があった可能性もある。浅い溝状の灰白色の砂質土を除去したところ、南北方向とその中間から東へ連続した小土坑を検出した。土坑内にも灰白色の砂質土が充填されており、3~5cm程度の円礫が10個程度ずつ混ぜられている。遺物は弥生土器が混入するが、1号波板状遺構と覆土及び形状が類似することから、奈良時代以降の遺構であろう。

出土土器(図版〇、第61図)

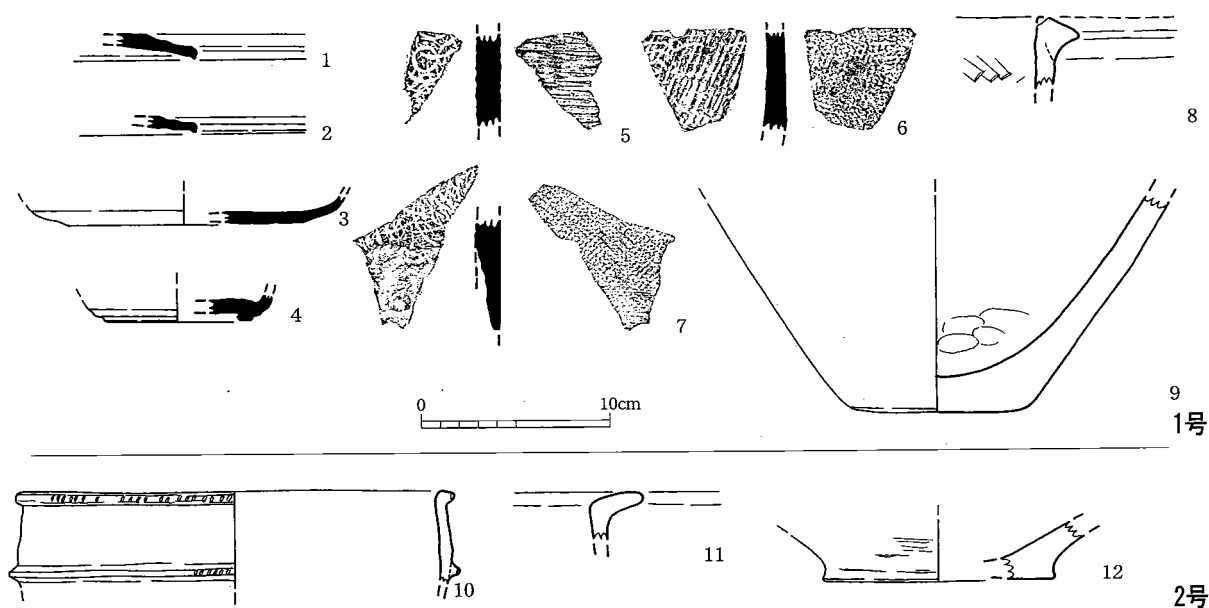
10は弥生土器の口縁部片。口縁端部を外側に折り曲げ、刻目を施す。口縁下に三角突帯を貼り付け、刻目を施す。口径は23.0cm。11は弥生土器の甕の口縁部。外側に折り曲げる。2は甕の底部であるが、縄文土器の深鉢の底部の可能性もある。外面は工具痕が残り、内面はナデ調整。底径は12.2cm。

3号波板状遺構(図版21・22、第62図)

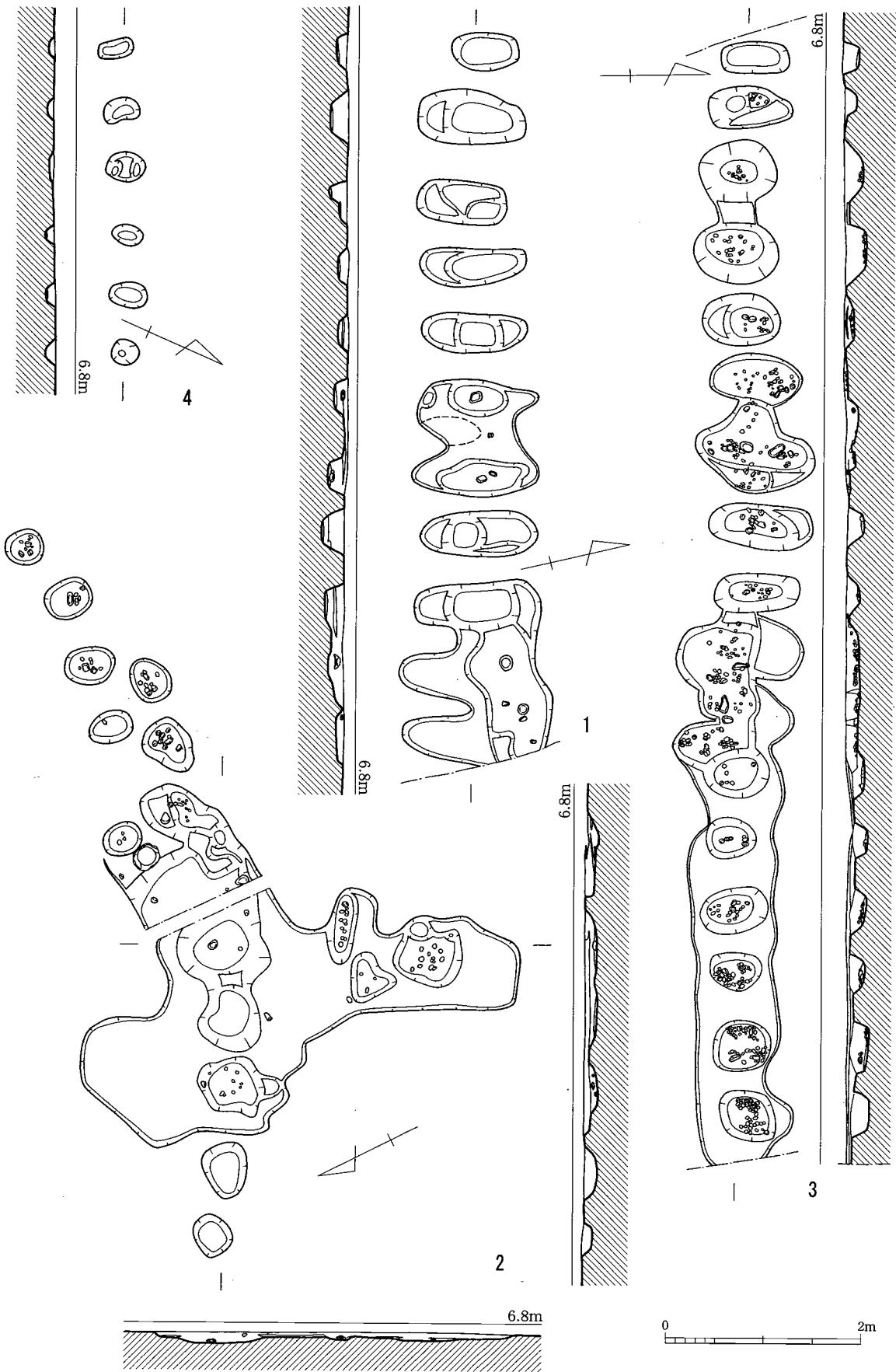
調査区の中央やや北よりで検出した。周辺の土壌には部分的に鉄分が付着しており、滞水していた時期があった可能性もある。東西方向へ掘削され、両端は調査区外に延びる。東半分は溝に検出された。浅い溝には灰白色の砂質土が充填されており、それを除去すると西半分と同様の連続した小土坑が現れた。土坑内にも灰白色の砂質土が充填されており、底面近くに3~5cm程度の円礫がやや多めに混ぜられている。また、須恵器や土師器等の土器片も混入する。土坑は長軸50~60cm×短軸30cm、深さ15cm程度で、心心間の距離は約70cmである。遺物は細片で図化していないが、須恵器片等が出土しており、奈良時代以降の遺構であろう。

4号波板状遺構(図版22、第62図)

調査区の南寄りで検出した。6個の連続する小土坑である。土坑は40cm×20cm程度の楕円形で、灰白色の砂質土が充填されている。深さは5cm程度で心心間の距離は60~70cmである。他の波板状遺構のように小円礫は混入しない。遺物は出土していない。



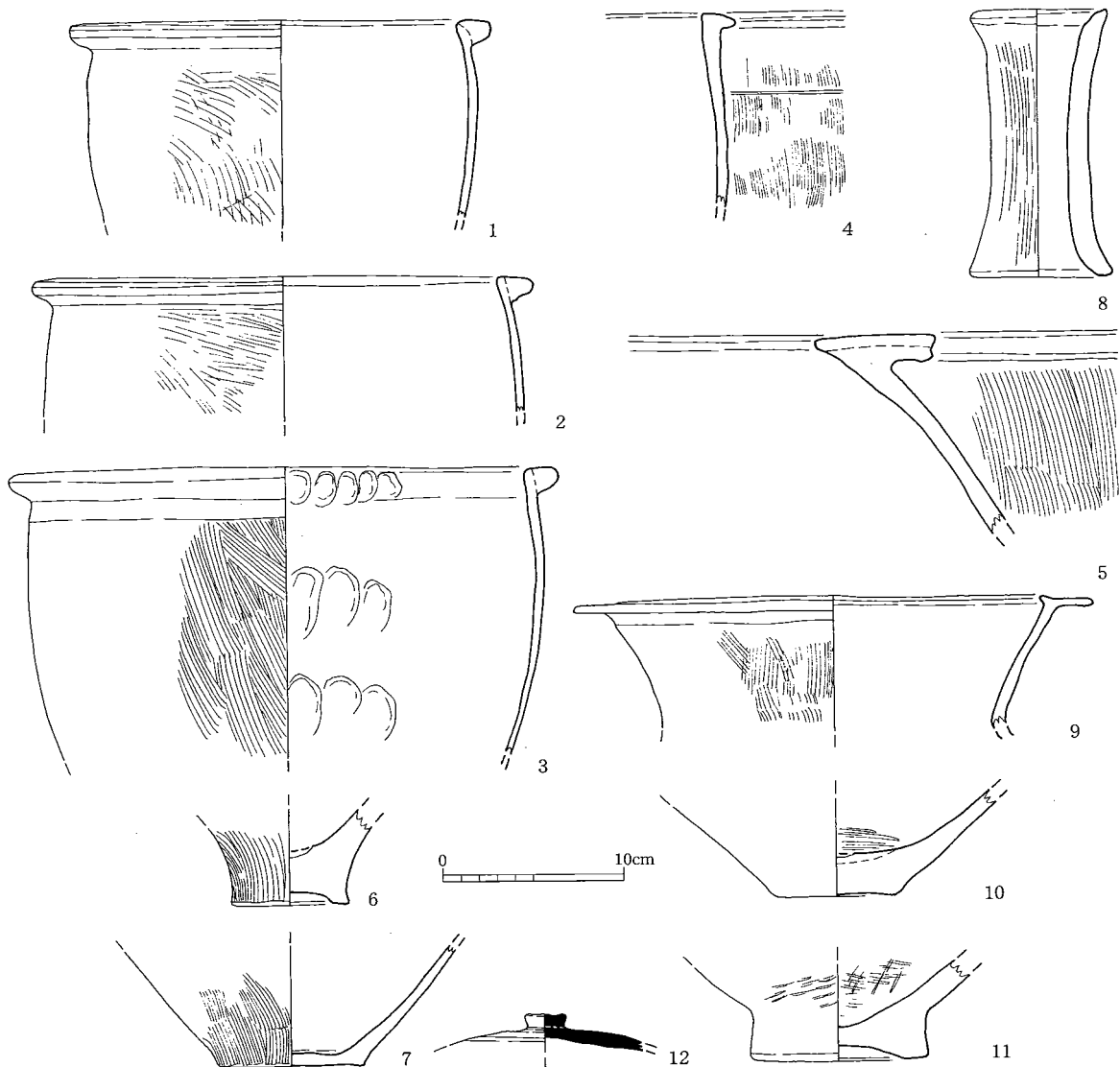
第61図 3区1・2号波板状遺構出土土器実測図(1/4)



第62図 3区1~4号波板状遺構 (1/60)

(7) 遺構面等出土土器(図版56、第63図)

1~7は弥生土器の甕である。1~4は口縁部片であるが、いずれも断面三角を呈する口縁である。口縁端部の作りはあまい。1の外面は粗いハケメである。口径は23.2センチである。2の口径は27.6cmである。3の外面はハケメ、内面はナデであるが、口縁端部付近に連続した接合時の圧痕が残る。口径は30.4cmである。4の外面口縁下には細い沈線を1条巡らせる。5は中型甕の口縁部片である。胴の大きく張る器形である。口縁は外側に大きく張り出し、端部は角ばって仕上げられる。外面はハケメ調整である。6は厚底気味の底部である。上底である。底径6.6cmである。7は平底の底部である。底部付近に黒斑が付着する。底径は8.0cmである。8は器台である。全体のつくりは厚い。口径7.6cm、底径7.9cm、器高14.6cmである。9は壺の口縁部である。外側に大きく、内側にわずかに張り出した口縁である。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。口径は28.7cmである。10は壺の底部である。厚く、わずかに上底である。内外面の調整はミガキである。外面に黒斑が付着する。底径6.5cmである。11は底部片である。底部は上底である。内外面に工具痕が残る。底径9.8cmである。12は須恵器杯蓋の頂部付近である。頂部付近は回転ヘラケズリ、周囲はナデ調整。内面はナデ調整である。つまみの径は2.2cm。



第63図 3区遺構面等出土土器実測図(1/4)

6 4区の調査の内容

4区は今回の調査範囲の中で最も遺構密度の高い調査区であった。1～3区で見られた淡茶褐色砂質土と黄褐色粘質土は存在せず、耕土を剥ぐといきなり淡茶褐色粘質土の安定した面が表れ、遺構等も検出できたため、この面を第一遺構面として調査を行った。この面の調査中に下層に遺構が存在することが判明したため、調査後、重機により下層の遺構面までの掘削を行った。この下層面を第二遺構面として調査を行ったが、これらの遺構は本来、第一遺構面からの掘り込まれているが、経年により遺構のプランが見えづらくなっていたものと判断している。その後、駄目押しで掘削を行った結果、甕棺墓や土坑、溝を検出している。甕棺墓は3区と同様に掘り方の検出がしづらく、上面からの切込みを見逃したものと考えている。しかし、土坑については上面の遺構より古い時期のものであり、淡茶褐色粘質土を面として分層できる可能性もある。断面での観察を行ったがわからなかった。この調査区では竪穴住居跡19棟、甕棺墓21基、石棺墓1基、石蓋土坑墓1基、土坑15基、溝11条を検出している。

第一遺構面(第64図)

耕土直下で判別できた遺構を中心に掘削を行った。奈良時代を中心とした1～5号竪穴住居跡、弥生時代中期前半の1～3号甕棺墓、1～7号土坑、1～4号溝を検出している。1号甕棺墓が1号竪穴住居跡に切られており、少なくとも弥生時代中期前半までが第一遺構面から切り込まれていることがわかる。

第二遺構面(第64図)

第一遺構面から10cm程度、重機により掘削を行った。弥生時代中期前半の甕棺墓の下層面から、弥生時代終末～古墳時代前期にかけての住居群を検出したことになるが、前述のとおり、竪穴住居跡が上層での検出が難しかったためと理解している。この面では6～20号竪穴住居跡、4～14号甕棺墓、1号石棺墓、1号石蓋土坑墓、8号土坑、5～8号溝を検出している。

第三遺構面(第65図)

第二遺構面調査後、重機により約15cm掘削を行った。上面で検出できなかった15～20号甕棺墓が検出された。また、上層の遺構より古い土器が出土する9～12号土坑の他、時期の明確でない9～11号溝を検出している。

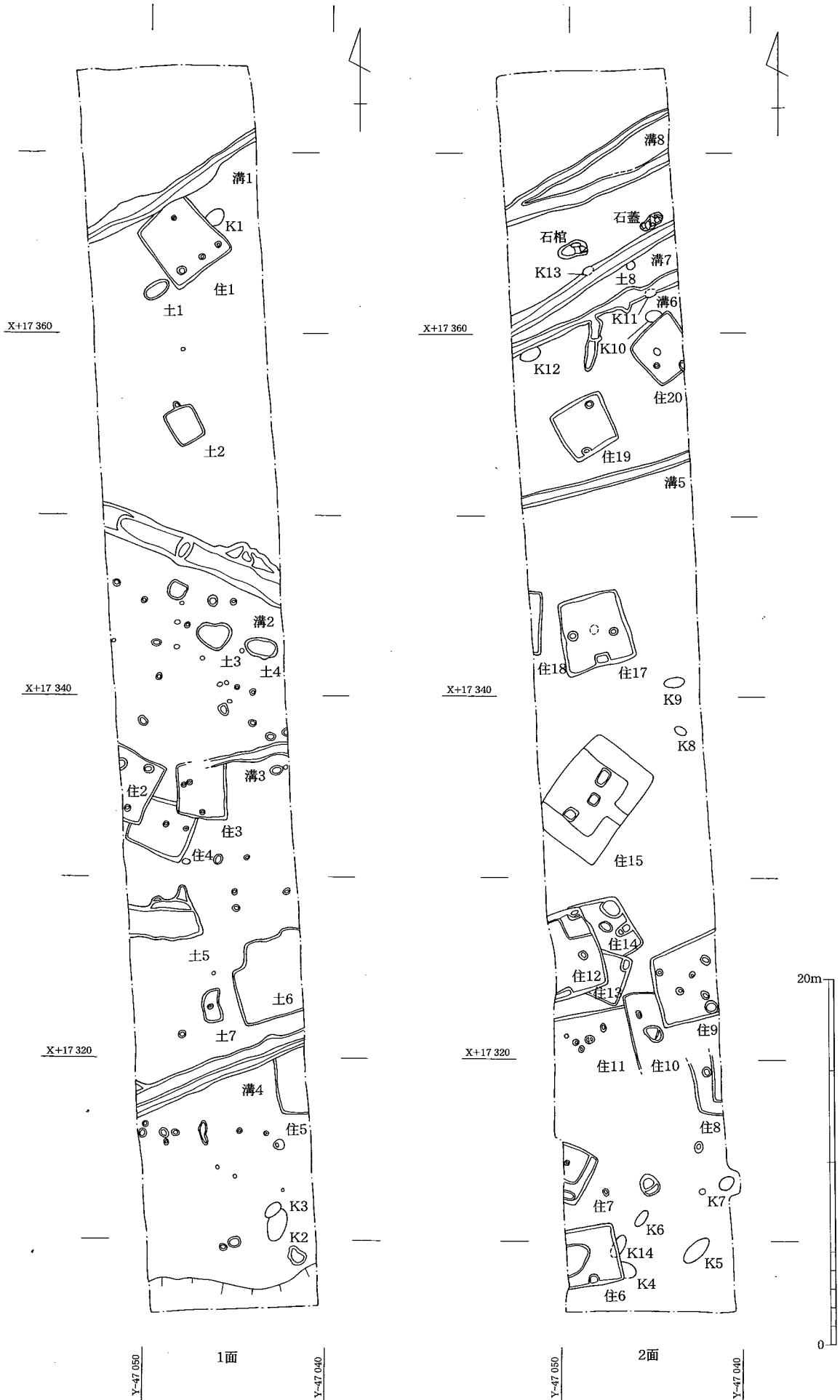
第四遺構面(第65図)

第三遺構面から、重機により約35cm掘削を行った。上層での掘り残しである21号甕棺墓と13～18号土坑を検出した。

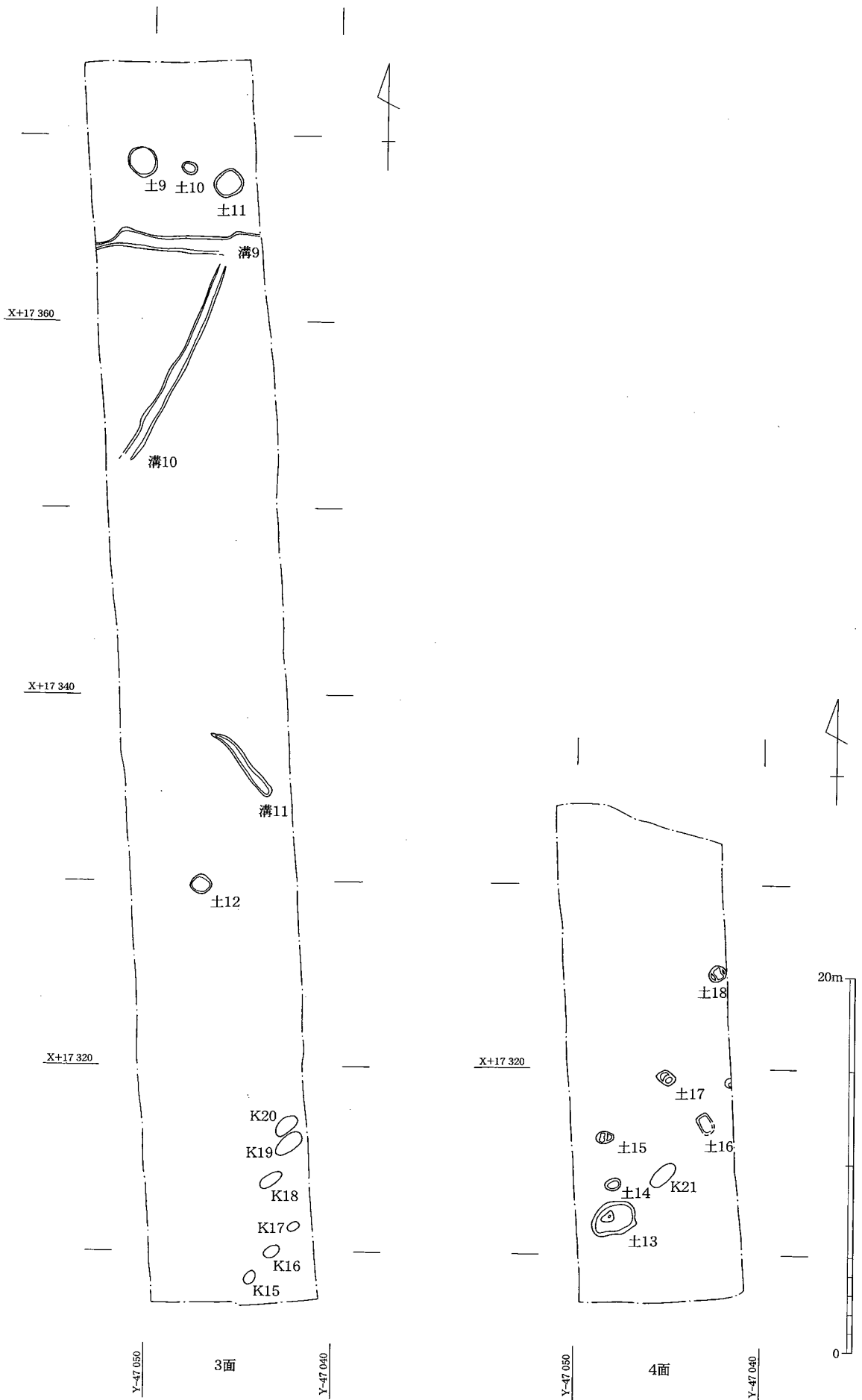
(1)竪穴住居跡

1号竪穴住居跡(図版24、第66図)

第一遺構面、調査区の北端部で検出した。1号甕棺墓を切り、1号溝に切られる。長軸400cm×短軸367cmの方形を呈する。深さは約10cm程度で壁の立ち上がりは緩やかである。床面はほぼ平坦で、炉跡は検出できなかった。床面には多数のピットを検出したが、いずれも浅く支柱穴にはなりえない。北側から西側にかけて床面下層の掘り込みがあり、その掘削時に東壁中央で屋内土坑を検出した。床面検出時に見落としたものであろう。遺物は古墳時代前期の土師器が出土している。



第64図 4区遺構配置図① (1/300)



第65図 4区遺構配置図② (1/300)

出土土器(第67図)

1~4は土師器である。1・2は甕である。1は器壁がやや厚い。口縁がわずかに内湾気味である。胴部内面はケズリである。口径15.6cmである。2は器壁が薄い。口縁端部をつまみあげる。3は二重口縁の壺である。口縁部は直線的に伸び、広がらない。内外面の調整はナデである。4は鉢である。内外面の調整はナデである。口径18.0cmである。

2号竪穴住居跡(図版24、第66図)

第一遺構面、調査区の中央西寄りで検出した。4号竪穴住居跡を切る。長軸360cm×短軸305cm+ α の方形を呈する。深さは10cm程である。床面はほぼ平坦で、炉跡は検出できなかった。床面には3箇所ピットを検出したが、いずれも浅く支柱穴にはなりえない。床面下層の掘り込みは確認できなかった。遺物は奈良時代の須恵器・土師器が出土している。

出土土器(図版57、第67図)

5~8は須恵器である。5は杯身である。口径10.4cm、底径8.3cm、器高3.3cmである。6は杯身の口縁部片である。内外面の調整はナデである。7は杯蓋である。口縁端部は折り曲げたのみである。頂部にはつまみの剥離痕が残る。口径17.0cmである。No1の位置から出土している。8は杯身である。踏ん張らない小さな高台が付く。内外面の調整はナデである。口径16.8cm、底径11.2cm、器高5.2cmである。No1の位置から出土している。9~12は土師器である。9は杯である。口径14.4cm、底径10.2cm、器高3.2cmである。No2の位置から出土している。10は杯である。底径10.0cmである。11は杯である。底径10.0cmである。No1の位置から出土している。12は鉢であろうか。口縁端部は外反する。口径22.0cmである。No2の位置から出土している。

3号竪穴住居跡(図版24、第66図)

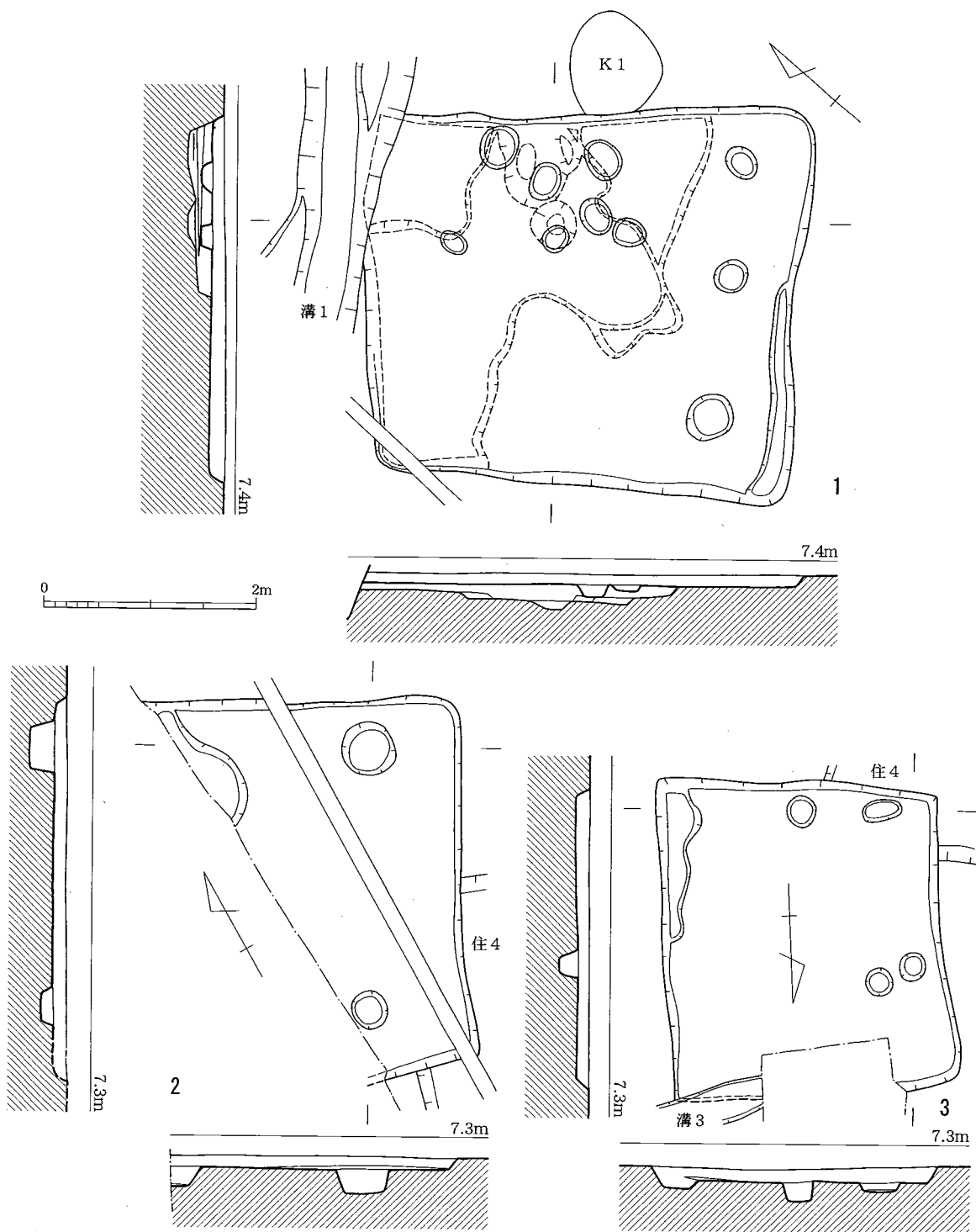
第一遺構面、調査区の中央西寄りで検出した。4号竪穴住居跡を切り、3号溝に切られる。また、北壁を試掘トレンチにより切られる。長軸310cm×短軸270cmの方形を呈する。深さは約15cmで、床面は平坦である。炉跡はない。床面ではピットをいくつか検出したが、いずれも浅く支柱穴にはなりえない。床面下層の掘り込みはない。古墳時代前期の土師器や奈良時代の須恵器が出土しているが、後者が住居の時期に近いと考えられる。

出土土器(第67図)

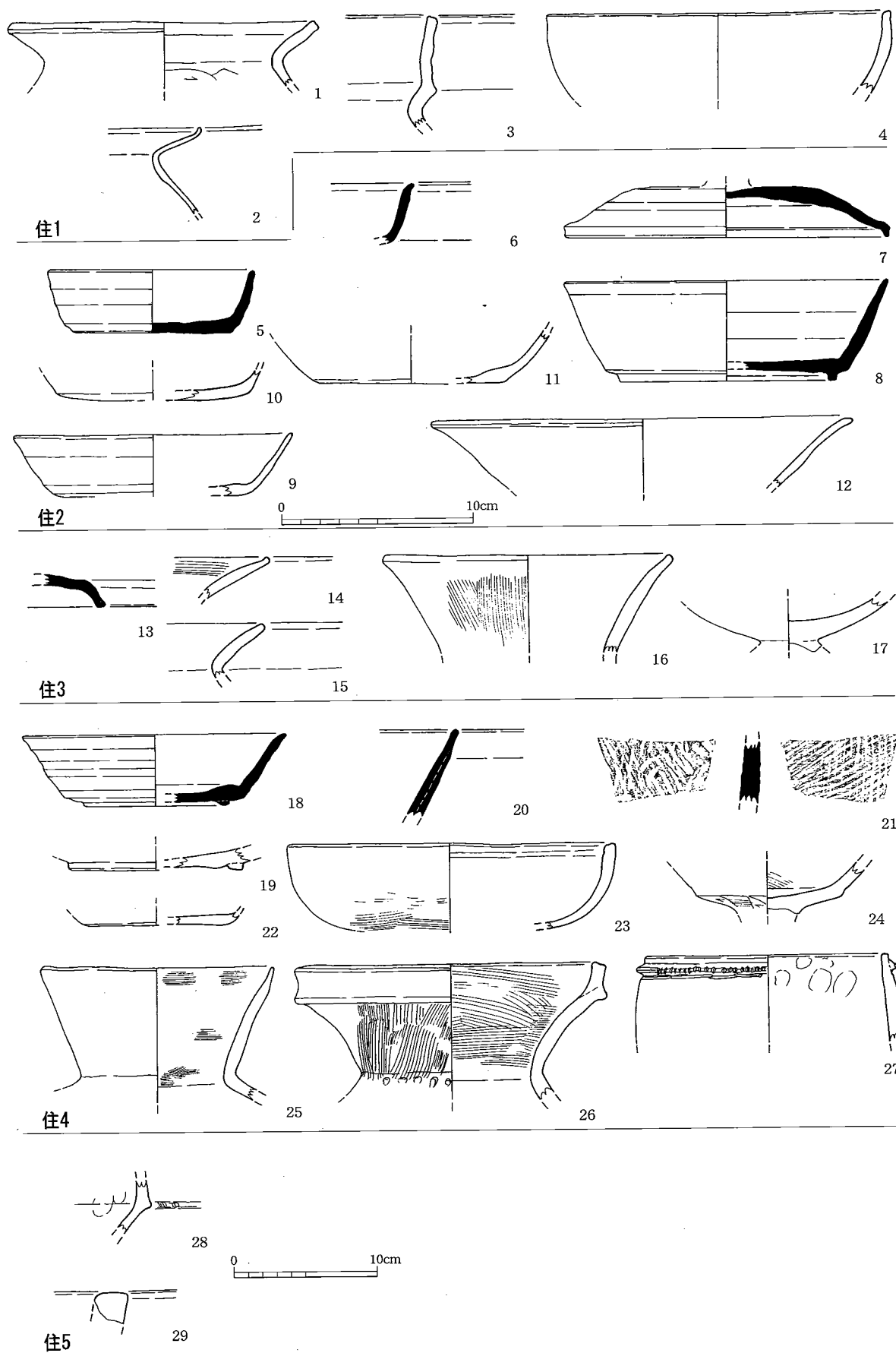
13は須恵器杯蓋の口縁部である。外面には自然釉が付着する。14~17は土師器である。14・15は甕である。14は口縁の大きく開くものである。端部をつまみあげている。内面の調整は横方向のハケメである。15は内外面ともにナデ調整である。16は壺の口縁であろうか。口縁はわずかに外反しながら大きく広がる。外面はハケメ調整である。口径15.0cmである。17は高杯の杯部分である。球形の杯部。

4号竪穴住居跡(図版25、第68図)

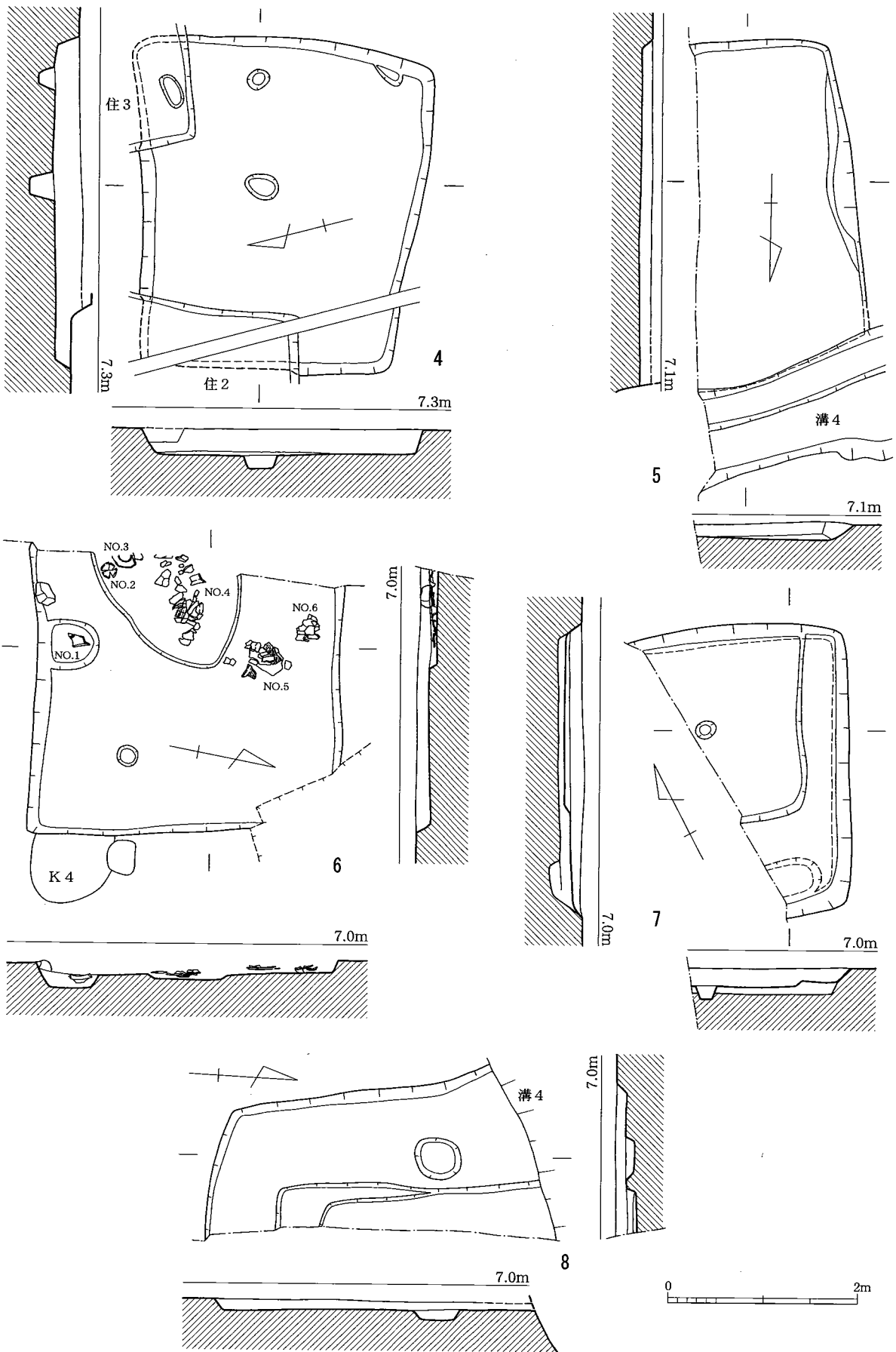
第一遺構面、調査区の中央西寄りで検出した。2・3号竪穴住居跡に切られる。長軸353cm×短軸310cmの方形を呈する。深さは約25cmで、壁の立ち上がりはやや急である。床面は平坦で炉跡はない。床面でピットをいくつか検出したが、いずれも浅く支柱穴にはなりえない。床面下層の掘り込みはない。奈良時代の須恵器や土師器が出土しており、この竪穴住居跡の時期を示すものと考えられる。



第66図 4区1~3号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第67図 4区1～5号竪穴住居跡出土土器実測図 (27～29は1/4、他は1/3)



第68图 4区4~8号竖穴住居跡实测图 (1/60)

出土土器(図版57、第67図)

18~21は須恵器である。18は口縁の大きく広がる杯身である。高台はごくわずかに粘土帯を貼り付けるのみである。口径13.4cm、底径7.2cm、器高3.7cmである。19は杯身の高台部分である。底径9.0cmである。20は杯身の口縁部分であろうか。内外面の調整はナデである。21は甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面には同心円の当具痕が残る。22~26は土師器である。22は杯である。底径7.8cmである。23は椀である。口縁部分には浅い沈線を巡らす。外面の調整はハケメである。口径17.0cm、器高4.5cmである。24は高杯の杯部である。外面は一部ケズリを施す。内面はハケメ調整である。15は小型丸底壺の口縁部である。外面の調整は摩滅して不明。内面は横方向のハケメである。26は二重口縁壺である。器壁は厚い。内外面の調整は全体にハケメである。頸部と肩部の境に連続した刺突痕を施す。口径16.0cmである。27は混入の弥生土器甕である。口縁端部よりやや下った位置に断面三角の突帯を貼り付け、刻み目を施す。内外面の調整はナデである。外面には黒斑が付着する。口径16.0cmである。

5号竪穴住居跡(図版25、第68図)

第一遺構面、調査区の南端部で検出した。東側は調査区外へ延びる。北側は4号溝に切られる。長軸365cm+ α ×短軸180cm+ α の方形を呈すると考えられる。深さは15cm程度で壁の立ち上がりは緩やかである。床面は平坦で、西側の壁で焼土が検出される。床面にピット・下層の掘り込みはない。弥生土器が出土しているが、混入の可能性が高い。下層の8号竪穴住居跡がほとんど重複することから、同一住居を掘り間違えた可能性がある。

出土土器(第67図)

28・29は混入の弥生土器である。28は甕の胴部である。屈曲させ、その部分に刻み目を施す。29は支脚であろうか。ナデ調整である。

6号竪穴住居跡(図版25、第68図)

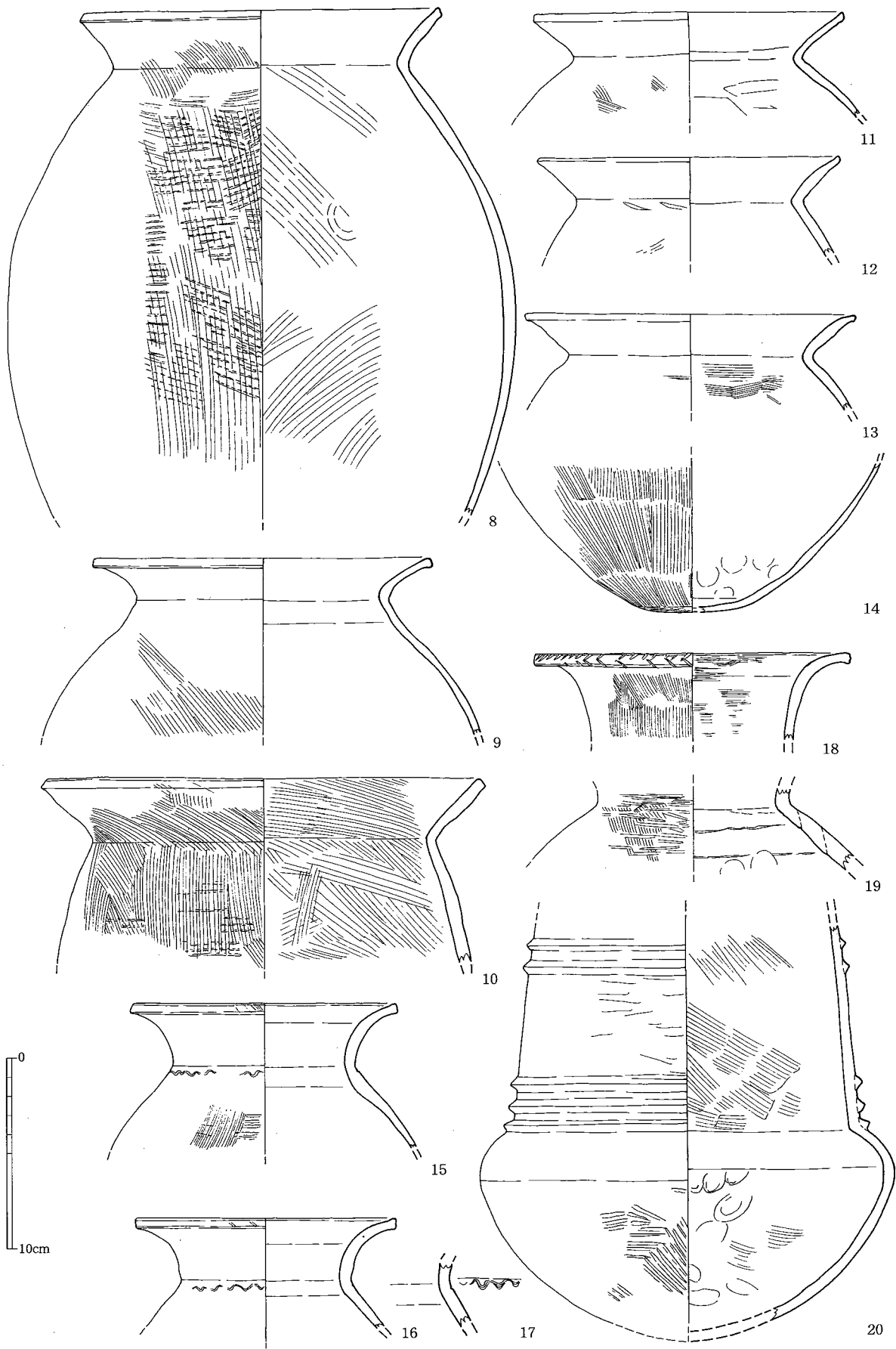
第二遺構面、調査区の南端部で検出した。4・14号甕棺墓を切る。長軸297cm+ α ×短軸318cmで、西端部は調査区外へ延びる。深さは約15cmで、壁の立ち上がりはやや急である。床面はほぼ平坦である。南壁中央には屋内土坑が掘られる。ピットはあるが浅く主柱穴にはなりえない。中央付近に5cm程度の掘り込みがある。床面下層の掘り込みは検出できなかった。遺物は古墳時代初頭の土器がややまとまって出土している。

出土土器(図版57、第69~71図)

1~23は土師器である。1~14は甕である。1は口縁が直線的に広がり、胴部はやや長い。外面の調整はタタキの後にハケメを施す。内面はナデ調整である。外面底部付近には黒斑が付着する。口径22.8cm、胴部最大径25.0cmである。No4の位置から出土している。2は口縁部がやや外反気味に広がる。胴部最大径が低く、寸胴の印象を受ける。外面はタタキの後に部分的にハケメ調整。内面はハケメ調整を密に行う。口径31.1cm、胴部最大径23.9cmである。No5の位置から出土している。3は直線的に広がる口縁である。外面はタタキ調整の後、ハケメであり、特に肩部付近は規則的にタタキを行っている。内面の調整はケズリである。口径17.2cm、胴部最大径22.5cmである。No3の位置から出土している。4は直線的に開く口縁にやや球形に近い胴部をもつものである。外面の調整はタタキの後、ハケメである。内面の調整はケズリである。口径17.2cm、胴部最大径20.2cmである。No4の位置から出土している。5は直線的に開く口縁である。やや長めの胴部をもつ。外面はタタキ

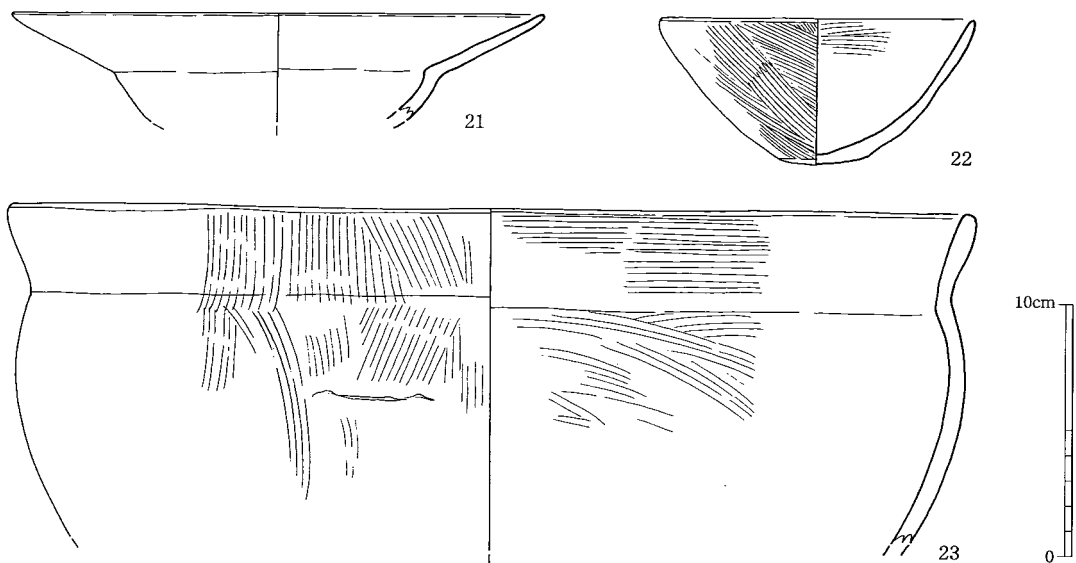


第69图 4区6号竖穴住居跡出土土器実測図① (1/3)

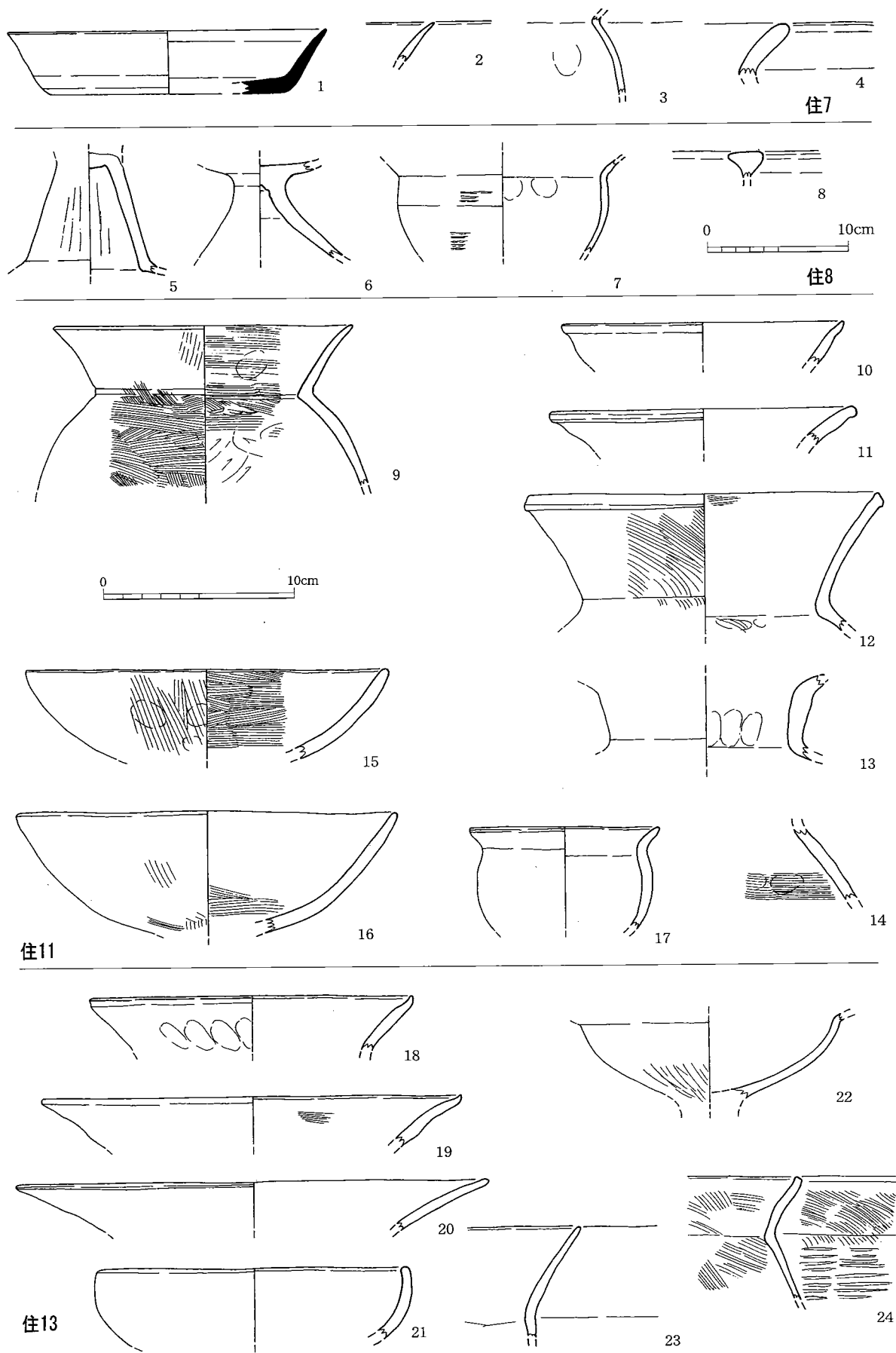


第70图 4区6号竖穴住居跡出土土器実測図② (1/3)

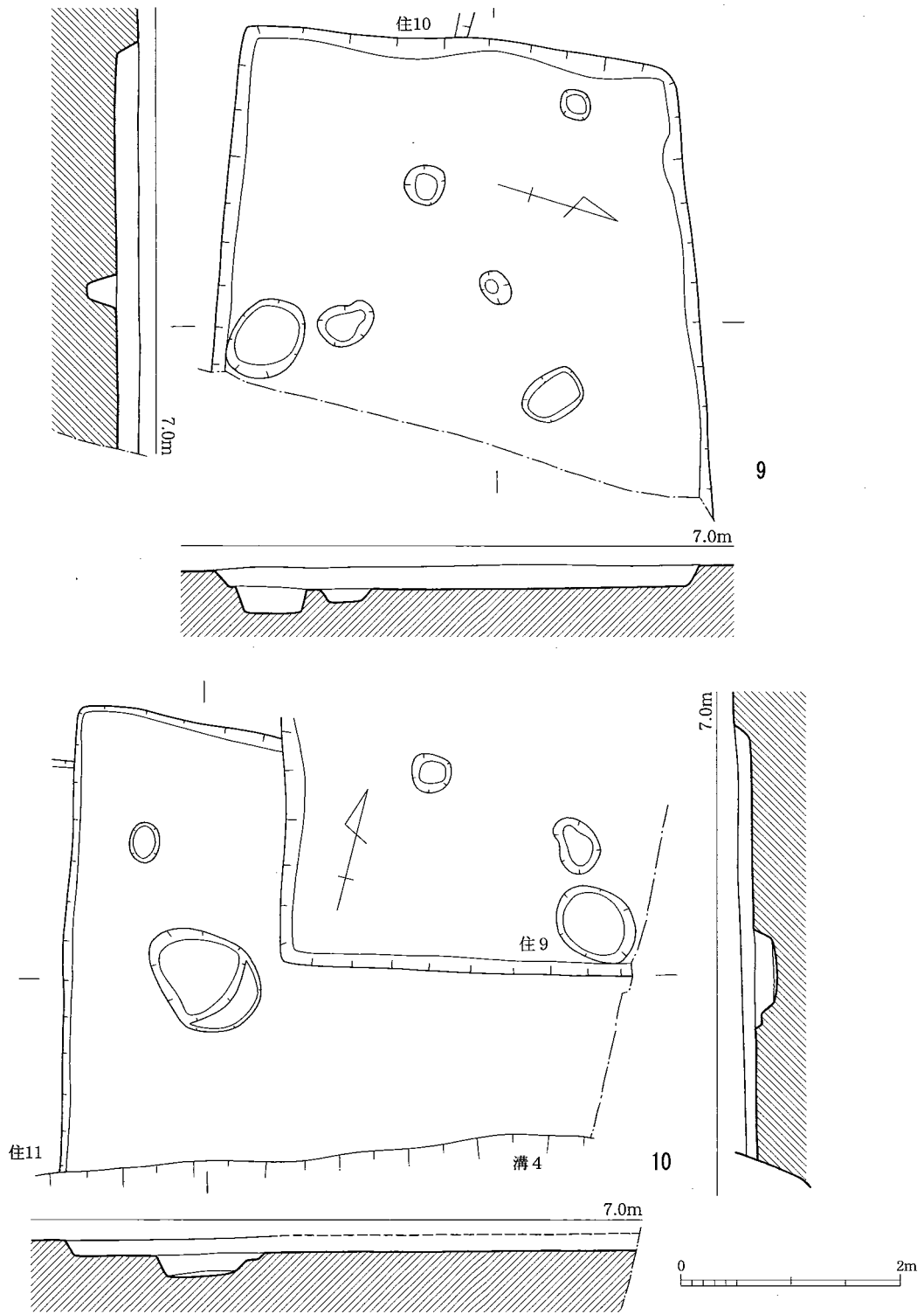
の後ハケメを施す。内面は摩滅しており、調整不明である。口径15.2cm、胴部最大径19.6cmである。6は直線的に開く口縁で、端部を角ばって仕上げる。外面はハケメ調整。内面はケズリである。口径16.4cmである。7はわずかに内湾する口縁である。端部はつまみあげるように仕上っている。外面の調整は摩滅しているが、部分的にタタキが残る。口径18.0cmである。No5の位置から出土している。8は直線的に広がる口縁で、胴部最大径が下がり、寸胴の器形である。外面の調整はタタキの上から、ハケメ調整を行う。内面はハケメ調整であるが、一部に当具痕らしきものが残存する。胴部上位と口縁付近に黒斑が残る。口径19.2cm、胴部最大径26.5cmである。9は外反する口縁部で、口縁部と胴部との境は明瞭ではない。外面の調整はハケメである。口径17.6cmである。No4の位置から出土している。10は胴のあまり張らない甕である。口縁端部は角ばって仕上げる。内外面の調整はハケメを密に行っている。11は口縁をわずかにつまみあげている。外面はハケメ調整。内面はケズリである。口径16.4cmである。No6の位置から出土している。12はわずかに外反する口縁で、端部をつまみあげる。外面はハケメ調整である。内面の調整は摩滅しており不明である。口径16.0cmである。No4の位置から出土している。13は外反する口縁である。外面の調整は摩滅により不明。内面はハケメである。口径17.4cmである。14は丸底の底部であるがわずかに底部が残る。外面はハケメ調整。内面は底面付近は圧痕が残り、それより上位はケズリである。15～20は壺である。15～17は口縁の大きく開く壺で、径は異なるがほぼ同じ器形になると思われる。15は口縁端部を角ばって仕上っている。頸部と肩部の境には波状文を施す。外面の調整はタタキの後、ハケメである。内面の調整はナデである。口径13.7cmである。16は15よりわずかに胴部が小さくなる。口径13.6cmである。18は口縁が大きく外反する壺である。口縁端部を角ばって仕上げ、連続した刻み目を施す。内外面の調整はハケメである。口径16.3cmである。No5の位置から出土している。19は壺の肩部部分である。肩部外面はハケメの後、ミガキ調整。内面には粘土帯の接合痕と圧痕が残る。20はひしゃげた胴部に直線的にすぼまる頸部をもつものである。口縁と底部を失っているので全体の形状は不明である。外面は頸部上位に2条の断面三角突帯、頸部と肩部の境に3条の断面三角突帯を貼り付



第71図 4区6号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/3)



第72図 4区7・8・11・13号竪穴住居跡出土土器実測図（8は1/4、他は1/3）



第73図 4区9・10号竪穴住居跡実測図 (1/60)

ける。頸部外面は横方向のミガキ調整。胴部外面はタタキである。頸部内面はハケメ調整。胴部内面は圧痕とハケメがわずかに残る。胴部最大径は21.6cmである。21は鉢もしくは高杯の杯部である。内外面の調整は不明である。口径21.0cmである。22は鉢である。わずかに底部が残る。外面はハケメ調整。内面もハケメである。外面には黒斑が付着する。口径12.5cm、器高5.8cmである。No2の位置から出土している。23は鉢である。口縁は直線的にわずかに広がる。胴部の張りは小さい。内外面の調整はハケメである。口径38.0cm、胴部最大径37.4cmである。No5の位置から出土している。

7号竪穴住居跡(図版26、第68図)

第二遺構面、調査区の南端部で検出した。長軸210cm+ α ×短軸310cmの長方形を呈するものと考えられる。壁の深さは15cmであるが、東側と南側にベッド状遺構を有する。小ピット1基を検出しているが、深さ15cmと浅く、支柱穴にはなりえない。床面下層は全体が掘り込まれており、南東端部は土坑状に深くなる。遺物は奈良時代と古墳時代前期の土器が出土している。

出土土器(第72図)

1~4は土師器である。1は杯である。口縁部はわずかに外反する。口径16.6cm、底径12.2cm、器高3.3cmである。2は甕の口縁部である。器壁は薄く、わずかに外反する。3は甕の胴部である。内外面は摩滅しているが、内面に圧痕が残る。4は甕の口縁部である。内外面の調整はナデである。

8号竪穴住居跡(図版26、第68図)

第二遺構面、調査区の南端部で検出した。上面の4号溝に北壁を切られる。また、上面の5号竪穴住居跡に大部分重複しており、5号住居は同一住居を分けて掘った可能性が高い。長軸160cm+ α ×短軸360cm+ α の長方形を呈すると考えられる。壁の深さは20cmで、南壁から西壁にかけて高さ10cmのベッド状遺構を有する。ベッド状遺構上には浅い掘り込みがある。遺物は土師器が出土している。

出土土器(第72図)

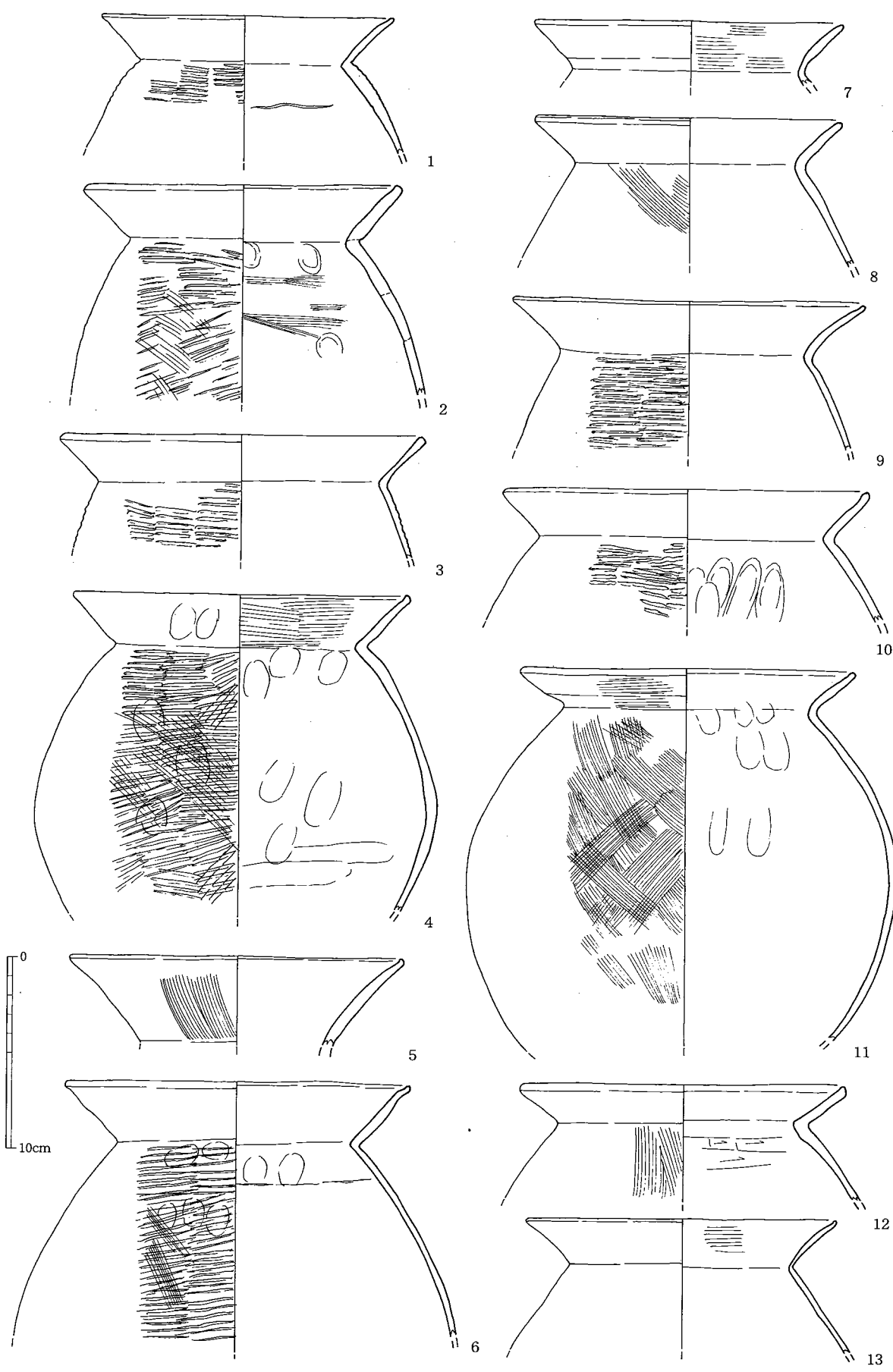
5~7は土師器である。5は高杯の脚部である。外面は縦方向のミガキである。6は高杯の脚部である。内外面の調整はナデである。7は鉢である。器壁は薄い。外面の調整はタタキ。内面の調整はナデで圧痕が残る。胴部最大径11.0cmである。8は混入の弥生土器甕である。内外面の調整はナデである。

9号竪穴住居跡(図版26、第73図)

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。10号竪穴住居跡を切り、上面の6号土坑と大部分が重複することから、同一遺構を分けて掘った可能性が高い。長軸400cm+ α ×短軸435cmの長方形を呈すると考えられる。壁の深さは約20cmで、床面はほぼ平坦である。床面からは6箇所のピットを検出している。遺物は土師器がまとまって出土している。

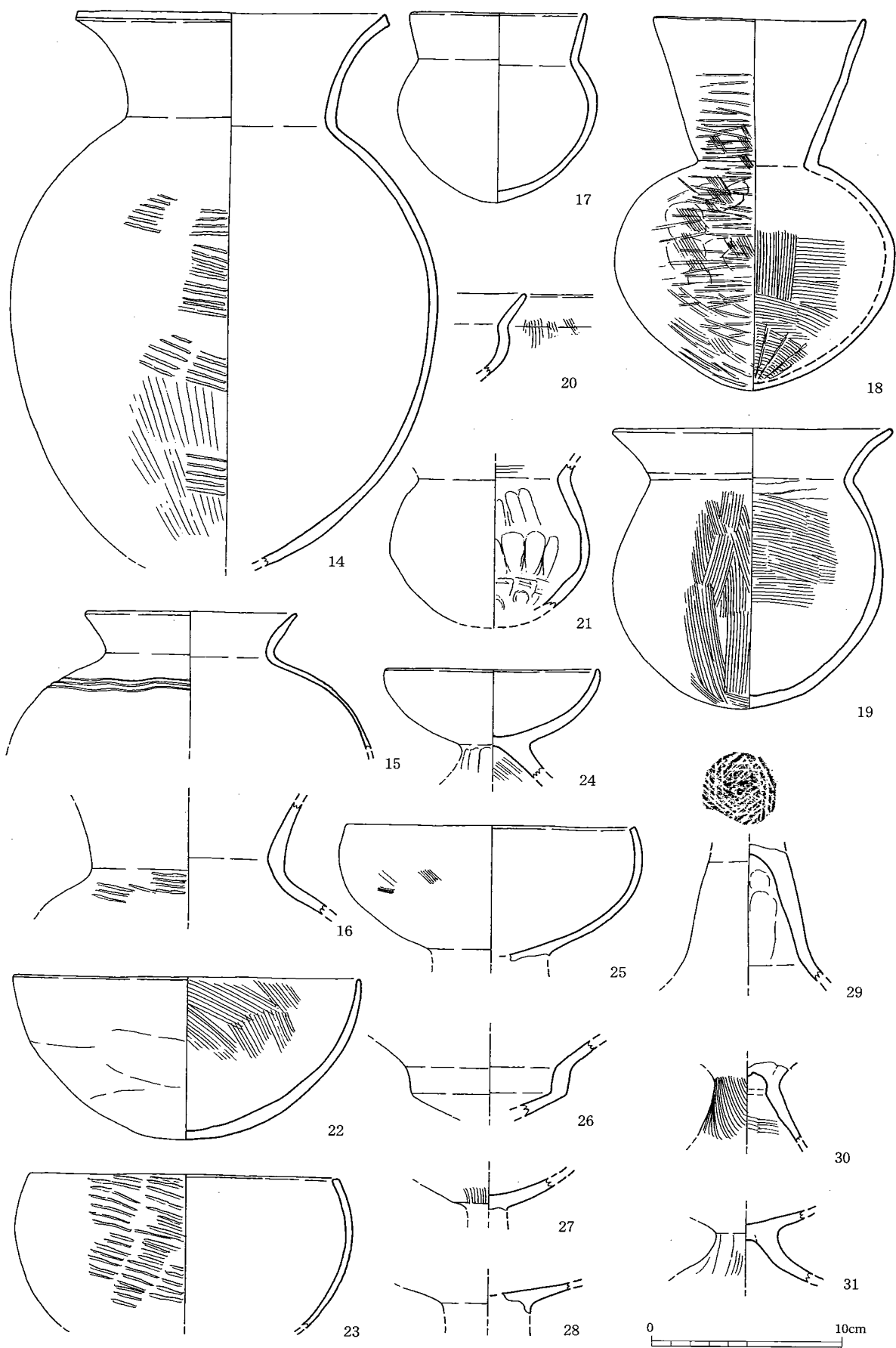
出土土器(図版58・59、第74~76図)

1~40は土師器である。1~13は甕である。1はわずかに外反する口縁である。肩部の器壁は厚い。外面は連続したタタキである。内面は粘土の接合痕が残るがナデである。口径15.4cmである。2は厚めの器壁で、あまり胴の張らない器形である。外面はタタキの後、部分的にハケメを施す。内面は圧痕が残るがハケメ調整である。口径16.5cmである。3は器壁が薄く、口縁端部を角ばって仕上げた。外面はタタキ調整。内面は摩滅している。口径19.0cmである。4は直線的な口縁が広がり、



第74图 4区9号竖穴住居跡出土土器実測図① (1/3)

端部はわずかにつまみ上げ気味である。胴部は球形に近い。外面はタタキで、部分的にハケメを施す。内面は口縁付近は横方向のハケメ、胴部はナデである。内外面に圧痕が多数残る。外面胴部にはスガが付着する。口径17.6cm、胴部最大径21.0cmである。5は口縁が長く薄い口縁である。端部をつまみあげる。外面の調整はハケメである。口径17.4cmである。6は直線的に広がる口縁で、端部をわずかにつまみあげ気味に仕上げる。器壁は薄い。外面はタタキ調整の後、部分的にハケメを施す。内面は粘土の接合痕と圧痕が残る。口径18.0cmである。7は直線的に広がる口縁で、端部をわずかにつまみあげ気味に仕上げる。外面はナデ調整。内面は横方向のハケメである。口径16.2cmである。8は直線的に広がる口縁で、端部を丸く仕上げる。外面の調整はハケメである。内面の調整は摩滅しているが、ケズリであろう。9はわずかに外反する口縁である。器壁は薄い。外面の調整はタタキ。内面の調整は摩滅しており不明である。口径18.4cmである。10はわずかに内湾する口縁部である。外面の調整はタタキ。内面の調整はナデであるが、圧痕が強く残る。11は口縁がわずかに内湾し、球形の胴部をもつものである。外面の調整はハケメ、内面はナデであるが、圧痕が残る。口径19.7cm、胴部最大径22.4cmである。12は口縁が内湾し、口縁端部をつまみあげ気味に仕上げる。外面はハケメ調整。内面はやや下った位置からケズリを施す。口径17.0cmである。13は器壁の薄い。外面は摩滅して不明。内面はケズリである。口径16.2cmである。14～16は壺である。14は口縁が外反しながら開く壺である。胴部はやや長めながらも球形に近い。外面の調整はタタキの後、底部付近はハケメが残る。内面はナデ調整である。口径16.5cm、胴部最大径22.2cmである。15は口縁部が短く直線的に開く壺である。肩部に3条の沈線を波状に施す。口径11.0cmである。16の外面にはタタキが残る。17は小型の壺である。直口でわずかに開く。口径9.1cm、胴部最大径10.3cm、器高9.9cmである。18は中型の直口壺である。外面はハケメの後、ミガキである。内面胴部はハケメである。口径11.2cm、胴部最大径14.2cm、器高19.4cmである。19は小型の甕である。外反する口縁に球形の胴部が付く。外面の調整はハケメである。内面もハケメであるが、口縁付近に粘土の接合痕が残る。口径14.5cm、胴部最大径14.0cm、器高14.7cmである。20は小型の鉢である。外面の調整はハケメである。21は小型の壺である。外面の調整は摩滅して不明。内面はナデであるが、圧痕が強く残る。胴部最大径10.4cmである。22は鉢である。外面はケズリ。内面はハケメである。口径18.0cm、器高8.5cmである。23は鉢である。口縁がわずかに内湾する。外面の調整はタタキである。口径16.0cm、胴部最大径17.5cmである。24～38は高杯である。24は椀状の杯部をもつ器形で杯部はナデ調整。脚部外面はケズリである。口径11.2cmである。25は椀状の杯部である。外面の調整はハケメである。口径15.0cm、胴部最大径15.7cmである。26は段をもつ杯部である。内外面の調整は摩滅のため不明である。27の外面はハケメ調整。内面には工具痕が残る。28の内面はナデ調整である。29は脚部で、杯部との接合面に表面積を広くするための刻みを施す。内面はナデである。30の内外面はハケメ調整である。31は杯部内面がナデ調整。脚部外面は縦方向のケズリである。32は脚部で、4箇所円形の穿孔を施す。外面の一部に黒斑が付着する。底径9.6cmである。33は円形の穿孔を行う脚部である。穿孔は1箇所のみ残存する。内外面の調整はナデであるが、杯部との境にはハケメが残る。底径11.6cmである。34も円形の穿孔を行う脚部である。内外面の調整はナデである。口径11.8cmである。35も円形の穿孔を行う脚部である。穿孔の下位には1条の沈線を巡らす。底径16.0cmである。36は脚端部片である。外面の一部にハケメが残存する。底径20.4cmである。37の底径は14.0cmである。38は高杯もしくは脚付鉢の脚端部であろう。底径19.0cmである。39は山陰系の器台である。内外面の調整はナデである。40は器台であろうか。上部を失っており、全体の形状は不明である。大きく広がる脚部で端部を屈曲させる。中位に台形の透かし窓を4箇所あける。窓の上位



第75图 4区9号竖穴住居迹出土土器实测图② (1/3)

には数条の沈線を巡らす。外面の調整はハケメ。内面の調整はハケメである。脚端部付近に黒斑が付着する。底径25.3cmである。41・42は弥生土器の台付甕の底部である。41の底部はきわめて薄い。内外面の調整はハケメである。底径10.2cmである。42の調整は不明。底径12.8cmである。

10号竪穴住居跡(図版26、第73図)

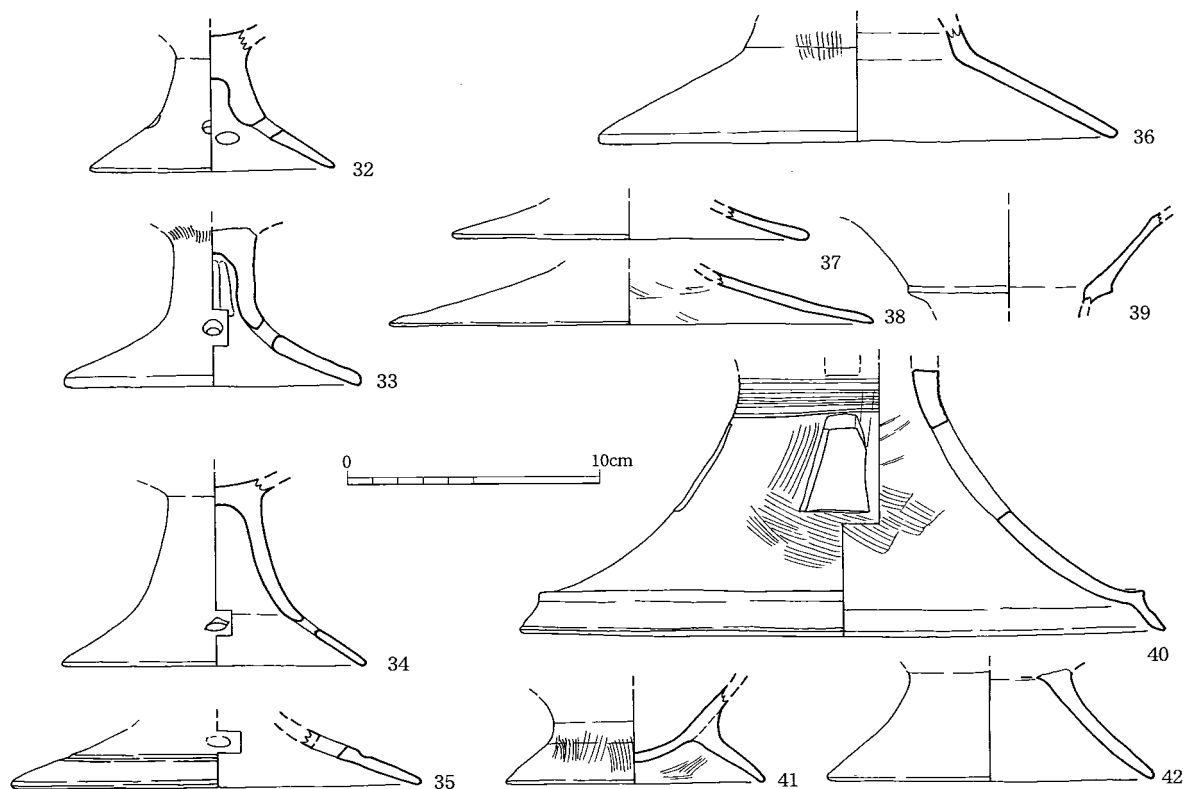
第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。11号竪穴住居跡を切り、9号竪穴住居跡、上面の4号溝に切られる。長軸500cm+ α ×短軸425cm+ α の方形を呈するものか。床面はほぼ平坦で、深さ15cmの掘り込みをもつ。床面下層の掘り込み等はない。遺物は出土していない。

11号竪穴住居跡(図版27、第77図)

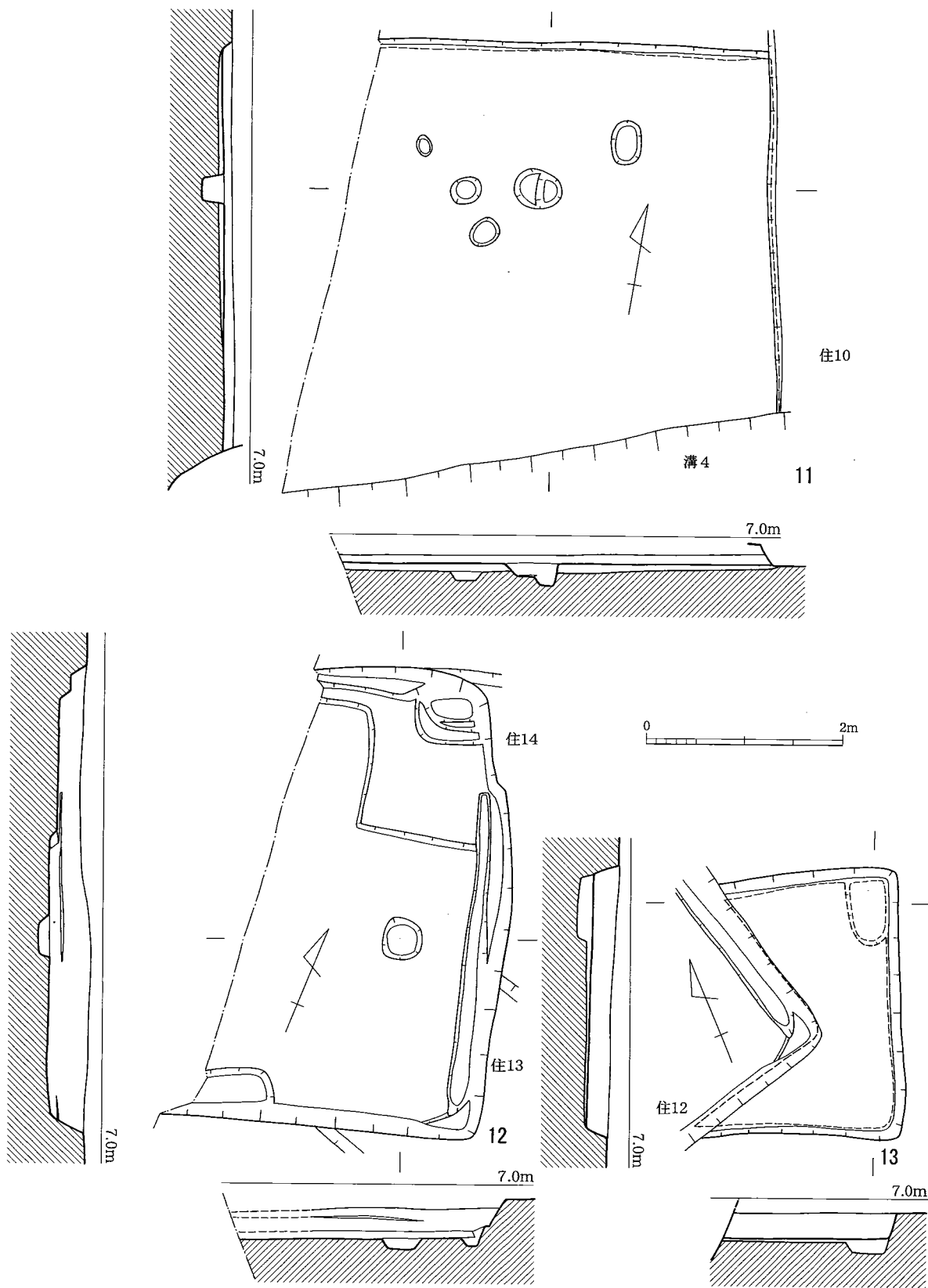
第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。10号竪穴住居跡、上面の4号溝に切られる。長軸480cm+ α ×短軸470cm+ α である。壁の深さは約10cmである。床面はほぼ平坦でピットをいくつか検出している。床面下層は全体に5cm程度掘り込まれる。遺物は土師器が出土している。

出土土器(第72図)

9~17は土師器である。9~11は甕である。9は口縁が長く直線的に広がるものである。外面はハケメ調整。内面はケズリの上からハケメを施す。口径15.6cmである。10は直線的に開く口縁である。内外面の調整はナデである。口径14.7cmである。11は器壁が厚く、わずかに外反する甕である。端部を丸く仕上げている。内外面の調整はナデである。口径16.0cmである。12は壺である。長く直線的に広がる口縁を角ばって仕上げている。外面はハケメ調整。内面は圧痕が残り、一部ハケメ調整



第76図 4区9号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/3)



第77图 4区11~13号竖穴住居跡実测图 (1/60)

である。口径18.3cmである。13は二重口縁壺の頸部である。内外面は摩滅しているが、内面に連続した圧痕が残る。14は壺の肩部である。外面には連続した刺突文が施される。内面は圧痕が残り、その上にもハケメを施される。15は鉢である。やや厚めの器壁である。外面は圧痕が残り、その上からハケメ調整を行う。内面はナデである。外面には黒斑が付着する。口径18.8cmである。16は鉢である。内外面の調整はハケメである。口径20.0cmである。17は小型の鉢である。内外面の調整はナデである。口縁部外側には黒斑が付着する。口径9.9cmである。

12号竪穴住居跡(図版27、第77図)

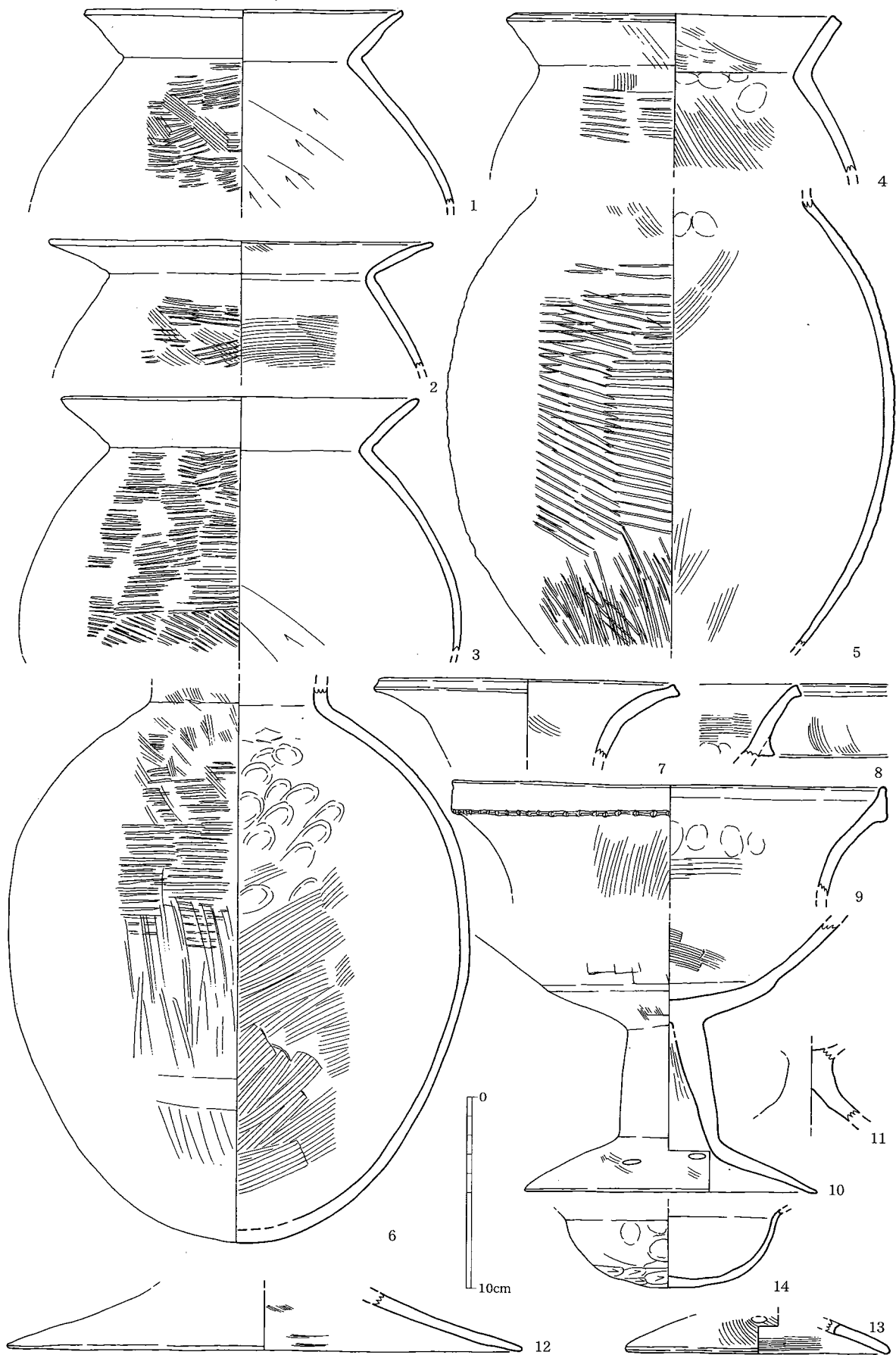
第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。西側は調査区外へ延びる。13・14号竪穴住居跡を切る。長軸290cm+ α ×短軸463cm+ α の長方形を呈するものと考えられる。床面までの深さは40cmで、北壁と東壁には壁小溝が掘られる。北東隅にはベッド状遺構が付設され、角には小土坑が掘られる。南壁の中央に当たるであろう部分には屋内土坑が掘り込まれる。床面で浅いピットを検出したが、支柱穴ではない。遺物は古墳時代前期の土器がまとまって出土している。

出土土器(図版59、第78図)

1～14は土師器である。1～5は甕である。1はわずかに外反する口縁部である。外面の調整はハケメ。内面の調整はケズリである。口径16.8cmである。2はわずかに外反しながら大きく開く口縁である。外面の調整はタタキの後、ハケメ。内面は横方向のハケメである。口径19.9cmである。3は直線的に開く口縁である。外面の調整はタタキのみである。内面はケズリである。口径18.6cm、胴部最大径23.1cmである。4は直線的に開く口縁で、端部を角ばって仕上げる。器壁が厚い。外面はタタキの後、部分的にハケメ。内面はハケメであるが、圧痕が口縁付近に残る。口径17.6cmである。5は胴部である。外面下位は擦痕が残り、中位はタタキ、それより上位には部分的にハケメが残る。内面はハケメが部分的に残存する。胴部最大径は23.3cmである。6～9は壺である。6はやや長めの胴部で丸底である。外面底部付近はナデ調整、それより上位はタタキの後にハケメを施す。内面は底部～中位はハケメ、それより上位には強い圧痕が多く残る。胴部最大径は23.8cmである。7は大きく外反しながら開く口縁である。端部を角ばって仕上げる。内面にハケメが残る。8は二重口縁の端部である。段部分に小さな断面三角突帯を貼り付ける。外面の調整はハケメ。内面の調整はハケメである。9は口縁端部下端を肥厚させるもので、その肥厚部分に刻み目を施す。外面はハケメ調整。内面もハケメであるが圧痕が残る。10～13は高杯である。10は段の付く杯部に屈曲する脚部をもつ。脚部には3箇所を円形の穿孔を施す。外面はハケメの後、ナデ調整である。杯部内面はハケメ調整。脚部内面には絞り痕が残る。底径14.0cmである。11は小型の高杯の脚部である。12は脚端部で内外面にはわずかにハケメが残る。口径26.6cmである。13は円形の穿孔を施す脚端部である。内外面の調整はハケメである。底径13.8cmである。14は外反口縁の鉢である。外面底部付近はケズリ、胴部付近はナデ調整。内面はナデ調整である。

13号竪穴住居跡(図版27、第77図)

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。14号竪穴住居跡を切り、12号竪穴住居跡に切られる。長軸200cm+ α ×短軸270cmの方形を呈すると考えられる。床面までの深さは約20cmである。床面は平坦で、ピット等は検出できなかった。床面下層は全体に掘り込まれ、北東隅が浅く掘り込まれる。遺物は古墳時代前期の土器が出土している。



第78图 4区12号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3)

出土土器(図版59、第72図)

18~24は土師器である。18~20は甕である。18は直線的に広がる口縁端部をつまみあげるものである。外面には圧痕が連続して残る。口径16.8cmである。19はわずかに外反する口縁で、端部をつまみあげる。内面にわずかにハケメが残る。口径21.8cmである。20はわずかに外反しながら大きく開く口縁である。内外面の調整はナデである。口径24.6cmである。21は鉢である。口縁はやや内湾気味である。口径16.2cmである。22は高杯の杯部である。外面には粗いミガキが施される。23・24は甕である。23の内面はケズリ。24は外面をタタキの後にハケメを行う。内面はハケメである。

14号竪穴住居跡(図版27、第79図)

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。12・13号竪穴住居跡に切られる。長軸260cm+ α ×短軸350cmの方形を呈するものと考えられる。床面までの深さは約20cmで、3箇所掘り込みがあるが、東壁中央の掘り込みは、支柱穴になりえる大きさと深さをもつ。床面下層の掘り込み等はない。遺物は弥生時代終末の土器が出土している。

出土土器(第80図)

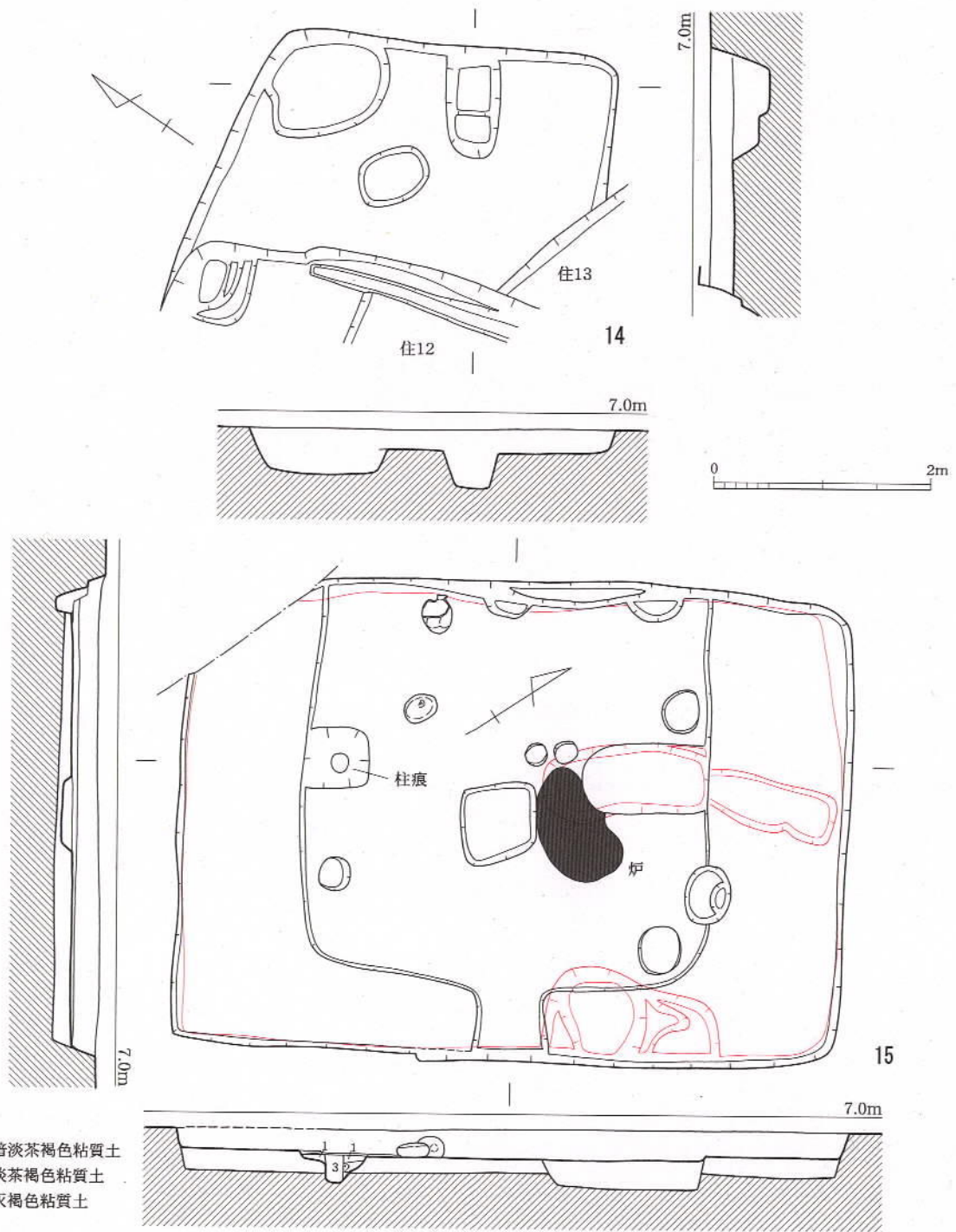
1~4は弥生土器である。1は口縁部を外反させる甕である。外面の調整はハケメである。内面の調整はナデである。2は壺の底部である。わずかに底部が残る。内外面の調整はナデである。3は甕の口縁部である。内外面の調整はハケメである。4は壺の口縁部であろうか。端部を角ばって仕上げた。内外面の調整はナデである。5は縄文晩期の浅鉢である。内外面の調整はミガキである。

15号竪穴住居跡(図版28、第79図)

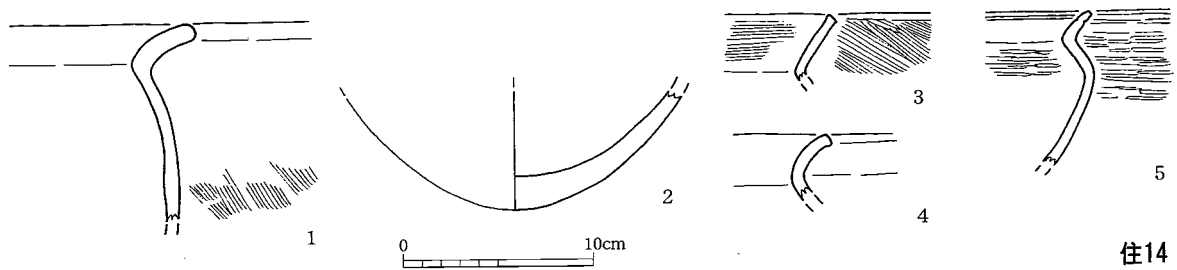
第二遺構面、調査区の中央で検出した。西側隅が調査区外へ延びる。長軸610cm×短軸440cmの整った長方形を呈する。床面までの深さは25cmで壁の立ち上がりは急である。長辺である東壁を中心に北壁と南壁にベッド状遺構が付設される。床面との差は3cmしかなく、掘り過ぎた可能性がある。西壁にはやや北によった位置にピット2基と段を検出しており、入り口等の何らかの施設があった可能性も考えられる。中央には深さ約10cmの方形の掘りこみがある。その北側の床面が焼けており、炉跡として使用されていたようである。南側のベッド状遺構と床面の境部分で、支柱穴と見られる柱痕を検出した。掘り方は約60cmの隅丸方形で、柱を据える部分を中心に20cm程度掘り込まれる。周囲は粘質土で埋められていた。柱痕部分は柔らかい灰褐色の粘質土が検出され、木質が腐食して空間になった後に粘質土が流入したものと考えている。柱痕の直径は約15cmであり、これは当時の木材の径を示すものであろう。これと対になる位置から床面検出時に柱穴らしきものを検出したがあまり自信がない。床面下層の検出のために床面を掘り下げた段階で、炉跡の位置に大きく重なるピットを検出しており、これが対になる支柱穴の掘り方であると考えている。床面は下層は全体に掘り込みがあったが、東壁のやや北にずれた位置で、土坑を検出した。屋内土坑の可能性も考えたが、ベッド状遺構と重なるため、床面下層掘削時の土坑と判断した。遺物は古墳時代前期の土器が出土している。なお、西壁で甕を検出したが、現在、所在不明である。

出土土器(図版60、第81・82図)

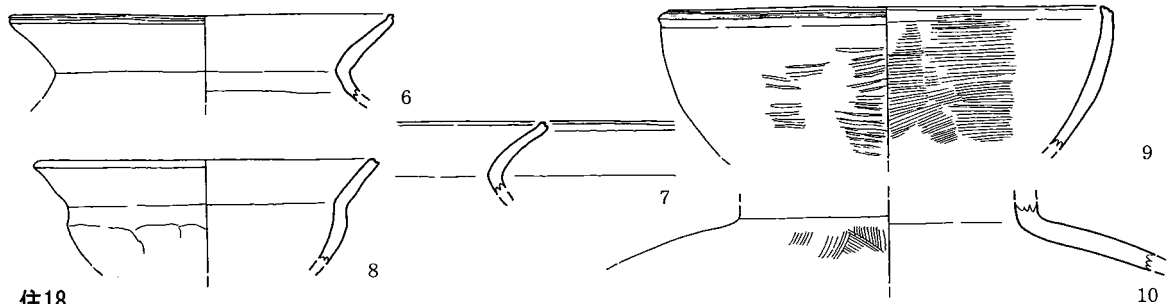
1~22は土師器である。1~9は甕である。1は直線的に広がる口縁部で端部は丸く仕上げる。外面はミガキの後、ハケメ調整。内面の調整はケズリで部分的にハケメである。外面下半部にはススが付着する。口径17.4cm、胴部最大径19.2cmである。2はやや厚めの器壁である。外面の調整はタタキの後、ハケメを部分的に施す。内面は圧痕が残り、その上にハケメを施す。口径17.5cm、胴部最



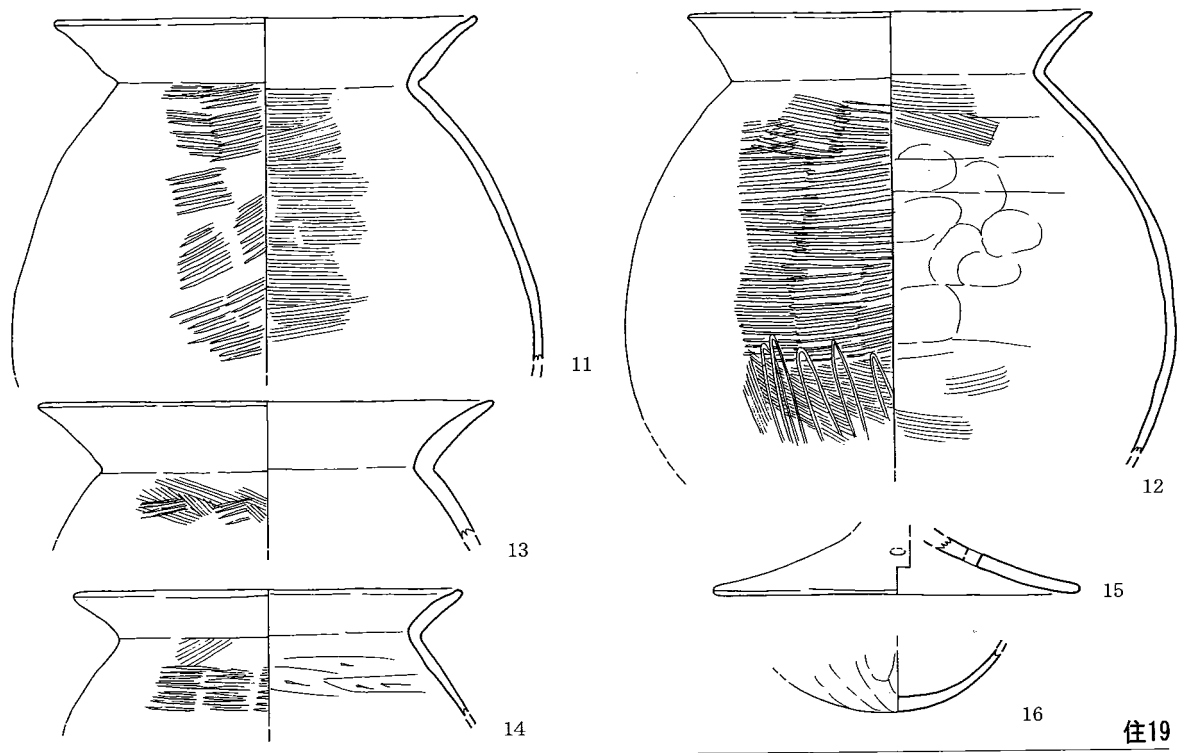
第79图 4区14・15号竖穴住居跡实测图 (1/60)



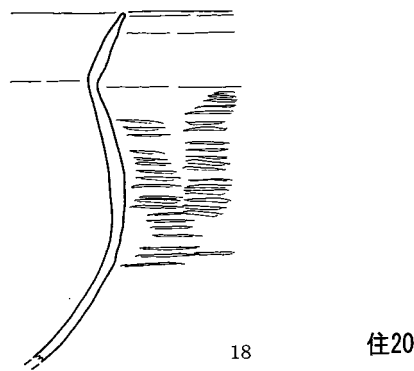
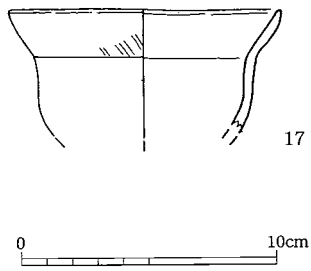
住14



住18

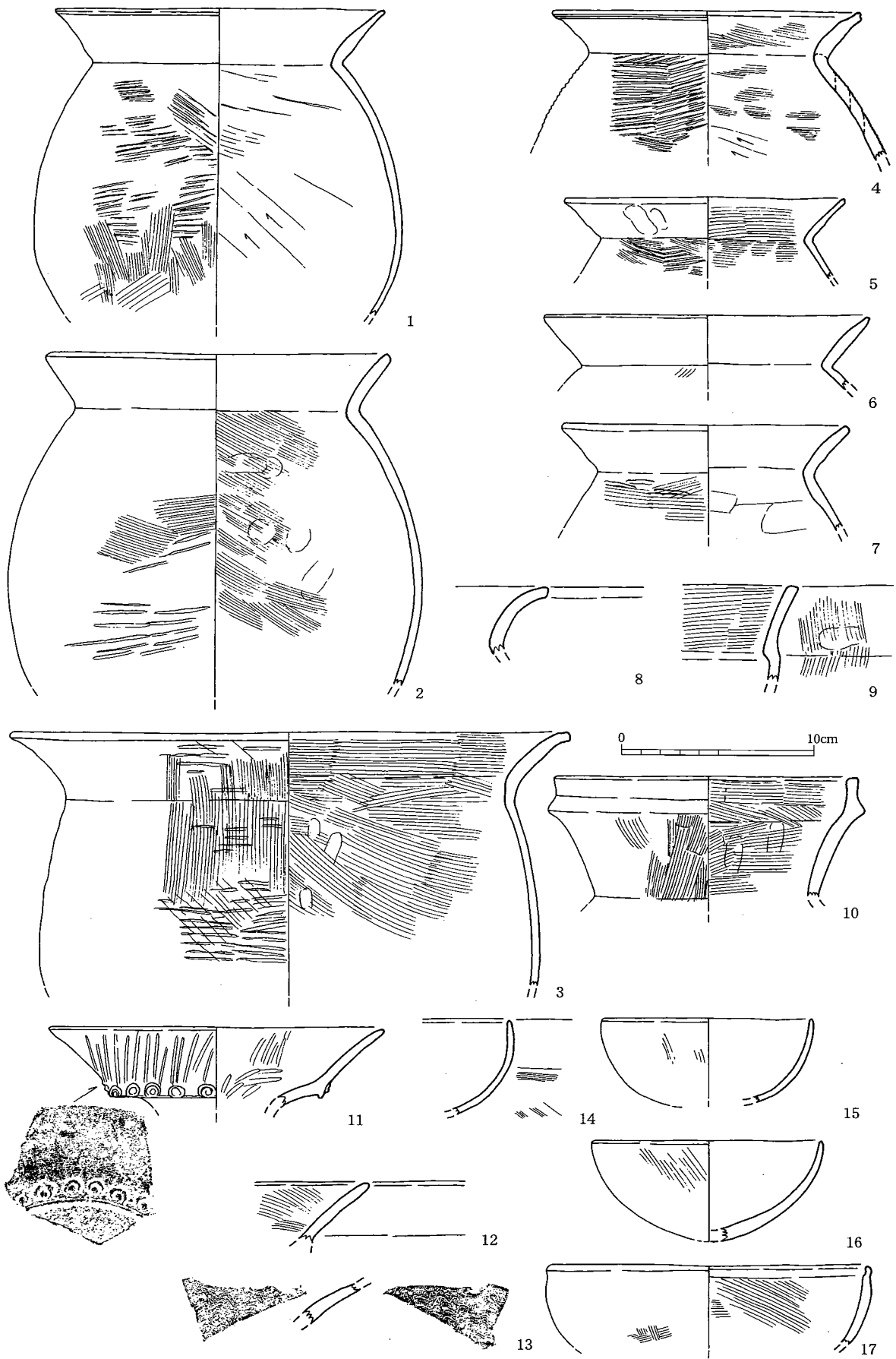


住19



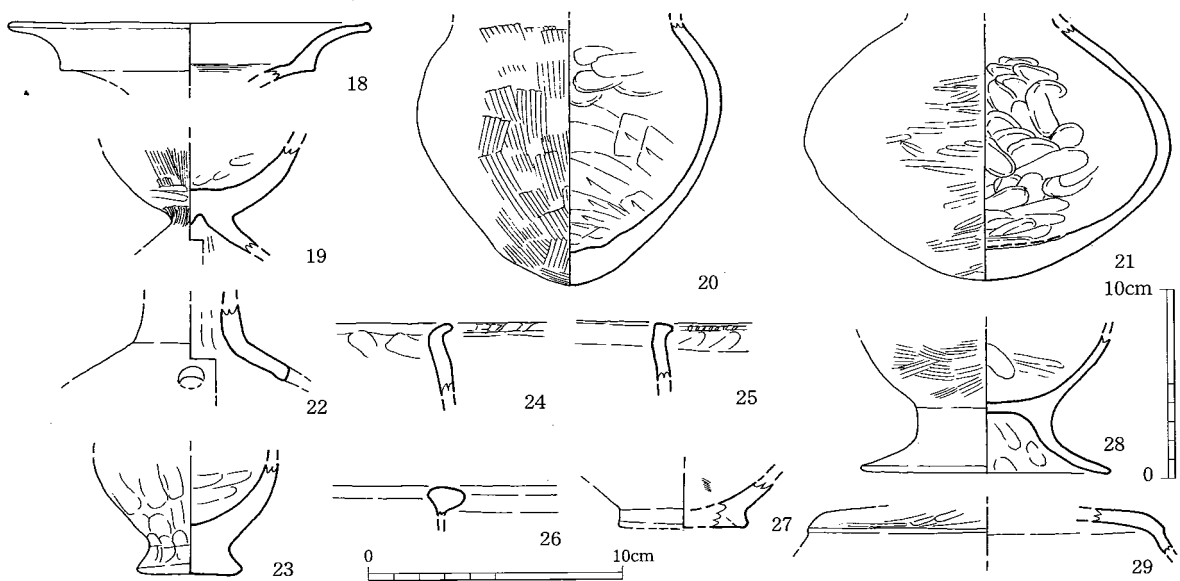
住20

第80図 4区14・18~20号竪穴住居跡出土土器実測図(1~5は1/4、他は1/3)

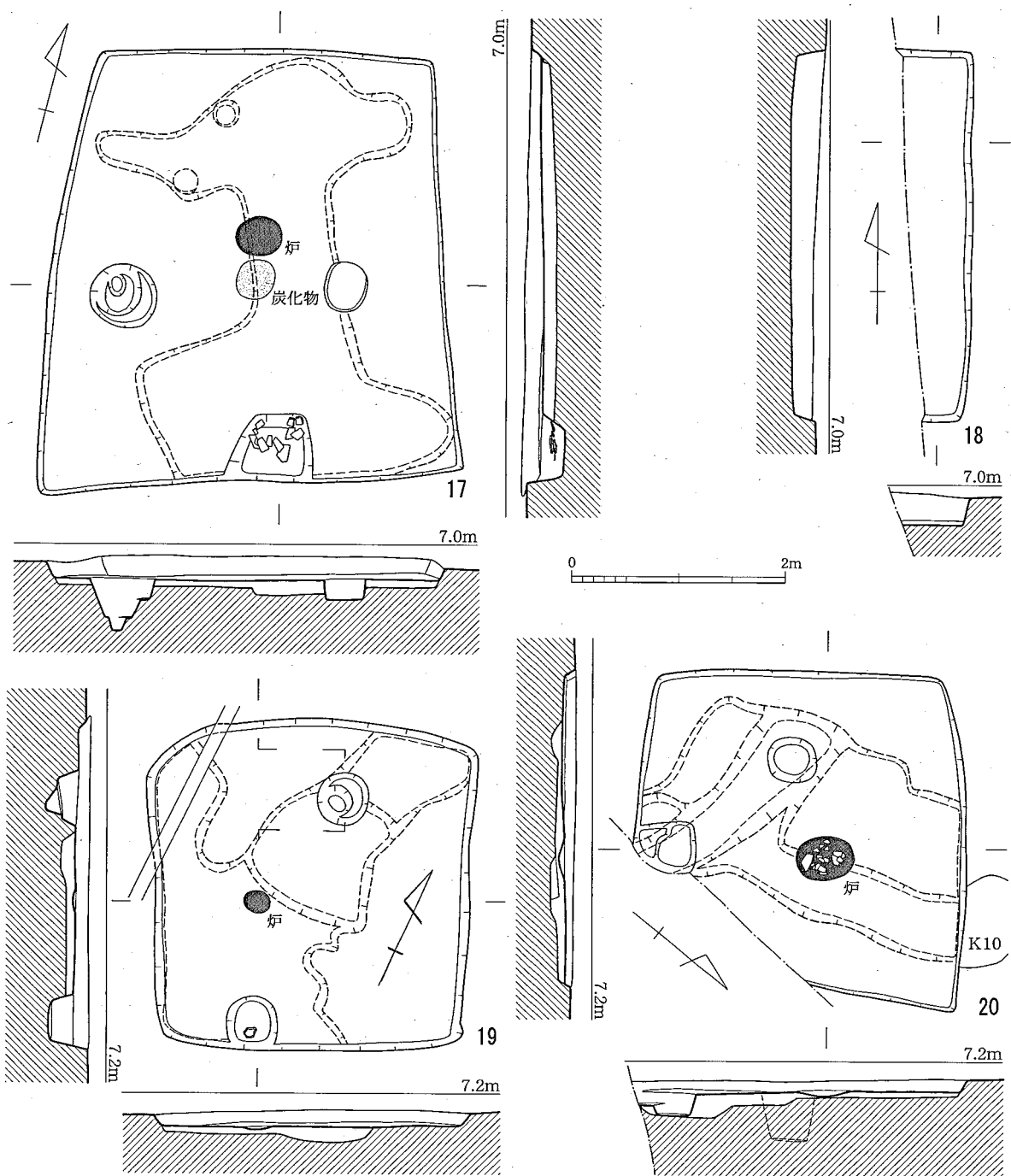


第81图 4区15号竖穴住居跡出土土器実測図① (1/3)

大径21.5cmである。3は頸部との境が明瞭でなく、口縁が緩やかに外反する甕である。外面は口縁部までタタキを施し、その上からハケメを部分的に行う。内面は一部に圧痕が残るが、全体にハケメ調整を行う。口径29.2cm、胴部最大径26.0cmである。4はわずかに外反する口縁で、端部をつまみあげるように仕上げる。外面はタタキ調整。内面はケズリの後ハケメを部分的に施す。胴部断面には内傾の接合痕が観察できる。口径16.2cmである。5は口縁が直線的に広がる器形で外面はタタキの後、ハケメ調整である。内面は横方向のハケメである。口径14.8cmである。6の口径は17.0cmである。7はやや厚めの器壁である。外面はタタキの後、横方向のハケメ。内面胴部はかなり下った位置からケズリを施す。それ以外の部分はナデである。8は緩やかに大きく外反する口縁である。内外面の調整はナデである。9はやや大型の甕の口縁であろうか。外面は縦方向のハケメ。内面は横方向のハケメである。10~13は壺である。10はわずかに外反する口縁を屈曲させ、その部分を肥厚させ、突帯状に仕上げる。外面の調整はハケメ。内面の調整はハケメである。11は二重口縁壺の口縁である。外反する途中で屈曲させ、粘土帯を貼り付ける。円形の粘土を貼り付け、竹管文を施す。外面は縦方向のミガキ。内面の調整もミガキである。口径17.4cmである。12は壺の口縁部片である。内面の調整はハケメである。13は壺の口縁部付近であろうか。内外面に波状文を施す。14~17は鉢である。14の外面はハケメである。15の外面の調整はハケメ。内面の調整はハケメである。口径11.0cmである。16は外面はハケメ調整。内面はナデである。口径12.0cm、器高5.1cmである。17は内外面ともにハケメ調整である。口径16.6cmである。18は段をもつ高杯の杯部である。内外面の調整は摩滅して不明である。口径14.0cmである。19は椀状の杯部をもつ高杯である。内外面の調整はハケメである。20・21は小型の壺であろうか。20の外面はハケメ調整。内面下位はケズリ、上位は圧痕の残るナデである。胴部最大径12.0cmである。21の外面はミガキ。内面には強い圧痕が多数残る。胴部最大径14.5cmである。22は高杯の脚部である。円形の穿孔を施している。23は手づくね土器である。底径3.5cmである。24~28は混入の弥生土器である。24は口縁端部を折り曲げるもので、刻み目を施している。内外面の調整はナデである。25は口縁外端部をわずかにつまみ出し、



第82図 4区15号竪穴住居跡出土土器実測図② (24~28は1/4、他は1/3)



第83图 4区17~20号竖穴住居跡实测图 (1/60)

刻み目を施すものである。26は断面三角の甕の口縁部である。27は底部片である。底径6.2cmである。28は台付甕の底部である。外面はハケメ。内面はナデである。底径は12.8cmである。29は土師器の杯蓋である。外面の調整はミガキである。

16号竪穴住居跡として掘削を行った部分は、後に遺構ではないことが判明したため、混乱を避けるために欠番とした。

17号竪穴住居跡(図版29、第83図)

第二遺構面、調査区の中央やや北寄りで検出した。長軸400cm×短軸395cmの台形を呈する。床面までの深さは約10cmである。床面はほぼ平坦で、中央付近の2箇所で炭化物の集積が見られ、炉跡と考えられる。炉跡の東西でピットを検出しており、支柱穴の可能性を考えている。南壁中央には屋内土坑が掘り込まれる。床面下層は全体に掘り込みがある。遺物は古墳時代前期の土器が出土している。

出土土器(図版60、第84図)

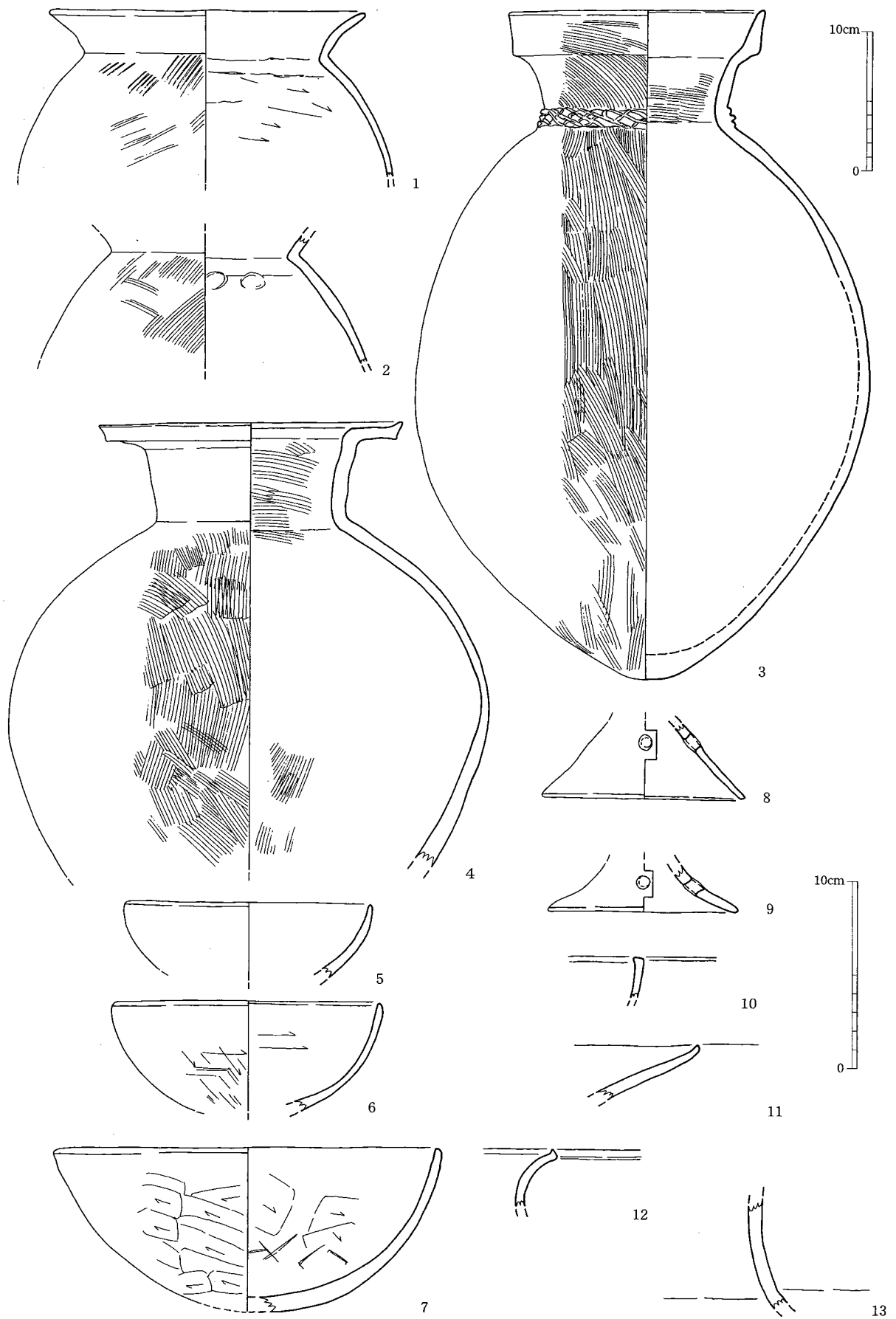
1～13は土師器である。1・2は甕である。1は口縁がわずかに外反しながら開く甕である。外面の調整はハケメ。内面の調整はケズリである。口径17.0cmである。2は甕の肩部である。外面はタタキの後、ハケメ調整。内面はナデで、粘土の接合痕と圧痕が残る。3・4は壺である。3は口縁の屈曲部を肥厚させて二重口縁状に仕上げる。頸部と肩部の境には粘土帯を貼り付け、斜格子状に刻み目を施す。胴部はやや長胴気味である。底部はわずかに残る。外面の調整はハケメ。内面はナデで、部分的にハケメである。底部付近に黒斑が付着する。口径18.5cm、胴部最大径32.6cm、器高48.0cmである。5～7は鉢である。内外面の調整はナデである。口径12.2cmである。6の外面はケズリ。内面は部分的にケズリ。口径14.6cmである。7は内外面ともにケズリである。口径20.7cm、器高8.8cmである。8・9は高杯の脚部である。8は直線的に広がり、円形の穿孔を施す。底径11.0cmである。9はわずかに外反する。円形の穿孔を施す。底径10.2cmである。10は鉢であろうか。11は高杯等の口縁部か。外面には黒斑が付着する。12は甕の口縁部か。内外面の調整はナデである。13は器種は不明であるが脚部である。内外面の調整はナデである。

18号竪穴住居跡(図版29、第83図)

第二遺構面、調査区の中央やや北寄りで検出した。長軸70cm+ α ×短軸345cmで住居の端部を検出したのみである。床面までの深さは約25cmで、壁の立ち上がりは急である。床面に掘り込み等はない。遺物は古墳時代前期の土器が出土している。

出土土器(第80図)

6～10は土師器である。6は直線的に広がり、口縁端部をつまみあげる甕である。胴部内面はケズリである。口径15.0cmである。7は口縁が外反する甕の口縁で、端部をつまみあげる。胴部内面はケズリである。8は外反する鉢である。胴部外面はケズリで、他はナデである。口径13.5cmである。9は鉢である。外面はタタキ。内面はハケメである。口径18.0cmである。10は壺の肩部である。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデである。



第84図 4区17号竪穴住居跡出土土器実測図 (3は1/4、他は1/3)

19号竪穴住居跡(図版29、第83図)

第二遺構面、調査区の北寄りで検出した。長軸310cm×短軸290cmの方形を呈する。床面までの深さは約10cmである。床面中央よりやや東で炉跡を検出している。南壁に屋内土坑が掘り込まれる。床面下層は西側を中心に5cm程度掘り込まれる。遺物は古墳時代前期の土器が出土している。

出土土器(図版60、第80図)

11～16は土師器である。11～14は甕である。いずれもわずかに外反する口縁である。11の外面の調整はタタキである。内面は横方向のハケメである。口径16.6cm、胴部最大径21.4cmである。12の外面はタタキ調整の後、下半部にはハケメ。その上から板状工具による波状の痕跡が残る。内面は粘土の接合痕が水平に3条残る。全体に圧痕があり、その上から部分的にハケメを施す。外面にはススが付着する。口径16.0cm、胴部最大径21.6cmである。13は外面がタタキの後にハケメ調整。口径19.6cmである。14は外面がタタキの後にハケメである。内面は横方向のケズリである。口径14.8cmである。15は脚付鉢の脚部であろうか。円形の穿孔を施す。内外面の調整はナデである。底径14.2cmである。16は丸底の鉢の底部である。外面はケズリ。内面はナデである。

20号竪穴住居跡(図版30、第83図)

第二遺構面、調査区の北寄りで検出した。10号甕棺墓を切る。東端は調査区外に延びる。床面までの深さは約10cmである。中央に炉跡を検出した。南壁に屋内土坑が掘り込まれる。中央部分を中心に床面下層が掘り込まれている。遺物は古墳時代前期の土器が出土している。

遺物は古墳時代前期の土器が出土している。

出土土器(第80図)

17・18は土師器である。17は口縁の外反する鉢である。内外面の調整はナデであるが、わずかにハケメが残る。18は甕である。外面の調整はタタキである。内面の調整は摩滅して不明である。

(2) 甕棺墓

1号甕棺墓(図版30、第85図)

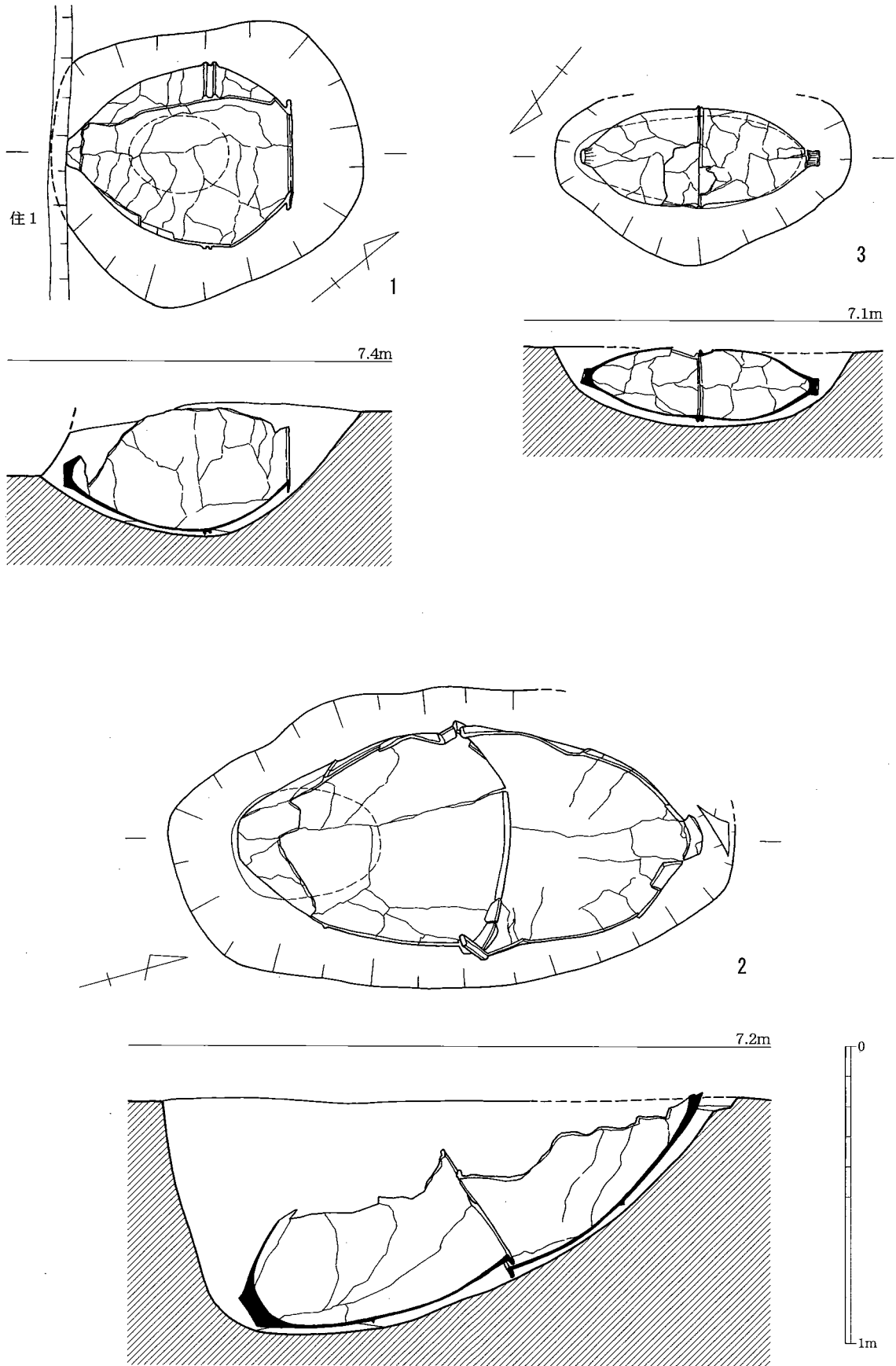
第一遺構面、調査区の北端部で検出した。墓坑の南端を5号竪穴住居跡に切られる。単棺の中人用甕棺墓である。本来、木蓋等があった可能性もある。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度はほぼ水平である。主軸はN-40°-Eである。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版61、第86図)

球形の胴部をもつ中型の甕である。口縁部は内外に大きく張り出すが、内側の張り出しが大きい。胴部最大径の部分に小さな断面三角突帯を2条貼り付ける。底部は平底で薄い。外面はナデ調整。内面もナデ調整である。胴部の突帯を中心に大きく黒斑が付着する。口径37.8cm、胴部最大径61.8cm、底径11.8cm、器高73.4cmである。色調は淡橙色を呈する。

2号甕棺墓(図版30、第85図)

第一遺構面、調査区の南端部で検出した。小児用の3号甕棺墓に切られる。合せ口の成人用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度は32°である。主軸はN-16°-Eである。弥生時代中期前半頃と考えられる。



第85图 4区1~3号甕棺墓实测图 (1/20)

出土土器(図版61、第86図)

上甕は全体に膨らみのある器形である。口縁部は外側に大きく張り出し、角ばって仕上げられる。口縁端部にはごくわずかに窪みが残存する。胴部中位よりやや下がった位置に小さな断面三角突帯を貼り付ける。底部は平底であるが、やや厚い。外面の調整はナデ調整。内面の調整はナデ調整である。口径64.8cm、胴部最大径62.4cm、底径10.7cm、器高86.2cmである。色調は灰黄褐色～橙褐色を呈する。

下甕は全体に膨らみのある器形である。口縁部は外側に大きく張り出し、角ばって仕上げられる。内側にも比較的伸びる。胴部中位よりやや下がった位置に小さな断面三角突帯を貼り付ける。底部は平底であるが、かなり厚い。外面の調整はハケメである。内面はナデ調整であるが、部分的に圧痕が残る。底部底面に黒斑が付着する。口径66.2cm、胴部最大径63.6cm、底径12.0cm、器高85.4cmである。色調は黄褐色～橙褐色を呈する。

3号甕棺墓(図版30、第85図)

第一遺構面、調査区の南端部で検出した。成人用の2号甕棺墓を切る。合せ口の小児用甕棺墓である。墓坑は甕棺墓の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度は3°である。主軸はN-50°-Eである。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版66、第88図)

上甕はやや胴の張る器形である。口縁部は断面三角であるが、わずかに内側にも張り出す。底部は厚底で小さく上底である。外面の調整はハケメである。内面の調整はハケメ後、ナデである。部分的に圧痕が残る。底部底面に黒斑が付着する。口径34.8cm、胴部最大径33.3cm、底径5.1cm、器高39.6cmである。色調は淡褐色を呈する。

下甕はわずかに胴の張る器形である。口縁は断面三角である。底部は厚底で小さく、上底である。外面の調整は摩滅しているが、ハケメであろう。内面の調整はナデである。内面底部付近には圧痕が残る。底部外面には黒斑が付着する。口径32.4cm、胴部最大径31.2cm、底径5.0cm、器高38.9cmである。色調は白茶色～褐色を呈する。

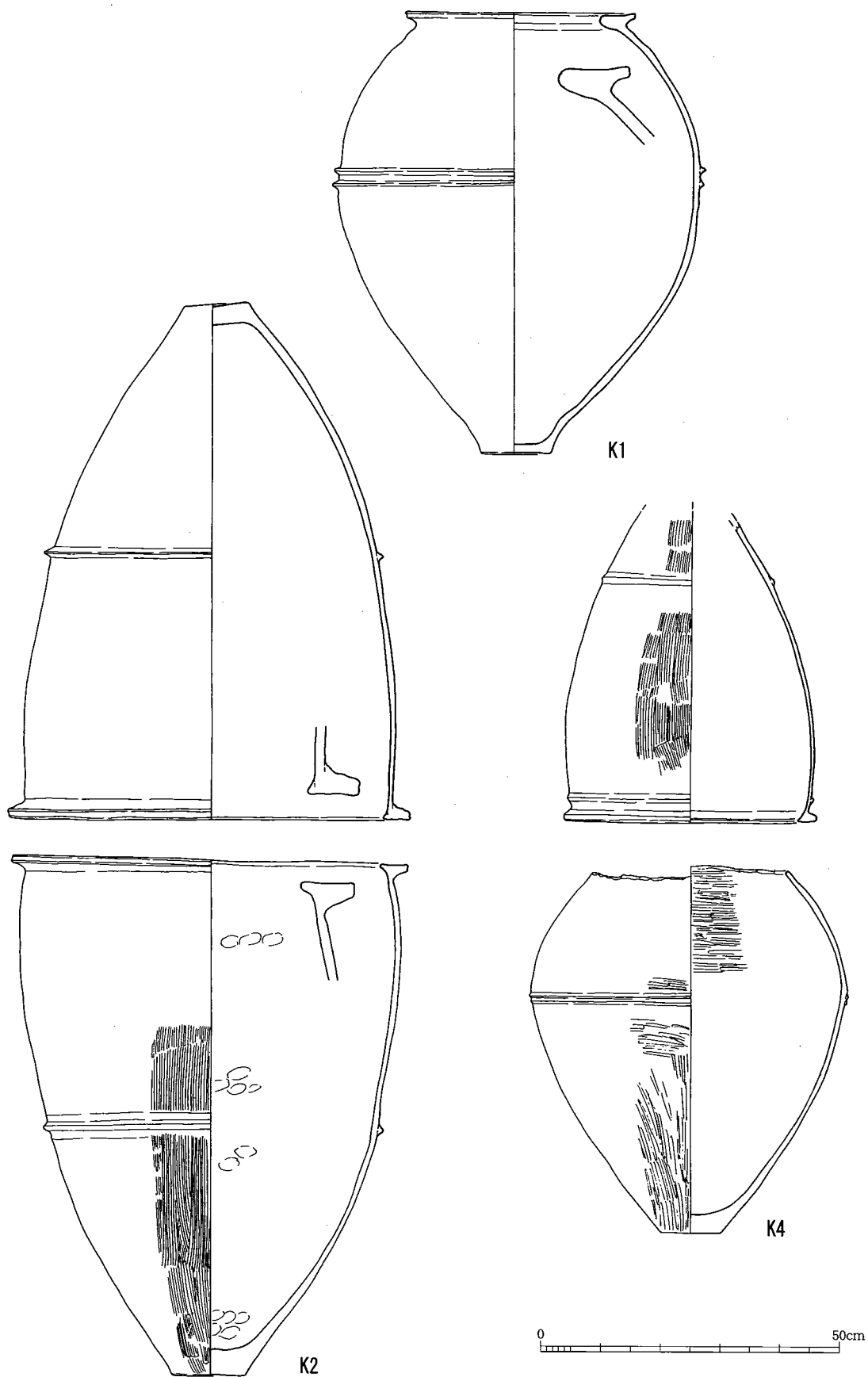
4号甕棺墓(図版31、第87図)

第二遺構面、調査区の南端部で検出した。上甕部分を6号竪穴住居跡に大きく切られる。合せ口の中人用甕棺墓である。墓坑は非常に検出しづらかったが甕棺の形状に合わせて掘り込まれると考えられる。埋置角度はほぼ水平である。主軸はN-55°-Wの方位をとる。時期は弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版62、第86図)

上甕は住居に切られるために胴部の大部分と底部を欠失する。比較的胴の張る中型の甕である。口縁部は断面三角を呈するが、端部は丸く仕上げる。口縁下に小さな断面三角突帯を貼り付ける。胴部のかなり下がった位置に小さな断面三角突帯を貼り付ける。外面の調整は縦方向のハケメであるが、口縁下は横方向のハケメである。口径41.6cm、胴部最大径41.6cmである。色調は暗褐色を呈する。

下甕は焼成後に口縁付近を打ち欠いている。胴部が球形に大きく張る器形である。胴部最大径付近に小さな断面三角突帯を2条貼り付ける。底部は平底であるが、やや厚い。外面の調整は底部付近は縦方向のミガキ、それより上位は横方向のミガキを行う。内面の調整は横方向のミガキである。



第86图 4区1·2·4号甕棺实测图 (1/10)

外面底部付近に黒斑が大きく付着する。残存する状況で口径33.3cm、胴部最大径53.5cm、底径10.0cm、残存の器高61.1cmである。色調は橙褐色～茶褐色を呈する。

5号甕棺墓(図版31、第87図)

第二遺構面、調査区の南端部で検出した。合せ口の成人用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度はほぼ水平である。主軸はN-46°-Wの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版62、第89図)

埋置の状況がほぼ水平であったために上下をつけていない。東甕と西甕と呼称し、説明を行う。東甕は胴の張らない器形で、全体に細い印象を受ける。口縁部は外側に大きく内側に小さく張り出すものである。胴部中位にやや大きめの三角突帯を貼り付けている。他のものより突帯の位置がやや高い。底部はやや小さく厚い。外面の調整はハケメ。内面もハケメである。底部内外面および胴部突帯より上位に黒斑が付着する。口径64.8cm、胴部最大径60.6cm、底径10.6cm、器高88.2cmである。色調は茶褐色を呈する。

西甕はわずかに胴の張る器形である。口縁部は外側に大きく張り出す。胴部中位よりやや下がった位置に小さな断面三角突帯を貼り付ける。底部は小さめの平底である。外面の調整は縦方向のハケメで、口縁部下は横方向の粗いハケメを施す。底部底面と胴部突帯より上位に黒斑が付着する。口径68.8cm、胴部最大径63.4cm、底径9.8cm、器高85.6cmである。色調は淡橙色を呈する。

6号甕棺墓(図版31、第87図)

第二遺構面、調査区の南端部で検出した。合せ口の小児用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度は4°である。主軸はN-43°-Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

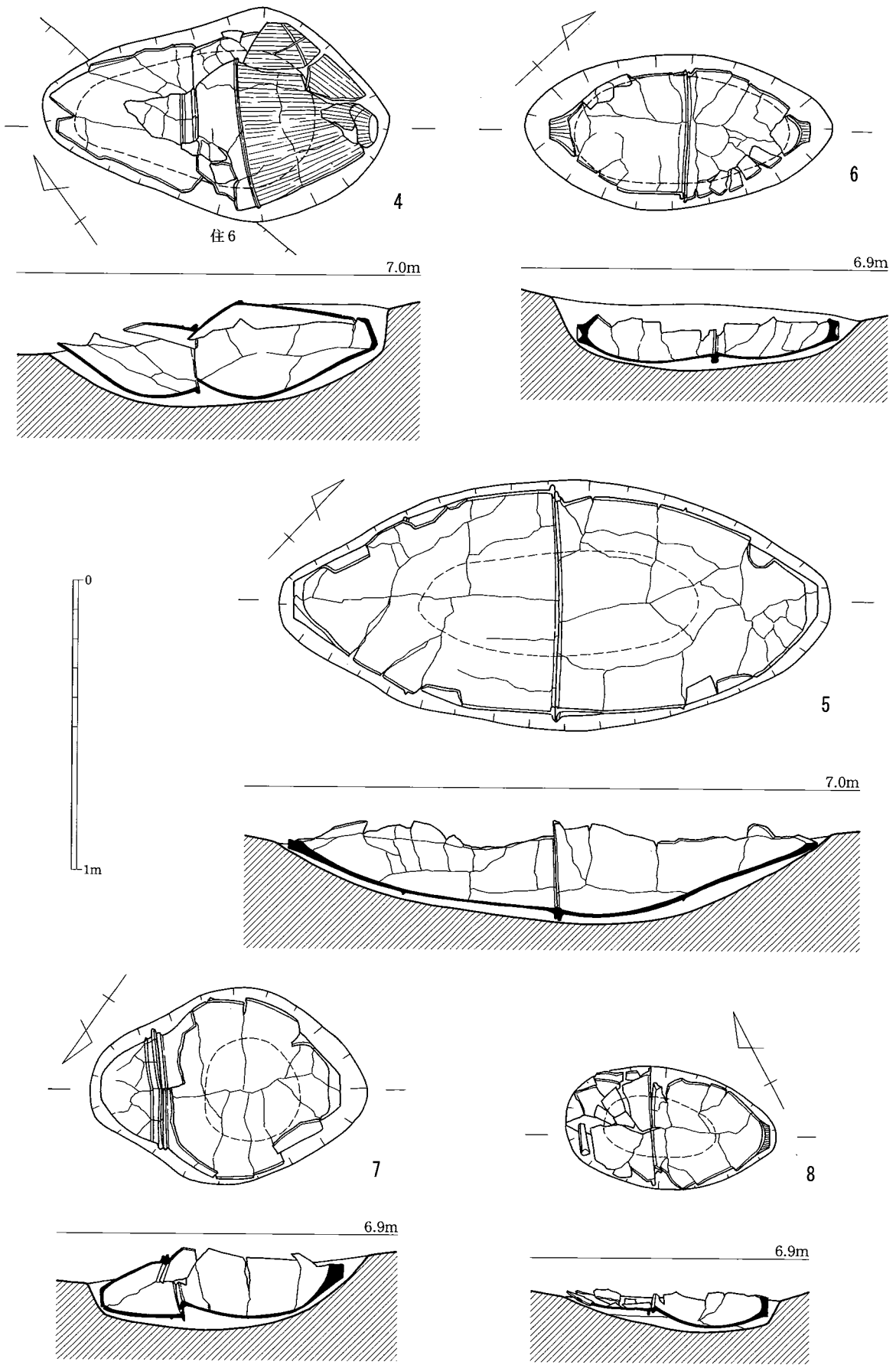
出土土器(図版66、第88図)

上甕はわずかに胴の張る器形である。口縁部は断面三角形であるが、端部の仕上げは丸い。底部は厚底で、比較的小さく上底である。外面の調整は摩滅しているがハケメであろう。内面はナデ調整。底部付近に黒斑が付着する。口径35.0cm、胴部最大径33.6cm、底径65.0cm、器高42.0cmである。色調は黄褐色～灰黄色を呈する。

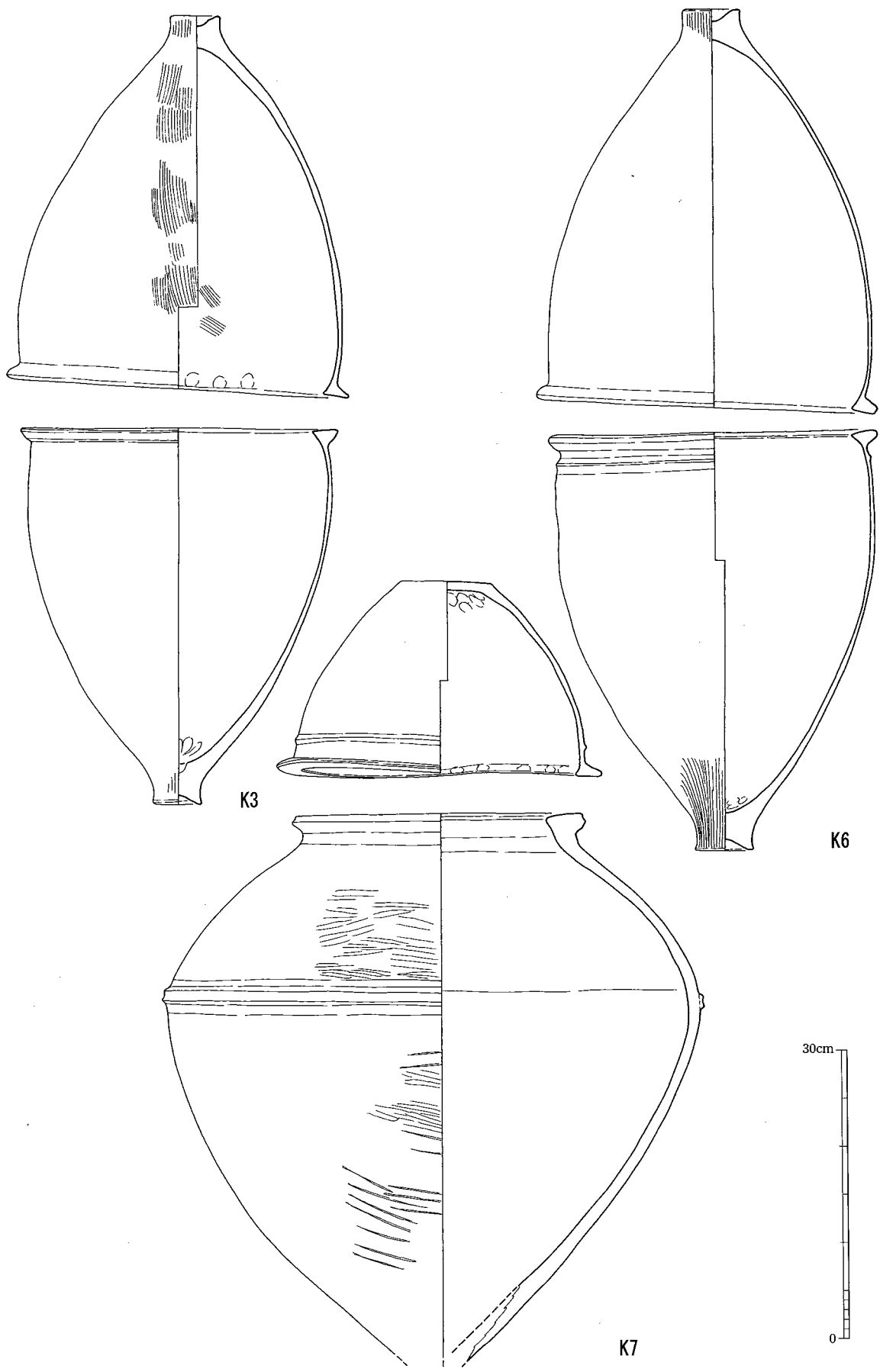
下甕もわずかに胴の張る器形である。口縁部は断面三角形であるが、端部の仕上げが丸く、大きく内湾させている。口縁下に小さな三角突帯を貼り付ける。底部は厚底で比較的小さく、上底である。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデである。内面全体が黒変しており、黒塗りもしくは黒斑の両方の可能性がある。口径33.8cm、胴部最大径32.7cm、底径5.9cm、器高43.5cmである。色調は黄褐色を呈する。

7号甕棺墓(図版32、第87図)

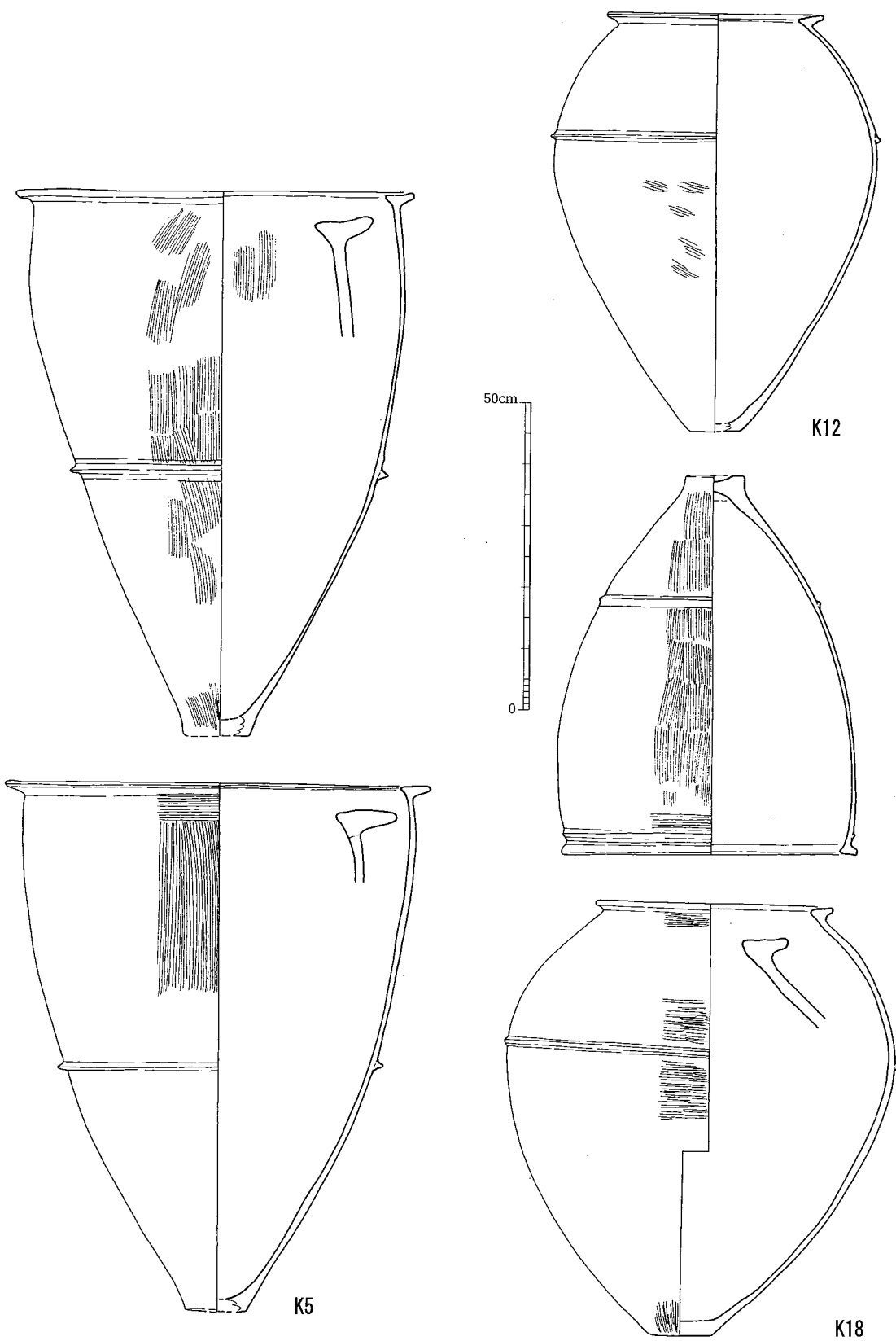
第二遺構面、調査区の南端部で検出した。合せ口の中人用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。上甕は原位置を保ってないようである。下甕の埋置角度は3°である。主軸方位はN-55°-Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。



第87图 4区4~8号甕棺墓实测图 (1/20)



第88图 4区3·6·7号甕棺实测图 (1/6)



第89图 4区5·12·18号甕棺实测图 (1/10)

出土土器(図版63、第88図)

上甕は鉢である。口縁部は断面三角で、端部のつくりは丸い。内側にもやや張り出す。口縁下に小さな断面三角突帯を貼り付ける。底部は平底である。外面はナデ調整。内面はナデ調整で、口縁付近には連続した圧痕が残る。また、底部付近にも圧痕が多く残る。外面底部付近には黒斑が大きく付着する。口径33.3cm、底径9.2cm、器高20.3cmである。色調は淡褐色～茶褐色を呈する。

下甕は底部を失う。胴の大きく張る器形で、全体のつくりが厚い。口縁部は厚い粘土帯を貼り付けた形状で、外端部にわずかに窪みが残る。胴部最大径の部分に断面「M」字状の小さな突帯を貼り付ける。外面の調整は横方向のミガキである。部分的に工具痕が残る。内面は剥離が著しいが、ナデ調整である。内面が黒変しており、黒塗りもしくは黒斑の可能性はある。口径30.1cm。胴部最大径54.8cmである。色調は褐色を呈する。

8号甕棺墓(図版32、第87図)

第二遺構面、調査区の中央部分で検出した。合せ口の小児用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度は10°である。主軸はN-63°-Wの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版66、第91図)

上甕は削平により底部を失う。胴の張る器形である。口縁部は外側に大きく張り出す。口縁下に小さな断面三角突帯を貼り付ける。外面の調整はハケメである。内面はナデ調整である。一部圧痕が残る。口径31.8cm、胴部最大径31.8cmである。色調は褐色を呈する。

下甕は胴部最大径がやや下がっており、やや寸胴な印象を受ける。口縁部は外側に大きく張り出す。口縁下に小さな断面突帯を貼り付ける。底部は大きめでやや厚い。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデ調整で、底部付近と口縁付近に圧痕が残る。底部底面に黒斑が付着する。口径27.8cm、胴部最大径28.3cm、底径7.9cm、器高38.0cmである。色調は白茶色～褐色を呈する。

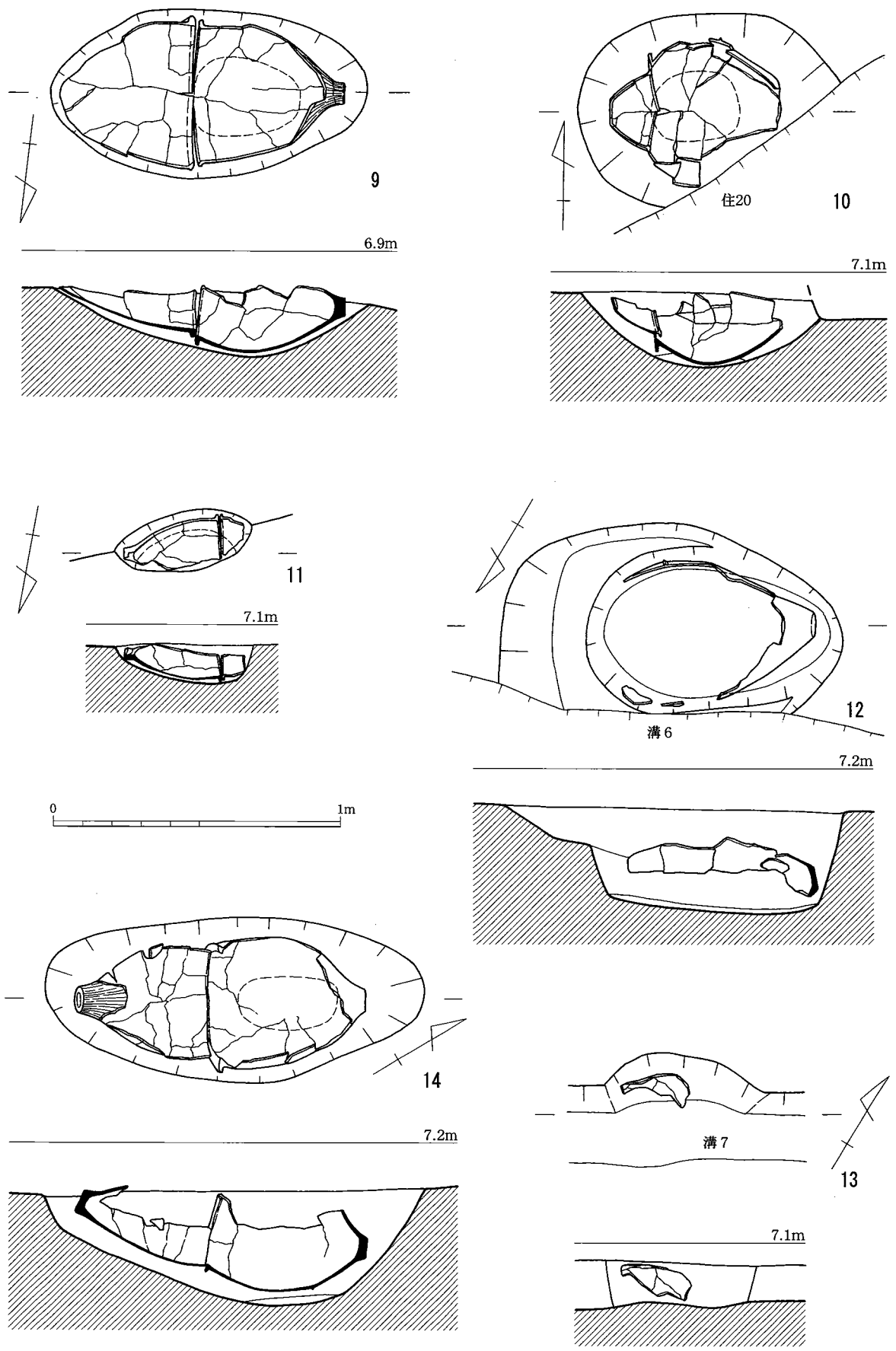
9号甕棺墓(図版32、第90図)

第二遺構面、調査区の中央部分で検出した。合せ口の中人用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度は3°である。主軸はN-81°-Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版66、第91図)

埋置の状況がほぼ水平であったために上下をつけていない。東甕と西甕と呼称し、説明を行う。東甕は胴の張る器形である。口縁は外側に張り出す。口縁下に小さな断面三角突帯を貼り付けている。底部は厚底で、わずかに上底気味である。外面はハケメ調整。内面はナデ調整である。底部と胴部中に黒斑が付着する。口径41.7cm、胴部最大径43.0cm、底径7.8cm、器高51.9cmである。色調は灰褐色を呈する。

西甕は底部を失う。胴の張る器形である。口縁部は外側に大きく、内側にわずかに張り出す。口縁下に小さな断面三角突帯を貼り付ける。外面の調整は摩滅しているがハケメであろう。内面はナデであるが、突帯貼り付け時の圧痕が残っている。口径45.0cm、胴部最大径47.6cmである。色調は黄橙色を呈する。



第90图 4区9~14号甕棺墓実測图 (1/20)

10号甕棺墓(図版33、第90図)

第二遺構面、調査区の北側で検出した。下甕の底部付近を20号竪穴住居跡に切られる。合せ口の中人用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせてやや大きめに掘り込まれる。埋置角度はほぼ水平である。主軸はN-1°-Wの方位をとる。時期は弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版66、第91図)

上甕は小型の鉢である。口縁は両側に張り出す。底部は平底で広い。外面は横方向のミガキ、内面はナデ調整であるが圧痕が多数残る。口径23.6cm、底径9.6cm、器高12.9cmである。色調は橙褐色を呈する。

下甕は胴の大きく張る中型の甕である。口縁部は外側に大きく発達し、端部を角ばって仕上げる。胴部最大径部分に小さな断面三角の突帯を貼り付ける。底部は平底で薄い。外面はナデ調整。内面はナデ調整である。胴部下位に焼成後、大きな穿孔が施される。口径31.8cm、胴部最大径46.5cm、底径9.8cm、器高51.0cmである。色調は灰黄褐色を呈する。

11号甕棺墓(図版33、第90図)

第二遺構面、調査区の北側で検出された。6号溝に大部分を切られる。合せ口の小児用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度はほぼ水平である。主軸はS-81°-Wの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。なお、上甕は6号溝による掘削のため、ほとんど失われており、復元・図化していない。

出土土器(図版66、第91図)

下甕はやや胴が張り、器高の低い印象を受ける。口縁は跳ね上げ口縁で、外側へ大きく跳ね上げられる。底部は厚底で、上底である。外面はハケメ調整。内面はナデである。口径28.5cm、胴部最大径26.2cm、底径4.8cm、器高31.2cmである。色調は灰黄褐色を呈する。

12号甕棺墓(図版33、第90図)

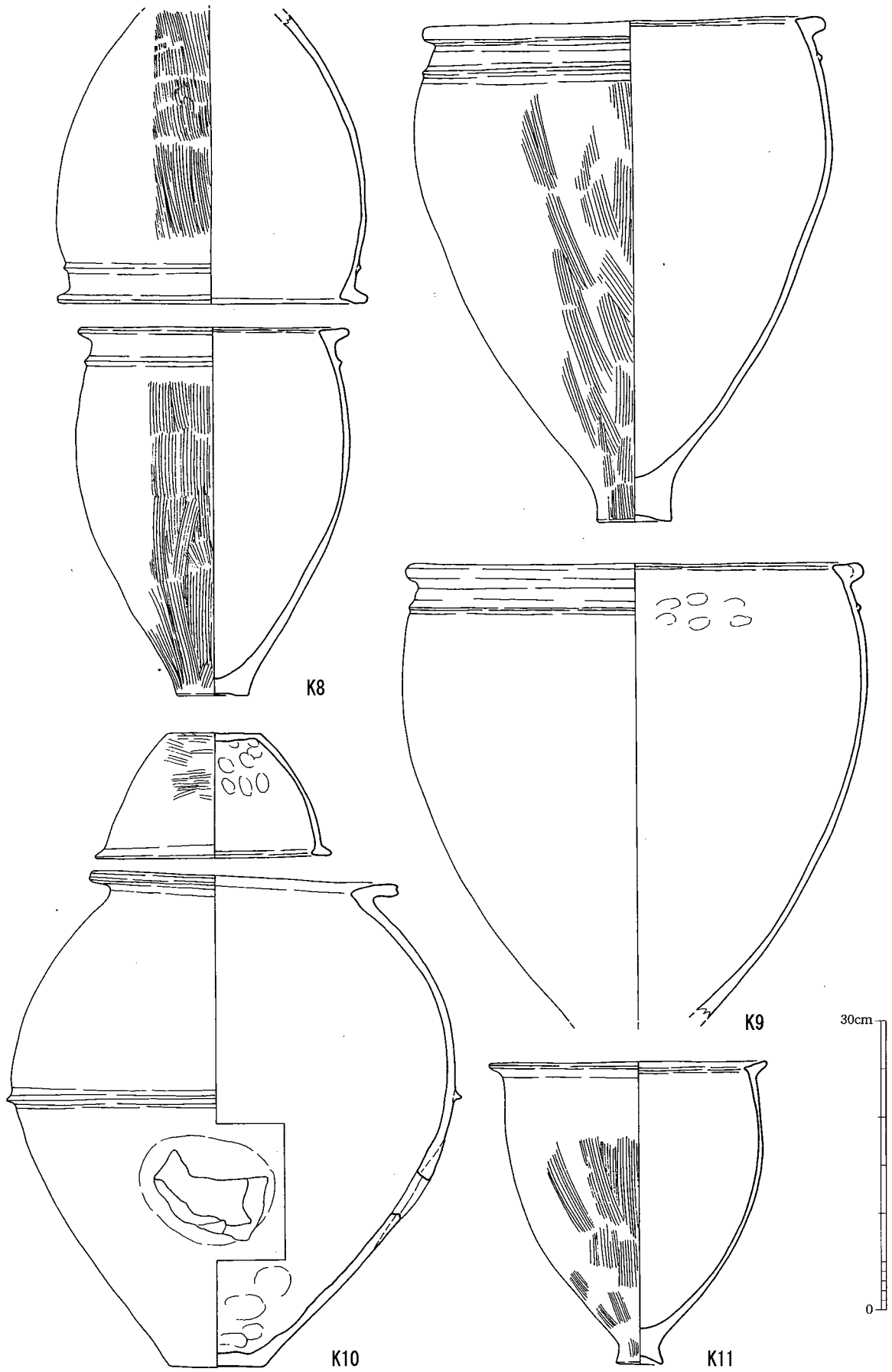
第二遺構面、調査区の北側で検出された。6号溝に切られる。単棺の中人用甕棺墓である。本来、木蓋等があった可能性もある。落ち込んだ甕の上半部を除去する時に、下半部も原位置を動いたために判別できず、取り上げてしまった。埋置角度はほぼ水平である。主軸はN-58°-Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(第89図)

大きく胴が張り、卵形を呈する中型の甕である。口縁部は外側に大きく張り出すもので、端部は丸く仕上げている。胴部最大径よりやや上に小さな断面三角突帯を貼り付ける。底部は平底で小さい。外面の調整は横方向のミガキである。内面はナデである。外面突帯付近に黒斑が付着する。口径35.6cm、胴部最大径52.4cm、底径8.2cm、器高68.0cmである。色調は茶褐色を呈する。

13号甕棺墓(図版34、第90図)

第二遺構面、調査区の北側で検出された。7号溝に大部分を切られる。合せ口の小児用甕棺墓と考えられる。胴部のみの残存のため、埋置角度、主軸方位は不明である。小片だったために復元・図化は行っていない。



第91图 4区8~11号甕棺实测图 (1/6)

14号甕棺墓(図版34、第90図)

第二遺構面、調査区の南端部で検出した。16号竪穴住居跡に墓坑を切られるが、深く埋められていたために甕棺本体に影響はなかった。墓坑は甕棺の形状に合わせ、やや大きめに掘り込まれる。合せ口の中人用甕棺墓である。埋置角度は 10° である。主軸はN- 30° -Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版67、第92図)

上甕は胴のやや張る器形である。口縁部は外側に大きく張り出す。口縁下に小さな断面三角突帯を貼り付ける。底部はやや広めの平底である。外面の調整はハケメである。内面はナデ調整であるが、突帯の貼り付け時やその他の圧痕が多数残る。外面胴部に黒斑が付着する。口径35.2cm、胴部最大径38.2cm、底径8.7cm、器高50.8cmである。色調は暗黄茶褐色である。

下甕は胴の張る器形である。口縁部は両側に均等に張り出しているが、内側の張り出しが大きい。胴部最大径よりやや下がった位置に小さな断面三角突帯を貼り付ける。底部は平底であるが、やや厚い。外面の調整はハケメ。内面はナデである。外面の底部付近と内面の底部付近に黒斑が付着する。口径44.0cm、胴部最大径44.6cm、底径7.9cm、器高55.0cmである。色調は橙褐色を呈する。

15号甕棺墓(図版34、第93図)

第三遺構面、調査区の南端部で検出した。合せ口の小児用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせ、やや広めに掘り込まれる。埋置角度は 2° である。主軸はN- 35° -Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版67、第92図)

上甕はやや胴の張る器形である。口縁部は外側に張り出すものである。底部は厚底であるが大きく、わずかに上底である。外面はハケメ調整。内面はナデである。底部付近に大きく黒斑が付着する。口径30.4cm、胴部最大径29.6cm、底径5.8cm、器高38.6cmである。色調は灰黄褐色を呈する。

下甕はやや胴の張る器形である。口縁部は外側に張り出すものである。底部は厚底で、やや小さく上底である。外面の調整はハケメである。内面の調整はナデである。底部付近に黒斑が付着する。口径30.3cm、胴部最大径29.9cm、底径5.8cm、器高36.9cmである。色調は灰黄褐色～黄橙色を呈する。

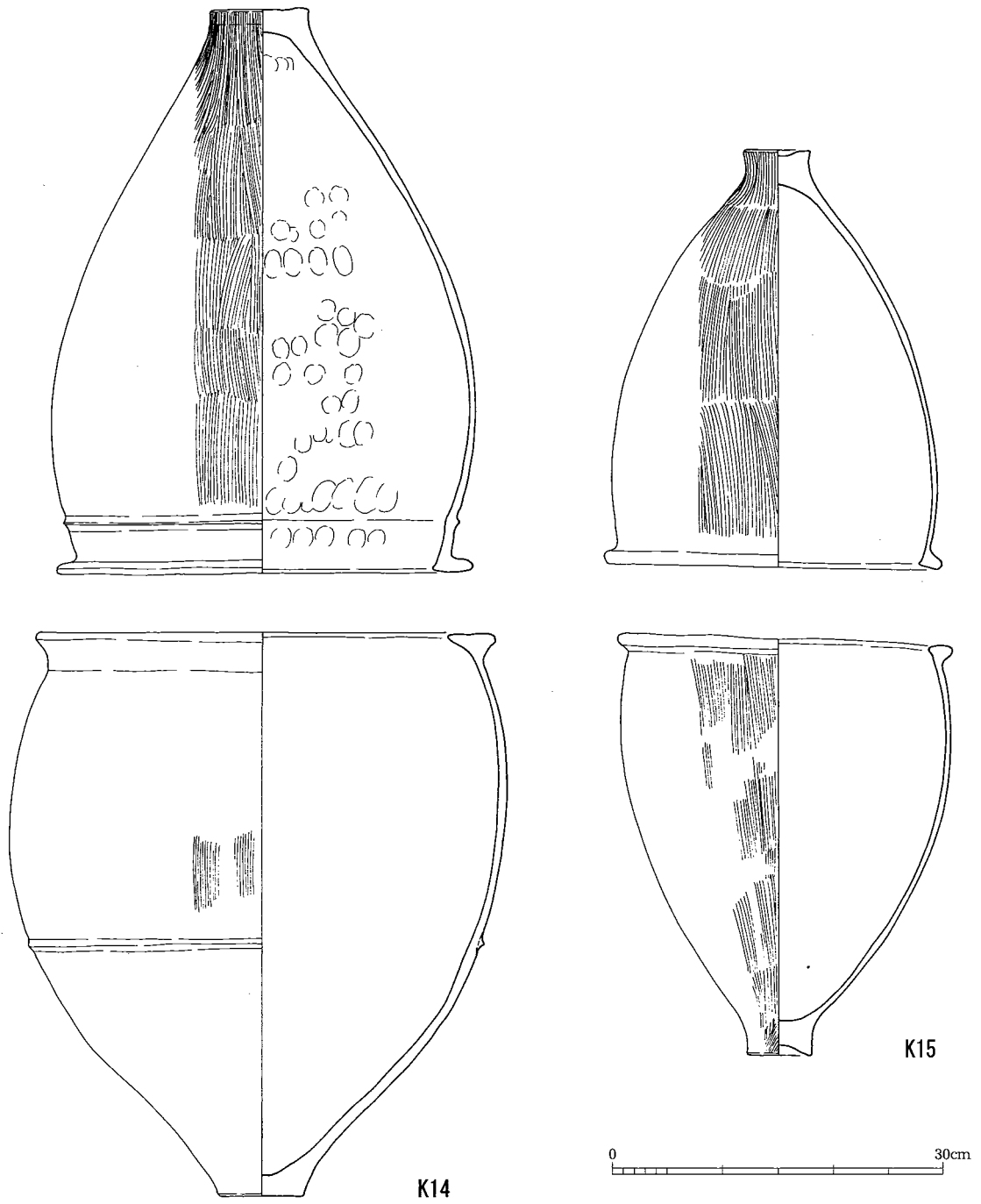
16号甕棺墓(図版35、第93図)

第三遺構面、調査区の南端部で検出した。合せ口の小児用甕棺墓である。墓坑はやや大きめの掘り込まれる。埋置角度は 4° である。主軸はN- 36° -Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版67、第94図)

上甕は底部を失う。わずかに胴の張る器形である。口縁部は外側に張り出す。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデである。胴部最大径の部分に焼成後の穿孔を施す。穿孔は外側に大きく開く。口径30.8cm、胴部最大径30.4cmである。色調は褐色～暗褐色を呈する。

下甕は胴の張る器形であるが、器高の高い印象を受ける。口縁部は外側に張り出す。口縁下に小さな断面三角突帯を貼り付ける。底部は厚底で、上底である。外面の調整はハケメである。内面の調整はハケメである。胴部中位に黒斑が付着する。口径34.0cm、胴部最大径36.6cm、底径8.1cm、器高56.5cmである。色調は灰黄褐色を呈する。



第92图 4区14·15号甕棺实测图 (1/6)

17号甕棺墓(図版35、第93図)

第三遺構面、調査区の南端部で検出した。合せ口の小児用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度はほぼ水平である。主軸はN-58°-Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃。

出土土器(図版67、第94図)

埋置の状況がほぼ水平であったために上下をつけていない。東甕と西甕と呼称し、説明を行う。東甕はあまり胴が張らず、底部が大きくすぼむ器形である。口縁部は断面三角であるが、端部のつくりは丸い。底部は厚底でやや大きい。上底である。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデで、口縁付近と底部付近に圧痕が残る。口径27.9cm、胴部最大径27.7cm、底径6.1cm、器高35.9cm。色調は淡黄褐色。

西甕はやや胴の張る器形である。口縁部は断面三角で、端部のつくりは丸い。底部は大きく厚底で、上底である。外面の調整はハケメである。内面の調整はナデである。口径26.9cm、胴部最大径25.7cm、底径6.2cm、器高35.2cmである。色調は橙褐色～灰黄褐色を呈する。

18号甕棺墓(図版35、第93図)

第三遺構面、調査区の南端部で検出した。合せ口の中人用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度はほぼ水平である。主軸はN-57°-Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃。

出土土器(図版63、第89図)

上甕は球形に胴の張る中型の甕である。口縁部は外側に大きく張り出す。胴部最大径部分に断面「M」字状を呈する突帯を貼り付ける。底部は平底でやや小さい。外面の調整は底部付近は縦方向のミガキ、それより上位は横方向のミガキである。内面はナデ調整である。胴部突帯より上位に黒斑が大きく付着する。口径38.3cm、胴部最大径63.8cm、底径9.6cm、器高70.0cmである。色調は淡褐色を呈する。

下甕はやや胴の張る器形である。口縁は断面三角突帯であるが、内外均等に発達する。口縁下に小さな断面三角突帯を低く貼り付ける。胴部のかなり下がった位置に小さな断面三角突帯を下向きに貼り付ける。底部はやや厚めで、上底を呈する。外面は縦方向のハケメ調整で、口縁部下は横方向にハケメを行う。内面の調整はナデである。外面胴部中位と底部付近に黒斑が付着する。口径48.0cm、胴部最大径48.4cm、底径9.5cm、器高61.4cmである。色調は暗灰黄褐色を呈する。

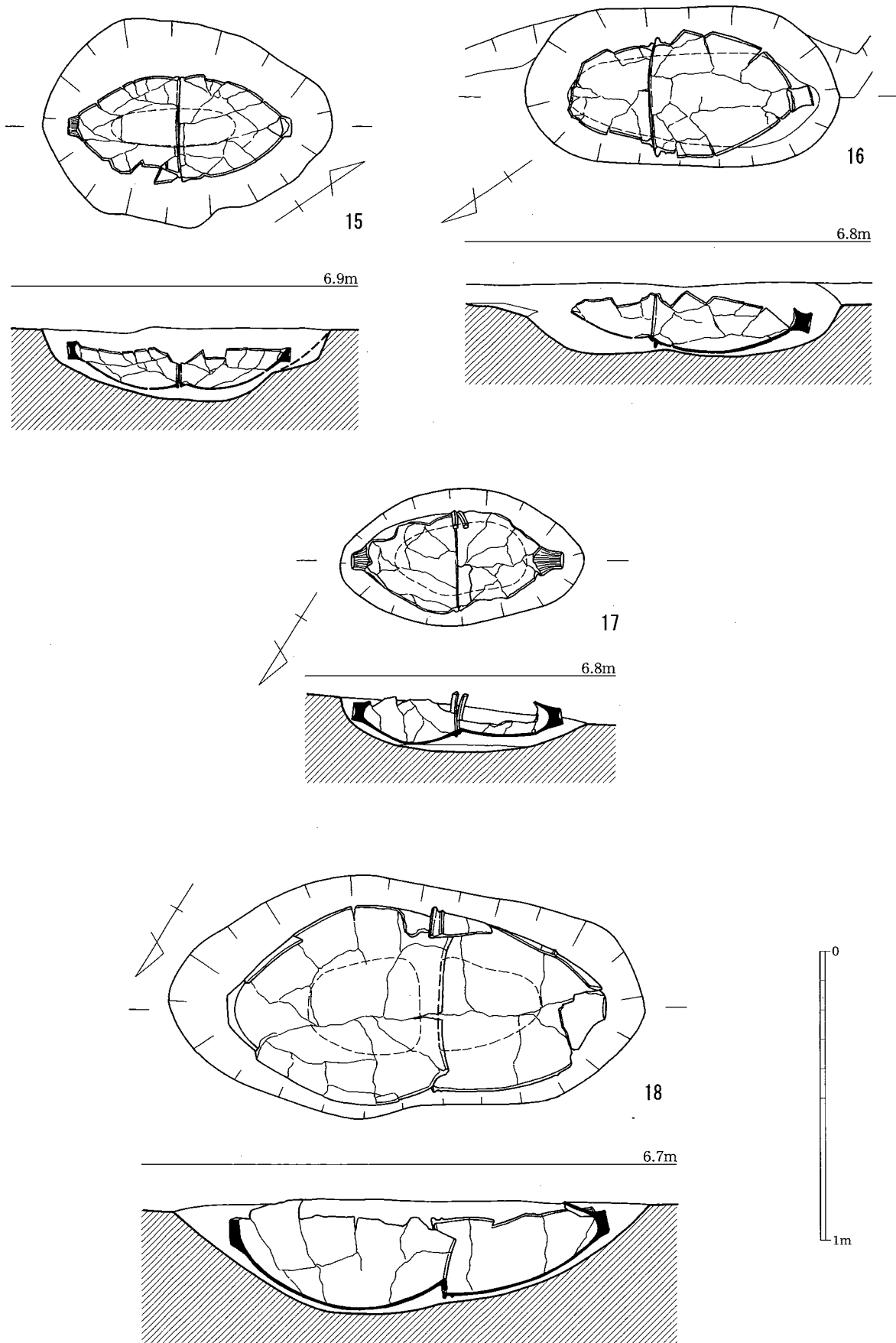
19号甕棺墓(図版36、第95図)

第三遺構面、調査区の南端部で検出した。合せ口の成人用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度は3°である。主軸はS-52°-Wの方位をとる。弥生時代中期前半頃。

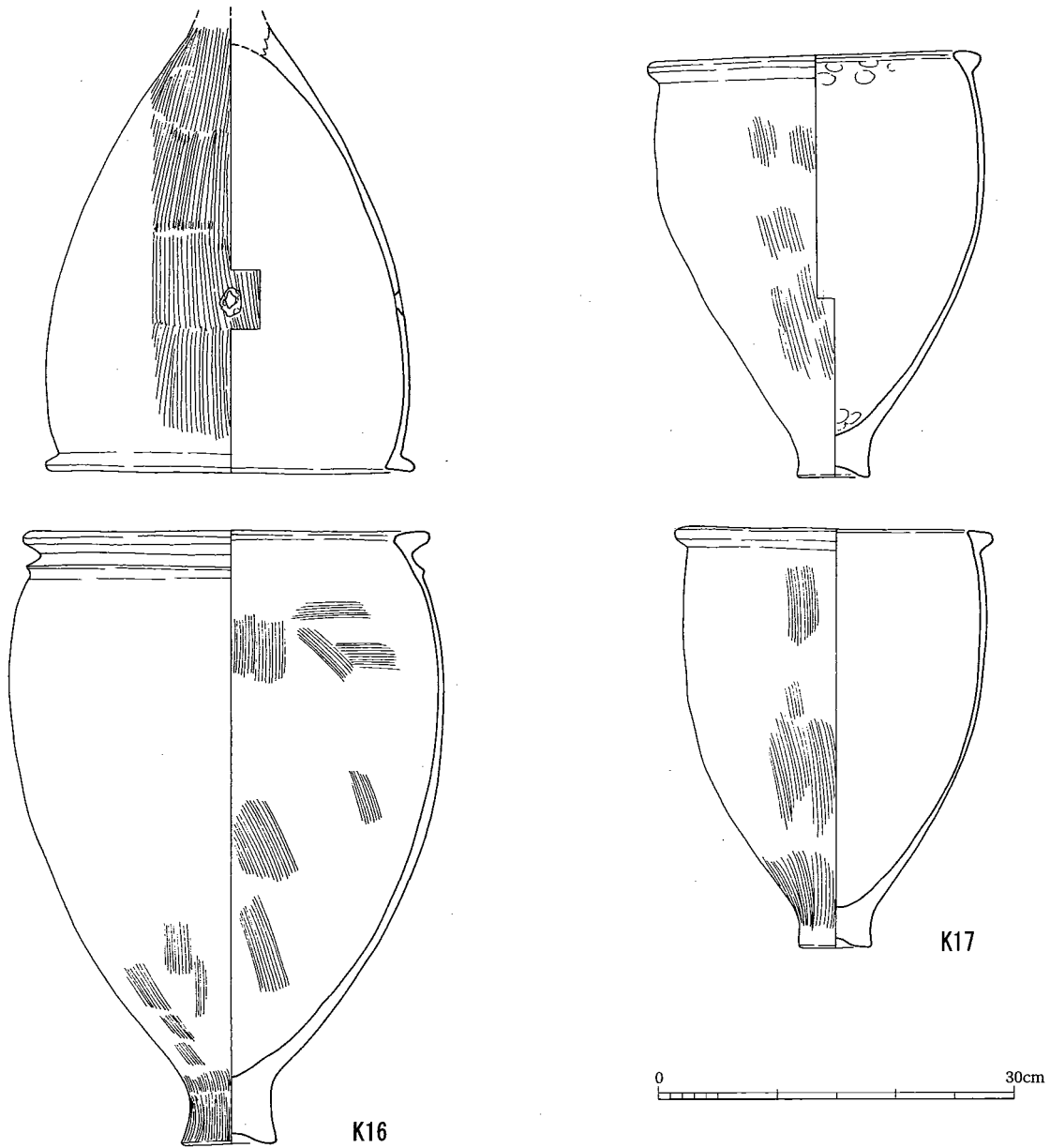
出土土器(図版64、第96図)

上甕はわずかに胴の張る器形である。口縁部は外側に大きく、内側に小さく張り出す。胴部中位よりやや下がった位置に小さな断面三角突帯を貼り付ける。底部は平底であるが厚い。外面の調整はナデ。内面の調整はナデである。底部に圧痕が残る。内面が黒変している。口径は67.0cm、胴部最大径62.4cm、底径10.0cm、器高89.0cmである。色調は茶褐色～橙褐色を呈する。

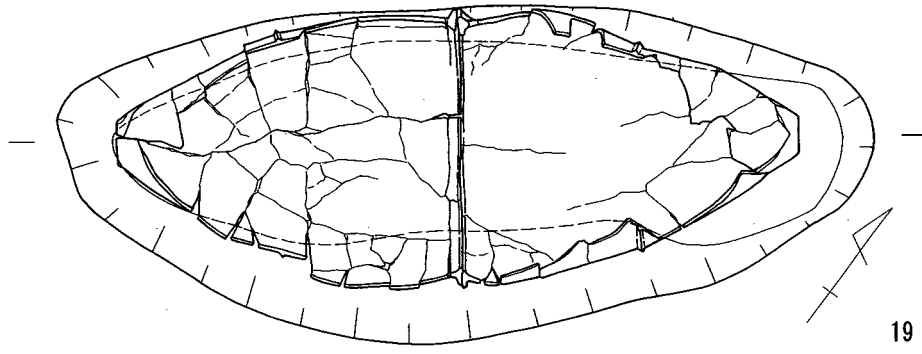
下甕は胴があまり張らず、スマートな印象を受ける。口縁部は外側に大きく、内側に小さく張り出す。胴部中位に小さな断面三角突帯を貼り付ける。底部はやや厚く、わずかに上底である。外面の調整はナデ、内面の調整はナデである。内面が黒変しており、黒塗りの可能性がある。口径70.0cm、胴部最大径63.2cm、底径10.8cm、器高86.8cmである。色調は淡橙褐色を呈する。



第93图 4区15~18号甕棺墓実測图 (1/20)

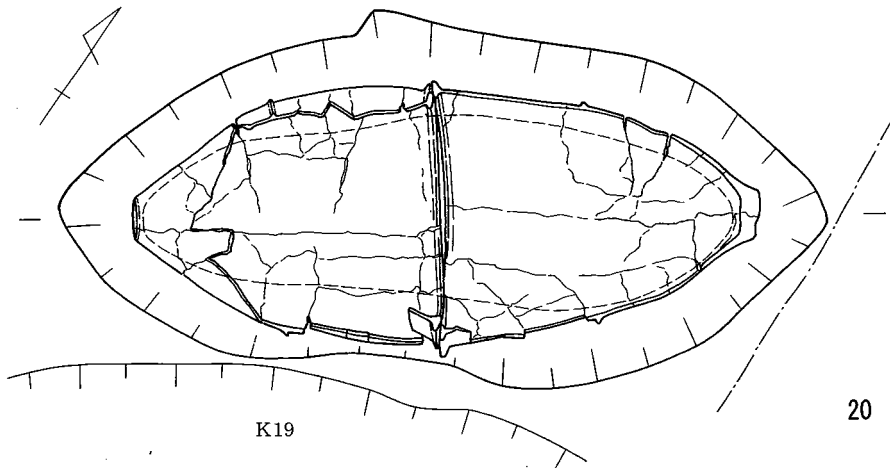
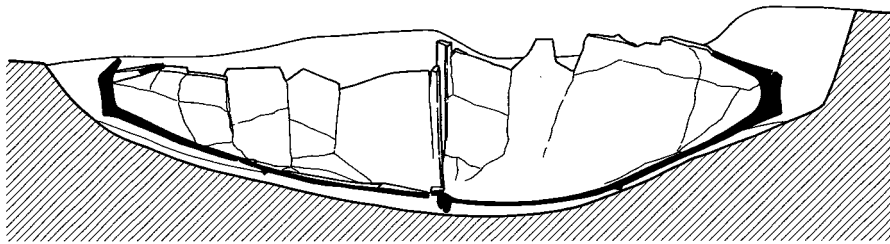


第94图 4区16·17号甕棺实测图 (1/6)



19

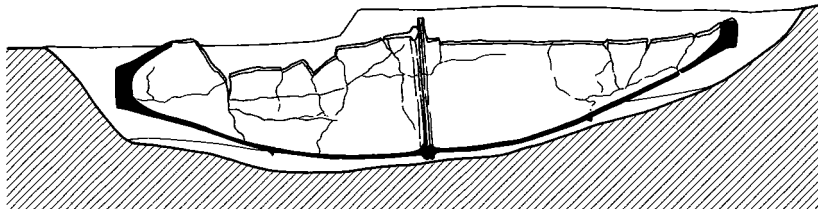
6.8m



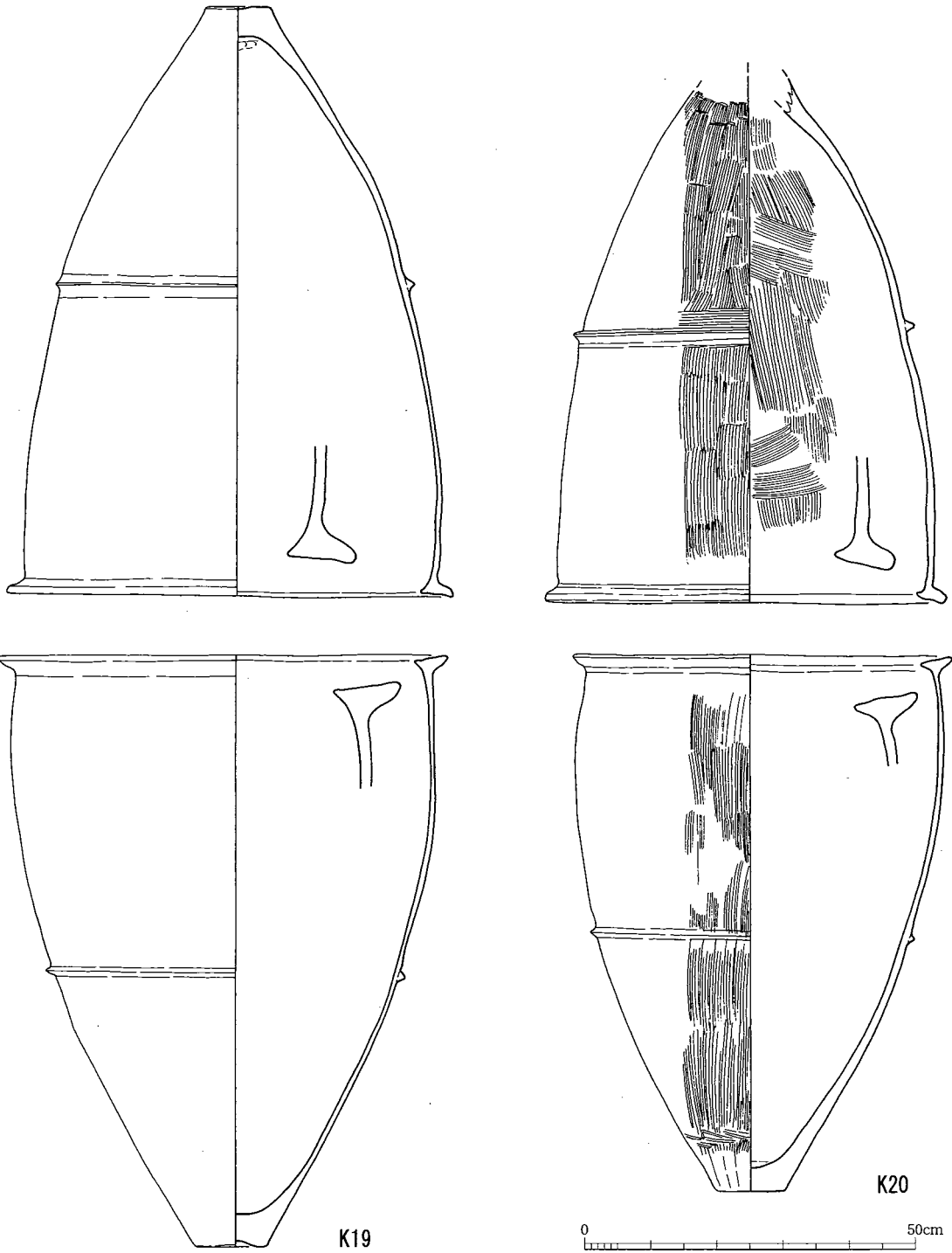
20

K19

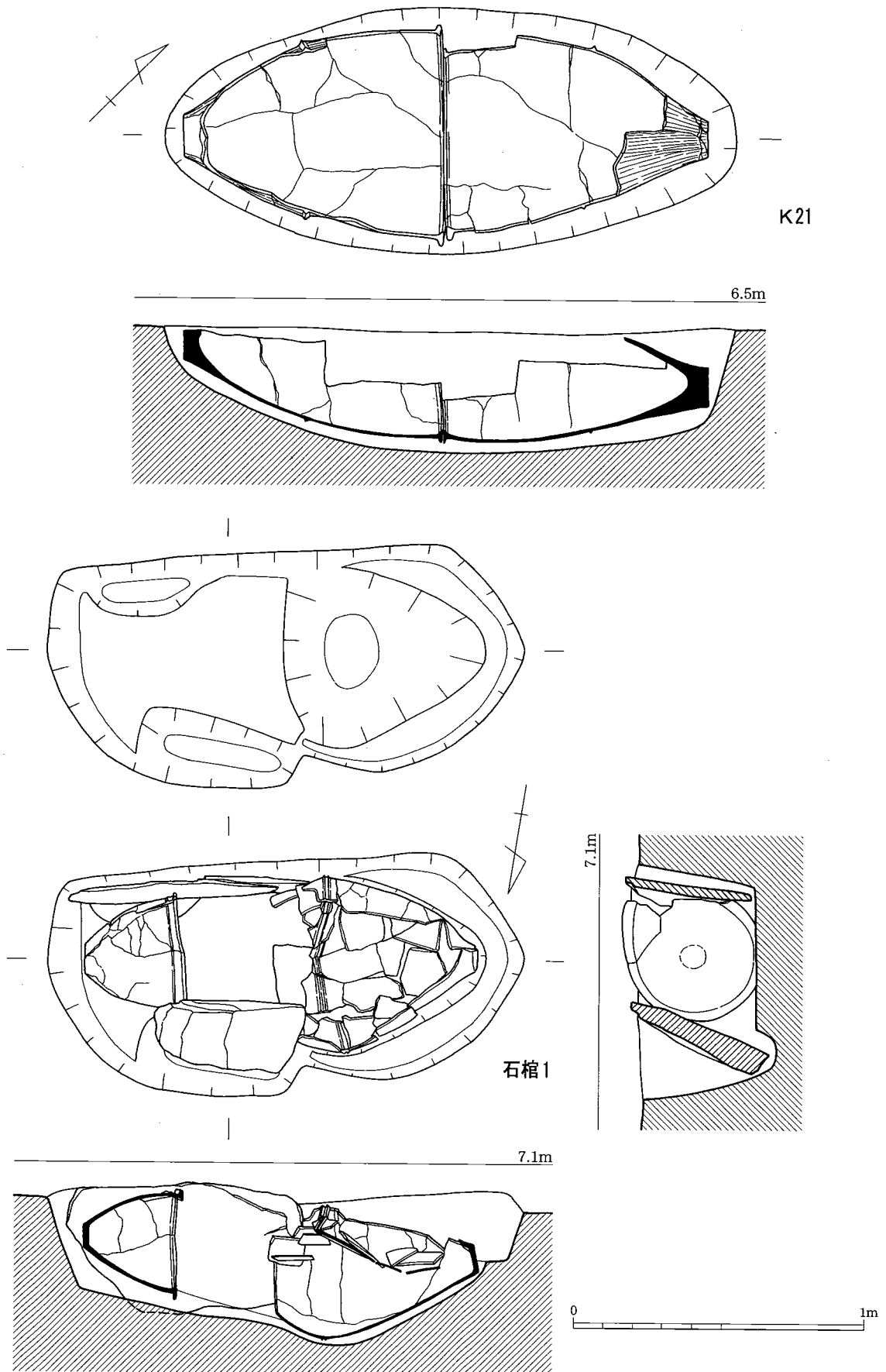
6.8m



第95图 4区19·20号甕棺墓实测图 (1/20)



第96图 4区19·20号甕棺实测图 (1/10)



第97图 4区21号甕棺墓·1号石棺墓实测图(1/20)

20号甕棺墓(図版36、第95図)

第三遺構面、調査区の南端部で検出した。合せ口の成人用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせてやや大きめに掘り込まれる。埋置角度は 4° である。主軸はN- 54° -E。弥生時代中期前半頃。

出土土器(図版64、第96図)

上甕は底部を欠失する。胴部はあまり張らない。口縁部は外側に大きく、内側に小さく張り出し、外側が上がる。胴部中位よりやや下った位置にやや大きめの断面三角突帯を貼り付ける。外面の調整はハケメである。内面の調整は縦横のハケメである。外面胴部には部分的に黒斑が付着する。口径59.5cm、胴部最大径56.4cmである。色調は橙褐色を呈する。

下甕はやや胴の張る器形である。口縁部は外側に大きく、内側に小さく張り出し、外側が上がる。胴部中位よりやや下がった位置に小さな断面三角突帯を貼り付ける。外面の調整はハケメである。底部付近に工具痕が残る。内面の調整はナデである。内面は黒塗りである。外面には一部黒斑が付着する。口径56.8cm、胴部最大径55.4cm、底径10.4cm、器高80.6cmである。色調は橙褐色を呈する。

21号甕棺墓(図版36、第97図)

第四遺構面、調査区の南端部で検出した。合せ口の成人用甕棺墓である。墓坑は甕棺の形状に合わせて掘り込まれる。埋置角度は 4° である。主軸はS- 44° -Wの方位をとる。弥生時代中期前半頃。

出土土器(図版65、第98図)

上甕は底部を欠失する。胴の張らない器形である。口縁部は外側に大きく、内側に小さく張り出すが、端部のつくりは丸い。胴部中位よりやや下った位置に小さな断面三角の突帯を貼り付ける。外面は縦方向のハケメであるが、口縁部と突帯付近は横方向にハケメを施す。内面の調整はナデである。口径66.5cm、胴部最大径61.8cmである。色調は茶褐色～橙褐色を呈する。

下甕はわずかに胴の張る器形である。口径は外側に大きく、内側に小さく張り出す。胴部中位よりやや下がった位置に小さな断面三角突帯を貼り付ける。底部は平底であるが、やや厚い。外面の調整はハケメである。内面の調整はナデである。部分的に黒斑が付着する。口径62.4cm、胴部最大径58.6cm、底径12.0cm、器高87.4cmである。色調は橙褐色～灰黄褐色である。

(3)石棺墓

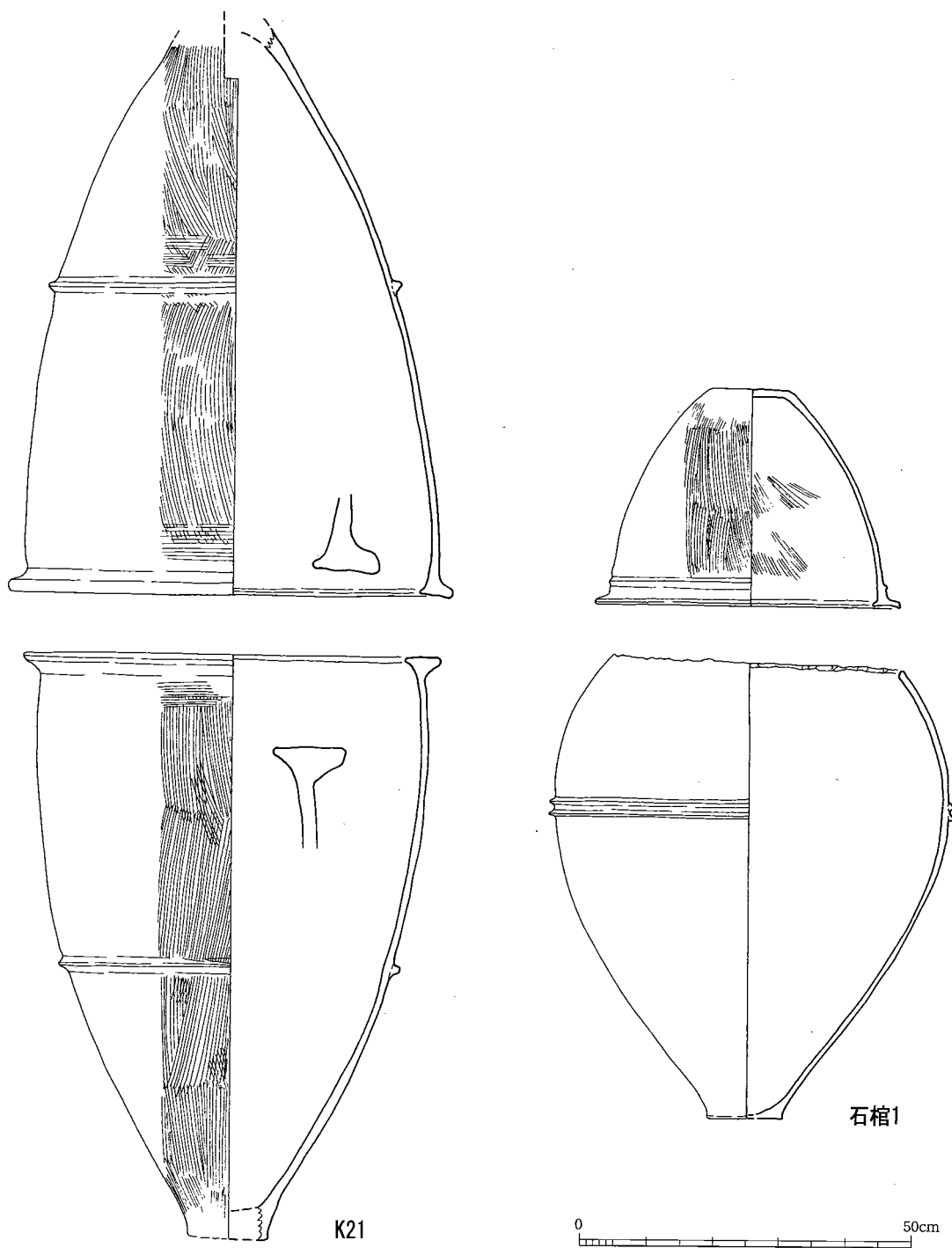
1号石棺墓(図版36～38、第97図)

第二遺構面、調査区の北側で検出した。墓坑を掘り、先に板状の石を両脇に立て、その間に約35cmの間隔をあけ中人用の下甕、上甕を据えている。墓坑は側石と下甕の形状に合わせて掘り込まれる。検出時に北側の板石はやや内側に倒れていた。上下の甕の間には蓋等は検出できなかった。本来、石蓋があった可能性がある。甕棺墓・石棺墓の両方の特徴をもつが、ここでは検出時のとおり石棺墓として報告する。埋置角度は 2° である。主軸はN- 80° -Eの方位をとる。弥生時代中期前半頃と考えられる。

出土土器(図版65、第98図)

上甕は鉢である。口縁部は両側に発達した鋤先状を呈する。口縁下に小さな断面三角突帯を貼り付ける。底部はやや広めである。外面の調整はハケメである。内面の調整はハケメである。外面胴部に一部黒斑が付着する。口径46.1cm、底径12.0cm、器高32.6cmである。色調は橙褐色を呈する。

下甕は口縁部を打ち欠いている。胴の大きく張る器形である。胴部最大径の部分に2条の下向きの断面三角突帯を貼り付ける。底部は平底で薄い。外面の調整はナデである。内面の調整はナデで



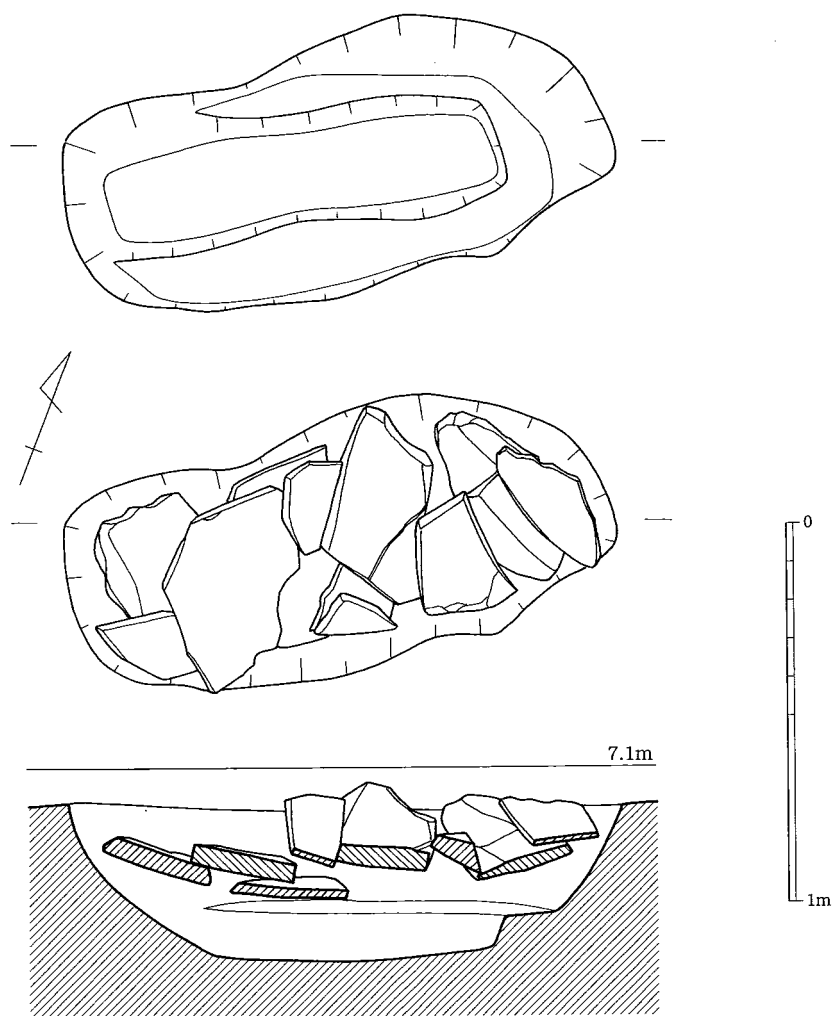
第98图 4区21号甕棺・1号石棺墓出土土器实测图 (1/10)

ある。胴部中位に大きく黒斑が付着する。残存する口径43.0cm、胴部最大径61.0cm、底径11.3cm、器高68.4cmである。色調は黄褐色～黄茶褐色を呈する。

(4)石蓋土坑墓

1号石蓋土坑墓(図版38、第99図)

第二遺構面、調査区の北側で検出した。掘り方のラインが判然としないことから、石の並びで主軸を決定し、掘削を行ったが、西側でさらに落ち込んだ3枚の石が検出された。このため、主体部との軸がずれてしまった。墓坑はやや広めに掘り方が掘削され、中位に段が付く。主体部は幅25cm、長さ105cmの方形で底面はほぼ平坦である。深さは40cmである。蓋石は10枚用いられ、東が7枚は片側が落ち込み、西側3枚は完全に墓坑内に落ち込んでいた。N-69°-Wの方位をとる。遺物は出土していないが、周囲の甕棺墓と軸を同一にすることから、弥生時代中期前半の範疇に入ると考えられる。



第99図 4区1号石蓋土坑墓実測図(1/20)

(5)土坑

1号土坑(図版39、第100図)

第一遺構面、調査区の北端部で検出した。長軸150cm×短軸75cmの楕円形を呈する。深さは約15cmで底面はほぼ平坦である。遺物は古墳時代前期の土器が出土している。

出土土器(図版68、第101図)

1~4は土師器である。1は甕の口縁部である。口縁端部をわずかに摘み上げる。内外面の調整は摩滅して不明である。2は高杯の杯部である。内面は縦方向のミガキである。3は二重口縁壺の口縁部である。器壁が厚い。外面はハケメ調整。内面もハケメ調整である。口径23.0cmである。4は鉢である。外面は口縁部付近はタタキ、底部付近は不定方向のケズリである。内面はハケメを施す。口径16.6cm、器高7.2cmである。

2号土坑(図版39、第100図)

第一遺構面、調査区の北寄りで見出した。長軸395cm×短軸335cmの方形を呈し、北側に約75cmの突出部をもつ。深さは約20cmで、底面はほぼ平坦であるが、部分的に掘り込みをもつ。遺物は覆土の中位から古墳時代前期の土器が出土している。

出土土器(第101図)

5~8は土師器である。5は甕である。口縁部はわずかに外反する。外面の調整はハケメであるが、肩部に細かいタタキが残る。内面の調整は横方向のハケメである。口径15.0cmである。6は甕である。直線的に広がる口縁の端部をわずかにつまみあげる。内面の調整は横方向のハケメである。口径12.6cmである。7は甕の口縁部であろうか。内面胴部付近はケズリである。口径15.0cmである。8は直口壺の口縁部である。内面の調整は横方向のハケメである。口径9.6cmである。

3号土坑(図版39、第100図)

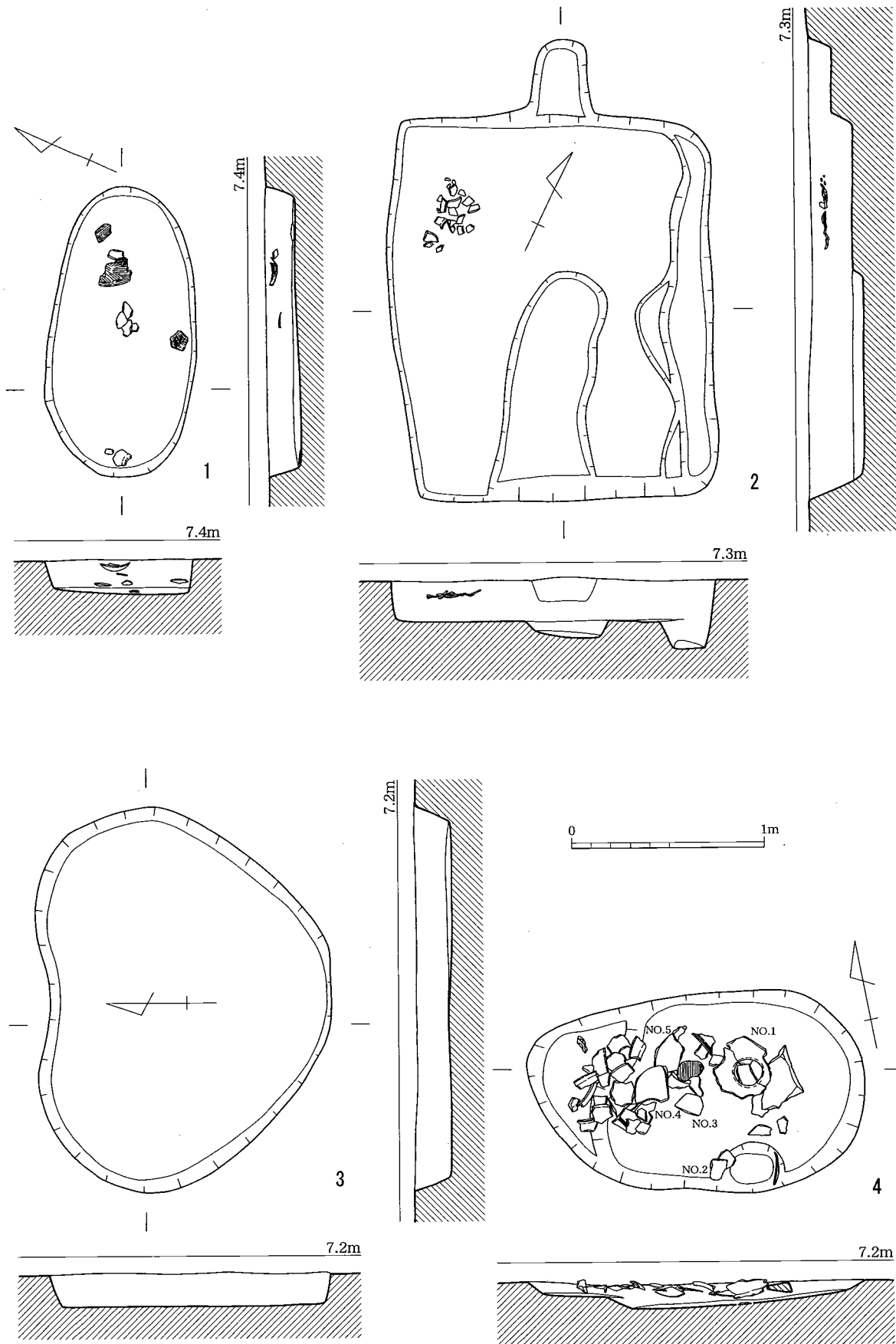
第一遺構面、調査区の中央付近で見出した。長軸198cm×短軸145cmの不整な楕円形を呈する。深さは約20cmで壁の立ち上がりは緩やかである。底面はほぼ平坦で掘り込み等はない。遺物は須恵器が出土しており、奈良時代の遺構と考えられる。

出土土器(第101図)

9・10は須恵器である。9は杯身である。内外面の調整はナデである。口径14.0cmである。10は甕の胴部である。外面は格子タタキである。内面は同心円の当具痕が残る。11~16は土師器である。11は鉢である。外面の調整はハケメ。内面はナデ調整である。口径14.0cmである。12は高杯の脚部である。内外面ともにハケメの後、ナデ調整を行う。底径は9.5cmである。13は直口壺の口縁部である。口縁上端部にはくぼみをつくる。内外面の調整はハケメである。口径21.0cmである。14は小型丸底壺である。内外面には一部ハケメが残る。胴部最大径は9.4cmである。15は鉢の口縁部である。外面底部はケズリを行う。16は高杯の杯部であろうか。わずかに外反する杯部の中位に断面三角突帯を貼り付ける。内外面の調整はナデである。

4号土坑(図版39、第100図)

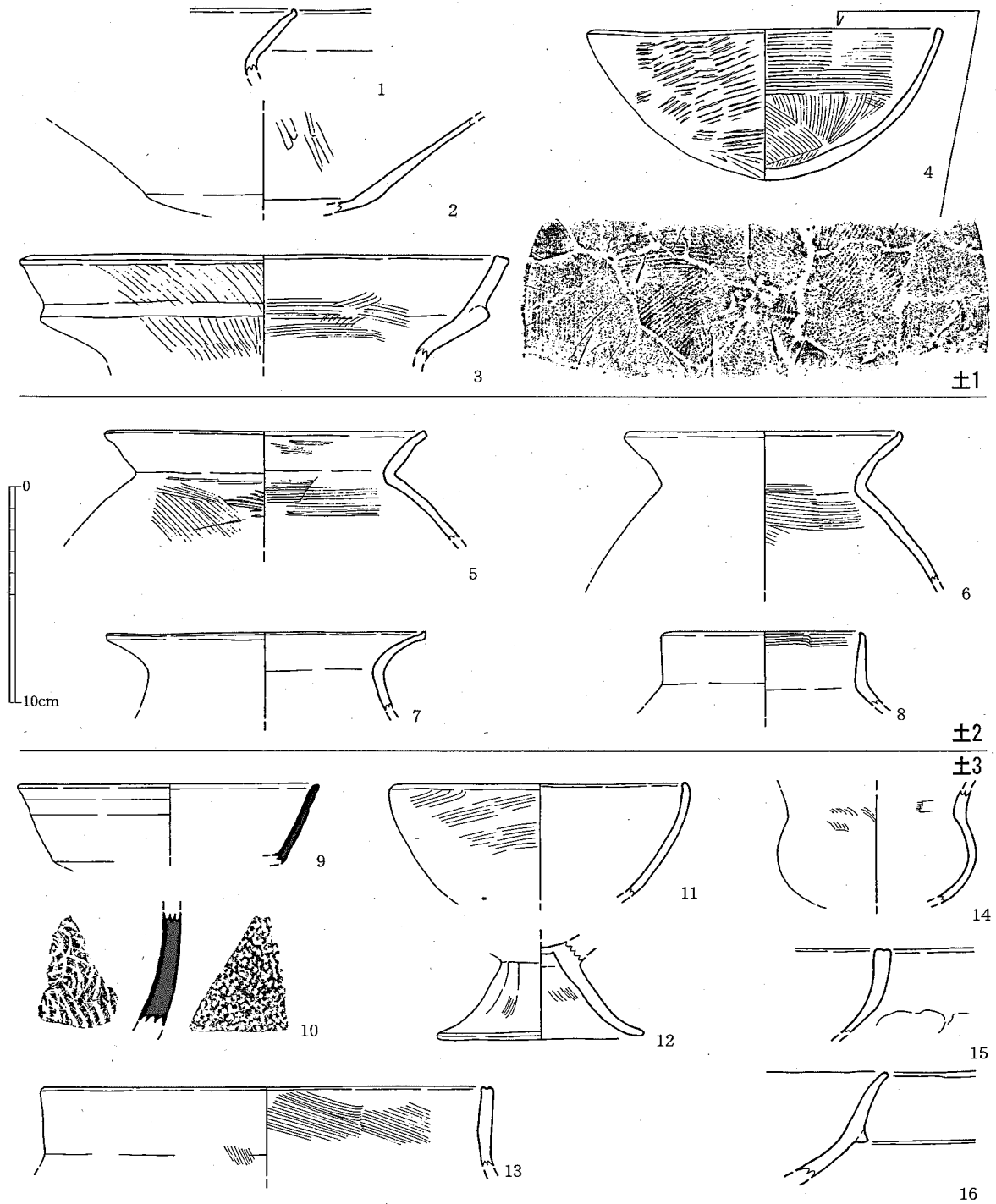
第一遺構面、調査区の中央付近で見出した。長軸173cm×短軸105cmの楕円形を呈する。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は段掘りをされ、最も深い部分で15cmである。弥生時代中期末の土器が出土している。



第100图 4区1~4号土坑实测图 (1/30)

出土土器(図版68、第102図)

1~15は弥生土器である。1~4は口縁を強く外側に折り曲げる甕である。1の口径は24.0cmである。No5の位置から出土している。2は口縁を角ばって仕上げる。胴部外面に黒斑が付着する。口径26.0cmである。3は口径27.0cmである。No5の位置から出土している。4は内面に口縁部接合時の段が残る。口径31.6cmである。No5の位置から出土している。5は壺である。口縁は緩く外反しながら広がる。肩部付近に黒斑が付着する。口径29.6cm、胴部最大径40.6cmである。No3・No5の位置から出土している。6は甕の胴部であろうか。小さな断面三角突帯を貼り付ける。内面には圧痕が残る。7は短頸



第101図 4区1~3号土坑出土土器実測図(1/3)

壺である。肩部と底部は接合しないが同一個体である。口縁部には焼成前に穿孔を施す。底部付近には黒斑が付着する。口径18.4cm、底径7.6cmである。No5の位置から出土している。8は小型の甕の口縁部である。口径21.6cmである。No1の位置から出土している。9～12は甕の底部である。9は焼成後に穿孔を施されている。底径8.4cm、孔径1.0cmである。10は平底の底部である。底径9.2cmである。No5の位置から出土している。11・12は台付甕である。11の内面には黒斑が付着する。底径は10.5cmである。No5の位置から出土している。12は底径9.8cmである。13は鉢である。胴部外面に黒斑が付着する。口径16.0cmである。No5の位置から出土している。14・15は丹塗土器である。14はひさご形土器である。口縁部と肩部との境に断面三角突帯を、それから下った位置に断面台形の突帯を貼り付ける。外面の調整はナデ、内面はハケメが残り、外面のみに丹塗が施される。口径23.6cmである。No1の位置から出土している。15は壺の肩部である。残存している部分で5条の小さな断面三角突帯を貼り付ける。外面はミガキ、内面はナデ調整であるが、突帯接合時の圧痕が連続して残る。外面のみ丹塗が施される。胴部最大径は31.0cmである。No2の位置から出土している。

5号土坑(図版40、第103図)

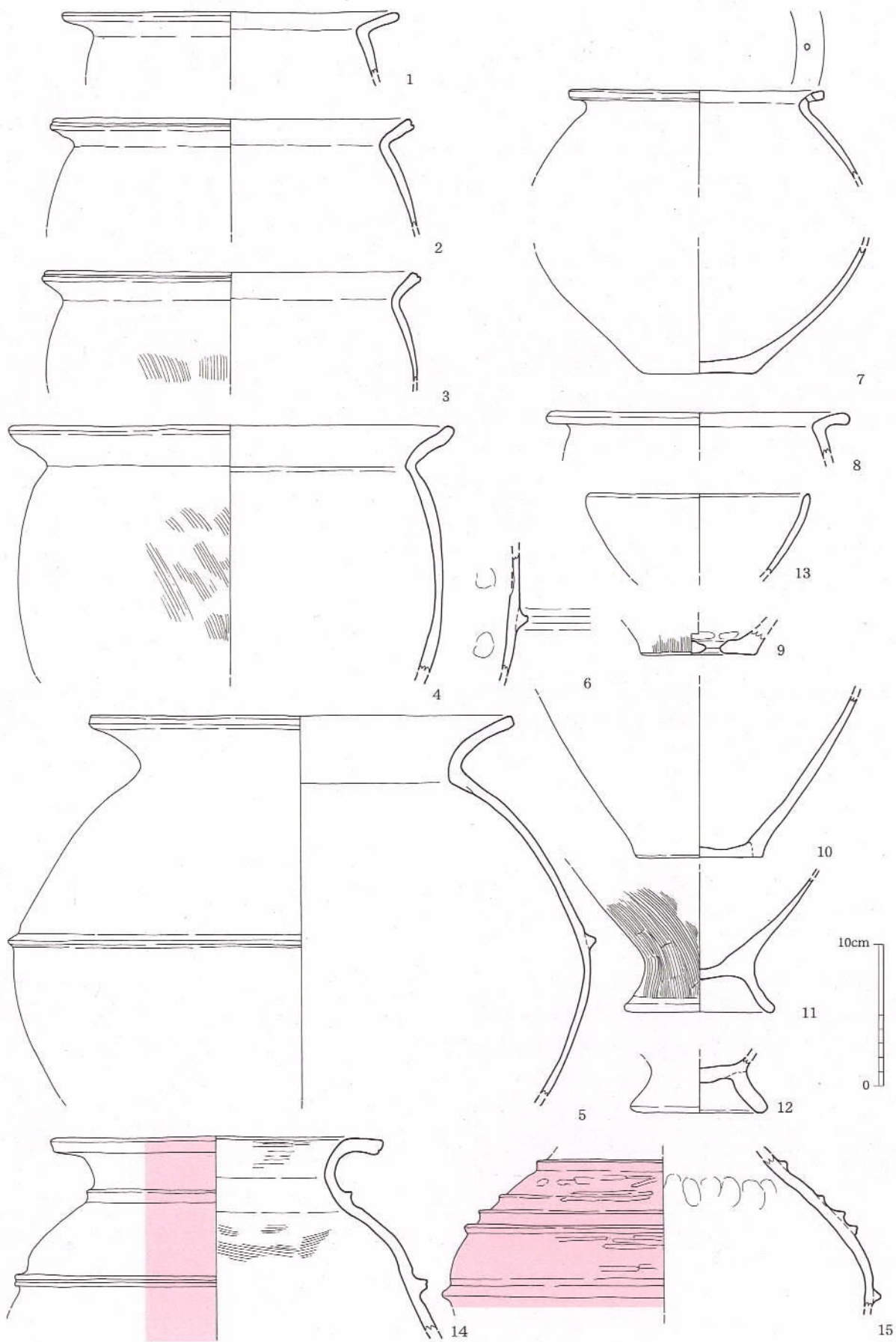
第一遺構面、調査区の中央やや南寄りで検出した。本体部分は長軸398cm+ α ×短軸165cmで部分的に突出する。壁の立ち上がりは緩やかで、深さは約30cmである。底面はほぼ平坦である。遺物は奈良時代の須恵器・土師器が出土している。

出土土器(図版68、第104図)

1～14は須恵器である。1～6は杯蓋である。いずれも口縁端部を折り曲げるものである。1は内外面ナデ調整である。2は輪状つまみをもつものである。外面には焼成時の灰等が付着している。口径13.0cmである。3の口径は13.8cmである。4の口径は16.0cmである。5のつまみ径は3.2cmである。6の口径は20.0cmである。7～11は杯身である。7は高台のつかないものである。底部が深くなるのは焼け歪みであろうか。口径14.4cmである。8の口径は15.0cmである。9の口径は16.0cm。10は踏ん張らない高台の付くものである。口径13.4cm、底径9.0cm、器高3.7cmである。11は踏ん張る高台を貼り付けるものである。12は高杯である。浅い杯部に端部が大きく開く脚部が付く。口径14.8cm、底径8.9cm、底径8.9cmである。13は甕の胴部である。外面はタタキの後、ナデである。内面は同心円の当具痕が残る。14は椀である。平底で直線的に広がる口縁である。口径11.0cm、底径8.0cm、器高5.9cmである。15～21は土師器である。15は杯である。口径13.0cm、底径9.5cm、器高3.5cmである。16も杯である。外面底部と一部内面に焼成時に敷いたと見られる植物の葉茎状の火礫が残る。口径13.5cm、底径10.5cm、器高2.0cmである。17は高杯である。球形の杯部に直線的に広がる脚部が付く。脚部には円形の穿孔が3箇所施される。18は椀の口縁部であろう。19は甕の口縁部片である。20は甌の把手の部分である。21は椀である。外面口縁部付近はタタキ、底部付近はケズリ。内面口縁部付近は横方向のハケメ、底部付近はナデである。口径17.8cm、器高5.8cmである。

6号土坑(図版40、第103図)

第一遺構面、調査区の南寄りで検出した。長軸462cm×短軸385cm+ α の不整な方形を呈する。深さは約15cmで壁の立ち上がりは緩やかである。底面は平坦で、ピット、掘り込み等はない。遺物は古墳時代前期の土器が出土している。



第102图 4区4号土坑出土土器实测图 (1/4)

出土土器(第105図)

1～8は土師器である。1・2は甕である。直線的に広がる口縁部で、胴の張りは小さい。外面はハケメ調整である。内面はナデである。口径16.0cmである。2は全体に器壁が厚い。3・4は壺である。3は大きく外反する口縁部である。端部は角ばって仕上げ、刻み目を施す。内面の調整はハケメである。4は肩部片である。内外面の調整はハケメで、口縁部との境に刺突文を施す。5は碗もしくは高杯の杯部であろうか。口径10.8cmである。6は高杯の脚部である。7は器種は不明であるが脚部である。脚部の中位に円形の穿孔を施す。底径15.0cmである。8は甕の口縁部である。内面はハケメ。外面には工具痕が残る。

7号土坑(図版41、第103図)

第一遺構面、調査区の南寄りで検出した。長軸180cm×短軸93cmの不整な方形を呈する。深さは約10cmで壁の立ち上がりは緩やかである。底面は平坦で、中央にピットを掘り込む。遺物は出土していない。

8号土坑(図版41、第103図)

第二遺構面、調査区の北側で検出した。7号溝に切られる。長軸50cm×短軸38cm+ α の円形を呈する。深さは10cmである。覆土中から甕が1個体分出土している。弥生時代前期後半の土器であろう。

出土土器(図版68、第105図)

9は弥生土器の甕である。胴がわずかに張る器形である。口縁部と胴部最大径の部分に断面三角突帯を貼り付け、刻み目を施す。底部はわずかに上底である。外面はナデ調整。内面もナデ調整であるが、突帯貼り付け部分には連続した圧痕が残る。口径23.5cm、底径6.4cm、器高27.1cmである。

9号土坑(第106図)

第三遺構面、調査区の北端部で検出した。長軸160cm×短軸150cmの円形を呈する。深さは約15cmで底面は平坦である。遺物は出土していない。

10号土坑(図版41、第106図)

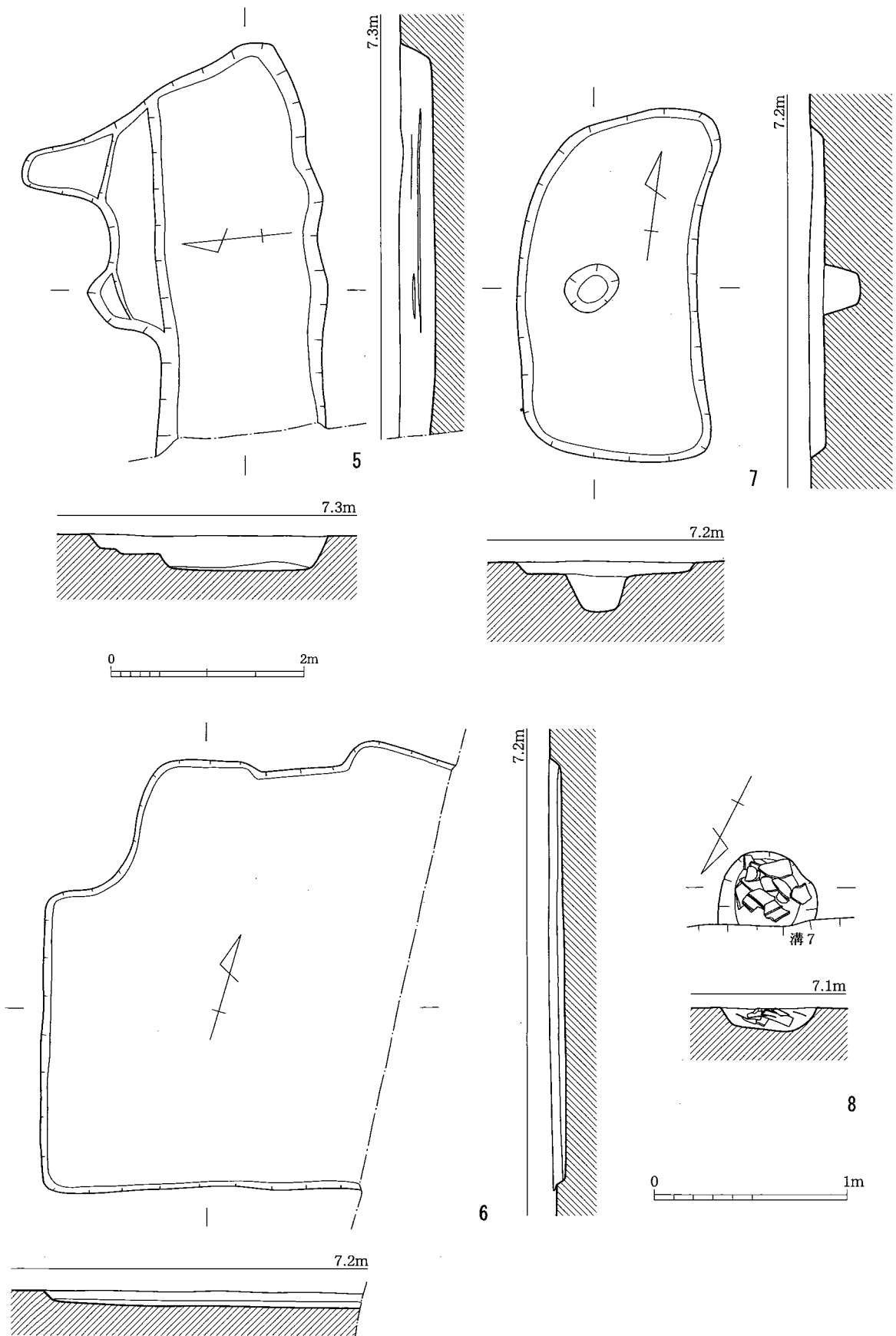
第三遺構面、調査区の北端部で検出した。長軸80cm×短軸60cmの楕円形を呈する。深さは約15cmで底面は平坦である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器(第105図)

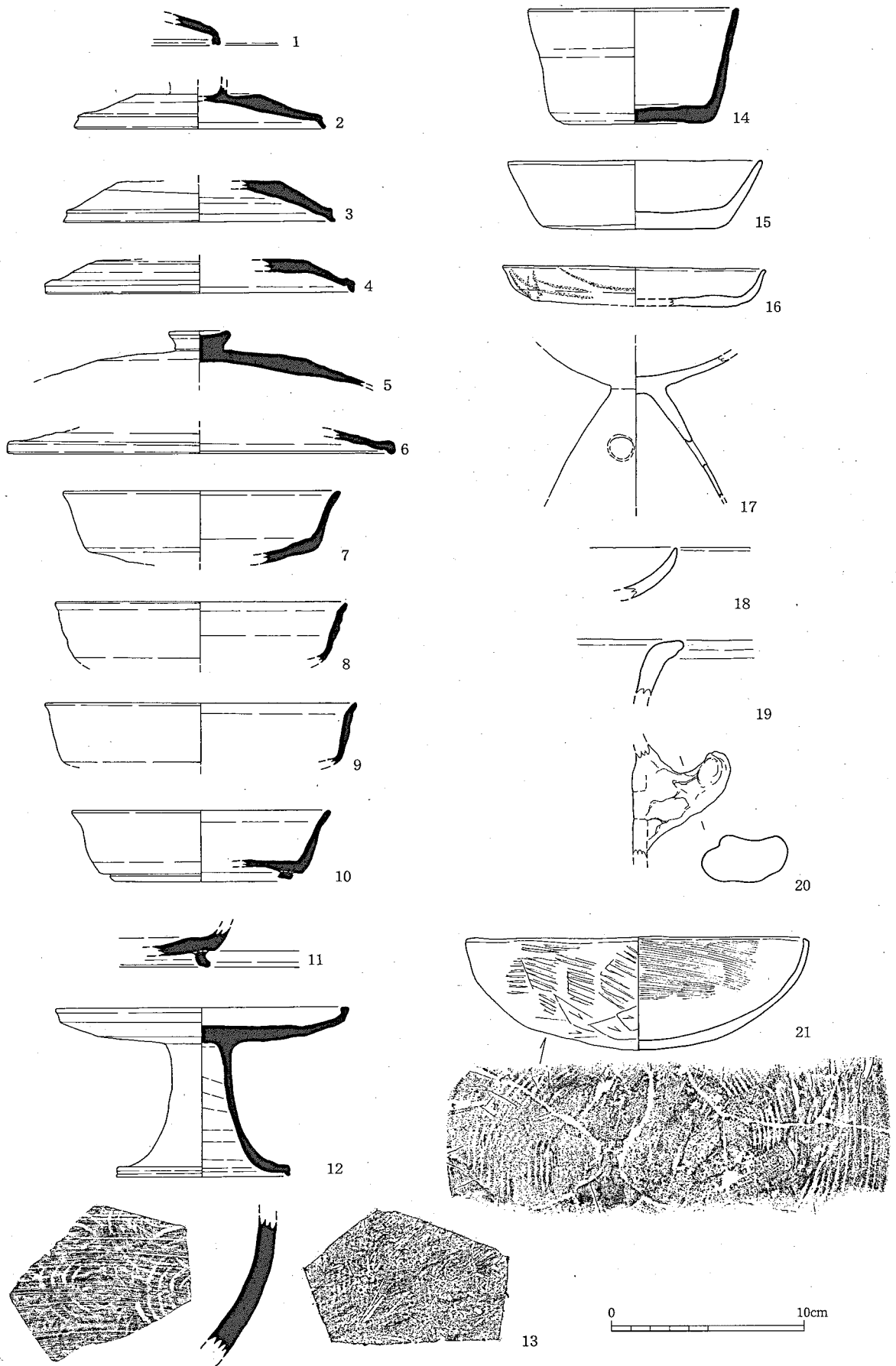
10は弥生土器甕の底部である。底部は平底で薄い。外面には部分的にハケメが残る。内面はナデ調整である。底径7.5cmである。11は縄文土器の胴部片である。深鉢であろうか。外面には刻みが施される。

11号土坑(第106図)

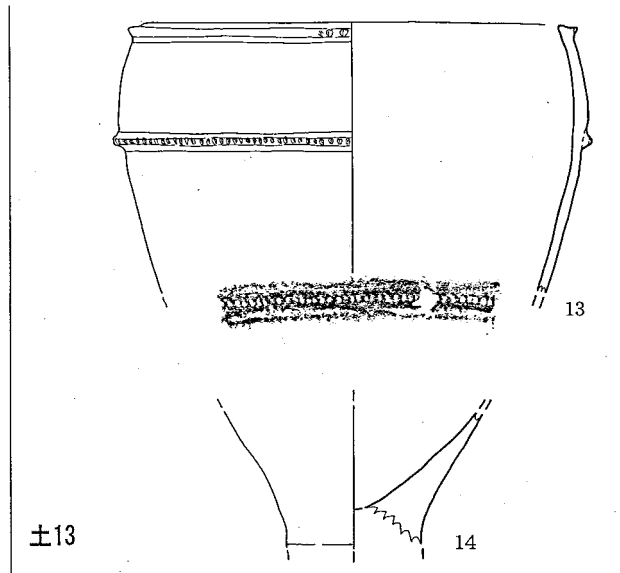
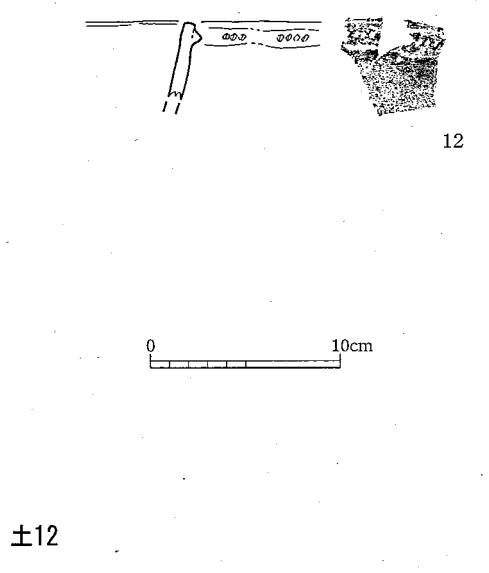
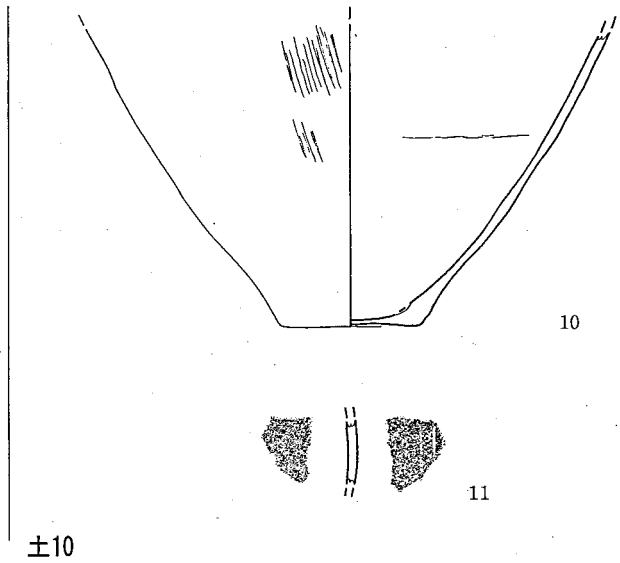
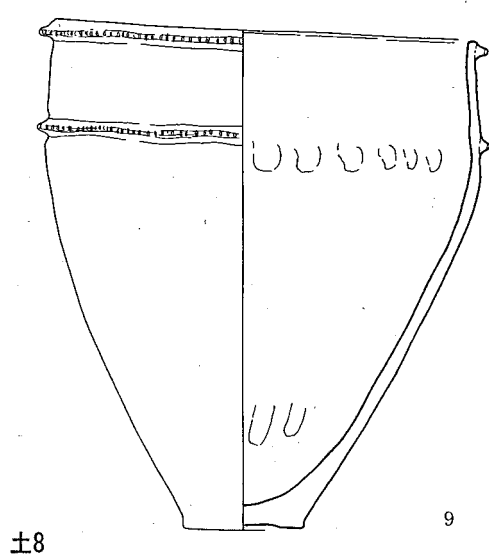
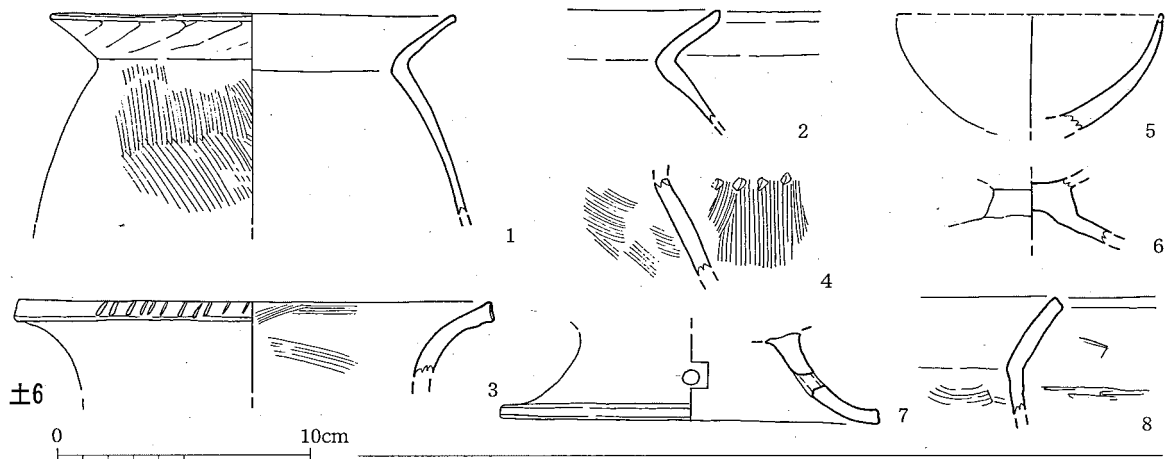
第三遺構面、調査区の北端部で検出した。長軸150cm×短軸138cmの楕円形を呈する。深さは約15cmで底面は平坦である。遺物は出土していない。



第103図 4区5～8号土坑実測図 (5・6は1/60、他は1/30)



第104图 4区5号土坑出土土器实测图 (1/3)



第105図 4区6・8・10・12・13号土坑出土土器実測図(1~8は1/3、他は1/4)

12号土坑(第106図)

第三遺構面、調査区の中央で検出した。長軸105cm×短軸103cmの略円形を呈する。深さは約15cmである。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器(第105図)

12は弥生土器甕の口縁部である。口縁端部よりわずかに下がった位置に断面三角突帯を貼り付け、刻み目を施す。胴はあまり張らない器形である。

13号土坑(第107図)

第四遺構面、調査区の南端部で検出した。長軸240cm×短軸180cmの略方形を呈する。深さは約30cmで、中央付近が一段深く掘られる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器(図版68、第105図)

13は弥生土器の甕である。やや胴の張る器形。口縁と胴部最大径の部分に断面三角形の突帯を貼り付け、刻み目を施す。内外面の調整はナデである。口径は21.8cmである。14は弥生土器の底部である。底径7.2cmである。

14号土坑(第106図)

第四遺構面、調査区の南端部で検出した。長軸78cm×短軸58cmの楕円形を呈する。深さは約5cmで、底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

15号土坑(第107図)

第四遺構面、調査区の南端部で検出した。長軸90cm×短軸70cmのやや不整な楕円形を呈する。深さは東側が一段深くなっており、約15cmである。遺物は出土していない。

16号土坑(第107図)

第四遺構面、調査区の南端で検出した。19号甕棺墓に切られる。長軸100cm+ α ×短軸73cmの方形を呈するものと考えられる。深さは約20cmで底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

17号土坑(第107図)

第四遺構面、調査区の南端で検出した。長軸95cm×短軸68cmの楕円形を呈する。深さは西側が一段深くなり、約25cmである。遺物は出土していない。

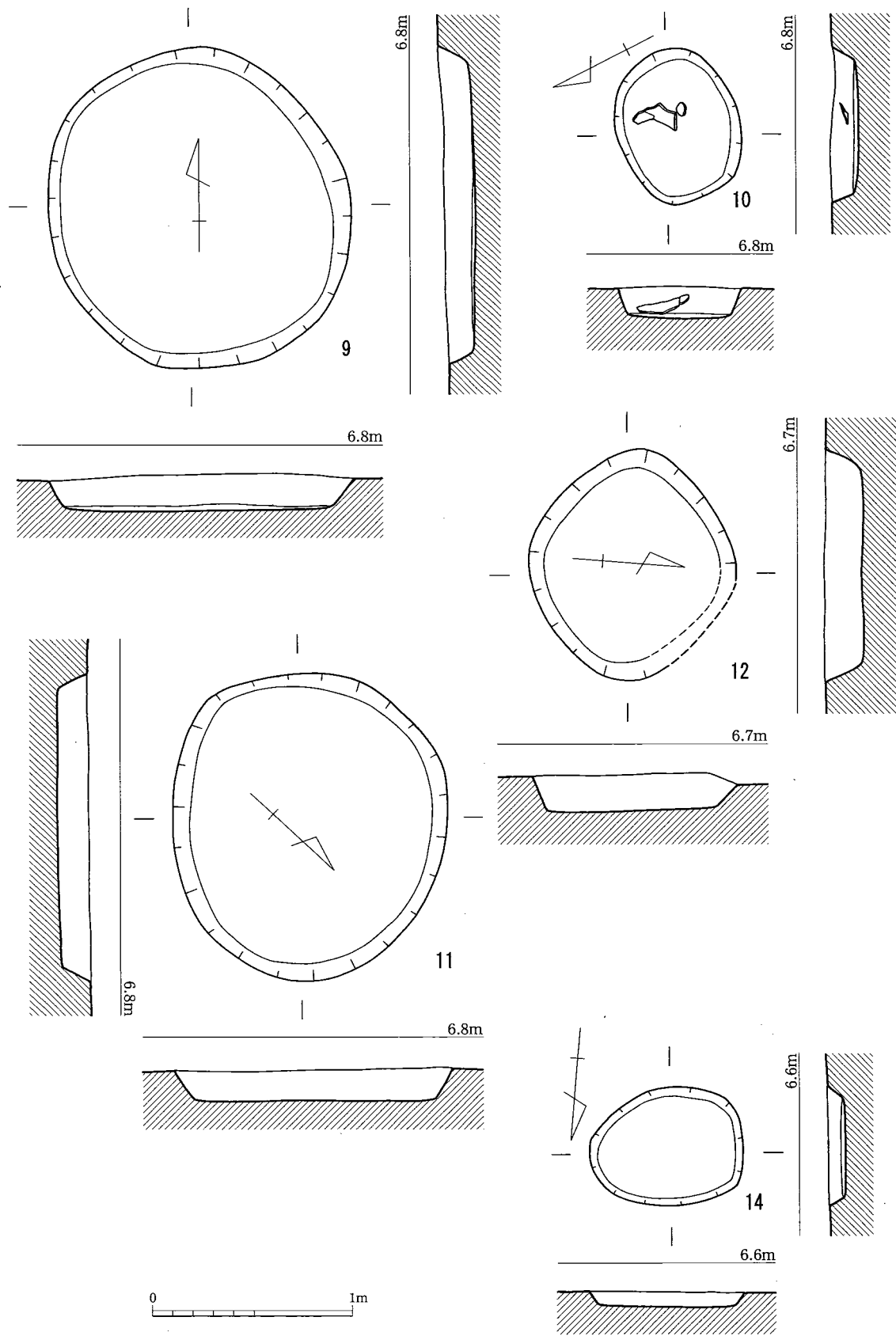
18号土坑(第107図)

調査区の南側で検出した、長軸100cm×短軸85cmの楕円形を呈する。深さは中央がやや深くなり、約15cmである。遺物は出土していない。

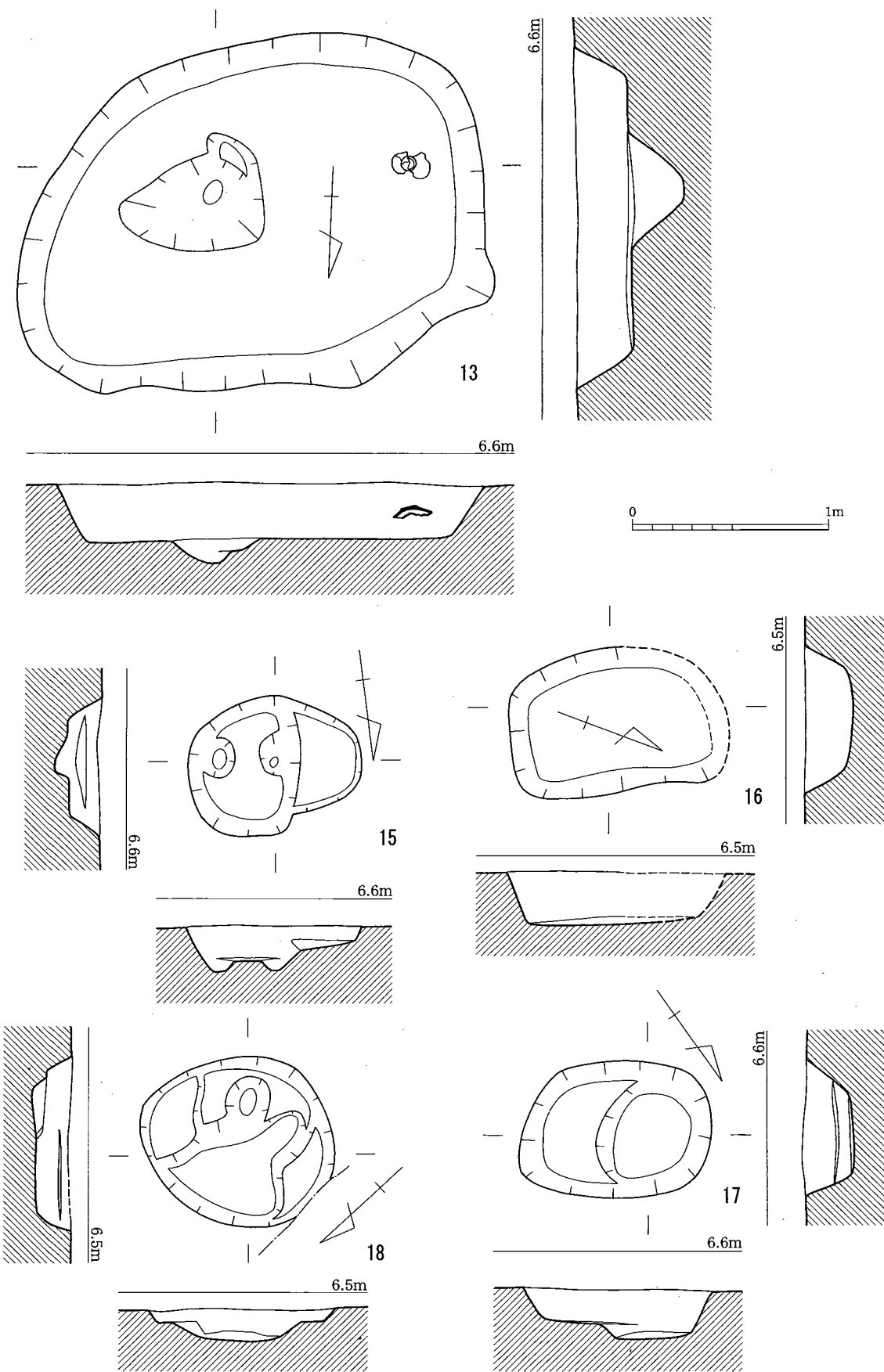
(6)溝

1号溝(図版42、第108図)

第一遺構面、調査区の北端部で検出した。1号竪穴住居跡を切る。北東から南西に向かい掘削され、両端は調査区外へ延びる。幅80cm、深さ40cmで中位に段を有する。土層断面の観察から掘り直しの可能性もある。遺物は奈良時代の須恵器が出土している。



第106图 4区9~12·14号土坑实测图 (1/30)



第107图 4区13·15~18号土坑实测图 (1/30)

出土土器(図版69、第109図)

1~5は須恵器の蓋杯である。1は輪状つまみをもつものである。外面には重ね焼きの後が残る。焼け歪みが著しい。つまみ径6.5cm、口径19.0cm、器高3.9cmである。2はやや深くなる器形である。口径21.2cmである。3は大きく広がる口縁部をもつ杯身である。高台は小さく踏ん張らない。口径19.8cm、底径12.0cm、器高5.6cmである。4も踏ん張らない高台をもつ杯身である。口径18.7cm、底径11.7cm、底径5.3cmである。5は杯身片である。底径10.0cmである。6は甕の口縁部である。直線的に広がり、わずかに摘み上げる。口径18.0cmである。7は縄文後期後葉の土器の口縁部である。外端部は沈線を3条施す。8は甕の口縁部である。内外面の調整はハケメ。口径27.0cmである。

2号溝(第108図)

第一遺構面、調査区の中央やや北寄りで見出した。北西から南東に向かい掘削され、両端は調査区外へ延びる。幅100~150cm、深さ30cmである。遺物は弥生土器が出土しているが、混入の可能性が高い。

出土土器(第109図)

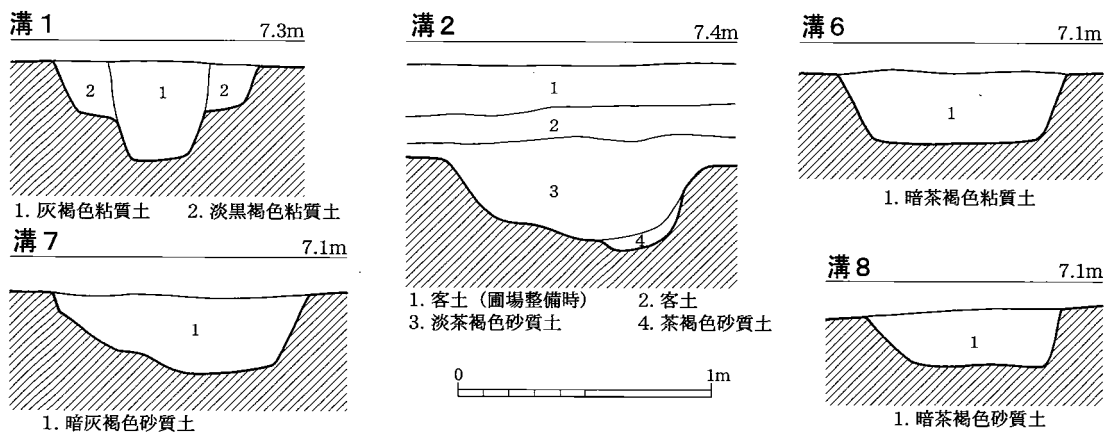
9は弥生土器の甕の口縁部片である。中型の甕で胴は比較的張る器形と考えられる。口縁は両側に発達する。内外面の調整はナデである。

3号溝(第64図)

第一遺構面、調査区の中央やや南寄りで見出した。3号竪穴住居跡を切る。東から西に向かい掘削され、東端は調査区外へ延びる。西端は試掘トレンチにより切られるが、本来、その付近で消失していたものであろう。幅60cm、深さ10cmである。遺物は奈良時代の須恵器・土師器が出土している。

出土土器(図版69、第109図)

10~14は須恵器である。10は杯蓋である。つまみを欠失する。11は端部をわずかに折り曲げる杯蓋である。口径13.6cmである。12は高台を貼り付ける杯身である。高台は踏ん張らず底径8.0cmである。13の底径は8.6cmである。14は甕の胴部片である。外面は平行タタキ。内面は同心円文の当具痕が残る。15は土師器の杯である。口径14.2cm、底径9.5cm、器高3.5cmである。



第108図 4区1・2・6~8号溝土層実測図(1/30)

4号溝(図版42、第64図)

第一遺構面、調査区の南端部で検出した。5号竪穴住居跡を切る。北東から南西に向かい掘削され、両端は調査区外へ延びる。幅120cm、深さ25cmで北側に段が付く。遺物は奈良時代の須恵器・土師器が出土している。

出土土器(図版69、第109図)

16・17は須恵器である。16は長頸壺の口縁部から肩部にかけての部分である。口縁部は緩やかに広がる。内外面の調整はナデである。口径12.0cmである。17は高杯の杯部と脚部部分である。内外面の調整はナデ調整である。脚部内面には粘土の接合痕が明瞭に残る。18・19は土師器である。18はすばまらない器形である。外面の調整はハケメである。内面の調整はナデである。外面には黒斑が大きく付着する。口径34.0cm、器高25.5cmである。19は高杯の杯部と脚部部分である。外面にはハケメがわずかに残る。

5号溝(第64図)

第二遺構面、調査区の北側で検出した。東西に掘削され、両端は調査区外へ延びる。幅60cm、深さ30cmで逆台形を呈する。遺物は出土していない。

6号溝(第108図)

第二遺構面、調査区の北側で検出した。北東から南西に掘削され、両端は調査区外へ延びる。また、南側へ別れ、5mほど延びて消失する。11・12号甕棺墓を切る。幅90cm、深さ30cmで逆台形を呈する。遺物は出土していない。

7号溝(第108図)

第二遺構面、調査区の北側で検出した。北東から南西に掘削され、両端は調査区外へ延びる。13号甕棺墓、8号土坑を切る。幅100cm、深さ30cmで逆台形を呈する。遺物は出土していない。

8号溝(第108図)

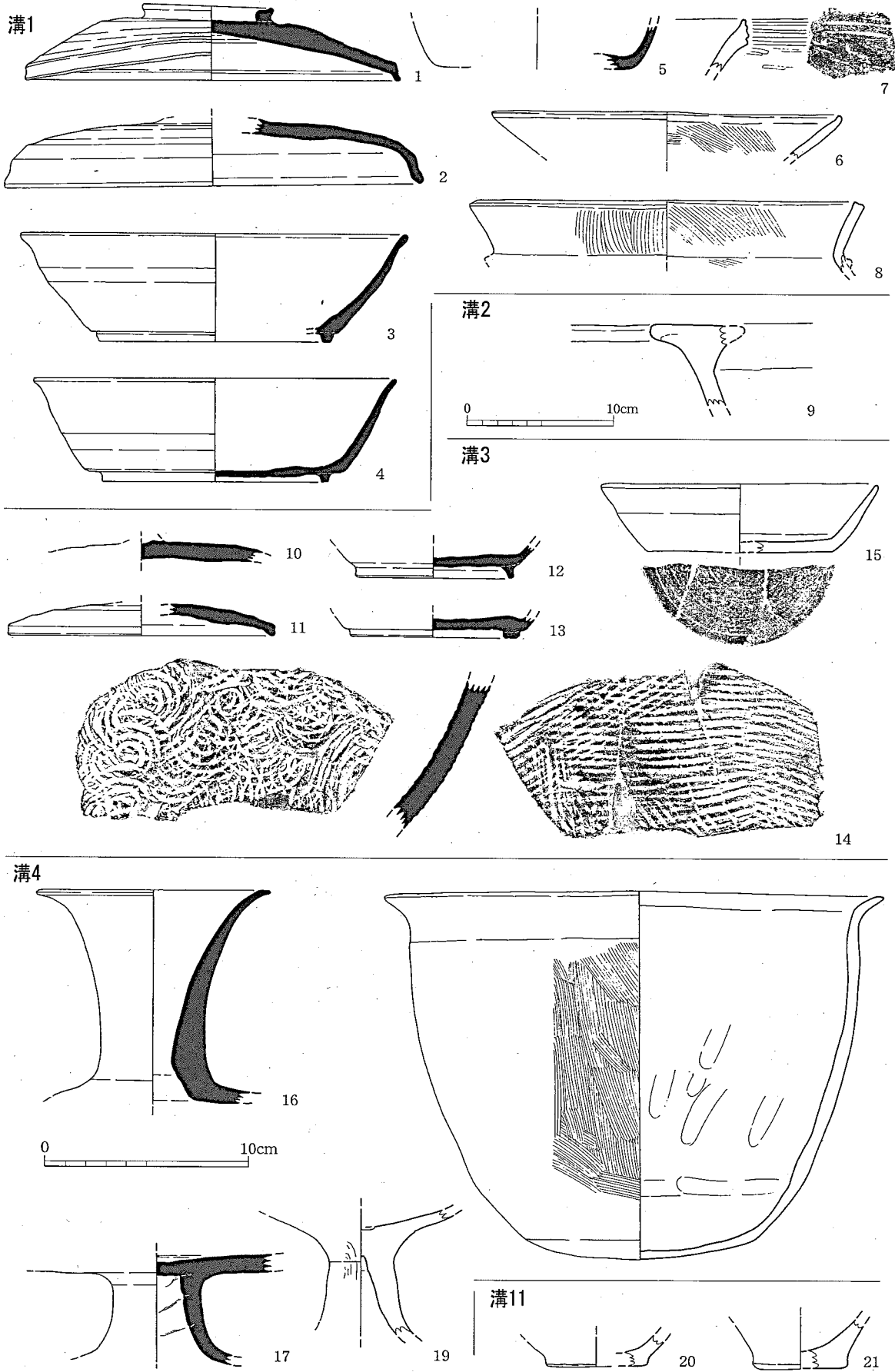
第二遺構面、調査区の北端部で検出した。南西から二条に別れ北東に向かい掘削されるが、切り合いがなかったためにいずれも8号溝とした。幅70cm、深さ20cmで逆台形を呈する。

9号溝(第65図)

第三遺構面、調査区の北端部で検出した。東西に掘削され、両端は調査区外へ延びる。幅90cm、深さ20cmの逆台形を呈する。遺物は出土していない。

10号溝(第65図)

第三遺構面、調査区の北側で検出した。北北東から南南西の向かい掘削され、両端は消失する。幅50cm、深さ15cmである。遺物は出土していない。



第109図 4区1~4・11号溝出土土器実測図 (8・9・18・20・21は1/4、他は1/3)

11号溝(第65図)

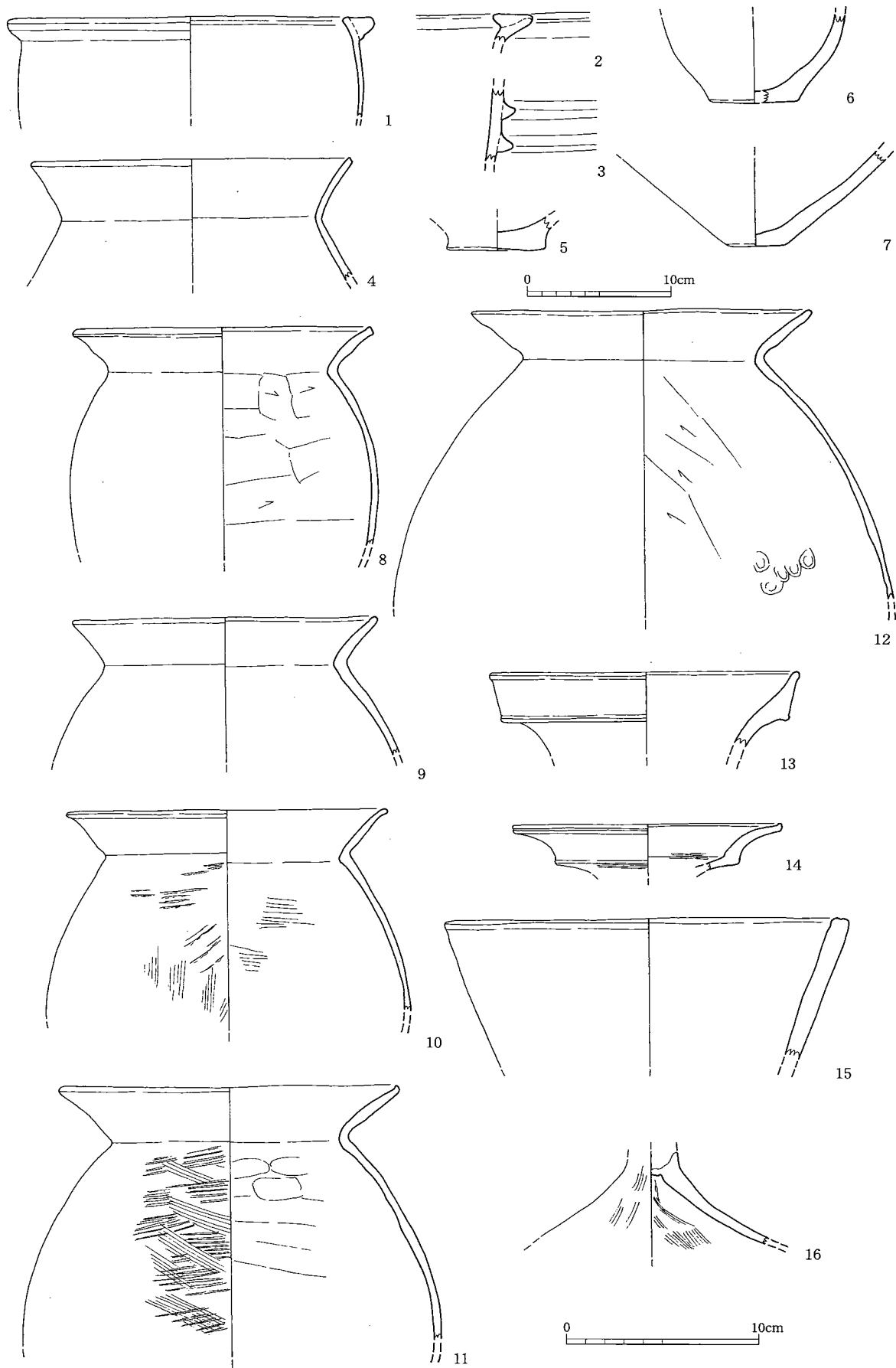
第三遺構面、調査区の中央部付近で検出した。北西から南東に向かい掘削されており、両端は消失する。溝の幅50cm、深さ25cmである。遺物は縄文土器が少量出土しているが、この溝に伴うものではない。

出土土器(第109図)

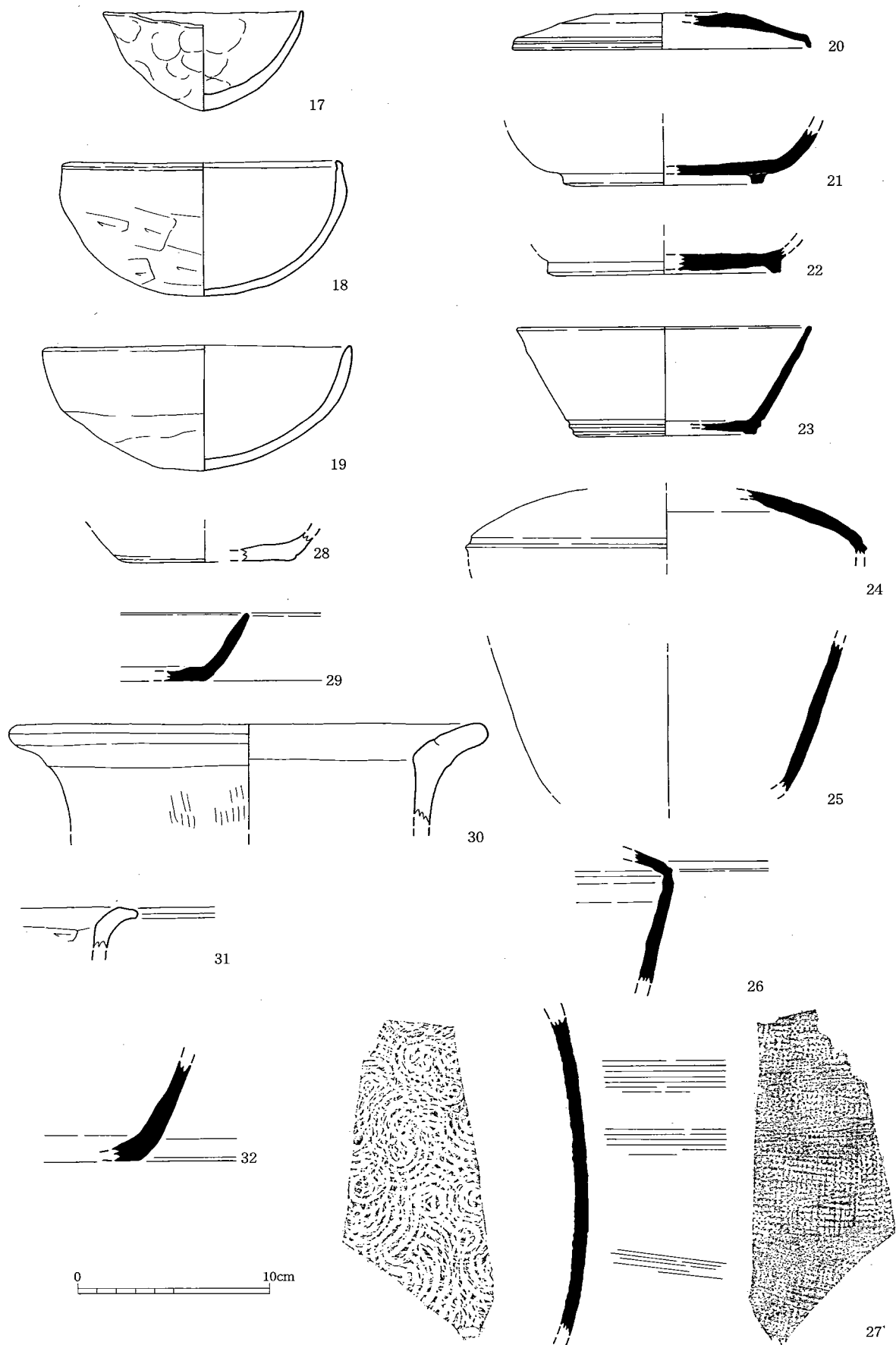
20・21は縄文土器の底部である。20の底径は6.9cm。21の底径は6.6cmである。

(7)遺構面等出土土器(図版69、第110・111図)

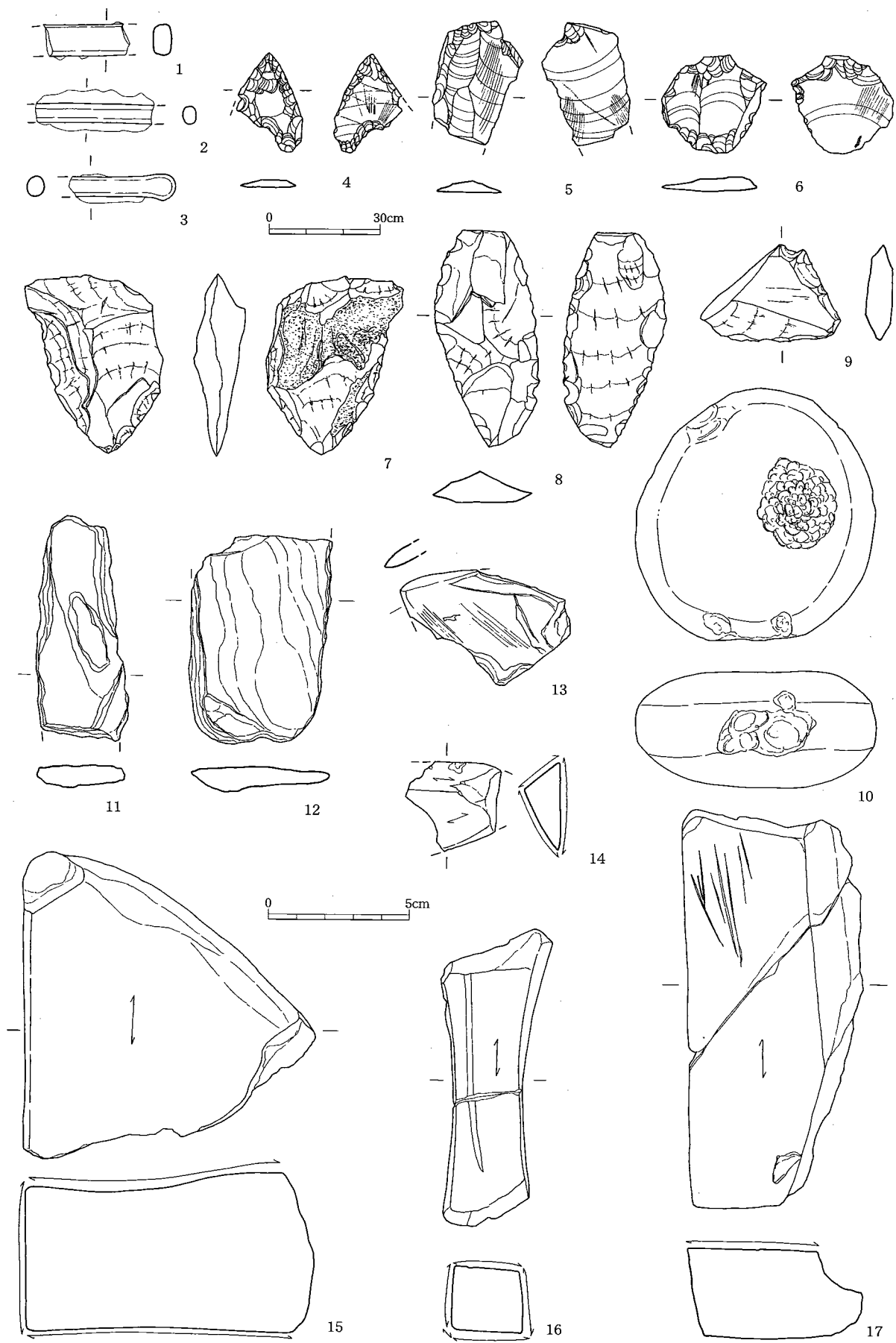
1~7は弥生土器である。1は断面三角の甕の口縁部である。端部のつくりは丸い。口径25.6cmである。2は壺の口縁部であろうか。粘土帯を口縁端部内面に貼り付ける。3は甕の胴部片である。断面三角突帯を2条貼り付けている。4は器壁の薄い甕である。口縁端部は角ばって仕上げられる。口径22.4cmである。5は甕の底部である。底径6.8cmである。P15から出土している。6は小型の壺もしくは鉢の底部である。底径6.4cmである。南側グリッドから出土している。7は壺の底部である。底径4.2cmである。8~19は土師器である。8~12は甕である。8はわずかに外反気味の口縁端部を角ばって仕上げる。外面の調整は摩滅のため不明。内面の調整は横方向のケズリである。口径15.6cmである。9は直線的に広がる口縁端部を丸く仕上げる。内外面の調整は摩滅のため不明。口径15.8cmである。10はわずかに外反する口縁である。外面の調整はハケメであるが、肩部に部分的にタタキが残る。内面はハケメの後、ナデ調整である。口径16.7cmである。11は直線的に広がる口縁端部をわずかにつまみあげるものである。外面の調整はタタキの後、部分的にハケメである。内面は圧痕が多数残っている。口径17.5cmである。12は胴の大きく張る甕である。口縁部は直線的に広がる。外面の調整は摩滅のために不明。内面の調整はケズリで部分的に圧痕が残る。13・14は壺である。13は外面に段を形成し、二重口縁状に仕上げえる。内外面の調整は摩滅のために不明。外面に黒斑が付着する。口径16.1cmである。14は二重口縁で外側に大きく開く。内外面ともにミガキ調整である。口径14.0cmである。15は鉢である。器壁は厚い。口径21.0cmである。16は高杯の脚部である。全体のつくりはやや粗い。内外面の調整はハケメである。P6からの出土である。17~19は鉢である。17は手づくね様のつくりで、内外面には圧痕が多く残る。口径10.4cm、器高5.1cmである。18は外面をケズリで仕上げる。内面はナデ調整である。口径14.6cm、器高6.9cmである。19は口径16.0cm、器高6.5cmである。20~27は須恵器である。20は杯蓋である。口縁端部をわずかに折り曲げる。内面には重ね焼きの痕跡が残る。口径15.6cmである。P4から出土している。21~23は杯身である。21は踏ん張らない高台に大きく広がる胴部が付く。底径10.5cmである。22の底径は12.2cmである。23はわずかに残る高台に直線的な口縁部が付く。口径15.4cm、底径9.5cm、器高5.6cmである。24は長頸壺の肩部である。胴部の最大径付近に沈線が巡る。内外面の調整はナデである。25は長頸壺の胴部である。内外面の調整は回転ナデである。26は長頸壺の肩部から胴部にかけての部分である。肩部付近には自然釉が付着する。27は甕の胴部である。外面は格子タタキで、部分的にカキメが施される。内面は同心円のタタキである。28~32は土師器である。28は杯である。やや器壁が厚く、重い印象を受ける。底径9.2cmである。29は杯である。内外面はナデ調整である。30は甕である。口縁を厚く外反させる。外面はハケメ。内面はケズリである。口径25.0cmである。31は甕である。内面は横方向のケズリを施す。32は平底の器形である。甕であろうか。内外面はナデ調整である。



第110図 4区遺構面等出土土器実測図① (1~7は1/4、他は1/3)



第111图 4区遺構面等出土土器実測図② (1/3)



第112図 1～4区出土鉄器・石器実測図（4～6は2/3、他は1/2）

挿図番号	種類	区	出土場所	長さ	幅・径	厚さ	重量	材質	備考
第112図1	鉄器	4区	13号住居	3.0+ α	1.1	0.6	5.0	鉄	
第112図2	鉄器	4区	1号溝	4.3+ α	0.6	0.5	4.0	鉄	
第112図3	鉄器	4区	1号溝	3.7+ α	0:7	0.6	8.0	鉄	
第112図4	石鏃	4区	トレンチ	2.6	1.5+ α	0.2	1.0	黒曜石	腰岳系
第112図5	スクレイパー	4区	10号溝	3.2+ α	2.1	0.3	2.0	黒曜石	腰岳系
第112図6	スクレイパー	4区	10号土坑	2.6	2.8	0.3	3.0	黒曜石	腰岳系
第112図7	スクレイパー	4区	14号住居P-1	6.5	4.5	1.8	42	安山岩	
第112図8	スクレイパー	4区	1号住居	7.6	3.5	1.1	27	安山岩	
第112図9	スクレイパー	4区	5号土坑	3.5	5.0+ α	0.9	17	安山岩	
第112図10	敲石	3区	1号土坑	8.9	8.6	4.1	450	玄武岩	
第112図11	石鋏	4区	遺構面	7.8+ α	3.0	0.8	27	粘板岩	
第112図12	石鋏	4区	遺構面	7.4+ α	4.8	0.9	43	粘板岩	
第112図13	石庖丁	2区	表土剥ぎ時	6.1+ α	4.1+ α	0.6	14	凝灰岩	気泡が多い
第112図14	不明磨製石器	4区	6号土坑	3.2+ α	3.1+ α	1.3	9.0	粘板岩	
第112図15	砥石	2区	西側トレンチ	10.8+ α	10.2+ α	5.8	786	砂岩	被熱
第112図16	砥石	4区	13号住居	9.7	3.8	2.2	144	細粒砂岩	1条の筋が入る
第112図17	砥石	4区	20号住居	14.1	6.3	3.1	522	粘板岩	数条の筋が入る

第2表 1～4区出土鉄器・石器一覧表

7 まとめ

遺跡の変遷について

今回報告する小川柳ノ内遺跡の1～4区からは、縄文時代後晩期から中世にわたるさまざまな時期の遺構・遺物を検出している。19年度報告予定の近接する5～8区の遺構・遺物がまだ未整理の段階ではあるが、現報告時点での遺構を時期別に追いながら周囲の土地の利用状況を考えつつ、取りあえずのまとめとしたい。

本遺跡1～4区においては遺構は検出することができなかったが、調査区内に存する後世の時期の遺構及び遺構面などから縄文時代後晩期の土器が少量出土している。19年度に報告を行う予定の5～8区においても縄文期の遺構自体は検出されておらず、土器もあるがそう多量の出土は見られなかった。周辺では、第二次世界大戦後、九州大学の鏡山猛氏が坂田出土の縄文土器を紹介されて以降(注1)、縄文の遺跡としては著名であり、昭和50年代後半以降、盛んに行われた県営の圃場整備に伴い発掘調査が行われた権現塚北遺跡(注2)においても縄文時代後晩期の竪穴住居跡・埋甕・土坑等の調査が行われている。この時点ですでに指摘されていることではあるが、遺跡の周辺に縄文の大規模な集落が分布している可能性が高いと思われる。

次に古い遺構が3区の最終遺構面で検出した土坑群11～15号土坑である。これらの土坑群からは少量であるが、弥生時代前期後半～中期初頭にかけての土器を検出している。この遺構面では弥生時代中期前半の甕棺墓を検出しているものの、これらの甕棺墓が上層の甕棺墓と同様に墓坑が極めて検出しづらかったことから、これらについては上面の層からの掘り込みを見落としていたものと判断している。しかし、土坑群については覆土が暗黒褐色粘質土であり、比較的検出しやすかった事から、甕棺墓群とは時期が異なり、出土土器から弥生前期後半～中期初頭にかけての遺構であると判断している。これらの遺構については、次年度報告予定である5・6・8区などで検出されている円形竪穴住居跡を伴う集落との関連を視野に入れておきたい。

本遺跡調査区内で本格的に土地利用の状況がわかるのは弥生時代中期前半に入ってからで、3・4区が墓地として利用されている。その構成は甕棺墓が68基と主であり、他に石蓋土坑墓1基、石棺墓1基の計70基が調査されている。甕棺墓の時期としては一部が弥生中期中頃までに下る可能性があるものの、そのほとんど全てが中期前半の範疇におさまると考えられる。

4区の1号石棺墓については、検出時のまま1号石棺墓として報告しているが、石棺墓の長軸部側に中人用の甕棺を埋置した特異な形態であり、時期は中期前半であることがわかる。類例は見つけることができなかったが、卑近な事例として、西方約600mに位置する権現塚北遺跡において、土坑墓と甕棺墓を組み合わせた例(42号甕棺墓)や上甕と下甕を離して埋置を行う例(35号甕棺墓)があり、その関連が窺える。また、4区の1号石蓋土坑墓に関しては出土遺物はないものの、その埋葬の位置と主軸を同じくすることから同時期であろう。調査範囲内においては弥生時代中期前半という比較的限られた期間で墓地が造営されているといえる。

甕棺墓群の配置については、現在の水路により調査できなかった範囲が残るものの、3区の北端部から4区の南端部にかけての部分(A群)と4区の北端部にかけての部分(B群)でややまとまって検出されている。今回調査した68基の甕棺墓のうち、大型の成人用甕棺墓は3区が37基中11基、4区が21基中6基と約3割の比率を占めるが、A群においては成人棺の主軸方位は北東-南西の方位をとることが多く、縦列埋葬の可能性を窺わせる。これは、北東に所在する現在の納骨堂の微高地から南西に位置する下坂田集落の天満宮の微高地の間に位置することから、当時の地形が一連の微高地

であり、その地形に制約され縦列の埋葬が行われた可能性を窺わせる。また、B群についても同様に地形的な要因が大きかった可能性もある。ただし、今回の調査は路線幅約10mの範囲に過ぎず、推測の域を出ない。なお、次年度報告する5区より北では該当時期の甕棺墓は全く検出されておらず何らかの制約があったものと考えられる。

弥生時代中期後葉の土坑が1・2区で検出されており、周辺に集落の存在した可能性が窺える。

弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡19棟が4区で集中して検出されている。この時期の集落は次年度報告する5区にも広がっており、次年度に検討を行いたい。4区の15号竪穴住居跡は柱が立ち腐れしてその内部に粘質土が流入した状態で検出されており、柱の直径が約15cmであることがわかった貴重な事例であった。

奈良時代の遺構については3区の1号竪穴住居跡と4区の5号土坑が存在している。特に3区は弥生時代中期前半期に墓地として利用された後は、奈良時代に至るまで明確な遺構が検出されていない。近接する4～8区が弥生時代～古墳時代にかけて盛んに集落として利用された状況とは異なる様相を呈する。何らかの規制が働いていた可能性もある。他に3・4区の溝からも同時期の須恵器が出土しているが、この溝が該当期のものである確証はない。

また、3区では1～4号波板状遺構を検出している。明確に時期を示すものはないが須恵器・土師器片が出土しており、奈良時代以降の可能性が高い。なお、5区においても溝状遺構を横切る状況で同様の遺構が検出されている。こちらの遺構からは白磁片が出土しており、3区の遺構についても中世以降に下る可能性もある。この役割としては現在、湿地等の地盤を改良が考えられており、道路の基礎工事としての説が主流である。該当時期にこの付近が軟弱な地盤となっていたため、その改良のために行われたのであろう。ただし、その形状から大規模なものではなく、集落と田畑をつなぐ程度の小規模な道としての機能を考えている。

以上、1～4区の報告であるが、19年度の5～8区の出土遺構・遺物の整理を行った上で、改めて検討を行いたい。

(注1)鏡山 猛 「筑後坂田の縄文土器」『九州考古学2』1957

(注2)瀬高町教育委員会 「権現塚北遺跡」瀬高町文化財調査報告書 第3集 1985

圖 版



1区遠景（南から）



1区全景
（空中写真）



1区1号土坑（南西から）



1区2号土坑（南東から）



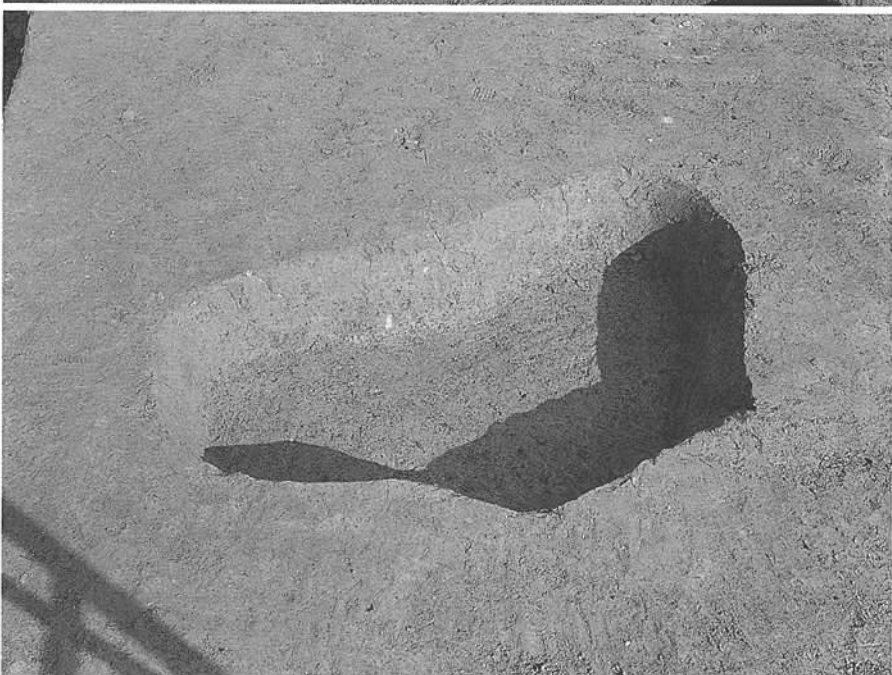
1区3号土坑（北から）



1区4号土坑（北西から）



2区1号土坑（南から）



2区2号土坑（南から）



2区3号土坑（北西から）



2区5号土坑（東から）



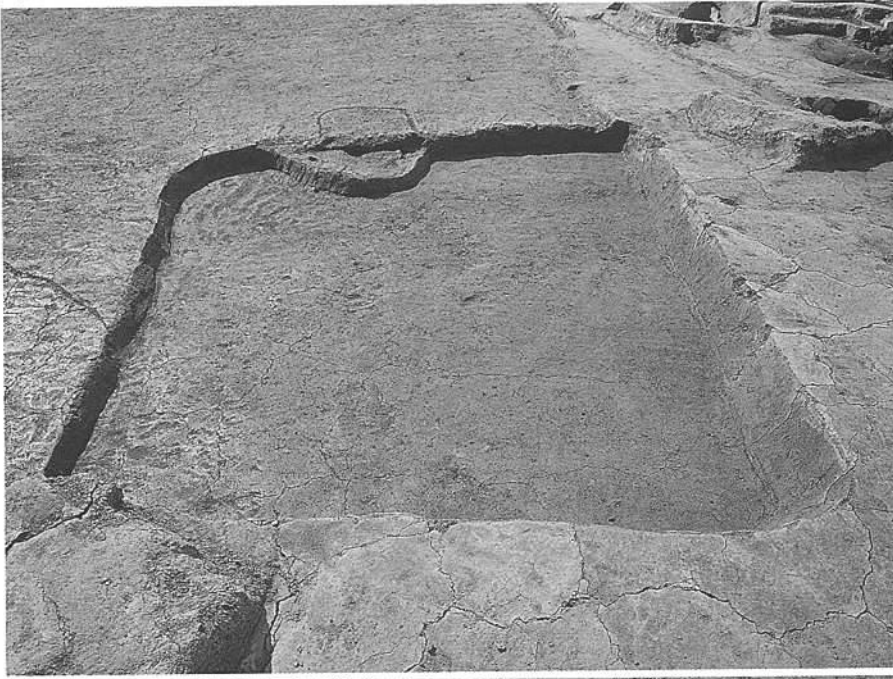
2区7号土坑（東から）

3区全景
(空中写真)



3・4区
甕棺集中部分





3区1号竪穴住居跡（東から）



3区1号甕棺墓（北から）



3区2号甕棺墓（南東から）

3区3号甕棺墓（南東から）



3区4号甕棺墓（南東から）

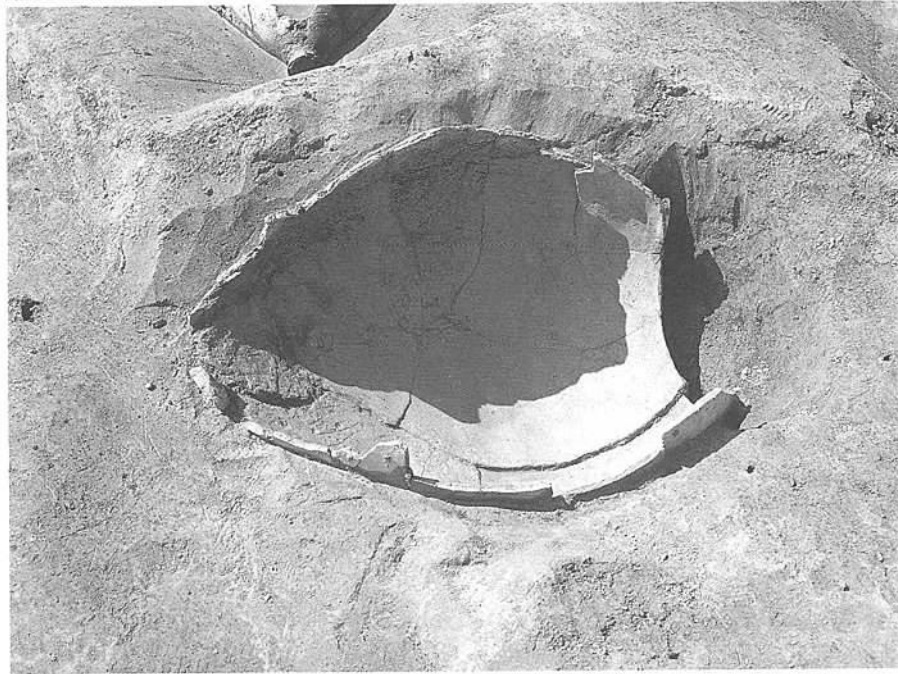


3区5・6号甕棺墓（北から）

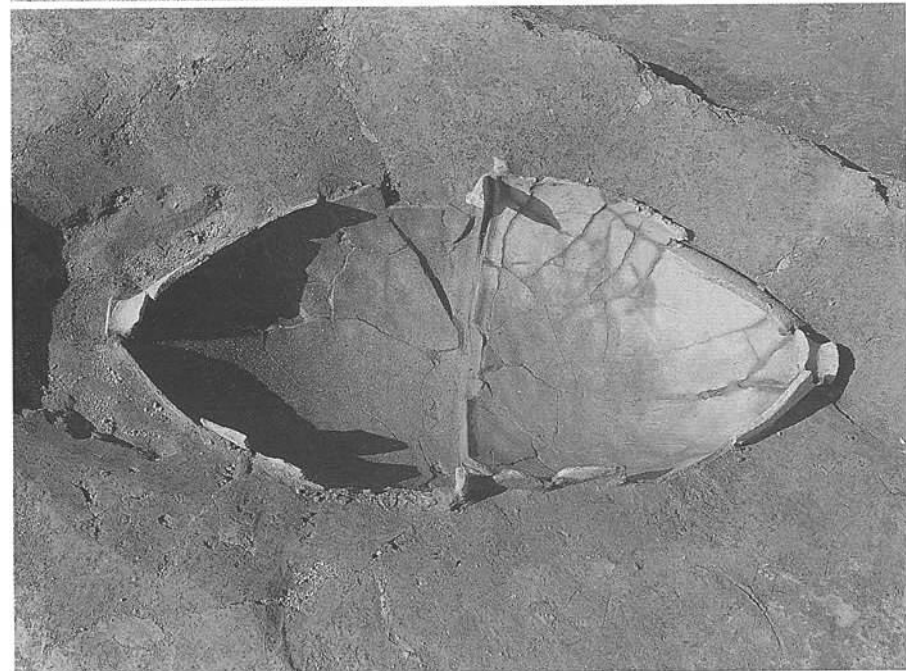




3区8号甕棺墓（南西から）



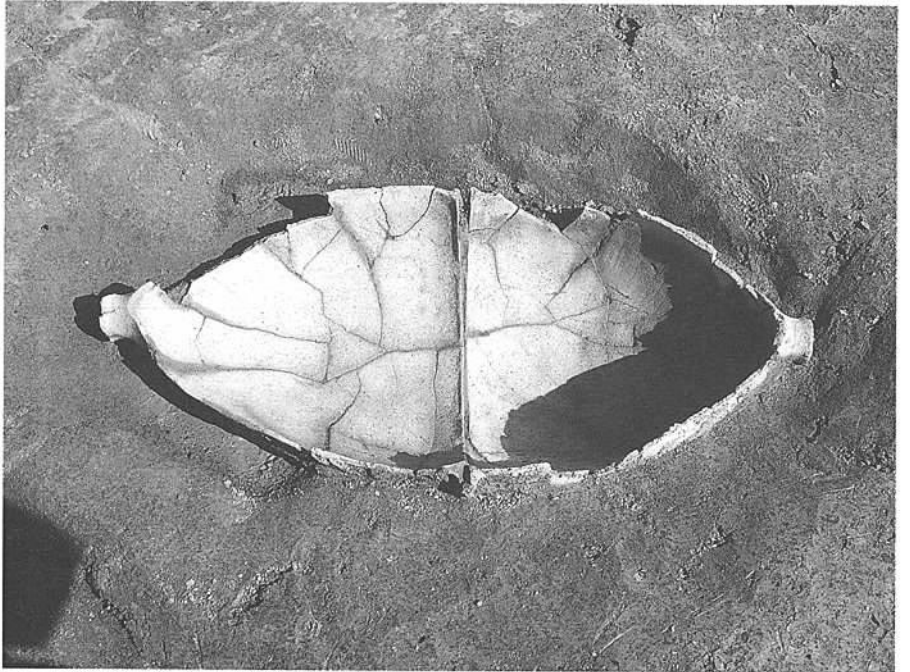
3区9号甕棺墓（北から）



3区10号甕棺墓（北東から）



3区11号甕棺墓（西から）



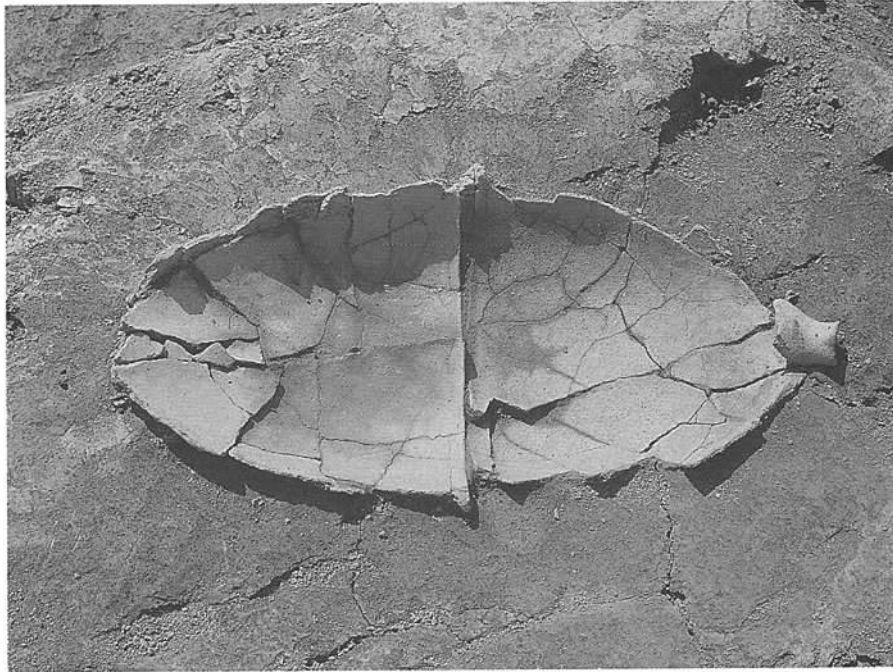
3区12号甕棺墓（南東から）



3区13号甕棺墓（北から）



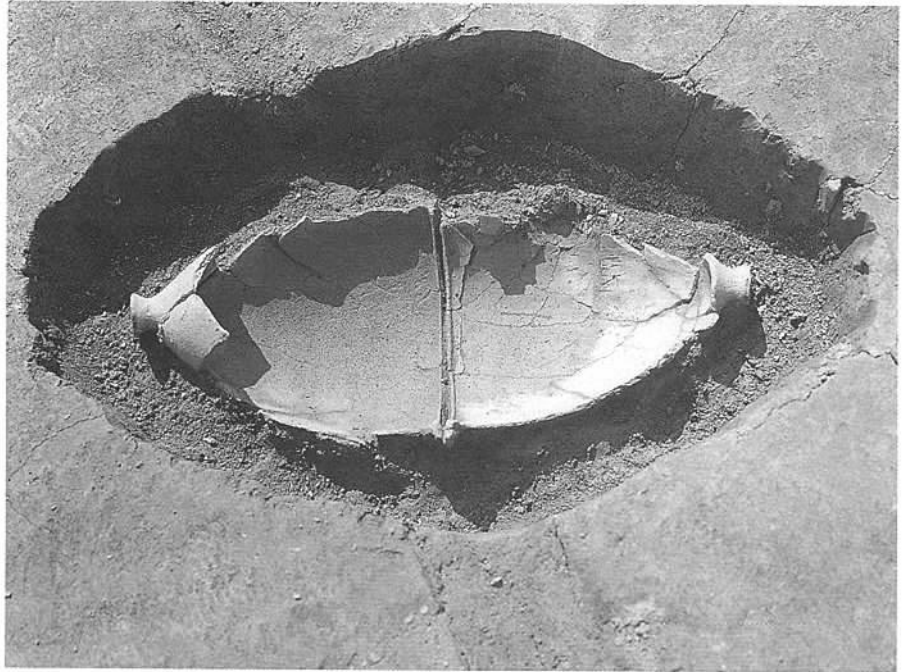
3区14号甕棺墓（北西から）



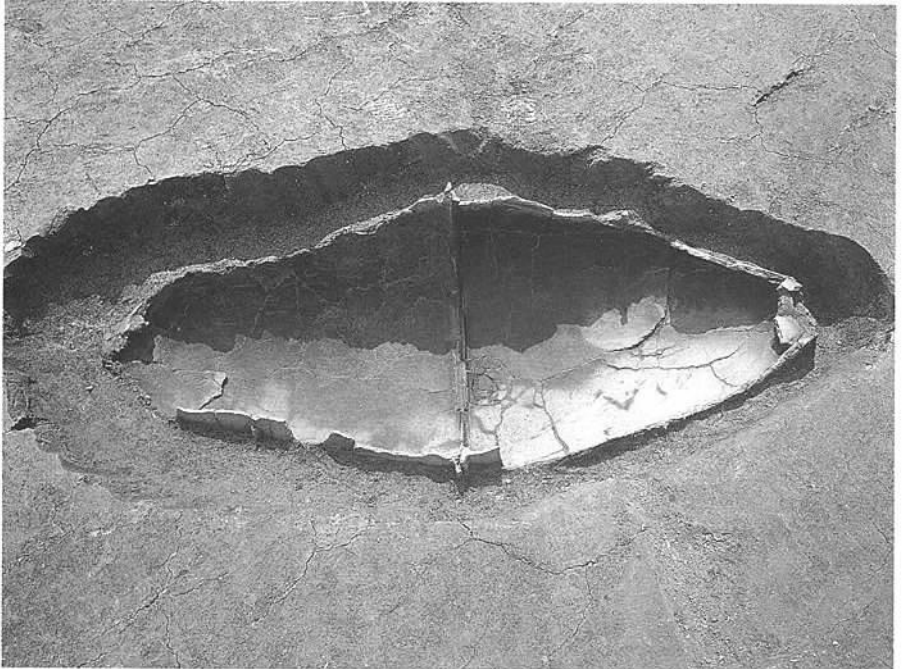
3区15号甕棺墓（北から）



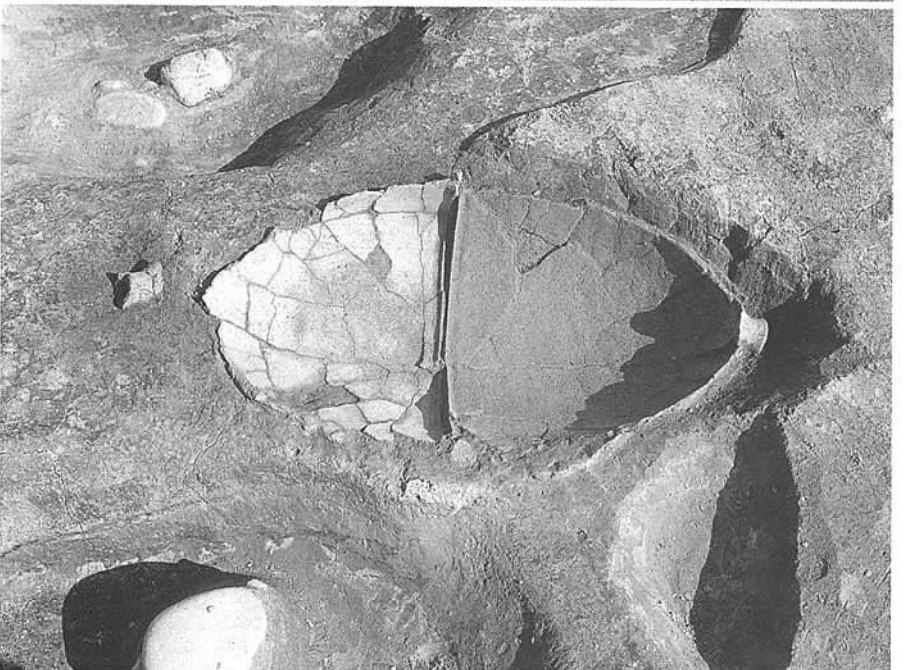
3区16号甕棺墓（南東から）



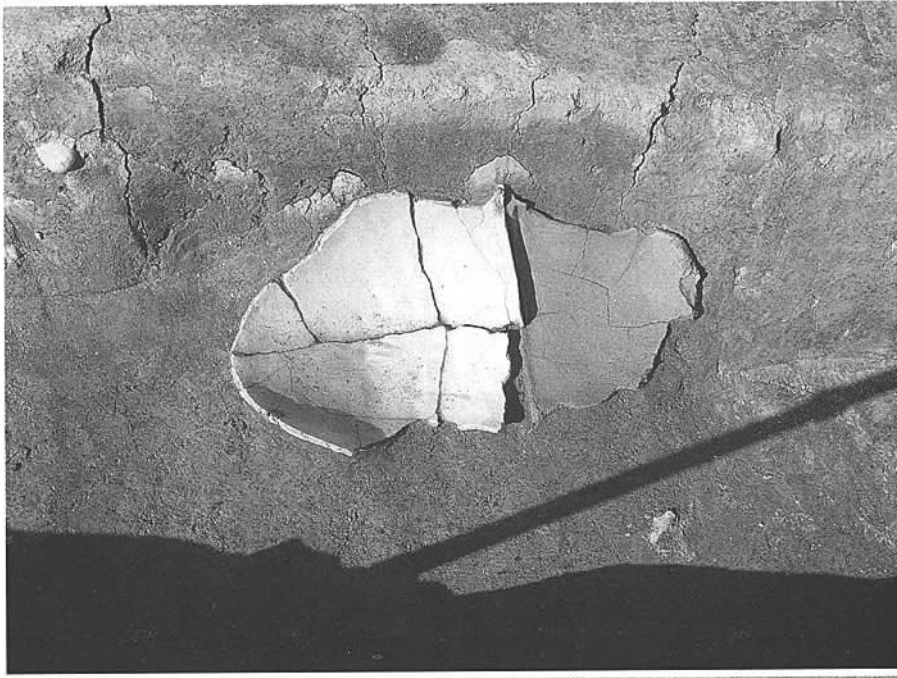
3区17号甕棺墓（北から）



3区18号甕棺墓（北から）



3区19号甕棺墓（西から）



3区20号喪棺墓（南から）



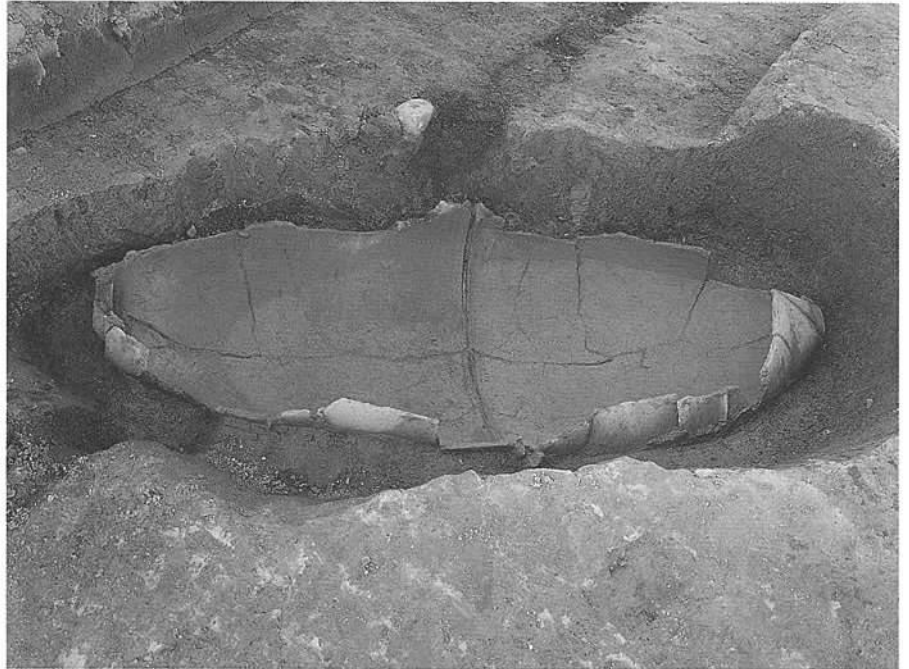
3区21号喪棺墓（南から）



3区22号喪棺墓（南東から）



3区23号甕棺墓（南東から）



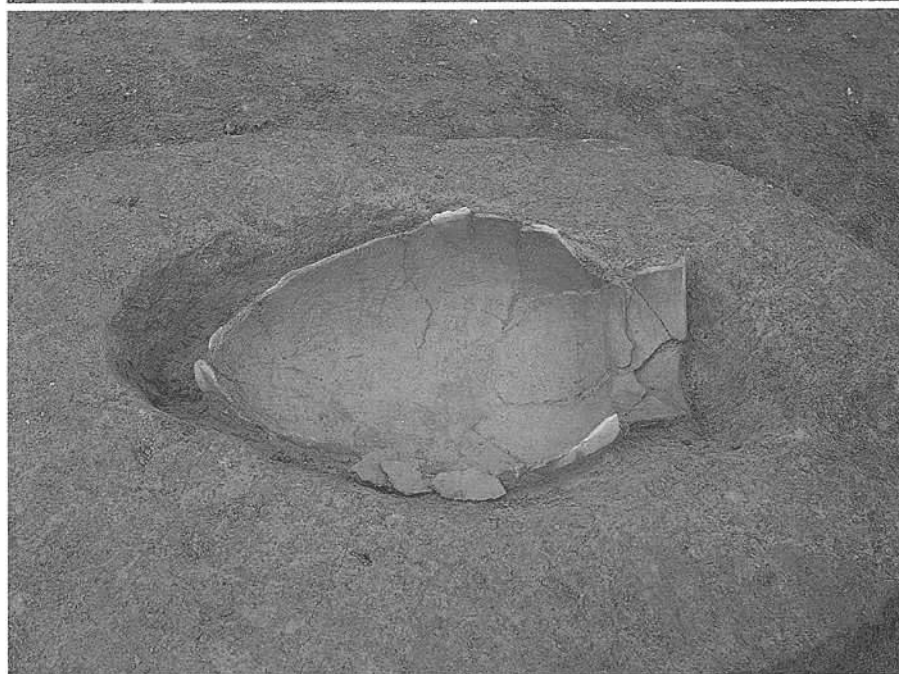
3区24号甕棺墓（北西から）



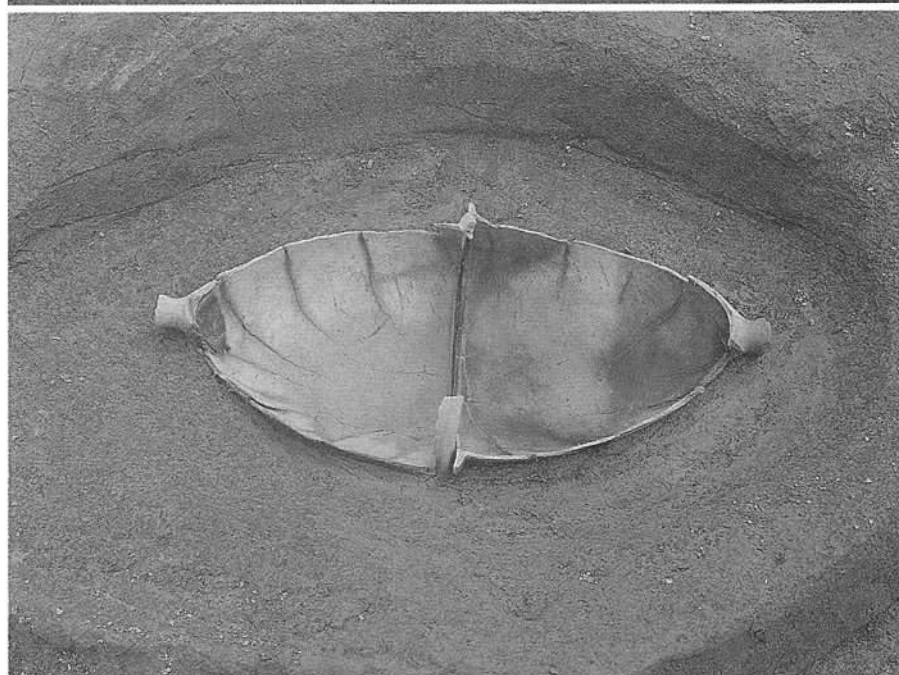
3区25号甕棺墓（東から）



3区26号甕棺墓（南東から）



3区27号甕棺墓（西から）



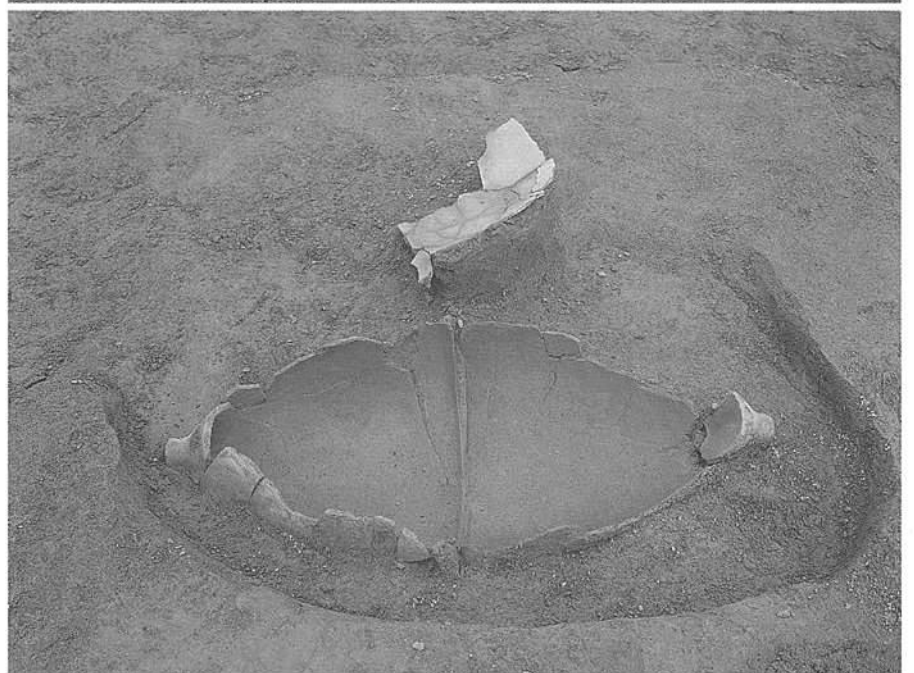
3区28号甕棺墓（西から）



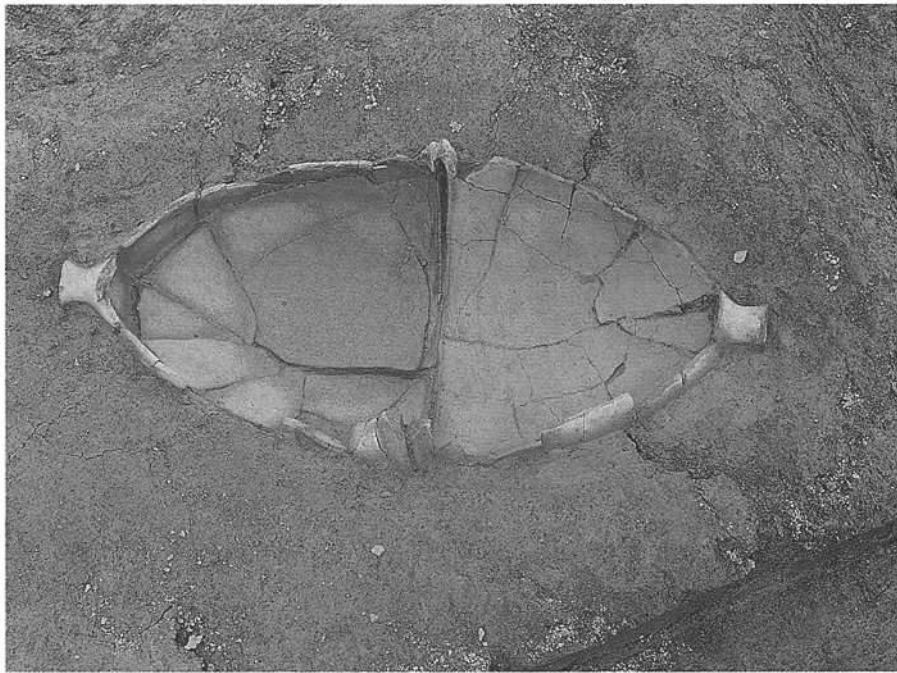
3区29号甕棺墓（東から）



3区30号甕棺墓（東から）



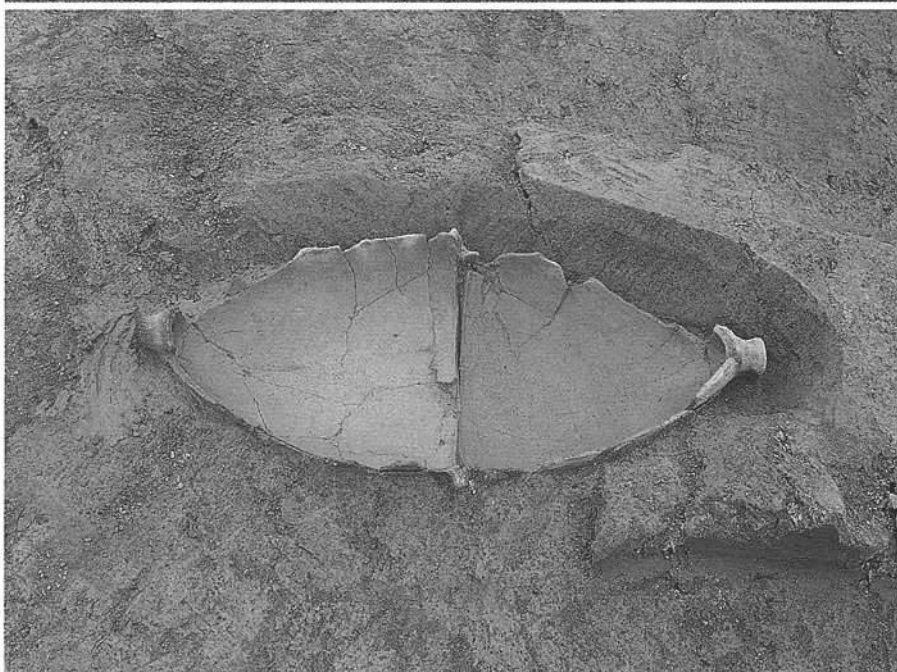
3区31・32号甕棺墓（南から）



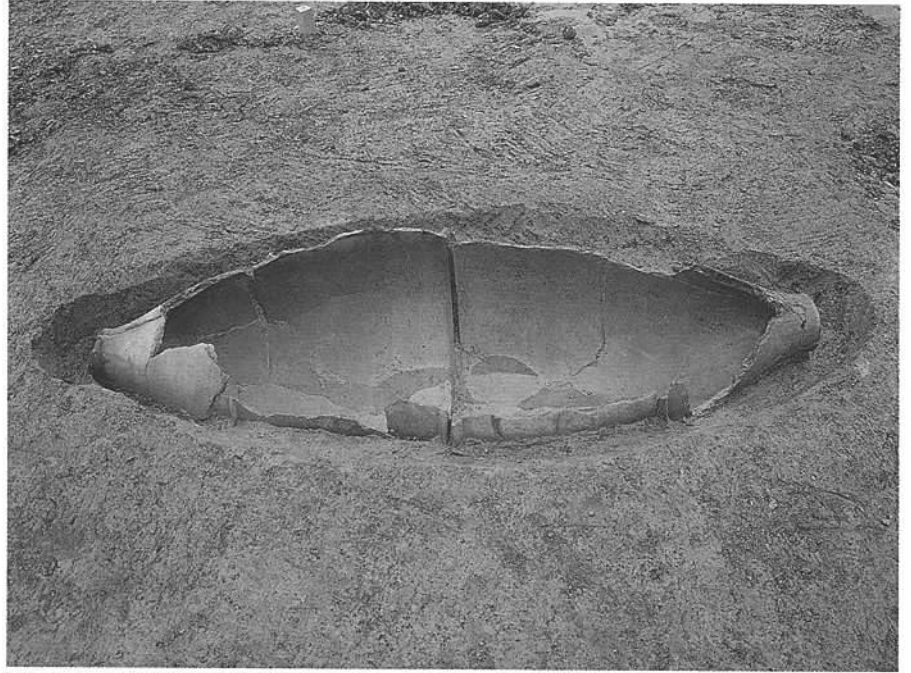
3区33号甕棺墓（東から）



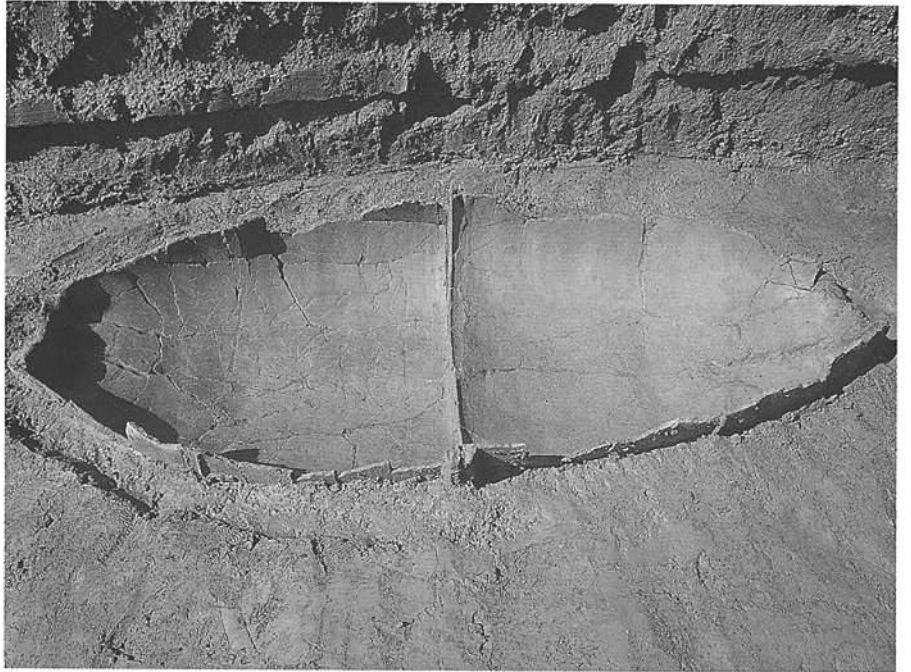
3区34号甕棺墓（西から）



3区35号甕棺墓（西から）



3区36号喪棺墓（北東から）



3区37号喪棺墓（東から）



3区1号祭祀土坑（北東から）



3区2号祭祀土坑（南から）



3区1号土坑（東から）



3区4号土坑（南東から）

3区7号土坑（東から）

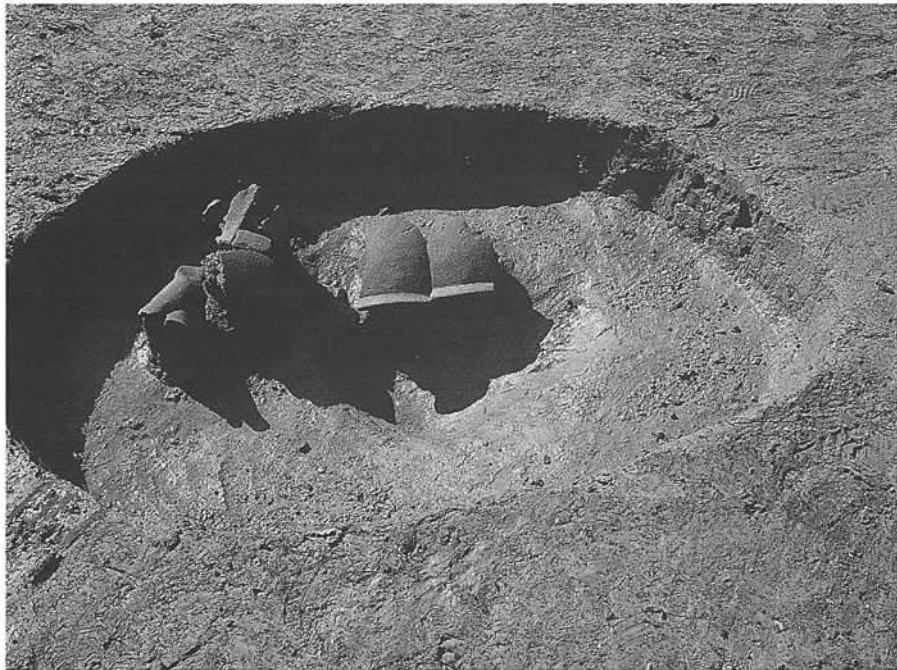


3区12号土坑（南から）



3区13号土坑（南西から）





3区14号土坑（北から）



3区15号土坑（南から）



3区波板状遺構検出状況（東から）

3区1号波板状遺構（東から）

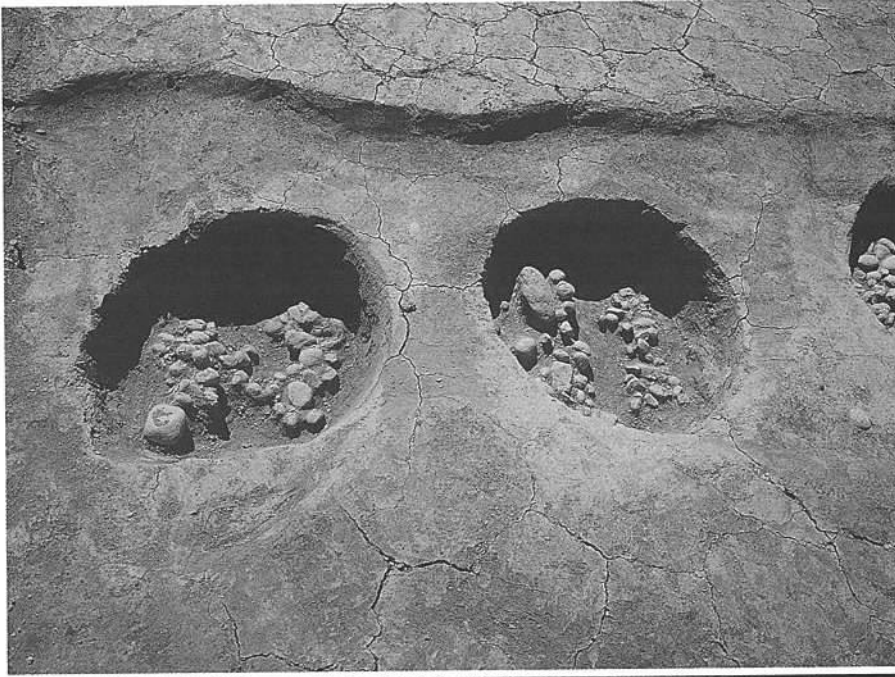


3区2号波板状遺構（東から）



3区3号波板状遺構（東から）





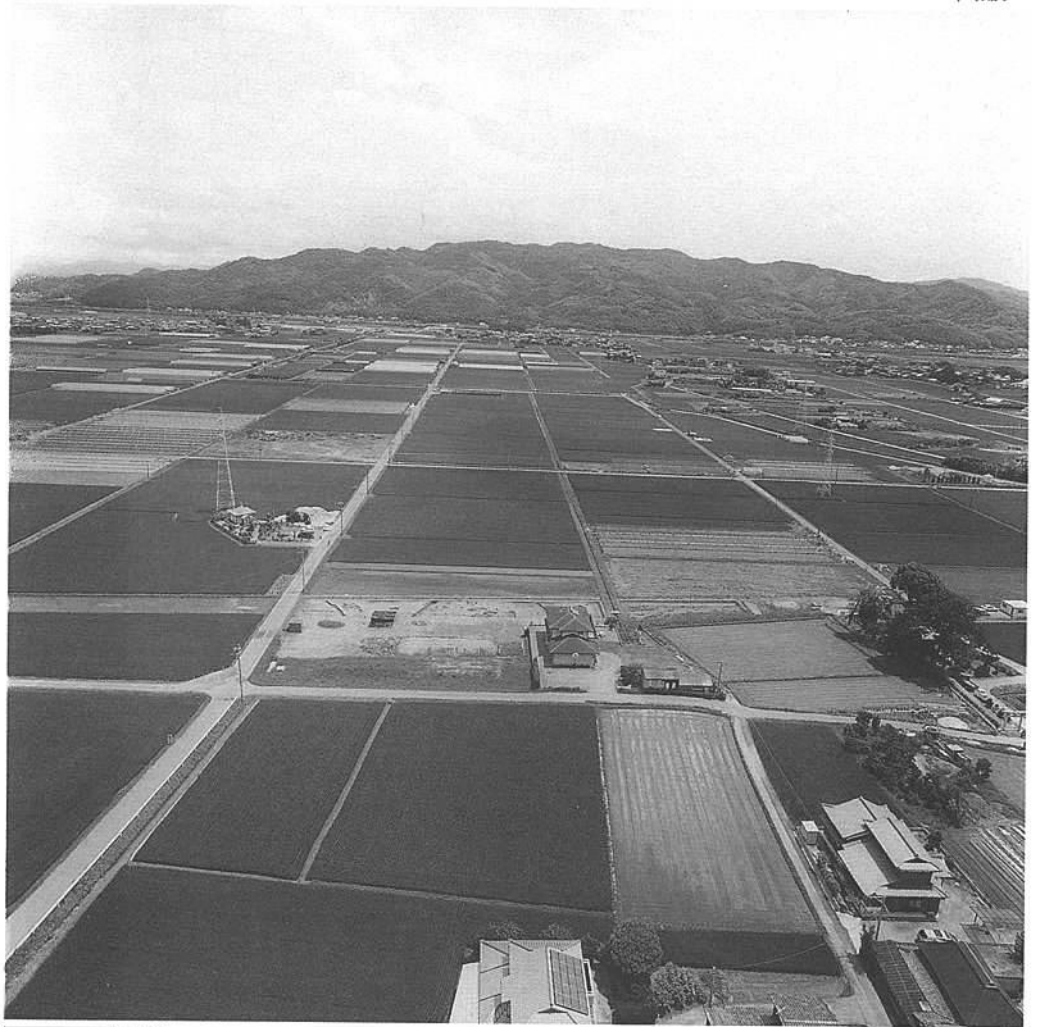
3区3号波板状遺構細部（北から）



3区4号波板状遺構（東から）



3区4号波板状遺構細部（東から）



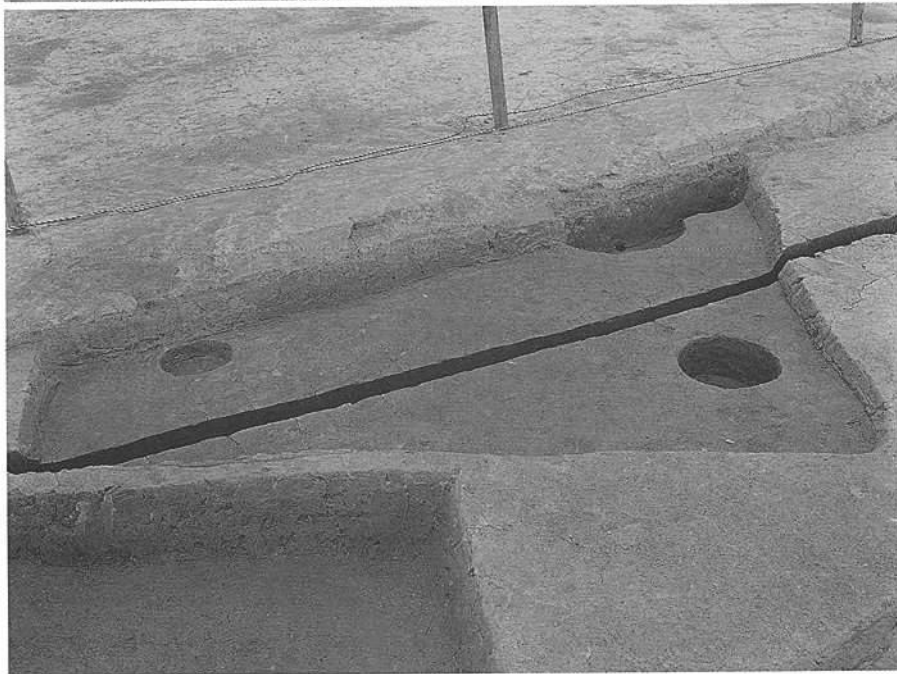
4区遠景（西から）
奥の山は女山神籠石



4区第一遺構面全景
（空中写真）



4区1号竪穴住居跡（南東から）



4区2号竪穴住居跡（南東から）



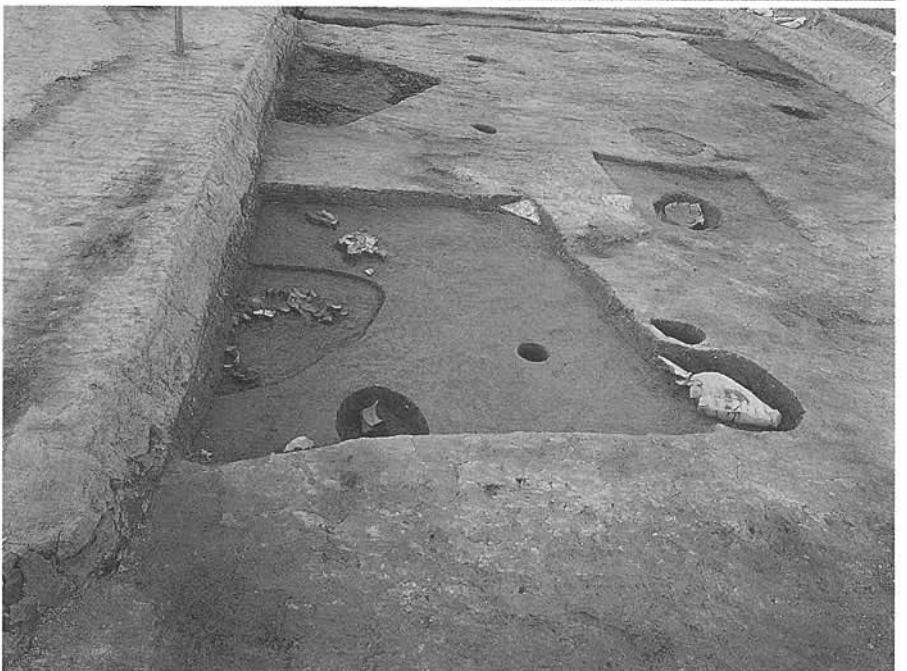
4区3号竪穴住居跡（南から）



4区4号竪穴住居跡（東から）



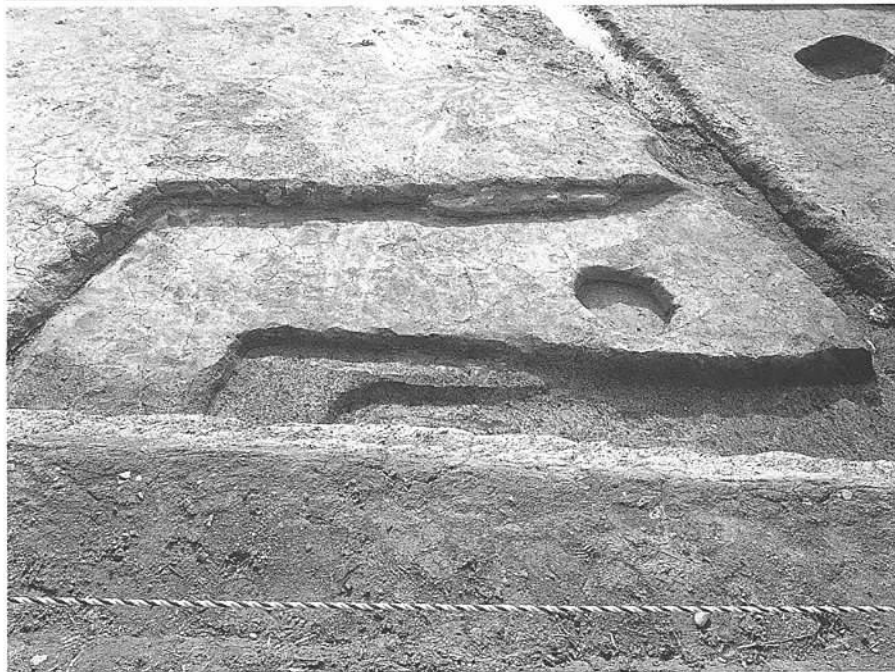
4区5号竪穴住居跡（東から）



4区6号竪穴住居跡（南から）



4区7号竪穴住居跡（南東から）



4区8号竪穴住居跡（西から）



4区9・10号竪穴住居跡（南から）

4区11号竪穴住居跡（南から）



4区12・13・14号竪穴住居跡
（西から）



4区竪穴住居跡集中部分
（南から）





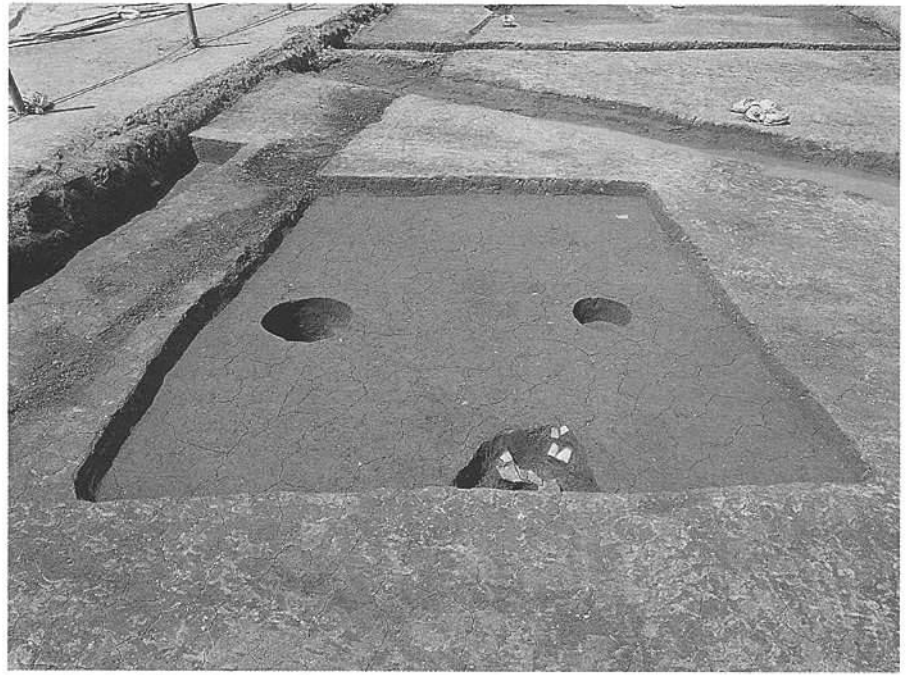
4区15号竪穴住居跡（北西から）



4区15号竪穴住居跡柱穴検出状況
（北東から）



4区15号竪穴住居跡柱痕検出状況
（南東から）



4区17号竪穴住居跡（南から）



4区18号竪穴住居跡（東から）



4区19号竪穴住居跡
（南東から）



4区20号竪穴住居跡（南東から）



4区1号甕棺墓（南東から）



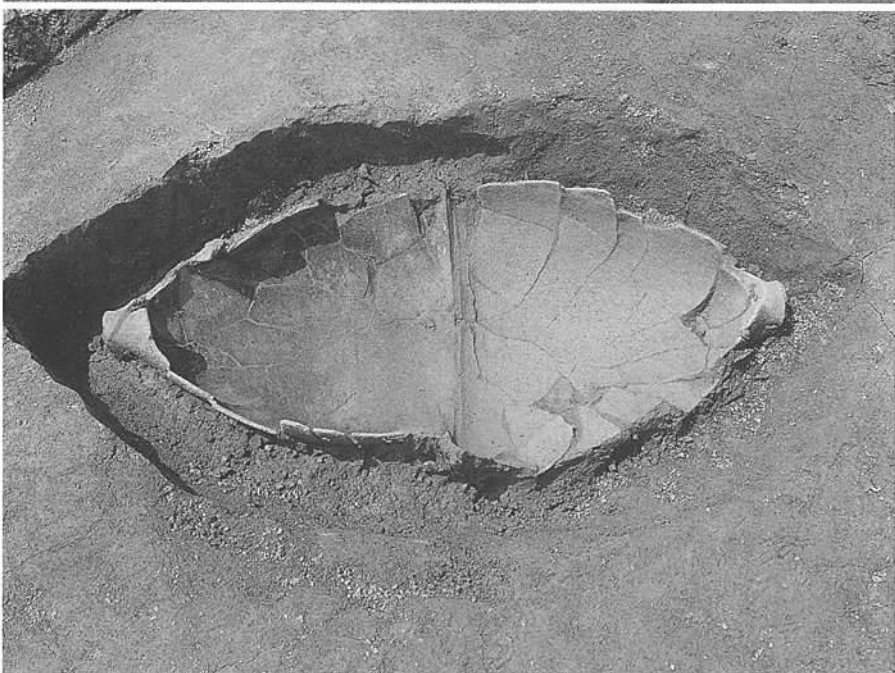
4区2・3号甕棺墓（東から）



4区4号甕棺墓（南西から）



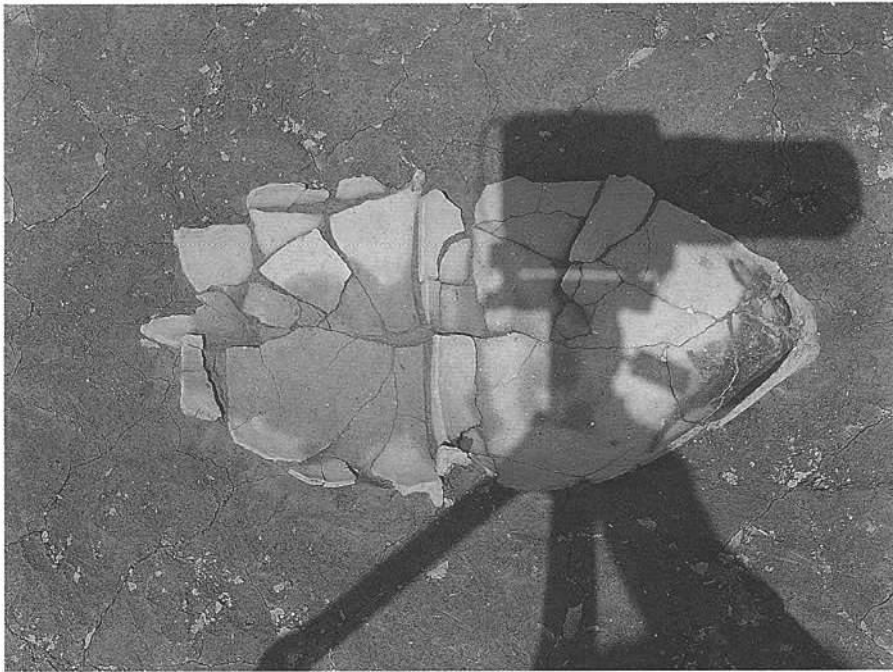
4区5号甕棺墓（南東から）



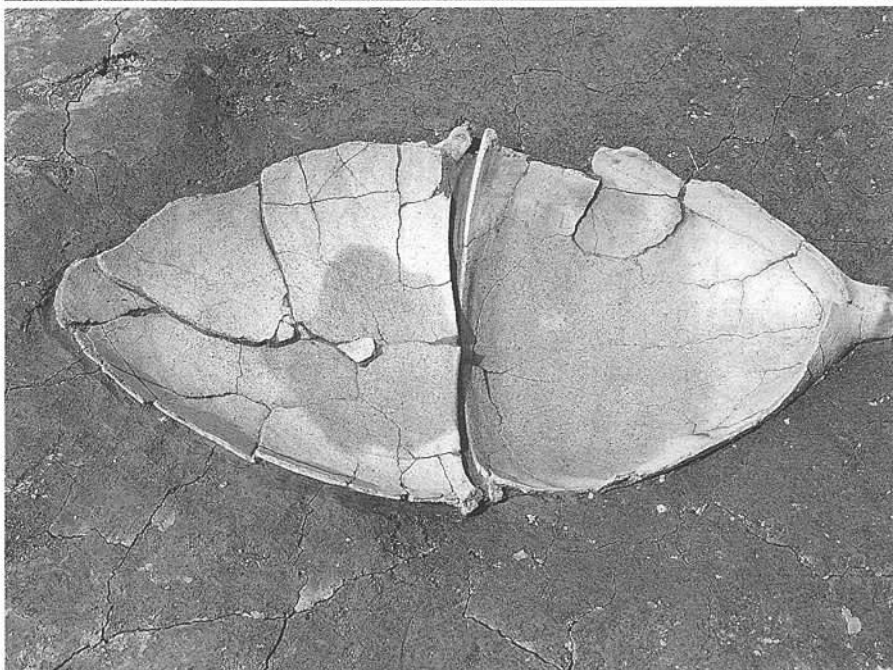
4区6号甕棺墓（南東から）



4区7号甕棺墓（北西から）



4区8号甕棺墓（南から）



4区9号甕棺墓（南から）



4区10号甕棺墓（南から）



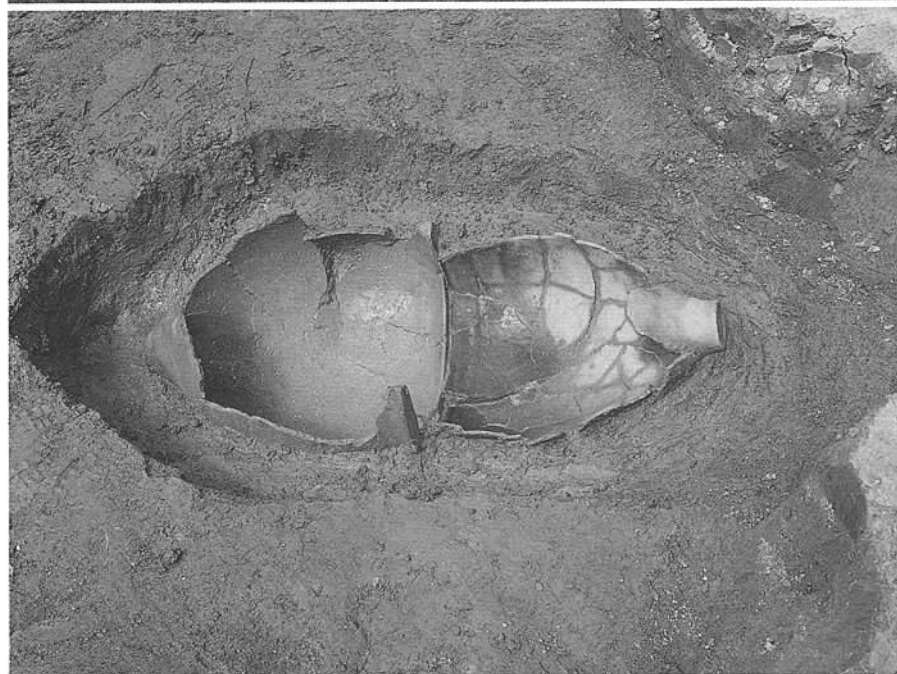
4区11号甕棺墓（北から）



4区12号甕棺墓（北から）



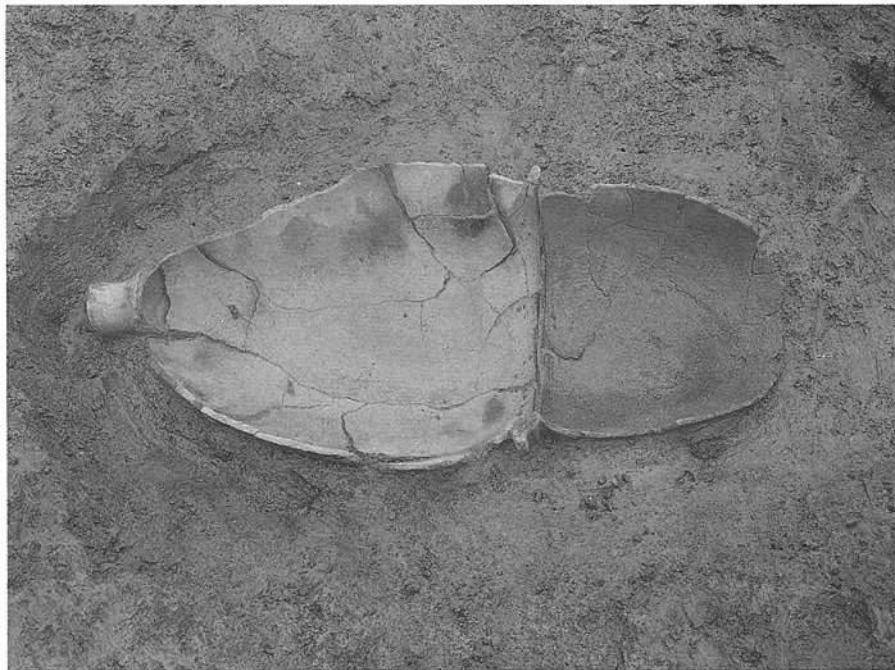
4区13号喪棺墓（南から）



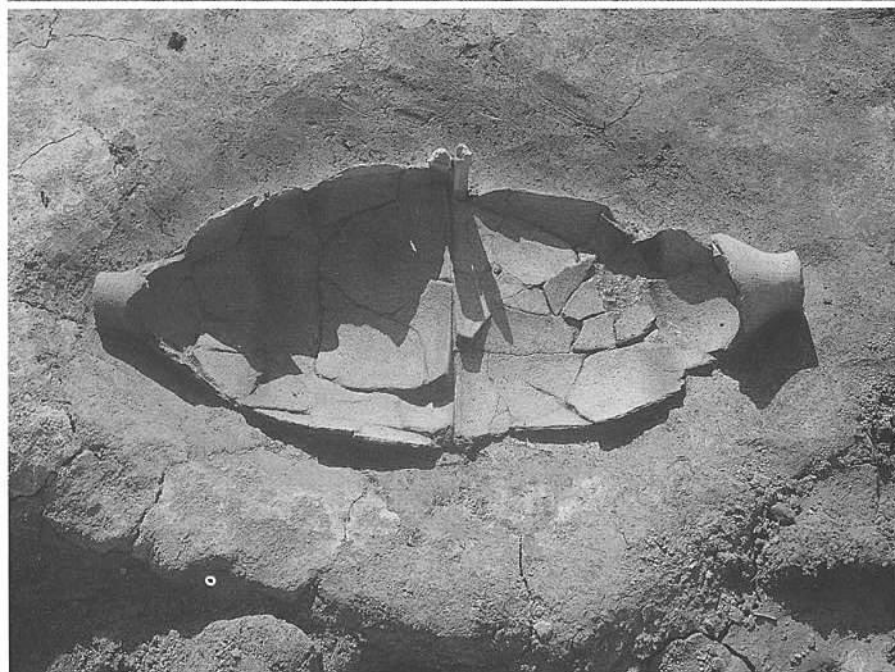
4区14号喪棺墓（南東から）



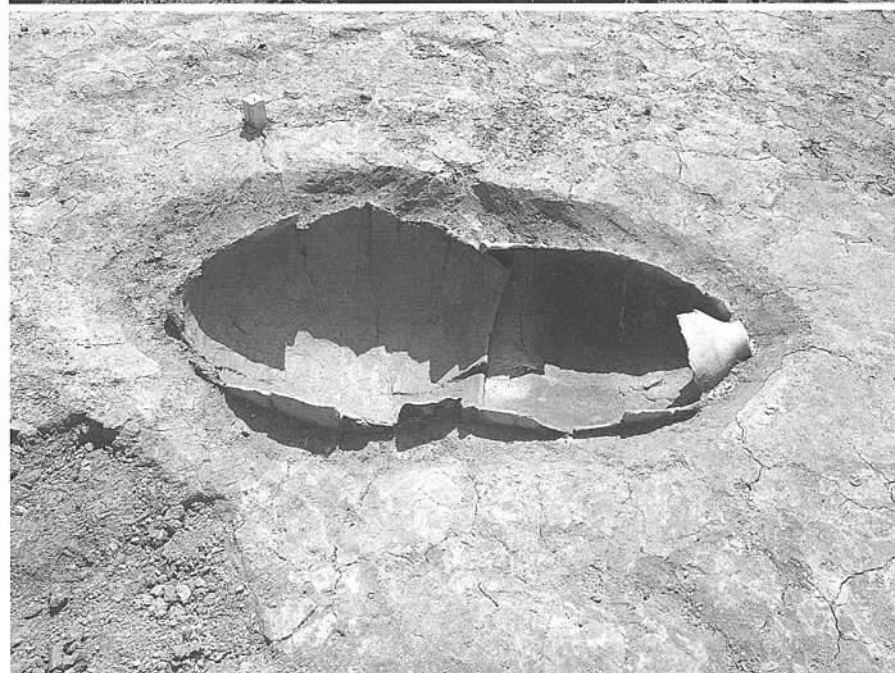
4区15号喪棺墓（南東から）



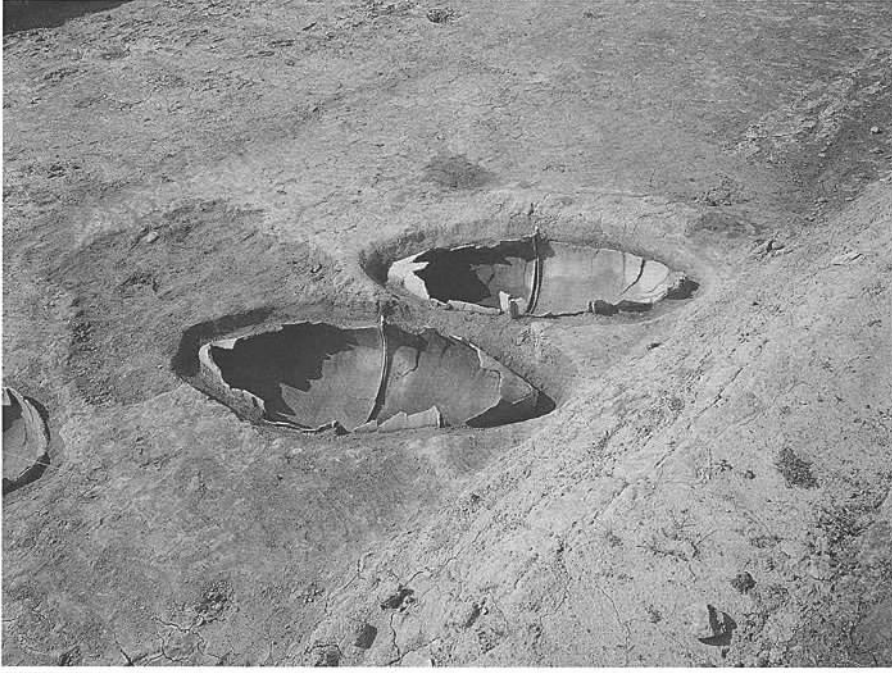
4区16号甕棺墓（南東から）



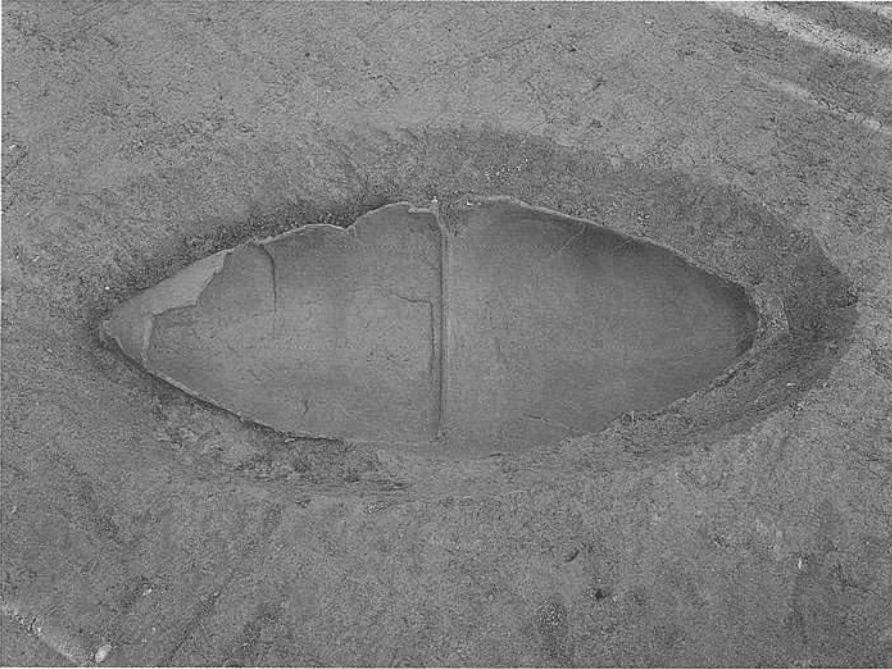
4区17号甕棺墓（北西から）



4区18号甕棺墓（北西から）



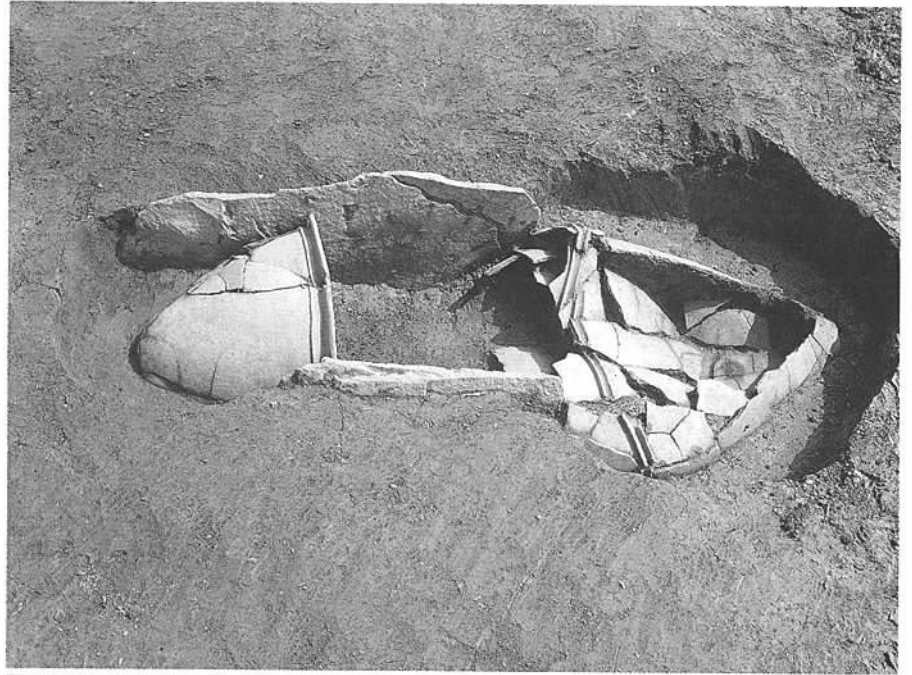
4区19・20号甕棺墓（南東から）



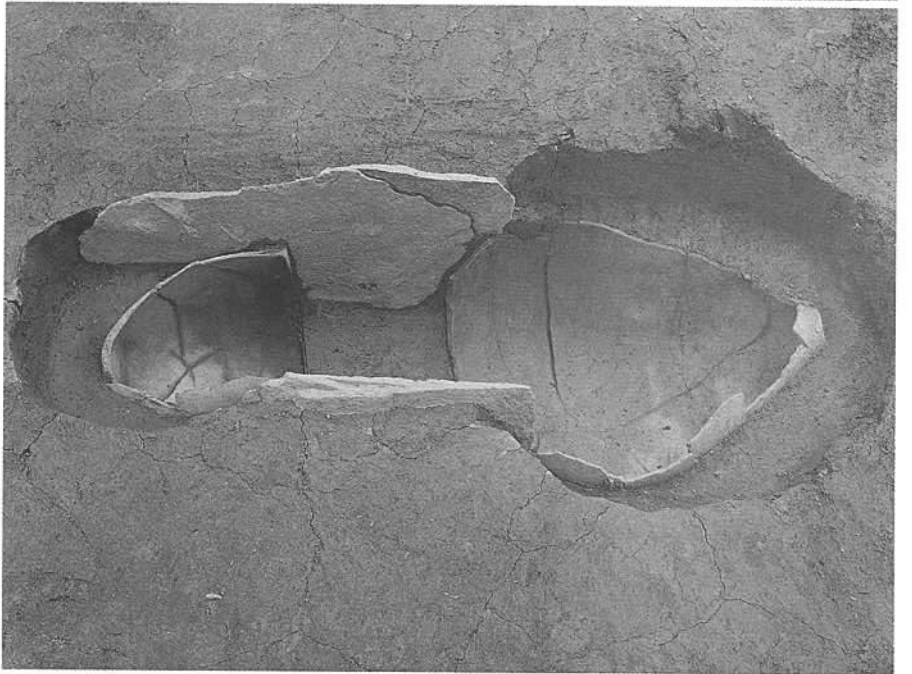
4区21号甕棺墓（南東から）



4区1号石棺墓検出状況（南から）



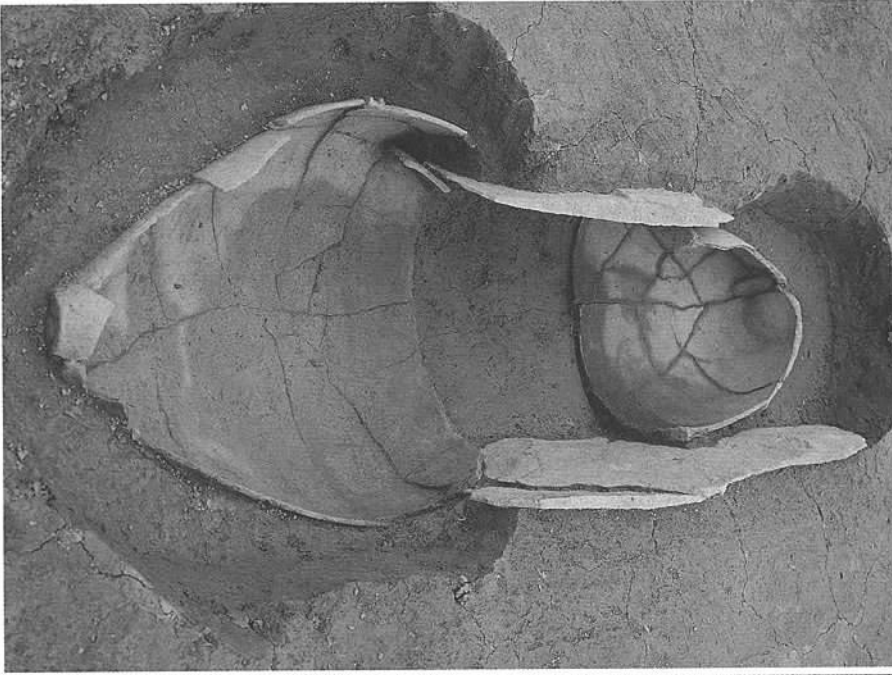
4区1号石棺墓（北から）



4区1号石棺墓（北から）



4区1号石棺墓（南から）



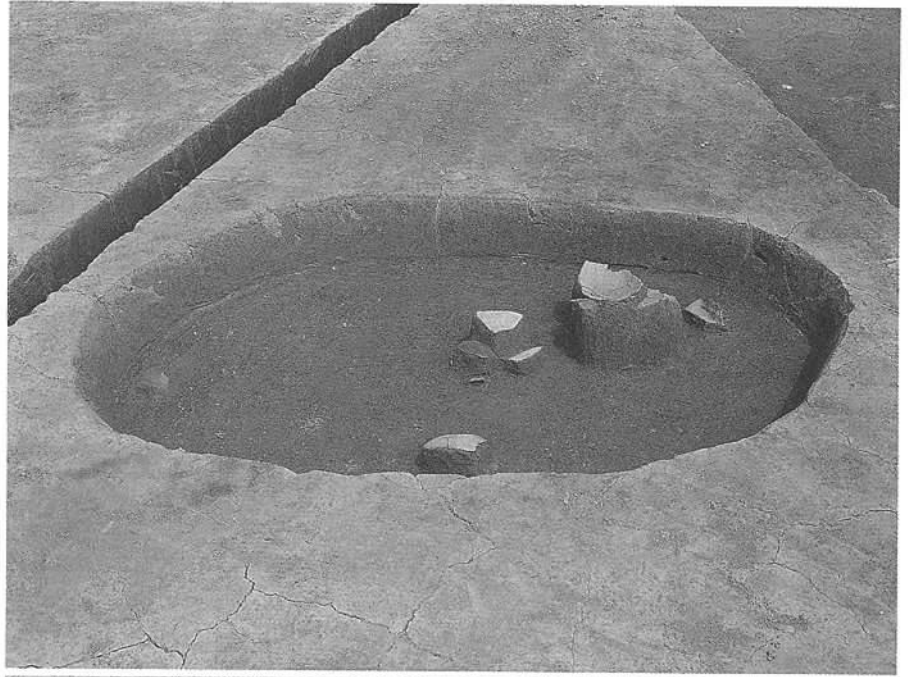
4区1号石棺墓（西から）



4区1号石蓋土坑墓（南から）



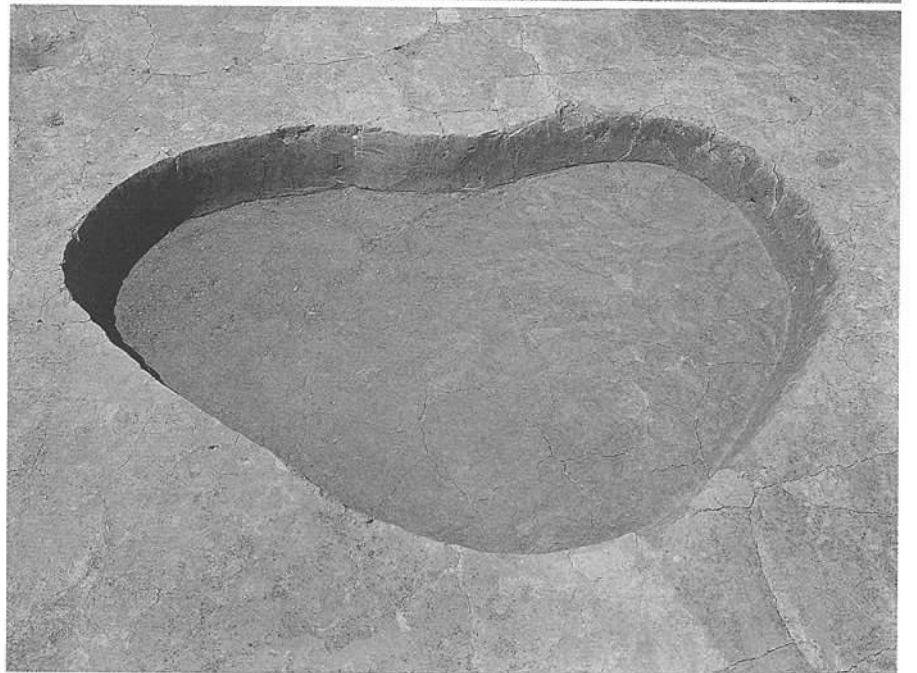
4区1号石蓋土坑墓完掘後（北から）



4区1号土坑（南から）



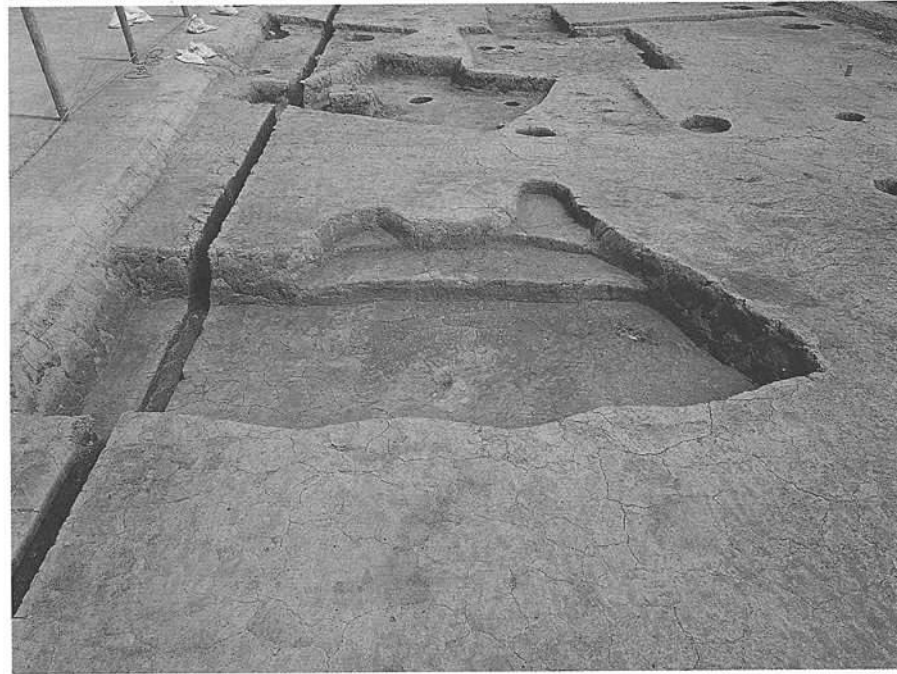
4区2号土坑（南から）



4区3号土坑（南から）



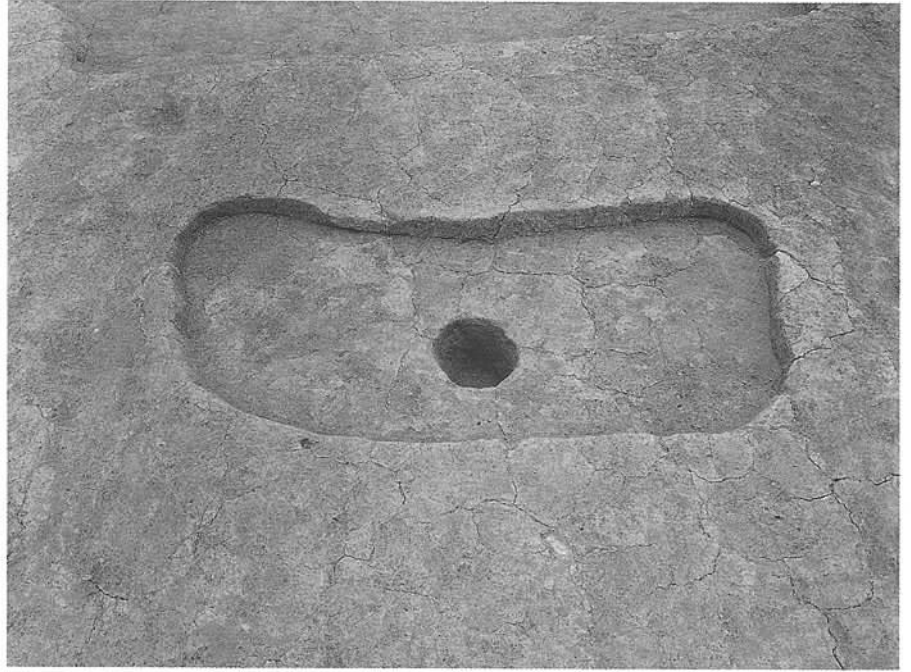
4区4号土坑（南から）



4区5号土坑（南から）



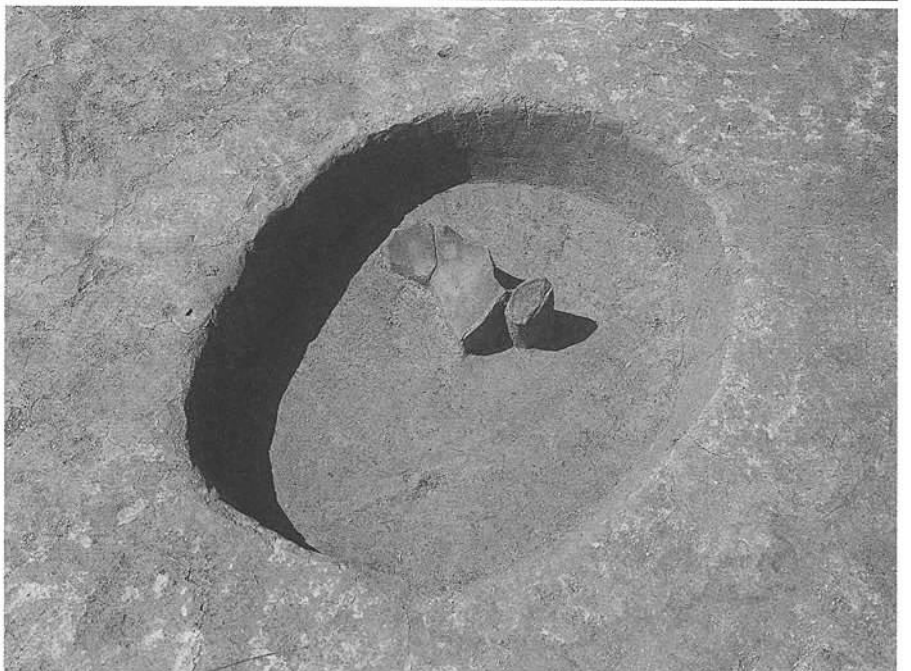
4区6号土坑（西から）



4区7号土坑（西から）



4区8号土坑（北から）



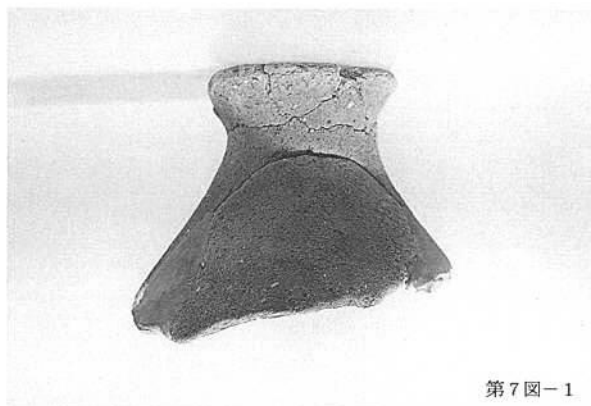
4区9号土坑（東から）



4区1号溝土層（東から）



4区4号溝土層（西から）



第7图-1



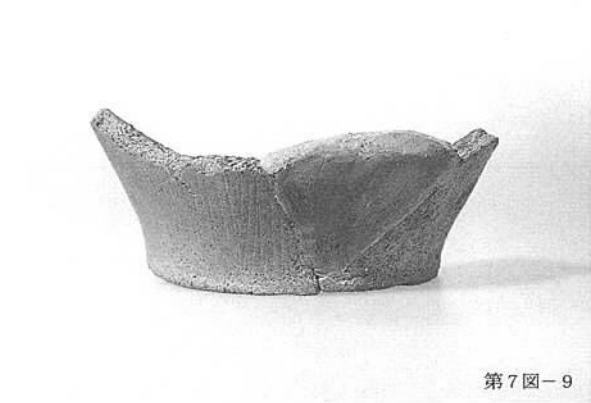
第8图-1



第7图-3



第8图-3



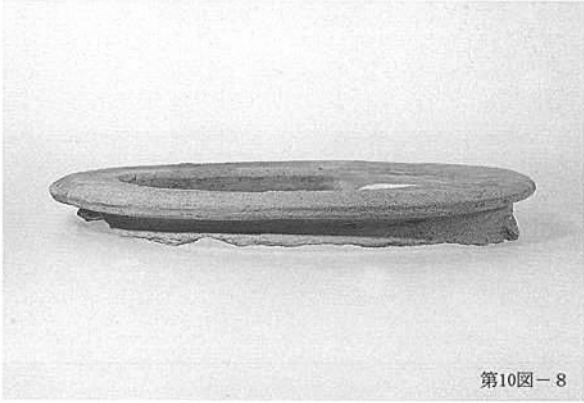
第7图-9



第8图-4



第7图-10



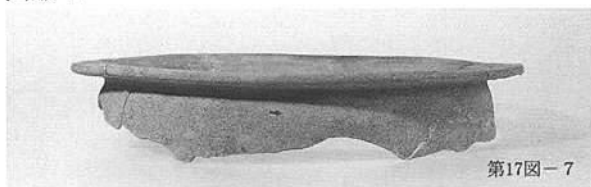
第10图-8



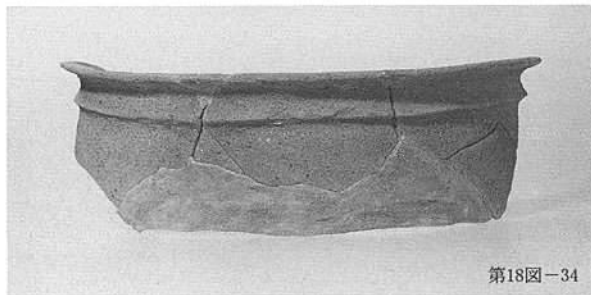
第7图-18



第10图-38



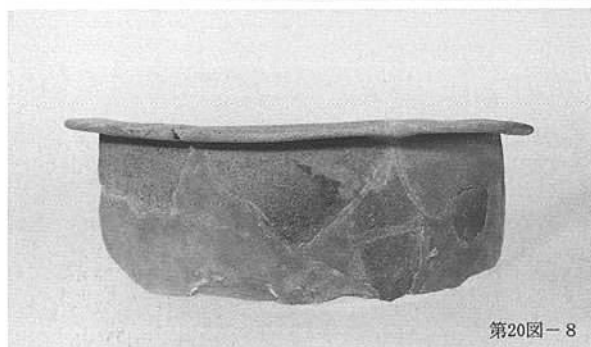
第17图-7



第18图-34



第18图-49



第20图-8



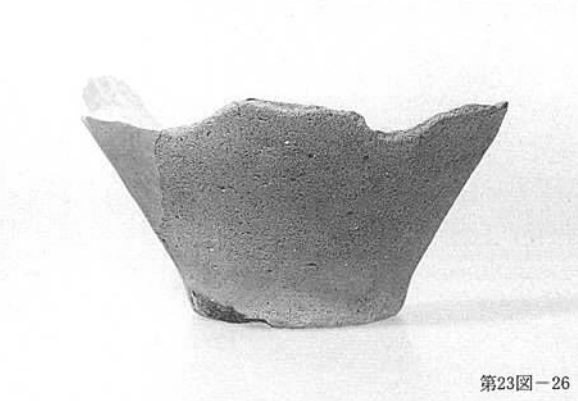
第21图-21



第21图-29



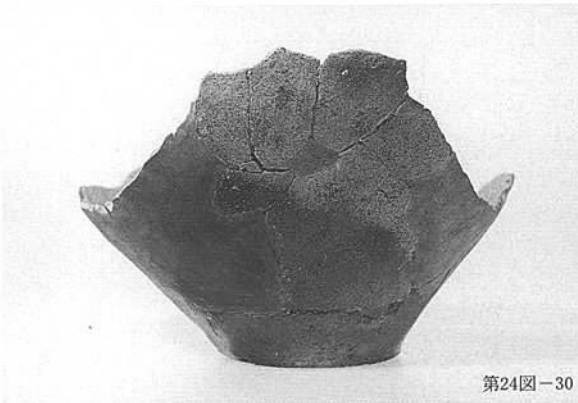
第21图-30



第23图-26



第23图-27



第24图-30



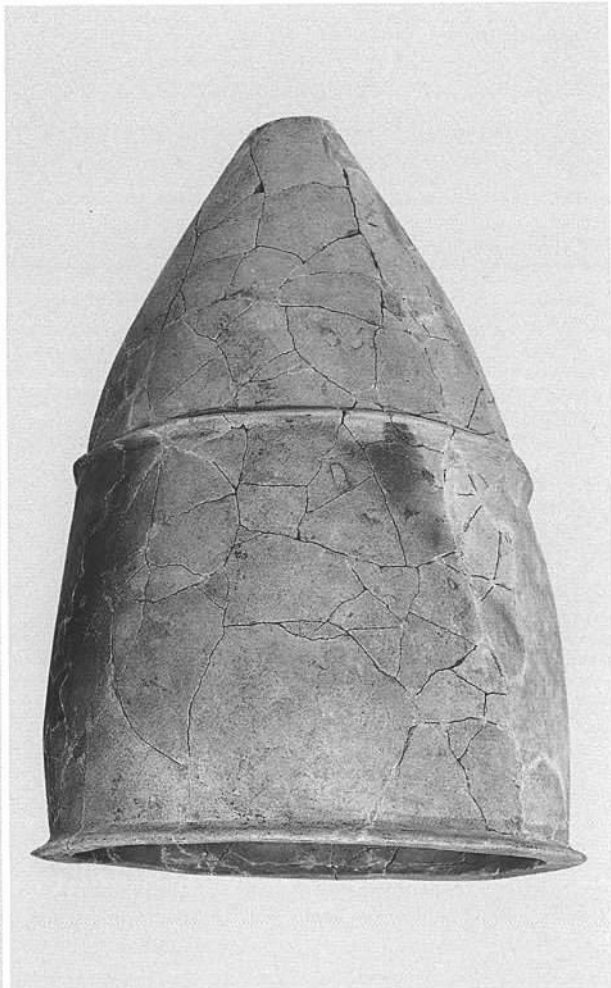
第24图-42

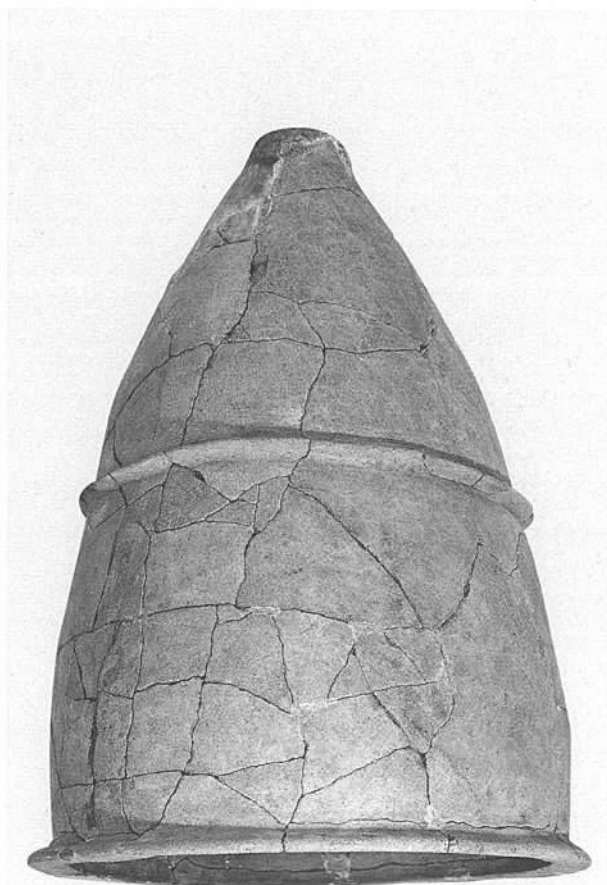


K1

K5

3区1·5号甕棺



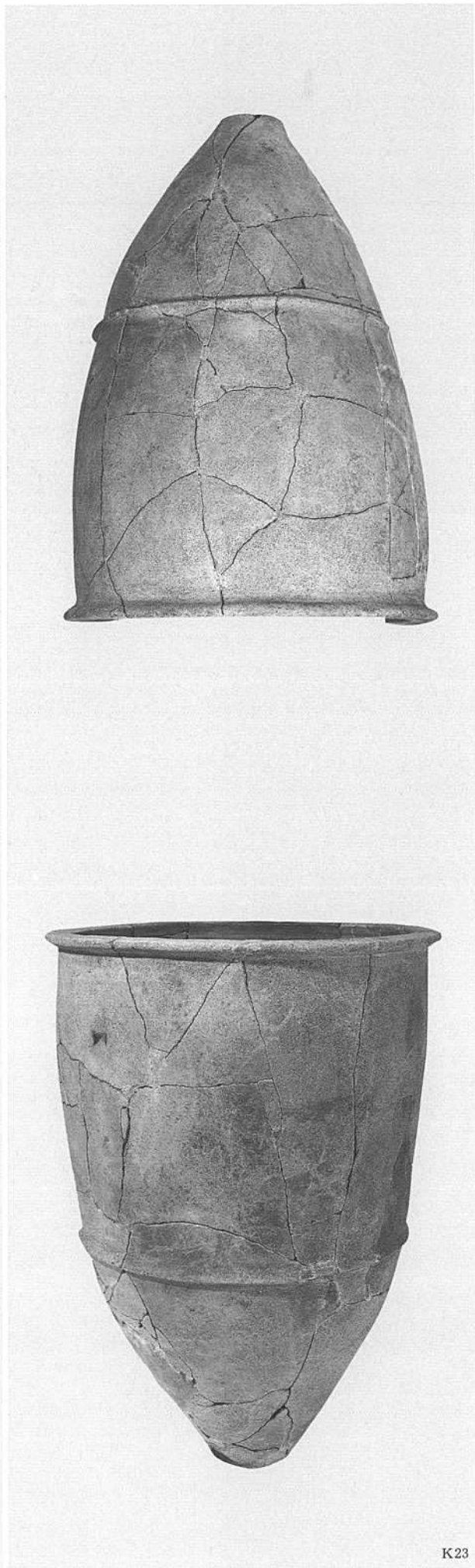


K18

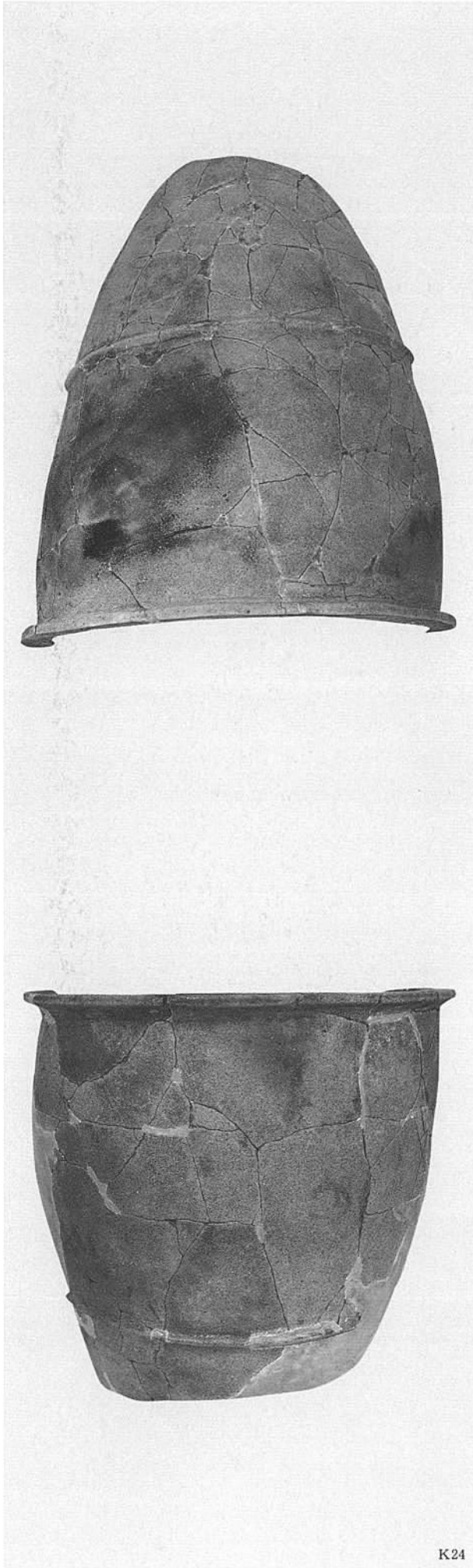
K21



K22



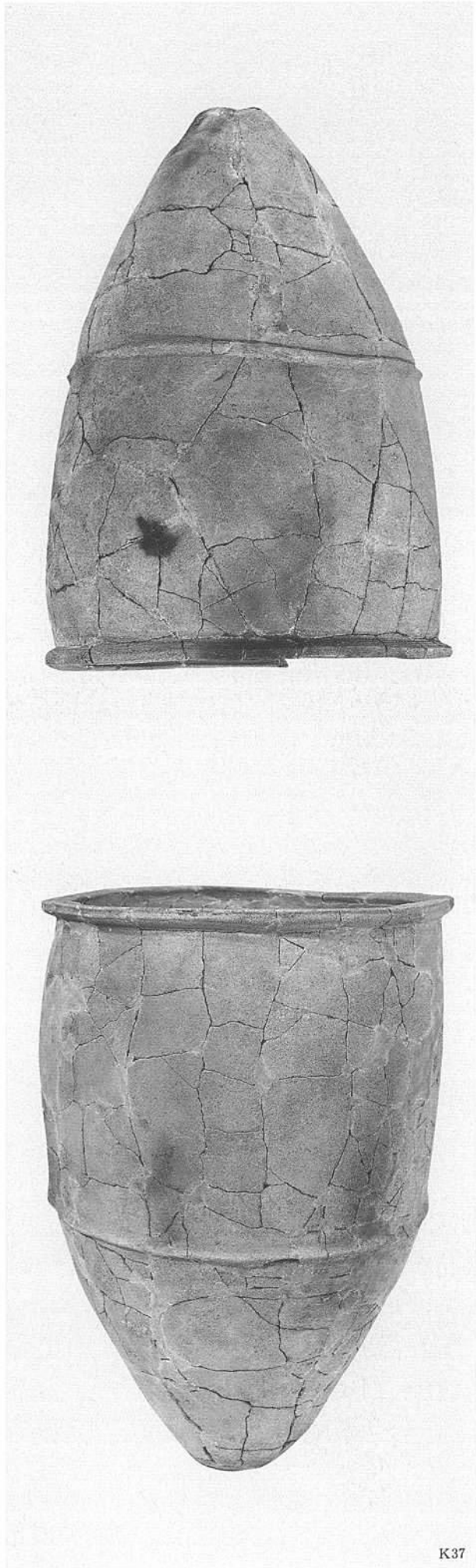
K23



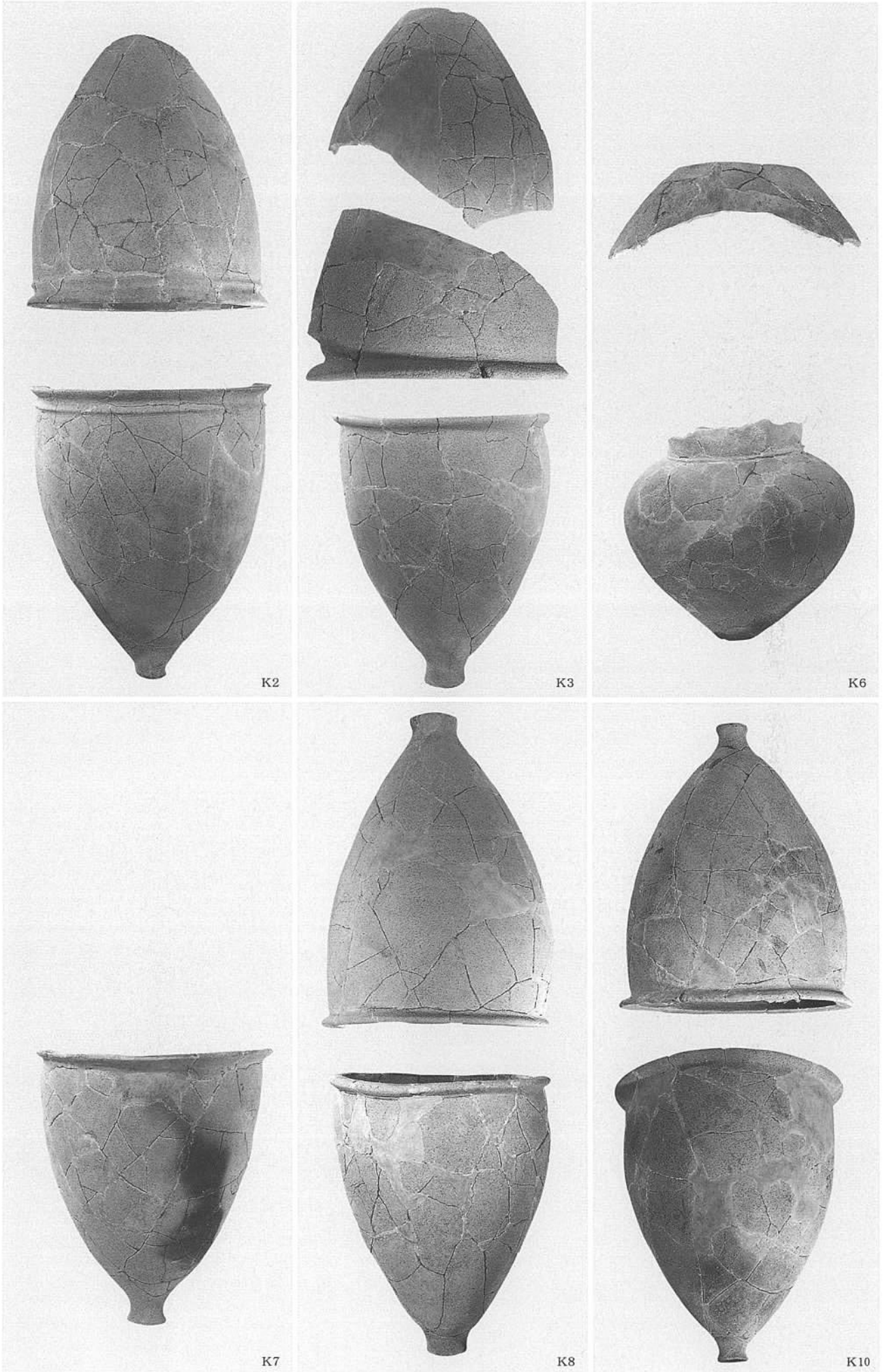
K24



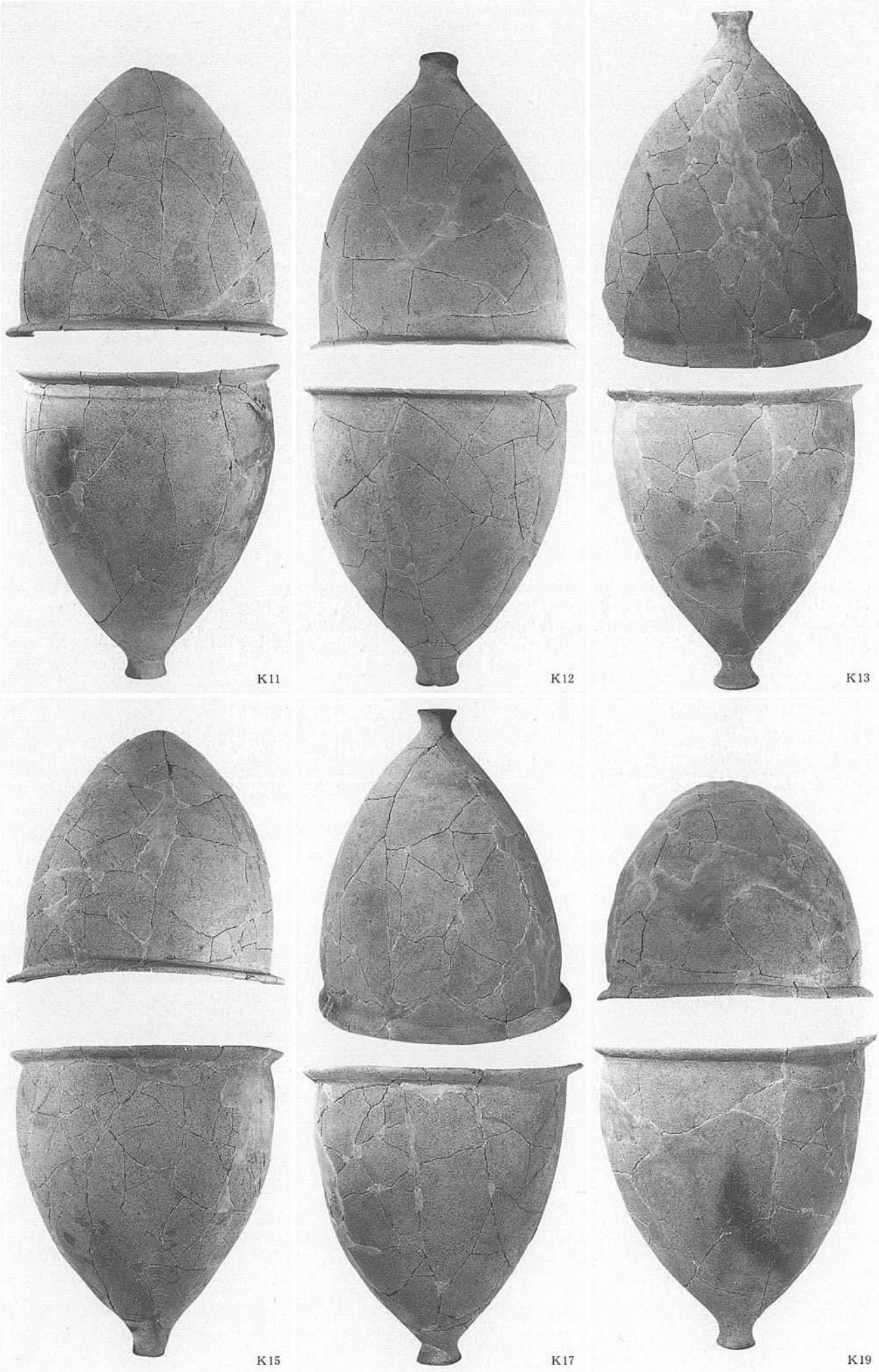
K26



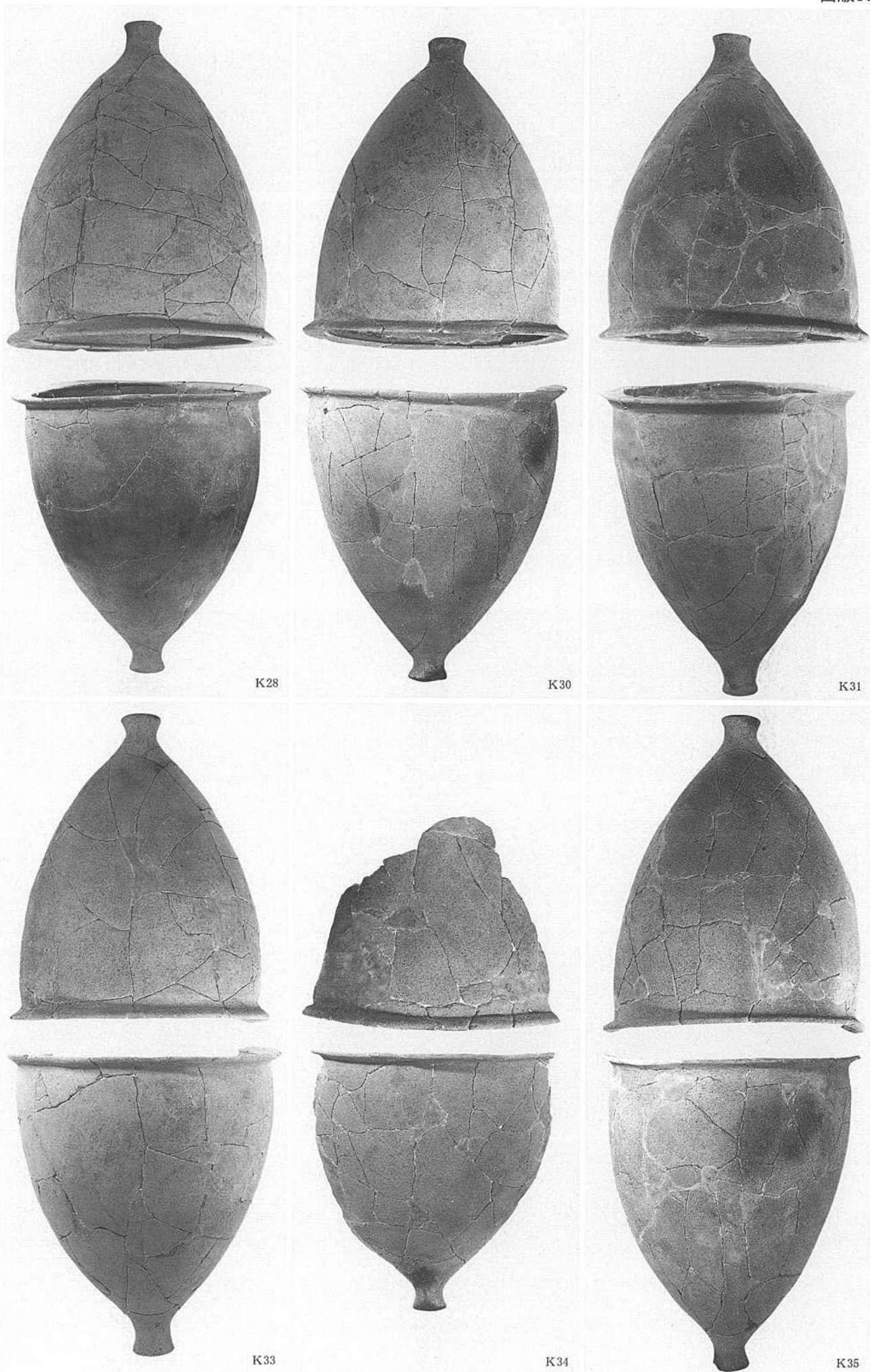
3区36·37号甕棺



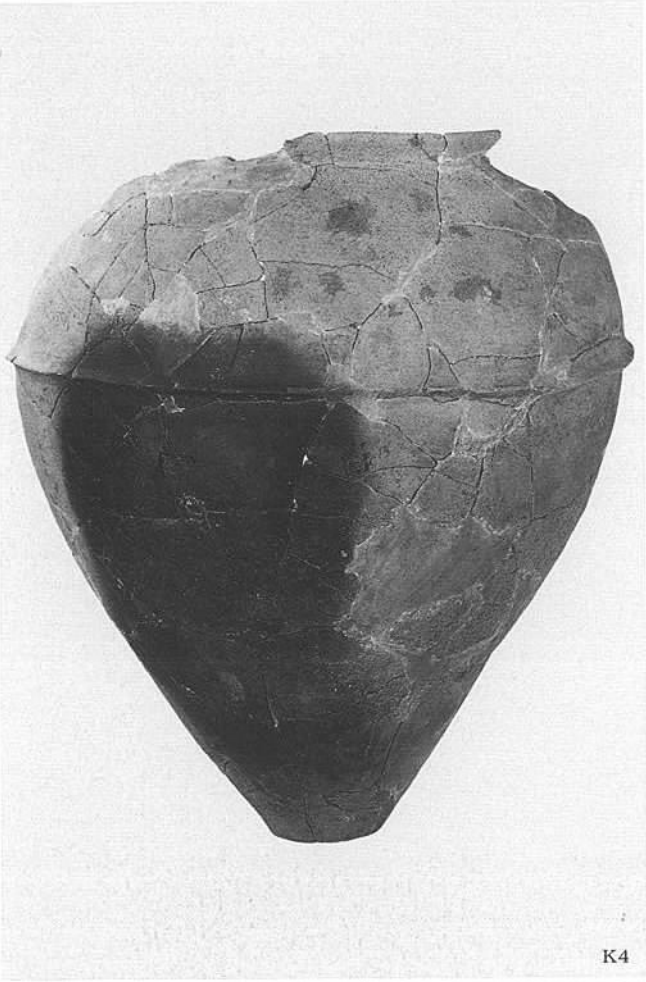
3区2·3·6·7·8·10号甗棺



3区11·12·13·15·17·19号甕棺



3区28·30·31·33·34·35号甕棺





第49图-2



第49图-2



第49图-5



第50图-18



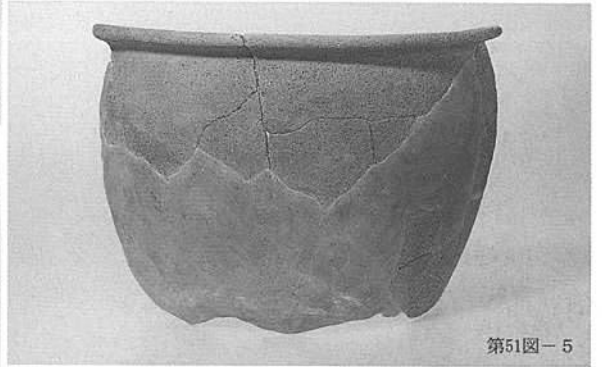
第50图-23



第50图-28



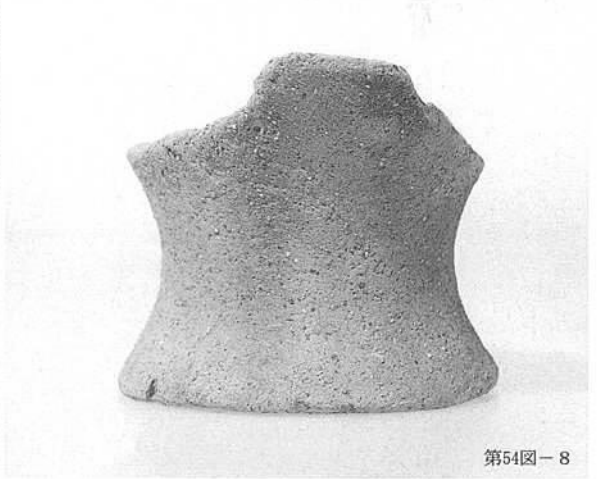
第52图-12



第51图-5



第54图-6



第54图-8



第54图-10



第55图-1



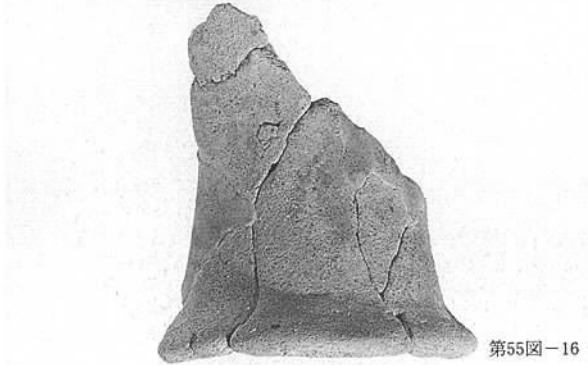
第59图-7



第55图-14



第59图-8



第55图-16



第59图-9



第55图-26



第59图-19



第59图-1



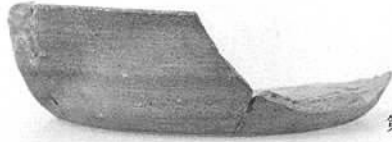
第63图-8



第59图-6



第63图-3



第67图-5



第67图-8



第67图-18



第69图-1



第69图-4



第69图-5



第69图-3



第70图-20



第69图-2



第71图-22



第74图-2



第75图-14



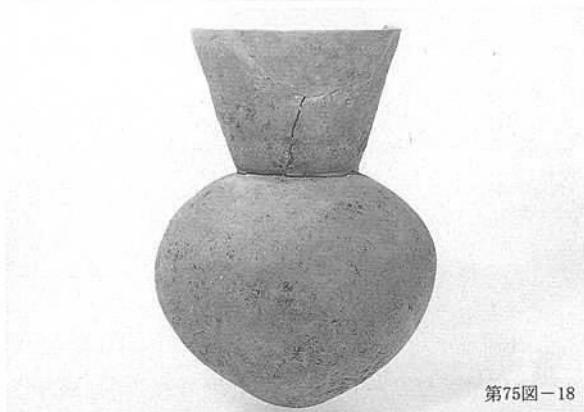
第74图-4



第75图-17



第74图-6



第75图-18



第74图-9



第75图-22



第74图-10



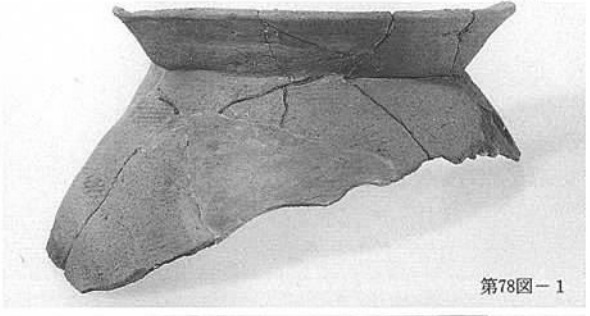
第74图-11



第75图-19



第75图-21



第78图-1



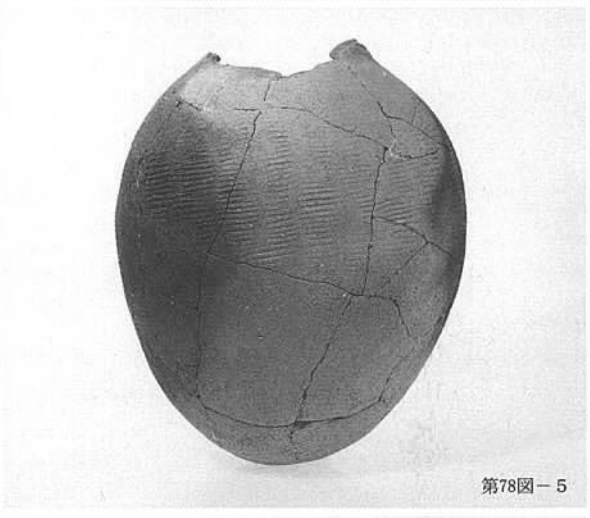
第75图-24



第78图-3



第75图-25



第78图-5



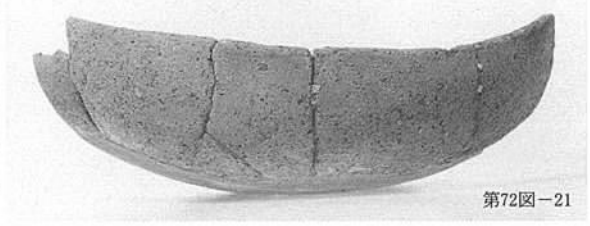
第76图-33



第78图-10



第76图-40



第72图-21



第76图-42



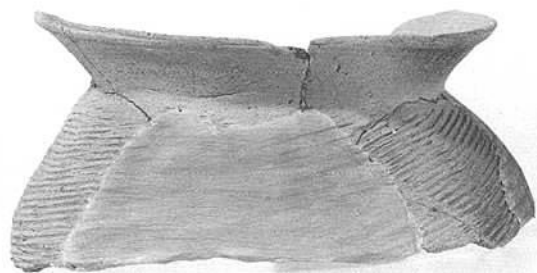
第72图-22



第81图-1



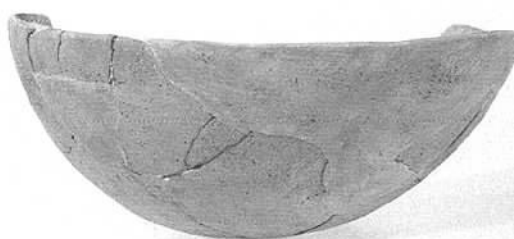
第84图-3



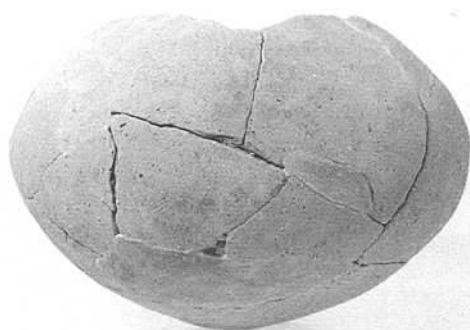
第81图-4



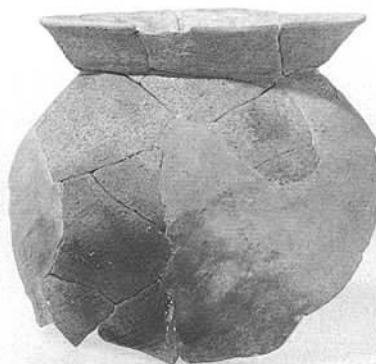
第82图-20



第84图-7



第82图-21



第80图-11



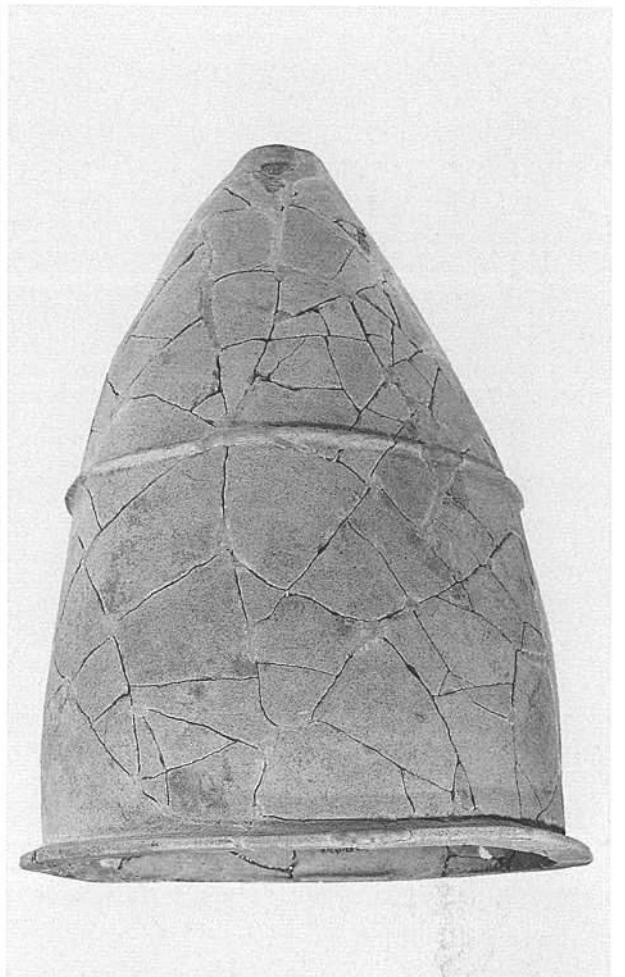
第84图-4



第80图-12



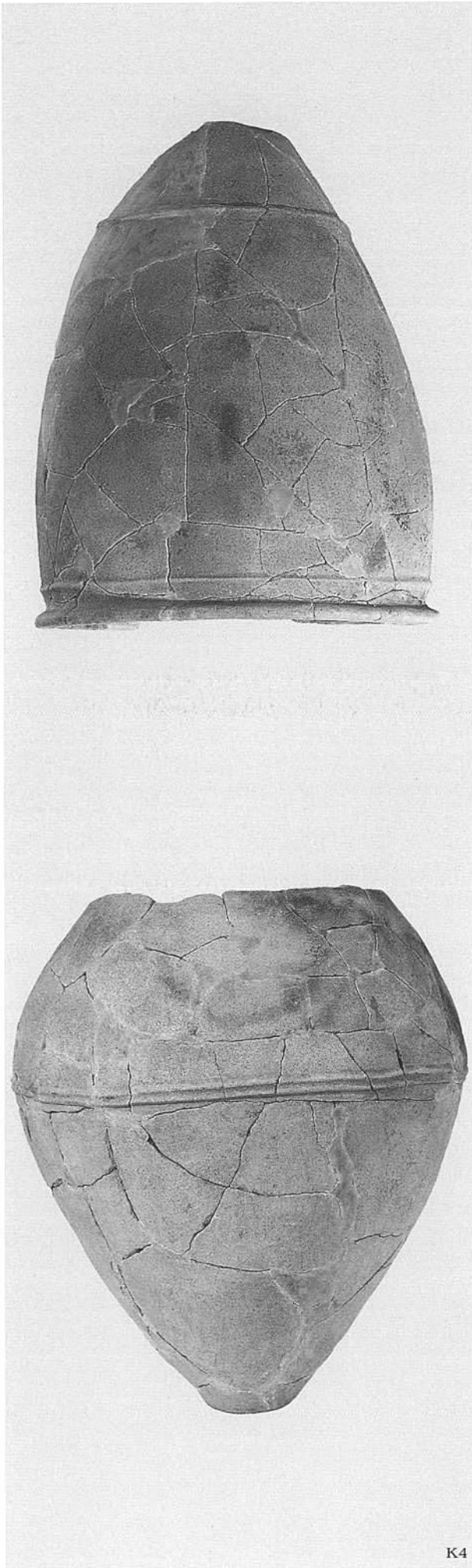
K 1



K12



K 2



K4



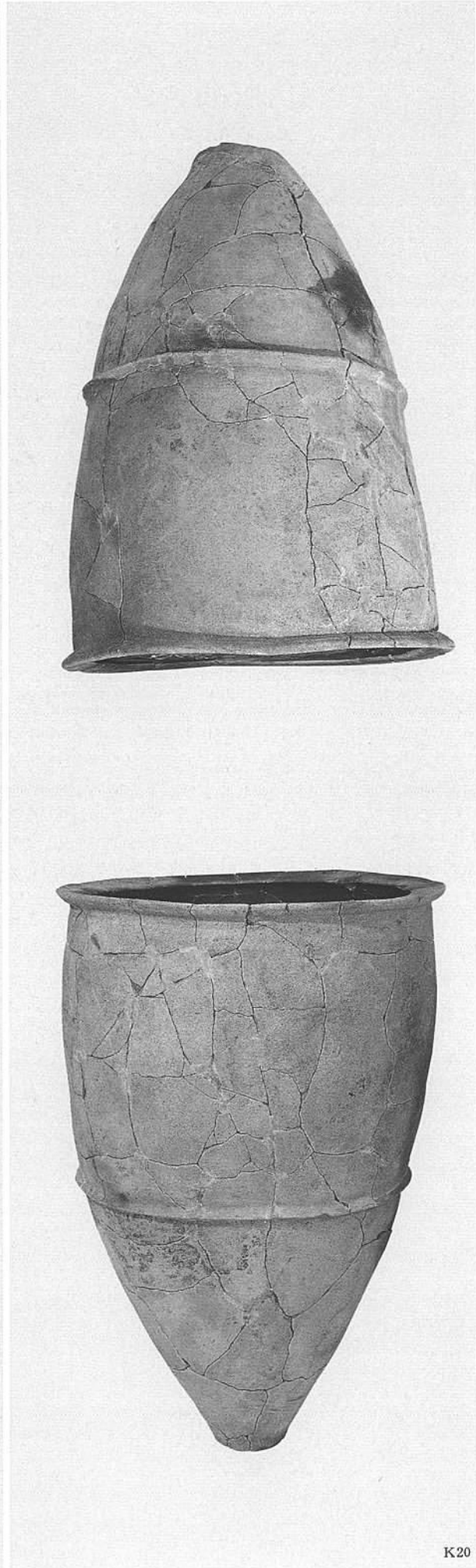
K5



4区7·18号甕棺



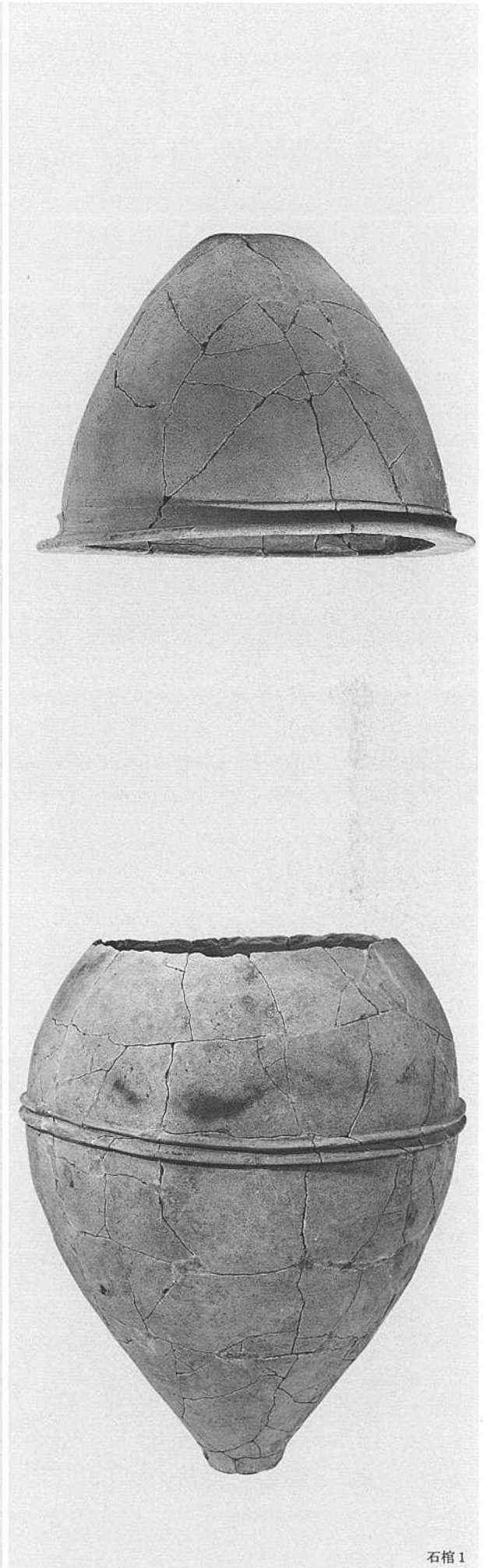
K19



K20

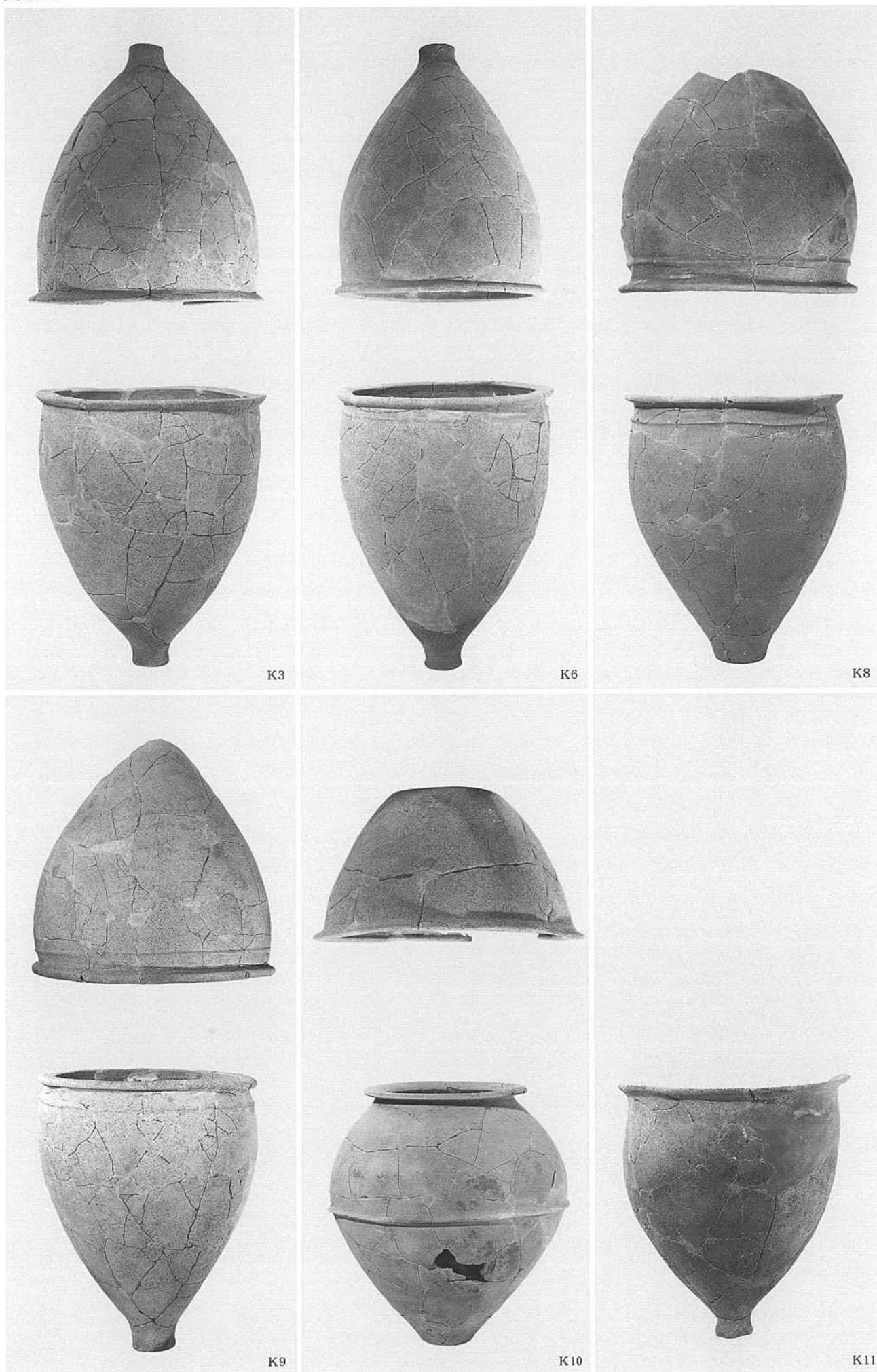


K21



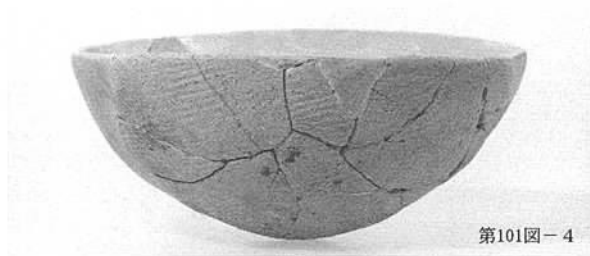
石棺 1

4区21号甕棺、1号石棺墓出土土器



4区3·6·8·9·10·11号甗棺

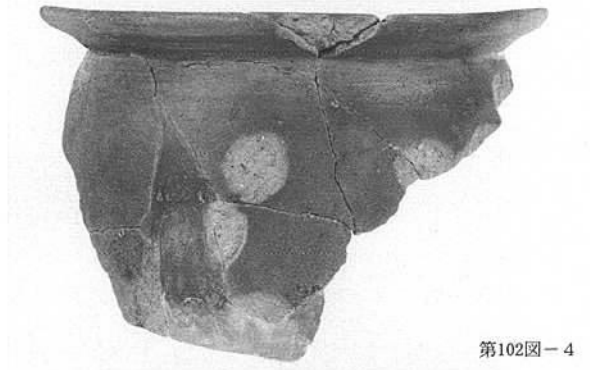




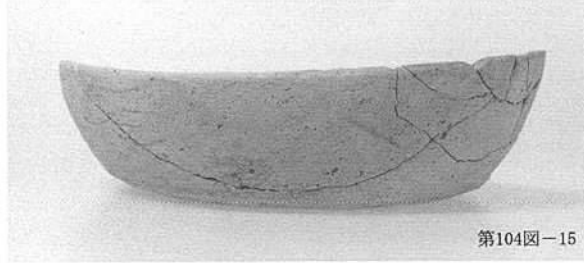
第101図-4



第104図-14



第102図-4



第104図-15



第102図-11



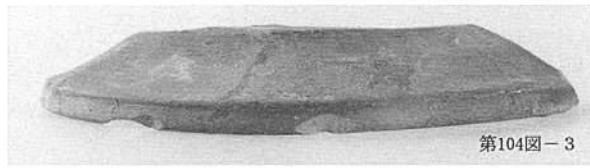
第104図-17



第102図-14



第104図-21



第104図-3



第105図-9



第104図-12



第104図-5



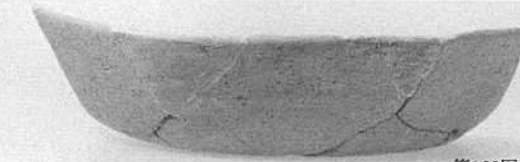
第105図-14



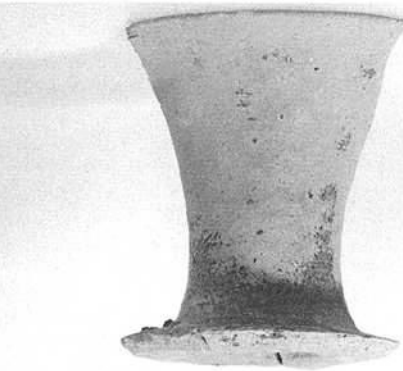
第109图-1



第109图-2



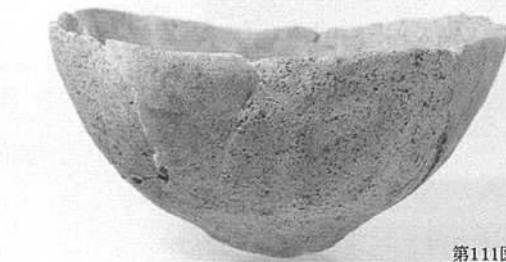
第109图-15



第109图-16



第109图-18



第111图-17



1

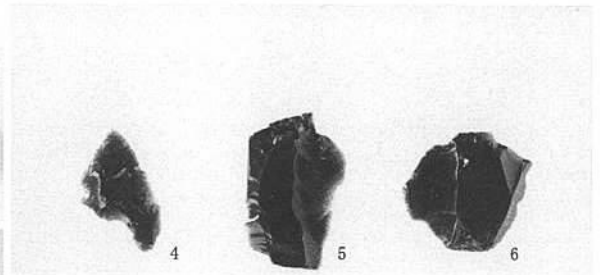


2



3

第112图

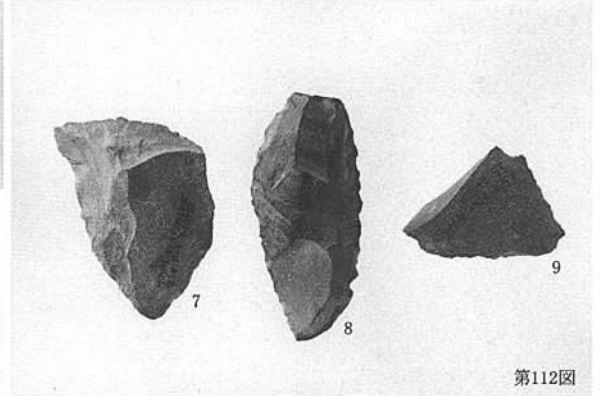


4

5

6

第112图



7

8

9

第112图



第112图-10



11



12

第112图



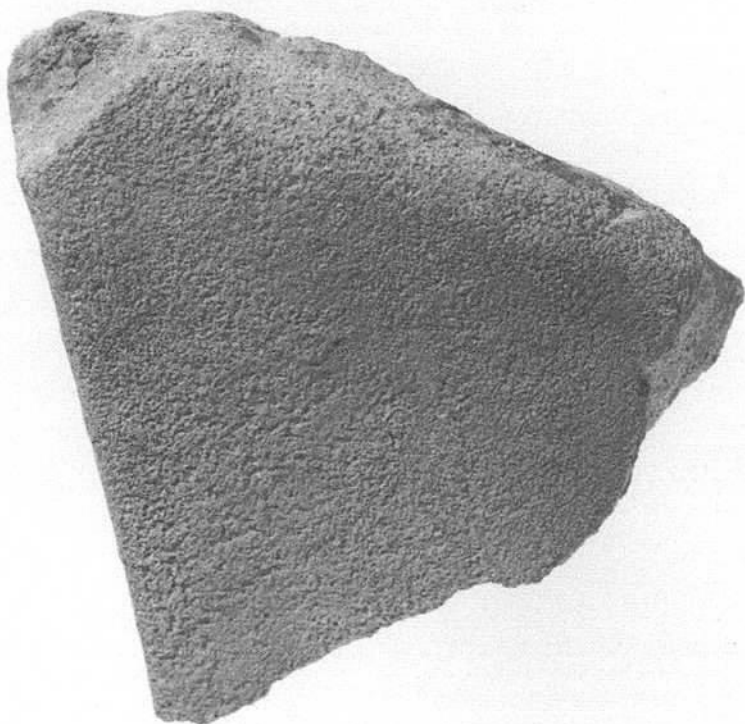
13



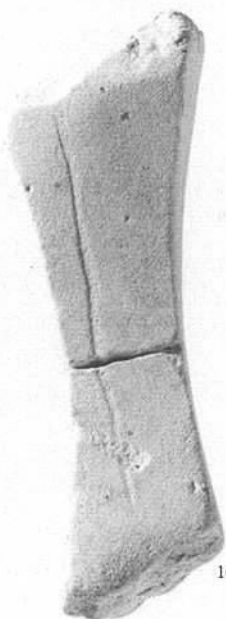
14

第112图

4区1·3·4号沟、遺構面出土土器、2~4区出土石器



第112图-15



16



17

第112图

報告書抄録

ふりがな	おがわやなぎのうちいせき							
書名	小川柳ノ内遺跡 I							
副書名	福岡県みやま市所在遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第7集							
編著者名	進村 真之							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡県福岡市博多区東公園7-7							
発行年月日	平成19(2007)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おがわやなぎのうちいせき 小川柳ノ内遺跡 1~4区	ふくおかけん 福岡県 みやまし 小川	40229	790501	33° 09' 32"	130° 29' 38"	20040602 ? 20050331	約2,500m ²	九州新幹線 鹿児島 ルート 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小川柳ノ内遺跡 1~4区	集落 ・ 墓地	弥生時代 古墳時代 奈良時代 中世	甕 棺 墓 石蓋土坑墓 石 棺 墓 竪穴住居跡 土坑 溝 波板状遺構		縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 石器 鉄器			

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 18	登録番号 2

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第7集

小川柳ノ内遺跡Ⅰ

平成19年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7-7

印刷 株式会社アカマ印刷
福岡市中央区平尾5-20-3